#169

小杉榲邨監修
井上頼圀監修
栗嶋山之助編纂

日本人名辭典

板倉屋書房

281.03 -Ku86

序

栗島山之助君日本人名辭典を編纂しその稿本を示さる。予喜んで之を繙き、君に告げて曰く、編次體裁頗るわが意を得たり。內容の詳細に至つては、未だ通讀の暇を得ざるを以て、仔細に之を批評する能はず。されども、學に忠に業に勤むる君は、みだりに杜撰の書を編して自ら安んじ、粗雜の著を公にして人を誤る者に非ざるを信ず。そもそも人名辭典の用たる、索引の便を以て容易に史上の人物の閲歴性行等を敎ふるに在り。是を以て識の深きと、

国立国会図書館
27.5.-1
266565

淺きとを問はず、學の專門なると普通なるとを論ぜず、苟も書を讀むの人は、之が便利を感ぜざるはなし。今わが國、さきには田口博士の人名辭書出で、次で鷲尾氏の佛家人名辭書等あらはれて、大に世を益したり。されども、ひろく古今の人物を一小册中に包括し、之を袖にすべく、之を囊にし得べく、かも最もその簡明なるを得、且つその價もまた低廉にして何人も容易に之を購ふを得るの書は、君のこの著に於てはじめて之を見るを思ふ。附載するところの假作人物の傳に至つては、予は寧ろ本

編よりも重きを置かむとする者、當初予は君に勸むるに十分の力を之に盡されんことを以てせり。今稿本を閲するに、院本小說の類の涉獵の未だ意に協はざるものあり、從つて假作人名の蒐集多からざるを憾む。されども尙一たび之を繙けば、多數の舊故と一堂に會するの思あらしむ。世人は定めて多大の感謝を之に表するならん。予は君が必ず刻苦精勵して增補を加へ、之を大成せらるゝの期有らんことを望むと。君この言を以て序とせんと請はる。序文はもと予の好まざるところなり。然れ

ども有益なる著書を世に紹介するに於て、予の一言が幾分にても効力ありと思惟せらるゝならば、強て辭するところに非ず。その序と呼び跋と名づけらるゝは、君の擇ぶところに任せんのみ。

[illegible]十七年六月

三上參次

凡例

一本書は人を知つてその傳を求むるに便ずるものにして、上古より明治三十七年一月に至る三千年間の大小人物の列傳を作り之を人名の假名文字に由つて五十音順に排列せるものなり。

一人名の蒐集は、その人物の種類を論せず苟くも世に傳ふべき者は大小序を以て之を採り、而して紙數限有りて遂に羅すべからざるに至つて始めて割愛せり。

一本書採錄する所の人物は凡べて既に生存を了れる者にして、尚現存する者は一も之を採ること無し。現存の人物はその歷史未完了せざればなり。

一人名の索引の頭標は名に據つて姓名に據らず。我が國人は姓名よりは單に名のみを以て記憶せらるゝと多きを以てなり。況や姓は家名にして人名に非ざるをや。

一名をいふよりは寧特に姓に官名等を附して呼ぶこと多き者は姓を冠して出せり。松平伊豆守、大岡越前守等の如し。

一姓名に擬したる戲號にして擬姓擬名相關係ある者は連出せり。俵米守(タワラノコメモリ)、曉鐘成(アカツキノカネナリ)等の如し。

一人名は諱、字、號、綽、諡、通稱、敬稱等種々ありと雖、その最普通に行はるゝものを

本名となし、之を以て頭標とせり。たとへば牛若丸に出さずして義經に出し藤吉郎に出さずして秀吉に出すが如し。

一本書は索引の便を計りて本傳の外に別名索引、宇音索引、字畫索引、名數索引、年代表を附し、また吾人の觀念裡實在の人物の外亦想像假在の人物有るを以て、卷末に假作人名辭彙を附したり。

一別名索引は、字、號、綽、諡、通稱、敬稱等本傳の頭標に出でざる別名を集めて各別名の下にその本名とする所を記し、之を頭標の別名の五十音順に由つて排列せるものなり。故に本傳の頭標に出でざる、別名を知つてその傳を求めむとせば、先づ別名索引に由つてその本名を知り而して後本傳に索ぬべし。但し別名索引は一人一行にして事足り紙面の惜むに足らざるを以て、單に本名を知るのみにして且つ便利なる場合あるべきを思ひ、本傳に割愛せる人物の別名をも採錄せり。

一字音索引は、訓の往々にして誤ること有るべき人名をその音讀の順序に由つて排列し、各下に本傳に出す所の正しき訓を之るせるものなり。故に訓を知らざる人名は、之を音讀してその字音に由て字音索引を索ね、その訓を得て而して後に本傳に索ぬべし。たとへば宇合、家持はその字音ウゴー、カジに由て字音索引に索ね、その訓のウマカイ、ヤカモチなることを知り以て本傳に索ぬべきがごとし。たゞし字音

は、漢音呉音等の別なく各字個々獨立せる場合の最普通なる發音によれり。たとへば立、百、物、をリュー、ハク、モツとせずしてリツ、ヒャク、ブツとせるが如し。

一字畫索引は、訓の誤ること有るべき人名中字音の定め難く又は誤り易きものを集め、畫數に由て排列し各下に本傳に出す所の正しき訓を附したるものなり。故に字音索引に由りがたきものは字畫索引によるべし。

一名數索引は、數詞を冠して數人を合稱せる名稱を集めて之を數字順に排列し、その各下に合稱せらるゝ各個の人名を列擧せるものなり。但しこれまた單に名數各個の人名を知るのみにして且つ便利なる場合あるべきを思ひ、一名一二行にして足るを以て、本傳に出さゝざる人名をも採錄せり。

一年代表は紀元のもとに天皇、年號、攝關、院政、將軍、執權、及びその時代まで生存せる著名なる人物、その時代に起れる重大なる事件を記入したるものにして、これら相互の年代關係を索ぬるに便ずるものなり。

一假作人名辭彙は物語謠曲戯曲小說等諸種の製作に顯はれたる想像假在の人物の假傳を記する所にして、編次體裁本傳に同じ。たゞ別名は之を混入せり。

一假作人名辭彙は、何人も通例之を知る者は多くは之を略けり。さはあれその蒐集極めて少なく、之を辭彙と稱するは聊冒稱の嫌無きにあらずと雖、その嚆矢たるべき

は編者の疑はざる所、他日完全なる假作人名辭典の現出を促すの導火となるを得れば足れり。編者亦企つる所無きにあらず。

一本書頭標の假名は、字音字訓を論せず歴史的假名遣法によらずして發音のまゝを以てせり。是假名遣特に字音假名遣の如きは、その區別の煩鎖なる到底索引に堪へ得べからざるを以てなり。然れども正しき假名遣亦之を要する場合あるべきを以て、本傳及び假作人名辭彙に於ては頭標の下に漢字を記し正しき假名遣を以て傍訓せり。たゞ別名字音字畫等の索引に於ては本傳の頭標と符合せしむる必要あるを以て皆發音のまゝによる。

一人名の發音は東京語により字音のケ、セイ、テイ等はケー、セー、テーとしクゥはカに一定し而してヂ、ヅはジ、ズに一定しキ、エ、ヲは阿行イエオに一定せり。

一長音符「ー」の有無は順序に關係なく、唯前後全く同じうして「ー」の有無のみ異なる時は「ー」なきものを前にす。ンはムに出さずして五十音最尾の文字として排列す。

一本書を編纂するに當つて村上三喜二君は專之に助力せられたり。その勞鮮しとせず。編者深く之を多とす。

あいが 井上安雅（イノウヘヤスイガ） 江戸の俳人但馬仙石家の武臣なり通稱長兵衛東溪舍と號す

あいと 戸塚愛子（トツカアイコ） 德川家康の妾なり愛の方又はお相の方といふ西郷の局是なり父は戸塚五郎大夫忠春母は西郷正勝の女なり愛子父忠春の死後右京進義勝に嫁す義勝戰死す母の再嫁に由て服部正尚の家に寓し左衛門佐清貞の養女として家康の侍女となる秀忠及び忠吉は愛子の生む所なり天正十七年五月三十八歳を以て駿府に病死す寛永五年秀忠奏請して從一位を贈る

あいわかだゆ 愛若大夫（アイワカダイフ） 應永の假面工なり春若の子假面工七人の一

あおいのまえ 葵前（アフヒノマヘ） 初め建禮門院の婢たり後召されて高倉帝に寵愛せらる時人葵女御とよぶを以て帝聊か愧色あり關白基房帝の意を察し自ら養ひて子となし以て宮嬪たらしめむとす帝許さず後年葵病を得て歿すといふ

あかえ 蘇我赤兄（ソガノアカエ） 大臣馬子の孫にして倉麻呂の子なり有間皇子の謀逆を平げて功あり天智帝の二年筑紫の帥に拜し大錦上に叙す四年左大臣となりて藤大臣と稱せらる後天武帝の即位に當り罪を得て流竄せらる

あかし 明石（アカシ） 志賀之助 江戸の力士なり寛永年中四谷鹽町に初めて勸進相撲を興行し剛勇の名一世に振ふ身の長七尺餘身量六十貫に及ぶと傳へらる曾て京都の力士仁王仁太夫と勝負を爭て之に勝ち無比の榮譽を博せりといふ

あかぞめえもん 赤染衛門（アカゾメエモン） 赤染時用の養女なり初め母兼盛の妻となり懷胎中に別れて女兒をあぐ乃ち衛門なり後母時用の妻となるに及びて衛門も養はれて其家にあり依て赤染を姓とす天性の才藻當時に傑出し和歌の堪能非凡の評を得たり攝政道長の妻倫子に仕へ程なく大江匡衡に嫁す曾て匡衡藤原公任が中納言を辭せむとするの表を依囑せらる匡衡家に歸りて悒惱時を久しうす衛門怪んで之を問ふ匡衡曰くわれ公任の辭表を囑せられたれどもこれ容易のわざにあらず紀齊名大江以言等の名儒既に筆を下したるも其意に滿たずと聞く吾が文何を以てか二儒の才を拔いて公任を欣ばすの樂を博せむやこれを以て大に憂ふと衛門曰くかの公は門地高く才學深きを矜るの色あり宜しく密かに官位沈滯の不平と門地貴きの矜飾とを加味して筆を下すべしと匡衡乃大に啓發して一文を草して公任に與ふ公任果して我意を得ぬと悅べり又衛門子擧周の病を住吉明神に祈り歌を詠じていはく變らむと祈る命はをしからでさても別れむとぞ悲しきと神其至情に感じて擧周の命を救へりと傳ふ蓋し歌才の高き和泉式部と其名を齊しくせり

あがたいぬかいのいらつめ 縣犬養娘子（アガタイヌカヒノイラツメ） 萬葉時代の女流歌人なり其詠歌は萬葉集卷第八にあり

あがたまろ 齋藤縣麿（サイトウアガタマロ） 和學者なり名は幸孝通稱市左衛門江戸神田雉子町の里正たり文化元年三月歿す年四十七子あり月岑といふ

あがたもり 多治比縣守（タヂヒノアガタモリ） 島左大臣の子慶雲の初年從五位下に進み和銅中宮內卿となる尋で從四位下にすゝみ遣唐押使となりて唐に往く吉備眞備安倍仲麿等從ふ玄宗帝に見えて姓を丹墀と改む養老二年歸朝正四位下に進む此年

始めて諸國に按察使を置く乃ち縣守武藏守となり相摸上野下野を管す時に蝦夷下毛廣人を殺す縣守勅を奉じて之を伐ち明年に及びて平定して還る功を以て中務卿にのぼり天平中遂に從三位に至る幾許ならずして民部卿參議となり山陽道鎮撫使となる九年正三位に叙せられ尋で薨ず

あかつきのかねなり 暁鐘成（アカツキノカネナリ） 一代小說家なり大阪の人藥種商を營む半齋齋といへり初世の門に學びて樂成り二世を嗣く安政六年四月歿す年四十三

あかひと 山部赤人（ヤマベノアカヒト） 神龜天平の間常に聖武帝の駕に從て出遊す和歌に巧みにして當時柿本人麿と其名を齊しうせり不盡山を望んで詠めるの歌尤も世にあらはる

あかまろ 大原赤麻呂（オホハラノアカマロ） 初め諸王となりて忍坂王といひ後大原姓を賜はりて眞人赤麻呂といふ和歌に巧みなり其詠萬葉集に見ゆ

あかまろ 佐伯赤麻呂（サヘキノアカマロ） 天平中官位正四位下皇后宮大夫に至る勝寶二年卒す赤麻歌をよくし其詠萬葉集に出づ

あきいえ 源顯家（ミナモトノアキイヘ） 源大納言親房の

あきう

子元弘中左近衛中將となり陸奥守となる建武元年功を以て從二位に進み二年鎮守府將軍となる延元元年鎌倉に抵り兵五萬を以て足利尊氏に尾して進み新田義貞と共に圍城寺を攻めて之に克ち さらに二萬の兵を選んで尊氏に當る勝敗決せず義貞精兵を率ゐて急に尊氏に薄り遂に之を走らす こゝに於て顯家陸奥に赴き常陸下野二國を併せ領し尋で權中納言となる二年陸奥の將士叛きて尊氏に從ふ顯家職て利あらず時に帝の宸翰到る顯家乃ち其旨を奉じ義詮の兵を利根川に伐ちて之を却け長驅して鎌倉に入り翌年隊を整へて京師に向ふ沿道の敵軍頻に起りて後を蹈む高師泰亦兵を出して美濃に拒ぐ顯家苦戰して伊勢に轉じ奈良に入る桃井直常來り攻む顯家敗走河内に逃れ男山に據る高師直大擧して來り圍む顯家吉野に奔らむと欲し勇戰して竟に陣中に薨ず年二十一南帝爲に從一位右大臣を贈る

あきうじ 細川顯氏（ホソカハアキウヂ） 頼貞の子四郎といふ陸奥守兵部大輔引付衆となる正平中足利尊氏に從ひて楠正行と河内に戰ふ利あらず直義歸順するに及び顯氏

あきか

從ひて官軍に屬し尊氏を攻む後顯氏頻に兩者の和を謀りて成らず愧ぢて僧となるむとす尊氏聞て之を止む正平七年顯氏義詮と共に和田正忠楠正儀と戰て克たず奔て讃岐に逃れ後三千の兵を以て京に入り男山を攻む男山陷るに及びて出家し尋で死す

あきかね 中原章兼（ナカハラノアキカネ） 章房の子後醍醐帝の北條氏を滅さむとするや章房固く其不可を陳ず帝謀の洩るゝ事を憂ひ瀬尾兵衛太郎及び其弟卿房をして章房を殺さしむ章兼大に憤り弟章信と共に苦心して遂に讐を復す世人大に其壯志を感ず

あきくに 源顯國（ミナモトノアキクニ） 親房の族なり春日侍從といふ延元元年顯家に從て西上し後還て常陸小田城に據り又駿馬城に據る敵軍來り攻む顯國敗走して大寶城に入り拒戰一日にして城陷り顯國遂に殺さる

あきこ 藤原詮子（フヂハラノアキコ） 圓融帝の皇后なり關白兼家の女天元元年女御となり三年一條帝を生む時に賴忠の女四條中宮就ありて皇子なし故を以て一條帝立ち詮子皇太后となるに及びて中宮の勢力

遂に衰ふ正暦二年疾に依て落髮し東三條院と號す關白道兼薨ずるの後詮子主として道長の内覽を勸め強て之を聽さる長德三年又病む十二月崩ず年四十

あきこ 藤原璋子（フヂハラノアキコ） 準山帝の女御にして關白賴忠の女當に帝の寵遇を得て恩眷終に衰へず長元八年六月卒す

あきこ 藤原彰子（フヂハラノアキコ） 一條帝の中宮なり攝政道長の女容姿秀麗なるを以て耀蘂蛍の稱あり寛弘五年身む事あり九月土御門第に於て皇子を生む即ち後一條帝なり六年十一月後朱雀帝を生む皇后定子崩御の後帝敦康親王を托して養はしむ彰子帝の意を察して親王を立てむ事を圖る道長用ゐず長和元年二月皇太后となる萬壽三年髮を斷ち戒を受く法名清淨覺一に上東門院といふ長暦三年尼となり再び戒を受く承保元年十月崩ず年八十七其椒房にありて寵遇恩眷全盛を極めたる前後に比なし

あきこ 藤原鐘子（フヂハラノアキコ） 伏見帝の中宮なり太政大臣實兼の女正應元年六月女御となり八月中宮となる永福門院といふ康永元年五月薨ず年七十二

あきこないしんのー 顯子内親王（アキコナイシンナウ） 東福門院の御腹にして後水尾帝の皇女なり寛永六年八月を以て御降誕延寶三年四月薨去御年四十七

あきさだ 上杉顯定（ウヘスギアキサダ） 房定の子房顯の養子長尾昌賢のために迎へられて山内第七代の主となり後關東管領に任ぜられ扇谷の主定正と共に兩管領と稱せらる文明三年三月足利成氏兵を發して伊豆を徇ふ顯定其後路を斷ち千葉小山結城の黨を破る時に長尾昌賢卒して子景春嗣ぐ景春族忠景と善からず是に於て不軌を謀り將に顯定を殺さむと企て乃ち之を太田道灌に圖る道灌顯定に請ふに景春に武藏守護代を與へて忠景と和せしめむ事を以てす顯定許さず景春乃ち之を襲ふ顯定支ふる事能はずして上野に逃る定正聞きて顯定を救ひ景春を伐つ然れども兩上杉氏の間常に相軋轢して解けず文明十八年二月定正足利政氏を來して顯定と戰ひ長享二年二月又戰ふ顯定憲房と計るも遂に克たず六月再び戰ひて顯定初めて勝利あり永正四年五年顯定薙髮して可淨と號し足利政氏其子高基の相爭ふを止む永正六年顯定の弟房能長尾爲景のために殺さる

宇佐美定行越人を率ゐて弔戰せむと欲し上杉定實を將と爲す顯定之を聞きて大に驚き憲房と兵を率ゐて越後に入り爲景を伐ちて破る永正七年土寇起り爲景を援く憲房戰て克たず顯定大に長尾原に戰ひ勇戰して爲景を走らせ鼓噪して進む信濃の人高梨政盛來り救ふ顯定遂に敗走して死す時に年五十七

あきさね 二條昭實（ニデウアキザネ） 後中院と號す二條家第十三世の主にして關白時良の子元和元年德川家康と共に禁中條目武家法度を定む同五年七月薨ず

あきすえ 藤原顯季（フヂハラノアキスエ） 隆經の子天仁中正三位に叙せられ天永中太宰大貳修理大夫となる保安中卒す年六十九和歌に巧みにして深く人丸を慕ひ其像を摸寫して之を祭る

あきすけ 藤原顯輔（フヂハラノアキスケ） 顯季の子堀河以下四帝に仕へて正三位左京大夫皇后宮亮となる和歌に巧みなるを以て詞花集の撰者となる

あきたね 藤原顯忠（フヂハラノアキタダ） 時平の子天德中左近衛大將となり遂に從二位右大臣となる康保二年薨ず富小路右大臣とよ

べり性節儉質朴を以て身を處す時平の子にして災禍を免れ顯官に達せる者は蓋し顯忠一人のみ

あきたね 相馬顯胤（サウマアキタネ） 盛胤の子陸奥の人讃岐守と稱す伊達植宗の女を娶れるを以て植宗の子晴宗の爲めに岩城重隆の女を媒す時に白河氏又婚を重隆にもとむ重隆惑ひ遂に晴宗の約を辭す顯胤大に恚り兵を率ゐて重隆を攻め連戰みな克つ重隆女を出して和を請ふ天文九年顯胤植宗を扶けて晴宗と戰ひ十一年大に之を破る十六年盧名盛氏來り侵すのち伐ちて之を却く

あきつ 文屋秋津（フンヤノアキツ） 大原の子承和の初め檢非違使別當に補せられ令聞あり後正四位下丹波守となる承和九年伴健岑の異圖に坐して貶せらる十年卒す年五十七

あきつら 立花鑑連（タチバナノアキツラ） 小字八幡後孫二郎初名守親筑前の人にして大友氏に隸屬す天文弘治中菊池秋月の諸族と戰ふ永祿五年削髮して道雪と號し毛利氏の豐後を侵すを一掃せり八年先鋒となりて筑前に入り十年龍造寺氏を伐ちて筑前守護となる依て立花城に居り立花氏を姓とす天正中大友義鎮の肆行を諫め秋月種實の叛するを伐ちて大に其軍を破る鑑連少時雷に擊たれて足爲めに傷さ行歩に艱む故に戰に臨む毎に手輿に駕し二尺七寸の大刀を帶び小銃を左右に携へ壯士百餘人を從ふ而して兵及交れば大聲叱呼輿を敵中に舁き入れよと促し先鋒破るれば乃ち怒號して謂ふ何ぞ我を敵中に投じて後走らざるとこゝを以て軍氣爲めに大に振ふ天正十三年九月病みて陣中に歿せり年七十三

あきとも 栗生顯友（クリフアキトモ） 新田義貞の臣にして左衛門と稱す上野の人なり驍勇を以て四天王の一人に數へられ又十六騎中の巨擘に推さる建武二年義貞に從ひて矢矧箱根に戰ひ軍功あり義貞敗るゝに及び顯友散卒をあつめて轉鬪する事三日天龍河に至る會々雨ふりて河水暴かに漲る乃ち浮橋を造りて軍を濟す軍中叛者あり縊かに繃繃を斷つ圍人馬を率ゐて至り陷りて水に溺れむとす顯友鎧のまゝに水中に入り人馬共に挾み流を亂して岸に達す明年義貞細川定禪を圍城寺に攻む僧兵拒戰して濠橋を撤す顯友藤原伊賀守と各々大木塔婆を拔き以て橋梁となせり畑時能渡里忠貞戲れていふ卿等を造橋判官となさむと乃ち進んで門に薄る賊大敗す後瓜生保の叛するに當り脇屋義助新田義顯奔りて金が崎に還る從者僅に十六人顯友簱を以て敵を欺き辛うじて城に入るを得たり足利尊氏大兵を督して來り薄る顯友勇戰して數十人を殪し逃れて其終るところを知らず

あきとも 結城顯朝（ユフキアキトモ） 親朝の子字は七郎大膳大夫左兵衛尉彈正少弼と稱す正平二年畠山高國等と藤田鑓山諸城を拔き後尊氏に從て白川を守り以て直義に備ふ八年白川以下八郡の檢斷職となり國守北畠守親と相関ぐ

あきなか 源顯仲（ミナモトノアキナカ） 顯房の子從三位左京大夫兼神祇伯となる和歌に巧みにして金葉集を撰み夏玉集を著はす保安四年薨ず年八十一

あきながまろ 商長麿（アキナガマロ） 萬葉集作歌者の一人なり但し其傳詳ならず

あきなり 上田秋成（ウヘダアキナリ） 國學者なり大坂の人父は丹波の豪家の子浪花に來りて妓に狎れ懷胎せしむ而して父鄉里に

歸る後妓樓に生るゝもの即ち秋成なり四歲にして孤となり上田氏に養はる東作、餘齋、鶉の屋、無腸、和譯太郎等の號あり常に身の賤しきを愧ぢ學を以て名を成さむとの大志を抱きて拮据勉勵す初め醫を業とせしも其性狷介人と合はざるを以て伎倆れず三十八火災に逢ひて家產を失ひ京に徙り又去て攝州長柄の橋畔に住し靜に書を讀む後京都南禪寺中に寓居し風月を友とし雅韻を探る曾て加藤美樹の大阪に到れる時訪れて弟子の禮を取り國學を修む又小說を好みオに任せて縱橫筆をやるに千行の文立どころに成るこゝに於て文名天下に鳴る曾て弟子に命じて著はすところの萬葉集訓點及び筆記八十卷をあつめて之を廢井に湮めしむ其友村瀨樗亭其故を問ふ秋成答へて曰く一時の漫筆未だ盡きざるもの多し然れども今や老衰して刪修の功に就く能はず此未定稿を遺して世を誤らむよりは寧ろ井中に投じ去らむにはと秋成の行爲率れかくの如し又嘗て妻を失ひ自ら炊事を司る本居春庭之を聞きて粽米數斗を贈る秋成大に欣び之を湯中に浸して喫す其洒落極めて愛すべし秋成晩年茶事に耽り自ら風爐茶器を作りて粟田口燒の基をひらく嘗てその數品を妙法院親王に獻じ精巧の稱を得たり文化七年十一月歿す年七十八著書の世に行はるゝ者僧昇道の輯めたる藤簒册子、冠辭考續貂、清風瑣言、靈語通、萬葉集見安補註、古今集よしやあしや、漢委奴王金印考、雨月物語、癇癖談、妄氣質、諸藝聞耳等あり

あきのぶ 狩野章信（カノアキノブ） 幕府の表醫師なり名は彰信後章信紫川と號す初名仙次郎衞を信政に學び業成りて法眼に叙せらる遂に幕府醫師に列し寵用せらる諸侯の前といへども或は頭巾を脫せずして描く事あり性放逸遊蕩を好み吉原越前屋の和國に狎る文政九年十月卒す年六十四

あきのぶ 源顯信（ミナモトノアキノブ） 親房の子左近衞少將となる依て春日少將の名あり延元元年兵を伊勢に起し三年美濃に入り土岐頼遠を破て男山に據る高師直來り圍む新田義貞勅を奉じて之を救ふ然れども城中糧盡きて支ふる事能はず顯信乃ち出でゝ河內に走る尋で從三位近衞中將となり陸奥介鎭守府將軍を兼ぬ興國元年陸奥に赴き白河城に居る正平二年結城相馬の兵來り攻む顯信利あらず六年宇津峰宮を奉じて戰ひ明年利を失ひて吉野に逃れ還る後中納言となり懷良親王に從ひて九州に赴き筑前に戰死す

あきのぼう 秋坊（アキノバウ） 芭蕉時代の俳人なり加賀金澤の人風流の志篤く諸州を遊歷して天下の雅客文人と交る其終焉に及んでは友人李東に句を與へていふ正月四日よろづ此世を去るによしと時は正に正月の四日なり而して坊の談笑又平日に異ならずかくて談盡き忽ちに瞑す李東大に驚き稻つむと見せて失せけり秋の坊の句を詠じて悲む

あきのり 一色詮範（イッシキアキノリ） 足利氏の族姓は源氏なり初め足利泰氏の七男公深參河の國吉良の莊に住し一色を姓とす公深の子義氏範光を生み範光詮範を生む詮範兵部少輔左京大夫に任じ正平二十三年評定役となる建德二年正月能登野の一揆を平げ元中八年義滿將軍のために山名氏清を伐つ功を以て若狹國今富莊を賜はる應永二年六月薙髮して信將といひ十三年六月卒す

あきは 田邊秋庭（タナベノアキバ） 從七位下周防守

に叙任せらる天平中の人其和歌萬葉集にあり

あきひら 藤原明衡（フヂハラノアキヒラ） 敦信の子康平中東宮學士となり文章博士を授けらる博學多才の名高し本朝文粹、雲州往來等を著はす

あきふさ 中原章房（ナカハラノアキフサ） 後宇多より後花園に至るの四帝に歴仕して大判事となる後醍醐帝の朝に及びて親昵せられ常に左右に侍す帝北條氏を伐たむと謀る章房朝廷の微力を憂ひて固く其不可を陳ず帝事の漏るゝを慮り瀬尾兵衛太郎及び其弟彌房をして之を殺さしむ兵衛太郎章房の清水寺に詣づるを機とし急に襲ひて遂に其首を得駛走して逃れ去る

あきふさ 源顯房（ミナモトノアキフサ） 太政大臣師房の子永保三年右大臣となり右近衛大將となる頗時望あり嘉保元年從一位となり薨ず年五十八世に六條右府といふ

あきみつ 勘解由小路韶光（カデノコウヂアキミツ） 權大納言光雄の子正二位權大納言を以て享保十四年七月薨ぜり年六十七韶光晩年居を平野に卜し儒者をあつめて唱酬して自ら娛む

あきみつ 藤原顯光（フヂハラノアキミツ） 關白兼道の子從一位に叙し左大臣に任ぜらる堀河又は廣幡といふ嘗て女延子を小一條の宮に入る後道長の女入るに及び寵頓に衰ふ顯光大に怨み僧道綱をして道長を呪詛せしめ死後又祟を爲す依て惡靈左府の名あり薨ずる時年七十八

あきやす 北畠顯泰（キタバタケアキヤス） 伊勢の國司なり顯能の子南北嬾和の後伊勢伊賀志摩を領す應永六年大内義弘の叛きて堺浦に來るや將軍義滿を出す顯泰從ふ而して利あらず東野に却くたまたま逆葬者あり顯泰其遺筵を食ひ天蓋を以て旗幟と爲し進で義弘を破るこれより世々天蓋を旗標となすといふ正二位右近衛大將を以て應永九年十月薨ず年四十三

あきよし 一條昭良（イチデウアキヨシ） 後陽成帝の第九子母は中和院なり九宮と稱す關白一條内基に養はれて嗣となり慶長十四年十二月正五位下となり禁色元服を許さる後右近衛少將より内大臣に歴任し關白氏長者となり尋で從一位左大臣に拜す幾許ならずして攝政左大臣共に辭して名籍還を改めて昭良となす正保四年攝政關白となり慶安四年薙髮して惠觀といふ寛文十二年二月薨ず年六十八德院の號あり

あきよし 北畠顯能（キタバタケアキヨシ） 伊勢國の國司なり准三宮親房の三男壹志郡多藝に治するを以て多藝御所といふ延元元年兄顯家に從ひて伊賀伊勢に轉戰し功あり後高師秋と戰て克ち正平六年に至て之を擒殺す同七年二月南帝其居に幸す和田正忠楠正儀八千の兵を以て供奉せり此時足利義詮法勝寺の惡鎭に據りて罪を謝せむと欲し稍々諸軍の警備を懈る顯能等之に乘じ急に京を攻めて義詮の軍を敗る義詮大敗狼狽して近江に入る顯能長驅して之を却け美濃に走らしむ幾許ならず義詮參河遠江尾張美濃近江越前の兵を率ゐて來り攻む顯能利あらず乃ち國に還り南帝吉野に幸す正平十五年畠山國清等二十萬の大兵を以て行宮を襲ふ顯能三千を以て進み敵の糧道を斷つこゝに於て敵京師に退く二十四年土岐頼康伊勢を犯す顯能子顯泰と共に拒戰して却くこれより六角仁木の徒と爭ひ常に利あり弘和三年七月を以て病んで薨ず官右近衛少將に至り位從四

位下に至る南帝贈るに從一位右大臣を以てせり

あきよし 松岡明義（マツヲカアキヨシ） 國學者なり辰方の孫行義の子有職故實の學に精し明治廿三年六月歿す

あきよし 山田顯義（ヤマダアキヨシ） 父は顯行周防山口の人なり毛利侯に仕ふ顯義幼より學に精しく兵法に通ず維新の際東北に征して功を奏し累進して陸軍中將となる後司法大臣と爲り正二位勳一等伯爵に叙せらる顯義時勢に鑑み國粹保存を以て國家百年の計となし大に國粹保存主義を稱へ先づ司法官の服裝を國風に改め亦國學院及日本法律學校を起して生徒を養成せり明治二十四年疾を以て司法大臣を辭す樞密院顧問官議定官故の如し二十五年十一月山口より歸京の途生野銀山の山中に卒倒し遂に起たず時に年四十九

あきら 小松彰（コマツアキラ） 信州松本藩の士幼名金八又左右輔後彰と改む江戸に出でて鱗谷宕陰に學び古賀謹堂の塾に入り長岡藩の名士河井繼之介と交る文久三年佐久間象山の門に入り明治維新後官途に就く明治五年豐岡縣令となり同六年權大内史にうつり法制課長となり文部大丞にすゝむ尋で辭職して東京株式取引所の頭取に推され後米商會所頭取となり二十一年三月歿す年四十七朝廷特旨を以て正五位を贈る

あきら 源明（ミナモトノアキラ） 嵯峨帝の皇子なり嘉祥中阿波守となり參議に拜す尋で髮を削りて名を素然と改め横川に居る依て横川宰相入道とよぶ仁壽二年十二月薨ず年三十九

あきらけ！と 藤原明子（フヂハラノアキラケイコ） 太政大臣良房の女文德の后となる清和帝及び儀子内親王を生む貞觀六年尊ばれて皇太后となり元慶六年正月太皇太后となる昌泰三年五月崩ず年七十二一に染殿后といふ

あくえもん 赤井惡右衛門（アカヰアクエモン） 丹波の人なり名は直正右衛門尉と稱す永祿十二年織田信長明智光秀を遣して之を伐つ惡右衛門降る天正七年八月秀吉脇坂安治を遣して光秀と共に其城を攻め遂に之を滅す

あくはんぼー 惡坂坊（アクハンバウ） 備中安閑梨の弟子にして公曉に從ひ北條氏の兵と勇鬪して死す

あげまき 總角（アゲマキ） 京都島原の名妓にして野波屋の抱なり市井の俠者助六といふものと狎れ嬌名世にうたはる元和中の事なりとか

あげみ 井手曙覽（ヰデノアケミ） 福井の人和歌をよくす初名尚平幼名玉郎三郎天保十年江戸に遊びて國學を修め弘化三年足羽山に卜居して子弟を教授す安政六年松平慶永の命を以て萬葉の名歌を選出し悉く忠君愛國の歌を採る明治元年八月歿す年五十七其著古今集垣間見、志濃夫廼舍集あり

あさお 淺尾（アサヲ） 加州侯の妾御貞の方の老女なり逆臣大槻傳藏に與みして事露はれ慘刑に處せらる時は寶暦六年四月なり

あさかしんのー 安積親王（アサカシンヤ） 聖武帝の皇子にして母は縣犬養刀自なり天平十六年六月脚疾に罹りて京に薨ず年十七

あさかぜ 堤朝風（ツヽミアサカゼ） 江戸の國學者通稱三玉郎幕府の暇組頭をつとむ本居の門に學びて平田篤胤と親交あり天保五

年四月歿す

あさたね 藤原朝忠（フヂハラノアサタダ） 定方の子土御門中納言とよばる和歌に巧なるを以て其名高し

あさつな 大江朝綱（オホエノアサツナ） 音人の孫玉淵の子夙に文章生にあげられ對策して登科す詞藻絶妙一世に秀づ嘗て村上の朝に新國史及び坤元錄を著し又渤海國使裴璆を饗するの詩序に書す其詞極めて美麗に極めて莊重なり璆大に嘆賞す官左大辨より參議兼備前美作守に任ぜられ正四位下にいたる又小野道風と書法を論じて互に相下らず村上帝いふ道風の文朝綱に及ばず朝綱の書道風に如かずと朝綱遂に服す天德の初年卒す年七十二著書に後江相公集あり後江相公は蓋し朝綱の別號なり

あさどの 阿佐殿（アサドノ） 其何人の女なるを詳にせず後龜山帝の中宮にあげらる

あさのみや 淺宮（アサノミヤ） 伏見貞清親王の女顯子をいふ明暦三年七月德川家綱に降嫁す貞德一世に高し延寶四年八月乳癌を病む節操を重じて醫を遠け遂に薨す年三十八從一位を追贈せらる法名高嚴院月淵圓心

あさはらないしんの一 朝原內親王（アサハラナイシンノウ） 平城帝の妃にして延暦中伊勢の齋宮となる弘仁八年薨す年三十九

あさひだけ 朝日嶽（アサヒダケ） 鶴之助 出羽の人立田川の部屋に入りて鶴ヶ嶽とよび幕下に附け出さる後朝日嶽と改め明治十年大關にのぼる當時酒井侯の寵を得て横綱免許の事ありしと雖病を以て果さず遂に業を廢めて年寄專務となる

あさひのかた 朝日方（アサヒノカタ）、豐臣秀吉の異父妹にして德川家康の室なり駿河御前といふ初め秀吉の母織田信秀の同腹筑阿彌に再嫁し秀長及び朝日の方を生む朝日の方容色秀麗花の如し長じて佐治日向守に嫁す秀吉家康と小牧に戰ひて克たず和を請ふ家康聽かず秀吉篠籠まり沈思熟慮遂に佐治氏を說きて朝日の方を家康に嫁せしめ以て婚姻政略を取らむと計る佐治義氣あり秀吉のために屠腹して之を讓る秀吉酒井忠次に據りて意を告げ淺野長政を遣して誓約を結び終に天正十四年五月姿嬌百五十人を從へて禮を行ふ式極めて盛大なりこゝに於て兩雄の和解初めて成る天正十七年秀吉の母病む朝日の方家康と共に京に赴き之を訪ひて自ら亦病む天正十八年正月年四十八を以て聚樂亭に薨ず東福寺に葬て南明院と號す

あじすきたかひこねのかみ 味鋤高彦根神（アヂスキタカヒコネノカミ） 下照姫の夫天稚彦の友なり天稚彦の死するに當りたまたま下照姫を訪ふ容貌極めて天稚彦に似たり下照姫大の蘇生せるものとあやまる高彦根大に驚き長歌を作て其辯疏をなせりとぞ一名迦毛大神といふ

あしなづち 脚名椎（アシナヅチ） 出雲の人大山津見神の子にして妻手名椎と共に簸川上に居る子あり櫛稻田姫といふ

あしのやけんぎょ一 蘆屋檢校（アシヤケンギャウ） 國學者にして源氏物語に精通し和歌を善くす名は麻積東洋堂と號す安政二年十月大地震の際歴死す年五十有餘

あすかしんの一 明日香親王（アスカシンノウ） 桓武帝の皇子にして母は紀若子なり上表して生む所の男女に姓朝臣を賜はらむ事を請ひ許されて久賀姓を賜はる弘仁十二年三品に叙し天長八年上野の大守に

任ぜられ承和二年二月薨す

あせー 阿清（アセイ） 備中の人百濟氏世に高德の僧として尊信せらる

あたごのばば 愛宕嫗（アタゴノババ） 洛東愛宕山祠の側に寡居せる女俠にして里閭の重んずるところとなる

あちきし 阿知吉師（アチキシ）一阿直岐の祖にして百濟人なり應神帝の十五年八月百濟王阿知吉師を遣して良馬一頭を奉る阿知吉師經典に通ぜり太子菟道稚郎子大に喜び乃ち之を師として學ぶ

あちのおみ 阿知使主（アチノオミ） 漢の靈帝の曾孫漢魏に禪るに及びて我國に來り歸化す時は乃ち應神帝の二十年なり詔して高市郡檜前邑を賜はりてこゝに居る三十七年詔を奉じて吳に往き兄媛弟媛吳織綾織の四女縫工を得てかへる帝崩す依て仁德帝に奉る履仲帝の立つや住吉仲皇子反す阿知使主平群木兎と共に變を告げ皇太子を馬に乘せて走る皇太子位に即くの後功を以て食邑を賜はれりといふ

あついえ 藤原敦家（フヂハラノアツイヘ） 兼經の子正四位伊豫守となる尤も管絃の道に精し寛治五年七月卒す

あつこ 稅所敦子（サイショアツコ） 京都の人歌人なり薩摩藩稅所篤之が後妻となり二十八歲の時夫を亡ふ而して姑に事ふること極めて孝なり島津久光の女香蘭院近衛忠房に嫁するや敦子之に侍す明治八年掌侍に任ぜられ皇后及皇太后に仕へて諸務に與る家集御垣の下草あり三十三年二月歿す年七十六正五位を授けらる

あつこ 藤原溫子（フヂハラノアツコ） 宇多帝の中宮なり太政大臣基經の女東七條后とよぶ仁和中女御となり均子內親王を生む醍醐の朝皇太夫人となり中宮と稱せらる延喜五年六月崩す年三十六

あつこないしんの一 篤子內親王（アツコナイシンノウ） 後三條帝の第四女寛治七年堀河帝の中宮となる時に年三十四帝に長ずる事十九歲なり嘉承二年薙髮して尼となり永久二年堀河院に崩ず年五十五

あづさ 小野梓（オノノアヅサ） 土佐の人東洋と號す慶應中中村重遠の門下にあり重遠兵を起すに及び梓從はむとして許されず強ひて請ひて越後口に戰ひ事平ぐの後鄕に還る明治二年昌平黌に入り後士格を脫して平民籍に加はる蓋し士の束縛多きを厭ひしが爲めなり三年大阪に赴き小野義眞に據て支那に游ぶ五年官命を以て英國に留學し歸て共存同衆の團體を結び白蓮會を興す而して國蹠論綱の著作に從ひ稿成らむとして虎列刺病に罹る十一年元老院書記官となり十二年會計檢査官となる十五年改進黨の學事となり傍ら專門學校創立に盡力す十七年病に罹り十九年一月歿す年三十五著はす所東洋經濟論、日本外交論、政學便覽、利學入門等あり

あつざねしんの一 敦實親王（アツザネシンノウ） 宇多天皇の第八皇子母は皇太后胤子一品式部卿たり六條宮、八條宮、或は仁和寺宮ともいふ宇多源氏の祖と傳へらる康保四年三月年七十五を以て薨ず法名覺信

あつしげ 菅原淳茂（スガハラノアツシゲ） 道眞の子對策して及第し文章博士となり式部權大輔に任じ正五位に叙せらる文に妙に詩に巧みにして頗る父右相の風あり宇多院常に之を賞す

あつただ 藤原敦忠（フヂハラノアツタダ） 時平の子從三位權中納言となる和歌及び音律に通ず本院中納言又琵琶中納言といふ天慶六

年卒す年三十八

あつたね 平田篤胤（ヒラタアツタネ） 國學者なり出羽の人幼名正吉通稱大角或は大壑氣吹廼舍と號す儒醫を修めて名を玄隆とよべり二十歳東都に來り苦役に服し消防人夫となり又市川團十郎の門弟となる幾許ならず板倉侯の家臣平田藤兵衛の養子となり山鹿流の軍學を修む妻のすゝめに依て國典研究の志を起し伊勢に赴きて本居宣長と師弟の約を結ぶ然れども密に其講説を親しく聽く事能はずして止む時は享和年中なり篤胤是より神典を讀み精勵して古史徵を著す文政六年古史成文古史徵開題記、神代御系圖、靈能眞柱、古史傳抄錄を著し六人部是香の周旋に依て朝廷に上る事を得同年九月紀伊に赴き本居大平と談じ十月伊勢に入り山室山なる本居翁が墓に詣づ歸て後二條家より古學宗匠の號を賜はり白川家より神職教導の事を托せらる天保九年秋田藩に歸復し百石を食む當時儒家林氏の妬みを蒙りて屢々閣老より身分取調を受くるに至れりといふ天保十四年九月歿す年六十八嗣して神靈能眞柱大人といふ著書に、古史傳、古史成文、古史徵、同開題記、古史本辭經、神學同文傳、大道或問、靈能眞柱、古今妖魅考、皇典文藻、歌道大意、古道大意、鬼神新論、印度藏志、悟道辨、伊吹の舍筆叢、伊吹の舍文集、出定笑語等あり

あつのりしんの一 敦儀親王（アツノリシンナウ） 三條天皇第二の皇子母は皇后宮城子寛弘八年十月式部卿に任ぜられ天喜二年七月五十八を以て薨ず

あつひのいらつめ 安都扉郎女（アツヒノイラツメ） 大寶中の人其和歌萬葉集にあり

あづま 山本東（ヤマモトアツマ） 大藏流の狂言師なり年少にして大藏彌左衛門に學ぶ妙技を以て明治狂言界の泰斗と仰がる三十五年五月病を得九月回復し十一月再發して歿す

あづままろ 荷田春滿（カダノアツマロ） 有名なる國學者なり本姓羽倉氏世々京都稻荷山の祠官たり齊とといひ東麻呂といふ夙に國學の研究に從ひ神代卷萬葉集を專攻し國史律令格式の諸書を修めて羽倉學の名を天下に轟かす將軍吉宗其名を聞きて召せども應ぜず國學校を京都に建てむの議を諮ひて許され地を東山に卜するに及び病を得て起つ能はず元文元年七月遂に歿す年六十七春滿曾て歌道の淫靡に流るゝを憂ひ之を矯正せむとの心より生涯戀歌を詠せず又赤穗の遺臣大高源吾と交り其爲に吉良邸の地圖を作りて與へしとの説あり 著書、神代卷講義、古今集古註考、伊勢物語童子問、同修刪、齊明紀童謠考、春葉集、出雲風土記考、儁頼聚三代格考等あり

あづまびと 大伴東人（オホトモノアツマビト） 寶字五年從五位下に叙せられ式部少輔となる七年少納言に拜し八年周防守となり彈正弼に任ず和歌をよくし其詠萬葉集に見ゆ

あづまびと 大野東人（オホノアツマビト） 大夫果安の子元明帝の時正七位上に叙す神龜中建議して曰くよろしく多賀城を築きて蝦夷に備ふべしと功に依て從四位下勳四等を授けられ陸奥鎮守府將軍兼按察使となる又男勝の賊を伐ちて遂に東北を鎮定せり兵部卿藤原麻呂奏して東人を多賀柵を鎮ぜしめ大養德守を兼ねしむ十一年參議に拜し此歳太宰大貳藤原廣嗣を伐ち板櫃河に逆戰して之を斬る十三年功に依て從三位に叙せられ十四年薨ず

あづまびと 河邊東人（カハベノアツマビト） 蘇我石川宿禰の後裔雲中從五位下に叙せられ寶龜中石見守に任ぜらる和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ

あづまびと 佐伯東人（サヘキノアツマビト） 天平中從五位下に叙せられ判官となる和歌に巧みなり萬葉集所載のもの秀歌頗多し

あづまびと 中臣東人（ナカトミノアツマビト） 養老二年式部少輔より進みて從五位上右近衛中將となり神龜元年正五位上に進み刑部卿に至る和歌に巧みにして其詠萬葉集に入る

あづまびと 橘原東人（ナラハラノアツマビト） 天平中從五位下駿河守となり勝寶に至て兼大學博士大學頭となる和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ

あつまろ 近衛篤麿（コノエアツマロ） 從一位近衛忠房の子五攝家名門の出なるを以て尤も同族の間に重んぜらる明治六年九月家督を嗣ぎ十年一月從五位に叙せらる十七年七月公爵を授けられ是歳九月を以て墺國留學の命を蒙る十八年四月從四位に進み尋で獨逸留學の命を受け歸朝して後貴族院議員に選まる二十六年六月從三位に進み二十八年三月學習院長に二十九年九月貴族院議長に任ぜらる三十年七月正三位となり三十四年六月從二位となる而して此間海外漫遊の途に上る事數回にして外國皇帝より勳章をうくること亦甚多し三十六年十二月樞密院顧問官にあげられ特に位二級を進められて從一位となり勳二等に叙せらる三十七年一月薨ず享年四十二

あづみのびみょーぶ 安曇外命婦（アヅミノゲミヤウブ） 天平寶龜年中の人其詠歌は萬葉集中にあり

あつもり 平敦盛（タヒラノアツモリ） 參議經盛の子從五位下に叙せられしも官職無きを以て無官大夫とよばる一谷の役城より逃れて海上の御座船に赴かむと欲し馬を浪間に入る時に源義經の旗下熊谷直實來り喚止して戰を挑む敦盛奮を廻らして渚にかへり直實と交搏して殺さる時に其年僅に十六歳なり

あつやすしんの一 敦康親王（アツヤスシンナウ） 一條天皇の第一皇子母は藤原道隆の女皇后定子なり太宰帥より一品式部卿にうつり寛仁二年薨ず

あつより 藤原敦頼（フヂハラノアツヨリ） 清孝の子馬寮使となりて馬部の裝束を給きて私す馬部數十人悉て之を一條大宮に襲ひ其衣服を褫ふ敦頼裸にして走る故に裸之助の渾名あり後薙髮して道因と號し專ら和歌に耽る

あひらつひめ 吾平津媛（アヒラツヒメ） 神武天皇の妃なり手研耳命、岐須美々命を生む

あぶつに 阿佛尼（アブツニ） 藤原爲家の妻なり安嘉門院に仕へ四條又は右衛門佐と稱す後髮を削りて阿佛尼とよぶ世に北林禪尼と云ふも此人なり和歌に巧なるは其著十六夜日記夜の鶴等に徴するも明かなるべし建治三年長子爲氏季子爲相の領たる細川莊及び小野莊を横領するに當り阿佛鎌倉に赴き裁決を請ふ訴訟決せず弘安六年九月を以て遂に歿す

あぶん 安田蛙文（ヤスダアブン） 西澤一鳳の弟子難波豐竹座の狂言作者 北條時頼記、鎌倉秘事、曾我錦几帳、青砥錢等を作る

あべのいらつめ 阿部娘子（アベノイラツメ） 和銅寶龜中の人其詠歌萬葉集にあり

あべまろ 紀阿閉麿（キノアベマロ） 壬申の亂天武帝に從ひ東道將軍となる帝位に即くに及んで重賞し其卒するに至りて冠大紫

を贈る

あほしんのー 阿保親王 平城帝の皇子母は葛井藤子なり弘仁の變太宰員外帥に貶せられ天長の初年召還せられて三品となる後伴健岑の反を朝廷に告ぐ爲に薨去の後一品を贈らる親王人となり謙讓溫厚頗る絃歌をよくせり

あま 安萬 天平勝寶中の人佛像を刻するに妙を得たり越田安萬とも稱す

あまくに 天國 崇神天皇の時の人天皇の六年勅を奉じて始めて劍を造る天皇以て護身の御劍となす

あまくに 天國 大寶年中の人日本刀劍師の元祖なり彼の平氏の傳ふる小烏丸は其作れるものなりといふ

あまこのいらつめ 尼子娘子 天武帝の宮人にして帝の幸を得高市皇子を生む

あまぐも 天雲 繼體天皇の時の人大和に住して刀匠をなす蟻切は其作るところなりと傳ふ

あまつくめのみこと 天津久米命 天孫降臨の時天忍日命と共に前驅したる神にして久米の直の祖なり

あまつまうら 天津眞浦 綏靖天皇の朝に勅を奉じて眞辟鏃をつくる有名の鍛工なり

あまとよつひめ 天豐津媛 懿德天皇の后にして孝昭帝及び武石彦奇友背命を生む後皇太后と崇稱せらる

あまね 西周 石見の人通稱初め經太郎後蘇惠僧を脫するに及びて修堯又は周助といひ維新後周と改む名は時懋麗城或は甘藤齋又は天根と號す闡學を池田玄仲に學び英語を中濱萬治郎に修め文久元年を以て蕃書取調所教授方となる二年內田恒次郎榎本釜次郎等と共に和蘭に赴き還て開港事業の勅許を仰がむとして途げず三年將軍慶喜の佛語侍讀となり佛帝三世ナポレオンの甘言を以て國人を誘はむとするを斥け明治元年伏見の戰敗れて將軍大阪より江戸に歸るに及び周も又和歌山を歷て江戸に赴き將軍のために告諭文を草して之を公布し恭順の意を天下に告げて德川家士の官軍に抗するを戒む後沼津に兵學校の起るや周教頭となり三年兵部省に出仕し陸軍大丞に轉じ十二年學士會院長となる十五年元老院議官となりて從四位勳三等に叙せられ十八年正四位に進み十九年從三位に陞り廿一年勳一等を授けらる二十三年貴族院議員に勅選せられ錦鷄間祗候に拜す二十四年議員を辭す二十七年五月正三位勳一等に叙し男爵を授けらる尋で歿す年六十九

あまのはら 天原 承曆弘仁又は大治年中の人と傳ふ有名の刀工なり

あまのひぼこ 天日槍 新羅王の子垂仁帝の時來航して歸化し齎すところの珍寶を獻ず帝其請ふに任せて諸國を遍歷して恰好の地を得しむ日槍宇治川より北近江に入り吾名邑に居る幾許ならずして若狹に赴き但馬に止る出島の人太耳の女麻多烏を娶りて但馬諸助を生むこれより世々但馬に居るといふ

あみだいんのそーじょー 阿彌陀院僧正 聖兼といふ正應二年八月醍醐寺の座主となる

あめのうずめのみこと 天鈿女命 性强悍猛固岩戸ひらきのとき眞辟の葛を鑿となし藤葛を手繦となし笹前の槽をふみとゞろかして舞ふこれに依て諸神笑樂す大神怪んで御戸をひらきて親

ふ手力雄の命其御手を執て出し奉る又天孫降臨の時猿田彦神と途にあひ其名を問うて嚮導となす其子孫猿女君は猿田彦に仕ふ

あめのおしひのみこと 天忍日命 高皇產靈神の御子天孫降臨の時弓矢を執て前驅す大伴連の祖なり

あめのおはばりのかみ 天尾羽張神 伊都尾羽張神ともいふ初め天安河を逆に堰きて居たりしが忍穗耳尊の勅を奉じて之に順ひ其子武甕土をして大國主命を征せしむといふ

あめのくらどのかみ 天之闇戸神 大山津見神の第五子なり

あめのくひざもちのかみ 天之久比奢母智神 速秋津彦神の御子なり

あめのこやねのみこと 天兒屋根命 神皇產靈神の御子天孫に從て中國に降る中臣連即ち藤原氏の祖にして春日明神これなり

あめのさぎりのかみ 天之狹霧神 大山津見神の第三子なり

あめのさつちのかみ 天之狹土神 大山津見神の第一子なり

あめのたなばたひめのかみ 天之棚機姬神 天照大神の岩戸に入らせ給ふの時神衣を織る

あめのたねとのみこと 天種子命 天兒屋根命の孫なり中國鎭定の後國政を整へ鳥部山に皇天を祀る

あめのたらしねのみこと 天帶根命 孝行帝の皇子なり

あめのたちのかみ 天之常立神 天地開闢の時始めて天に成りませる神なり

あめのとみのみこと 天富命 天太玉命の孫齋部を率ゐて安房に赴き殖產をつとむ

あめのはつちおのかみ 天羽槌雄神 倭文の祖天照大神の岩戸隱の時文布をつくる

あめのひわしのかみ 天日鷲神 阿波忌部の祖天照大神の岩戸隱れの時津咋見神と共に穀木を植ゑて白和幣をつくる後天太玉命に仕ふ

あめのふきおのかみ 天之吹男神 伊柴那岐神の子大戸日別神が弟にまします又氣吹主神といふ

あめのふとだまのみこと 天之太玉命 高皇產靈神の子齋部氏の祖なり今安房國洲崎に祀れるは乃ちこの神なり

あめのほひのみこと 天菩比命 忍穗耳尊の中國を征する時先づ往きて大國主尊を說かしむ命大國主に媚び三年復言せず後大國主の天日隅宮に入るの日其祭主を命ぜらる

あめのみくまりのかみ 天之水分神 速秋津比古神の子なり

あめのみぬかぬしのかみ 天之御中主神 天地開闢の初め高天原に生れたまひし神なり

あめのめひとつのかみ 天目一箇命 太玉命の臣にして筑紫伊勢の齋部の祖なり天照大神岩戸隱れの時刀斧鐵鏡をつくる

あめのわかひとのかみ 天稚日子神 天津國玉神の子なり天之穗日命の中國を征するとき先づ征きて大國主神の女下照姬を娶り自ら其國を獲むとして還

らざること八年天照大神人を遣はして之を詰らしむ命其使を殺す大神大に怒り直に命を射殺せり

あやおか 池田綾岡（イケダアヤヲカ） 畫人なり又書に巧みなり通稱を奈食屋八兵衛といふ明治二十年五月歿せり

あやせ 龜田綾瀬（カメダアヤセ） 儒者なり名は長梓字は木王通稱を三藏といひ佛樹齋と號す鵬齋の義子にして藤谷の義父なり嘉永六年四月歿す年七十六

あやせがわ 綾瀬川（アヤセガハ） 山左衛門 大阪の人初め湊由良右衛門の弟子となり伊達の森又は登り船と呼ぶ後江戸に來りて秀の山の門に入り伊達ヶ關又は相生と改め姫路侯に抱へらる數年にして仕を山内侯に替へ綾瀬川とよぶ明治四年小結に位し翌年雷電を倒すの故を以て一躍西方大關となる同十年病に罹りて歿す

あやせたゆ！ 竹本綾瀬太夫（タケモトアヤセダイフ） 義太夫の名家なり通稱中村彦兵衛大阪の人にして業を鶴澤芳次郎同友次郎竹本長門太夫に修め相生太夫とよべり後文樂座を罷めて江戸に來り明治初年綾瀬と改む以來名聲噴々播磨岡織の諸太夫と共に斯界のために力を致せり三十三年綾翁と改め三十四年九月病歿す年六十九

あやめ 片岡あやめ（カタオカ） 大阪の俳優なり初名を熊吉又豐松あやめともいふ後片岡の養子となり立女形にすゝむ文政七年四月歿す

あやめ 芳澤あやめ（ヨシザハ） 初代 京都の俳優なり家名橘屋初名山下權七粹水と號す立役より女形にうつる享保十四年七月歿す年五十七

あやんど 庭訓舍綾人（テイキンシヤアヤンド） 狂歌師なり一名霍の綾人姓久野通稱與兵衛四方側の判者なり文化中歿す

あゆのすけ 早川鮎之助（ハヤカハアユノスケ） 尼子十勇士中の一人尼子義久勝久に仕ふ

あらうま 荒馬（アラウマ） 吉五郎 下總の人江戸の力士宮城野の部屋に入りて船橋とよび後一文字と改め土俵に功名を積みたるが嘉永元年遂に關脇となりて大關小柳に對せり

あらお 荒雄（アラヲ） 筑前の人和歌を善くす其詠は爲葉集中に收めらる

あらかい 物部麤鹿火（モノノベノアラカヒ） 麻佐良の子仁賢武烈繼體安閑宣化の五朝に仕へて大連となる繼體帝の六年百濟任那表を上て上哆唎以下四縣を乞ふ哆唎守穗積押山類に之を乞ひ大伴金村專ら此議に與る麤鹿火勅を承けて宣勅使たり妻其慫慂に逆ふを說きて宣勅使を辭せしむ麤鹿火病を以て辭すこゝに於て此議止む二十一年筑紫國造磐井叛す麤鹿火伐て之を平ぐ宣化帝の元年薨ず

あらしろのむらじ 暴代連（アラシロノムラジ） 天兒屋根命十一世の孫雷大臣命の子雄略の朝に東夷を征して功あり一に暴代連は武内宿禰なりといふ

あらたわけのみこと 荒田別命（アラダワケノミコト） 豐城入彦四世の孫にして應神帝の時人新羅を伐つて之を平定し進んで南蠻沈彌多禮を屠る帝其地を百濟に賜へり又同帝の十五年勅を奉じて百濟に赴き博識の士王仁辰孫王を得てかへる

あらに 太田荒耳（オホタアラニ） 和歌に巧みにして其詠萬葉集中に見ゆ貞觀年中の人なり

ありおー 有王（アリワウ） 俊寛僧都の僕なり

俊寛の流さるや其あとを追ひて硫黄島に往く忠勤大方ならず俊寛死す乃ち選て高野に入るといふ

ありくに 有國（アリクニ） 有名の刀鍛冶にして或は在國といひ獅子と稱す三條宗近の門人寛仁三年六十二を以て歿す

ありくに 藤原有國（フヂハラノアリクニ） 豐前守輔道の子從三位藏人頭となり事に依て籍を除かる道長關白となるの時再び用ゐられて太宰大貳となり彈正大弼參議にすゝみ從二位にのぼる寛弘八年卒す年六十九

ありと 藤原有子（フヂハラノアリコ） 後堀河帝の后なり太政大臣公房の女貞應二年中宮となり嘉祿二年皇后となる安貞元年安喜門院と號す寛元四年尼となりて眞清淨とよぶ弘安九年二月崩ず年八十

ありと 源在子（ミナモトノアリコ） 後鳥羽帝の宮人なり法勝寺の執行能圓の女宰相の君といふ龍を得て土御門帝及び皇女某を生む後母の死後養父源通親と亂するに及び寵頓に衰ふ土御門帝の朝從三位に叙し三宮に准ぜらる建仁二年承明門院といひ建暦二年尼となり眞如妙といひ正嘉元年七月薨ず年八十七

ありとと 千種有功（チグサノアリコト） 歌人なり正三位有條の子千々廻舍といふ文化四年從五位下に叙せられ文政五年左近衛權少將となる尋で正三位權中納言にすゝむ歌は藤原忠良有栖川熾仁親王久世通理等に學びたるところにして當時の一大家を以て目せられたり安政元年八月歿す時に年五十八

ありさだしんの！ 有定親王（アリサダシンナ） 東山天皇の第三子母は藤原氏千なり三宮と稱す元祿十三年八月四滿院に入りて行憲法親王の弟子となり剃髮して慈尊といふ戒を寶性院僧正に受く正德三年十二月公辨法親王の弟子となり後山東の輪王寺に入る享保三年六月天台座主に補し牛車に乘りて禁中に入るを許さる

ありしげ 朝倉在重（アサクラアリシゲ） 六兵衛在重の二男仁左衛門と稱す大阪陣の時軍功あり爲めに町奉行となり從五位下石見守に叙任す慶安三年十一月卒す年六十八

ありしげ 金森可重（カナモリアリシゲ） 小字喜藏長尾臥長の子金森長近の猶子となる初め信長に仕へ後秀吉に從ひ從五位下に叙せられ出雲守と稱す關ヶ原の役宗族を勵して郡上八幡の城を攻め之を拔く長近の後をうけて飛騨を領し大坂の役に岸和田城を守る元和元年六月卒せり時に年五十八

ありたか 赤星有隆（アカホレアリタカ） 菊池武時の臣なり元弘三年三月筑前博多の役に戰死す

ありなか 都在中（ミヤコノアリナカ） 其香の子文才あり越前椽となる嘗て渤海國使に接見して交遊厚かりしといふ

ありなが 土御門有修（ツチミカドアリナガ） 阿倍晴明十九代の孫なり勘解由小路在富の後をうけて天文曆數の博士となる然れども其學に精しからず

ありなり 有成（アリナリ） 長和年間の刀匠初名有盛河内の人或はいふ後鳥羽帝の御劍石切及び源義平の太刀等を作ると

ありのぶ 植松有信（ウエマツアリノブ） 和學者なり通稱彦兵衛松陰と稱す尾張の人本居宣長に學びて國學を修め言語學を研究し鈴門の高弟を以て目せらる文化十年六月歿す

ありひと 源有仁（ミナモトノアリヒト） 輔仁親王の子白

河帝の養子となる天承二年十二月左大臣となり久安三年二月薨ず年四十五有仁性華奢を好み島羽上皇と共に強裝束を着初む世に花園左大臣といふ

ありひら 藤原在衡（フヂハラノアリヒラ） 僧如無の子伯父有賴の養子となる延喜中文章生となり尋で用ゐられて伊豫備前椽に任ずこれより累遷して從二位大納言となる安和中左大臣源高明貶謫に逢ふ在衡聞て嘆惜す家士麗賀して曰く次當に我公にあるべしと在衡禍の及ばむ事を憂ひ家士を逐ふ幾許ならず右大臣となり遂に左大臣にすゝむ常に精勤を以て衆の間に重んぜらる安和三年薨ず年七十九

ありふさ 有房（アリフサ） 畫人なり加賀權守に任じ繪所頭となる建長年中金岡の畫本を得て内裏の壁に描く

ありまのおーじ 有間皇子（アリマノワウジ） 孝德天皇の皇子母は皇妃小足媛なり齊明帝の朝帝を欺き奉て牟婁の溫泉に幸せしめ大臣蘇我赤兄と謀りて事を舉げむとす不祥の兆ありて懼む然れども赤兄のために告げられて死を賜はる時に年十九

ありまろ 荷田在滿（カダノアリマロ） 國學者なり字は持之號は仁良齋通稱東之進京都の人春滿の甥にして其後を嗣ぐ有職に精し其名四方に聞ゆ享保中妹背生と共に江戸に來り頻に家學を唱へしが後幕府の命に依て京に赴き大嘗會儀を錄し還りて其禮儀の註をなす又貞觀格式を校して賞を得出でゝ田安家に仕ふ其說合はず去て復仕へず生徒を集めて教授す寶曆元年八月歿す年四十六著書大嘗會具釋、大嘗會便蒙、國歌八論、全三辨、本朝制度略考、家記所繫考、裝束雜、白猿物語、長月物語、古今集左註論等あり

ありみちしんのー 有道親王（アリミチシンワウ） 貞敬親王の子文化五年光格天皇に養はれて尊眞法親王の弟子となる九年三月青蓮院に入り髮を削て尊寶とよぶ文化十二年十一月二品に叙せられ十二年天台座主に補せらる天保三年九月座主を辭し尊で薨ず年三十一

ありみつ 日野有光（ヒノアリミツ） 資敬の子從一位に叙し權大納言に任ぜらる應永二十三年薙髮して祐光と云ひ官職を辭す嘉吉三年七月南朝の遺臣兵を擧ぐ有光これに應じ神器を奪ひて叡山に奔る幾許ならず畠山持國の兵に擊たれて軍利あらず有光遂に死す

ありもり 平有盛（タヒラノアリモリ） 重盛の第四子從四位下左近衛少將に任ぜらる諱永三年資盛に從ひて戰ひ利あらずして屋島に逃れ四年壇浦に戰死す

ありゆき 有行（アリユキ） 豐後の刀匠なり貞應年中の人熊谷直實の太刀を作れりと傳ふ或はいふ千手院有行と同じと

ありよ 土御門有世（ツチミカドアリヨ） 天文占筮家なり後小松帝の朝陰陽頭となり從三位に叙せらる應永六年九月太白熒惑と合ふ有世占して變を告ぐ果して大内義弘の亂あり時人有世の言に服す

ありよし 武田有義（タケダアリヨシ） 信義の子左衛門尉となる正治元年梶原景時朝廷に奏して有義を將軍となさむとす弟信光之を聞きて有義を襲ふ有義覺りて逃走し其行くところを知らずといふ

ありよりしんのー 有賴親王（アリヨリシンワウ） 職仁親王の子享保十八年八月中御門天皇の養子となり天文五年十二月親王となる寛保五年五月薙髮して叡仁と改め戒を受く寶曆三年七月二品に叙せられ尊で薨ず歳二十四

あれ 稗田阿禮（ヒエダノアレ） 和銅四年朝廷に召されて其記憶する所の古事を口述し太朝臣安麻呂之を記す其成る所のもの即ち日本紀なり時に阿禮年六十五

あわじのじょー 引田淡路掾（ヒキダノアハヂノジヨウ） 人形遣なり京都の人淨瑠理姫の曲を演じて名あり後禁裏に召され後陽成帝の御前に之を行ふ依て淡路掾を授けらる

あわしまのかみ 淡島神（アハシマノカミ） 紀州海部郡加田神社に祀れる神なり

あわたのいらつめ 粟田娘子（アハタノイラツメ） 寶龜六年從五位下に叙せらる其詠歌萬葉集にあり

あわのかみ 阿波神（アハノカミ） 大和添上郡率川にまします大神にて五十鈴姫神玉櫛姫神專代主神の三神を祀る

あわのみこと 阿波命（アハノミコト） 專代主神の后にして天津羽々命ともいふ土佐小朝倉神社伊豆神津島の御瀧中社遠江阿波神社は皆此命を祀れるものなり

あんえ 安慧（アンエ） 狛氏河内の人なり慈覺大師に從ひて經を學び天長四年得度し承和十一年講師となり後選ばれて十禪師となる眞觀八年六月座主に補せられ十年四月年七十四を以て寂す

あんかいほーし 安海法師（アンカイホフシ） 天台宗の高僧なり教論に精しく講說に明かなり曾て源信法師のために二十七問を說く

あんがん 安願（アングワン） 興福寺の住職にして高僧なり承和二年但馬に赴くの途次海上颶風に遭ふ安願觀自在尊を祈て全きを得たりといふ

あんかんてんのー 安閑天皇（アンカンテンワウ） 第廿八代の天皇にして勾大兄皇子といふ繼體天皇の御子母は目子媛なり在位二年崩ず御年七十河内古市高野の陵に葬る

あんとーてんのー 安康天皇（アンカウテンワウ） 第廿一代の天皇にして穴穗皇子といふ允恭帝の第三子母は忍坂大中姫なり允恭帝崩じて太子木梨輕皇子殘忍なり天皇代りて位につき穴穗宮に在す時に叔父大草香皇子讒せられて戰死す天皇其妃中蒂姫を納る其子眉輪王父の仇を報ぜむと企て遂に之を弑す在位三年御年五十六菅原伏見の陵に葬る

あんさい 山崎闇齋（ヤマザキアンサイ） 儒者なり京都の人名は嘉字は敬義幼字は長吉と稱し後清兵衛又嘉右衛門と曰ひ闇齋、垂加と號す闇齋少うして狡悍父之を憂へて僧となす絶藝主といへり而して素行尙愍むなし偶土佐の公子其風姿非凡なるを見携へて國に赴き吸江寺に入らしむ谷時中野中兼山亦闇齋を見て奇なりとし經書を學ばしむ年二十五颯然として京都に至り髮を蓄へて學を講ず其弟子に接するや極めて峻嚴也假借する所なし後江戸に至る窮困洗ふに似たり因て書賈の隣家に居し以て其書を見る時に井上河内侯之を眞儒となし衆を闇齋に受く會津侯保科正之美作侯加藤泰義亦禮を厚うして之に師事すのち京都に至る其門に入るもの數千人晩年吉川惟足に就て神道を聞く闇齋著す所、朱易衍義、孟子要略、大學啓蒙集、中和集說、孟浩錄、文會筆錄、冲莫無朕記、神代卷風葉集、垂加文集、中臣祓風水鈔、四書序考、孝經外傳、孝經詳略、孝經刊誤附考、小學翼養集、仁說、逐錄、逐鹿評、讀書要、夜話錄、武銘、大家商量集、朱書抄書、張書鈔略、垂加草、經名考、本朝改元考、大和小學、敬齋箴、不自棄文、會

津風土記、雲谷記、温泉遊草、江府紀行、遠遊紀行、再遊紀行、明備錄、程書鈔略、朱子輯要、貴洗文、日本書紀註、本朝事蹟等あり天和二年九月歿す享年六十五

あんしょーいんどの 安祥院殿(アンシヤウヰンドノ) 徳川家重の側妻お遊の方といふ三浦義如の女にして和歌をよくす寛政元年四月卒す歌集を心の月といふ

あんちょーほーし 安澄法師(アンチヨウホフシ) 俗姓身人氏丹波の人密教の高僧なり弘仁五年三月五十二を以て寂す

あんちん 安珍(アンチン) 鞍馬山に住す會て一僧と共に熊野に赴かむとして牟婁の村舍に宿す主婦安珍の美貌を愛で〜切情を通ず安珍欺きて歸途必ず來らむ事を約し去て熊野に行き遂に來らず主婦怨んで遂に終身室を出でざりきといふ世に美人清姫を配して蛇體の怨靈と化せしめ戲曲に作りて日高川といふ

あんとくてんのー 安徳天皇(アントクテンチウ) 第八十二代の天皇御名は言仁高倉天皇の御子にして母は建禮門院なり三歳にして即位都を福原に遷す清盛薨ずるの後又京に移る源頼朝の兵を起して平氏を攻むるや宗盛のために擁せられて筑紫に赴き讃岐壇浦に趨る源義經來り攻む平氏利あらず天皇知盛等と共に海に入りて崩ず時は文治元年四月なり

あんねーてんのー 安寧天皇(アンネイテンチウ) 第三代の天皇なり綏靖天皇の御子母は五十鈴依姫なり天皇御名は磯城津彦玉手見命在位三十八年にして崩ず御年五十七

あんねん 安然(アンネン) 傳教大師の系族なり初め慧覺大師に就て顯密の二教を修め後花山寺の遍昭に從ひて胎藏法を學ぶ博く梵學に通じ宏才を以て稱せらる元慶八年元慶寺傳法阿闍梨となる

いいまろ 紀飯麿(キノイヒマロ) 天平中藤原廣嗣反す飯麻呂副將軍となり討て之を平ぐ功に依て右大辨となり尋で筑前國司に任ず勝寶六年從三位を以て卒す

いえきよ 赤井家清(アカヰイヘキヨ) 丹波の人悪右衛門の兄なり波多野家に仕へて氷上矢田船井の三郡を領す弘治三年二月槍傷に惱みて死す子忠家秀吉に仕へ千石を賜はり後家康に仕へて領二千石となる

いえと 藤原舍子(フヂハラノイヘコ) 櫻町帝の女御なり關白二條吉忠の女後櫻町帝を生む嘗て家定薨ず年廿五諡して溫恭院といふ

いえざね 藤原家實(フヂハラノイヘザネ) 關白基通の子摂政關白となり三宮に准ぜらる仁治二年十一月出家法名圓信三年十二月薨ず

いえしげ 徳川家重(トクガハイヘシゲ) 徳川九代の將軍なり將軍吉宗の長子小字長福丸享保十四年九月從一位權大納言となり寛保元年八月右近衛大將兼右馬寮御監となる延享二年十一月征夷大將軍に拜し正二位内大臣となり淳和非皇院別當源氏長者となる寶曆五年七月朝鮮の窮困をあはれみ一萬兩を賜ふ十年五月大御所と稱し十一年六月薨ず朝廷正一位太政大臣を贈る諡して惇信院といへり

いえすえ 首藤家季(スドウイヘスエ) 九郎と稱す源爲朝の家士廿八騎の一人なり異名を矢先拂といふ

いえずみ 岩松家純(イハマツイヘズミ) 滿純の子本名長純小字二郎應永二十四年三月足利持氏と戰ひて敗走し僧となつて源慶といひ又支非少僧都といふ十八歳還俗して家純といひ治部大輔と稱せり義教將軍綺門院といふ

いえさだ 平家貞(タヒラノイヘサダ) 進三郎大夫家貞の子なり筑後守に任ぜらる天承中平忠盛に從ひて其殿上に昇められむとせしに備ふこゝに於て忠盛も亦詭計を案出して衆を欺き事無きを得たり後清盛藤原信頼が亂を聞きて熊野參詣の途上より還るや急に兵仗無し家貞長櫃に鎧冑弓箭を齎せるを以て皆直に之を用ふ清盛爲めに家貞の備あるを嘆賞せり而して源義平の六波羅を攻むるに及び家貞子貞能と共に出で義平と戰ふ平治元年日向太郎通良を肥前に伐ち官兵と力を協せて其城を拔く通良遂に斬らる家貞凱旋して恩賞を受く

いえさだ 徳川家定(トクガハイヘサダ) 徳川十三代の將軍なり初名家祥政之助と稱す將軍家齊の弟發はれて嗣子となる文政十一年二月正二位に叙せられ權大納言に任ぜらる天保八年右大將を兼ぬ嘉永六年十一月征夷大將軍となり從一位内大臣にすゝむ安政元年正月米艦浦賀に入りて通商親和を求め進んで本牧に來る幕府令して江戸近海の警備を嚴にせしむ而して家定伊澤政義戸田氏榮井戸學弘に

命じて米使に會見せしめ遂に其請ふ處を許し尋で魯國との親和條約を修む四年十二月津田半三郎をして外國の事を天聽に達せしむ天皇悅ばずして鍋島齊正の上書排外說を納れ遠に兵備を嚴にすべきを命ず時に米使頻に條約捺印の事を迫る然るに朝議益々排外を主張し堀田正篤を召して外交締約の允す可らざるを傳へ國力を竭くして攘夷の實を擧げしむ五年四月家定井伊直弼を大老となし又堀田正篤をして締約實行延期の議を米使に諭さしむ米使服せず五月魯艦神奈川に入り米艦小柴に入る米使永井尙志等に告ぐるに英佛清に克つの狀を以てし其勢に乘じて欲望を遂ぐるの意を陳ず而してわが前約を實行せば貴國の爲めに保全を計らむと說けりこゝに於て遂に通商規則十四款を定めて捺印するに至れり德川慶恕慶篤慶喜慶永等建言して勅旨の斷行を促し攘夷論爲めに海内に響應して人心恟々國家頗る安からずたまたま家定病を發す慶恕繼嗣を定むるに慶喜を推すと雖井伊直弼其排外黨なるを忌み紀伊宰相慶福を立つ家茂これなりこれを以て水戸齊昭等黜けられ慶恕慶永退老を命ぜらる尋

いえざね 藤原家實(フヂハラノイヘザネ) 關白基通の子摂政關白となり三宮に准ぜらる仁治二年十一月出家法名圓信三年十二月薨ず

いえしげ 徳川家重(トクガハイヘシゲ) 徳川九代の將軍なり將軍吉宗の長子小字長福丸享保十四年九月從一位權大納言となり寛保元年八月右近衛大將兼右馬寮御監となる延享二年十一月征夷大將軍に拜し正二位内大臣となり淳和非皇院別當源氏長者となる寶曆五年七月朝鮮の窮困をあはれみ一萬兩を賜ふ十年五月大御所と稱し十一年六月薨ず朝廷正一位太政大臣を贈る諡して惇信院といへり

いえすえ 首藤家季(スドウイヘスエ) 九郎と稱す源爲朝の家士廿八騎の一人なり異名を矢先拂といふ

いえずみ 岩松家純(イハマツイヘズミ) 滿純の子本名長純小字二郎應永二十四年三月足利持氏と戰ひて敗走し僧となつて源慶といひ又支非少僧都といふ十八歳還俗して家純といひ治部大輔と稱せり義教將軍に召されて結城氏を討ち功を以て參河守に任ぜらる後上杉顯定に黨して上杉景春と戰ひ之を破る明應五年四月歿す

いえずみ 垣見家純(カキミイヘズミ) 豐臣家の臣和泉守と稱す富來城一萬石を食みて征明の役に從ふ泰行に任ず歸て罪を得國除かる關ヶ原の亂三成に與みし相良長毎のために殺さるといふ

いえたか 藤原家隆(フヂハラノイヘタカ) 光隆の從二位宮内卿となり嘉禎二年薙髮して佛性とよぶ三年薨ず年八十壬生二位といへり和歌を後成に學びて才發非凡鳥羽帝に親昵して人麿の稱を得嘗て新古今集の撰者たり又家集あり壬二集といふ

いえたね 金子家忠(カネコイヘタダ) 武藏の人十郎と稱す保元の亂源義朝に從ひ白河殿を襲ふ爲朝が守るところの西河原門に進み高間四郎及び三郎を殪し爲朝の賞するところとなる平治の亂義平に屬して六波羅を攻め又勇名あり後三浦義明を衣笠城に攻め血戰す義明見て嘆じて曰はく壯士なり一人當千といふべしと義盛に命じて射しむ中る弟近範肩にして走る三浦餘一追ふ近範返戰して餘一を斬り再び家忠を肩にして逃る家忠これ

より頼朝に從ひ承久の亂に當りては北條氏に隷屬せり

いえたな 藤原家忠（フヂハラノイヘタダ） 關白師實の子天承元年從一位左大臣となる保延二年卒す年七十五家忠初め父のために疎んぜられしと雖帝の寵を得て內覽を許され常に重用せらる保安中諸者あり家忠飲酒して卿相の體を失ふと帝遂に其言を納れず

いえつぐ 酒井家次（サカヰイヘツグ） 忠次の長子なり小字小五郎天正十七年十一月從五位下に叙し宮內大輔と稱す是冬秀吉の小田原攻に當り其令を諸將に傳ふ十八年家次長澤二連木の衆と白井城を攻め之を拔く北條氏滅後封を移されて上野碓氷城三萬石を食む慶長關ヶ原の亂上田を攻めて功あり依て二萬石を加へられ上州高崎にうつる時に左衞門尉と稱せり大阪兩度の役出で〻戰ひ事平ぐの日越後高田十萬石を領す元和四年三月卒す年五十五

いえつぐ 德川家總（トクガハイヘツグ） 德川七代の將軍なり家宣の第四子小字鍋松丸四歲にして世子となり間部詮房のために扶戴せらる正德二年十二月從二位權大納言

いえた

いえつ

となり三年四月征夷大將軍に拜し正二位內大臣に任ぜらる六年三月母月光院間部詮房と與に家機を擁して內園に遊び稍々時を移す家機ために感冒に罹り四月薨ず年八歲朝廷正一位太政大臣を贈る諡して有章院（トクガハイヘツグ）といへり

いえつね 德川家綱（トクガハイヘツナ） 德川四代の將軍なり將軍家光の第一子小字竹千代正保元年二月權大納言となり從二位に叙し尋で正二位にす〻む慶安四年六月征夷大將軍に拜し右近衞大將右馬寮御監を兼ぬ又內大臣に任ぜられ右大臣にのぼる萬治二年四月左大臣に任ぜらる家綱固辭してうけず延寶八年五月薨ず年四十諡して嚴有院といふ朝廷正一位太政大臣を贈る治世の間由井正雪等の異圖を企つるものありしも直に捕丁を發して之を執へ刑に處して天下の人心を安ぜしめたり

いえつね 藤原家經（フヂハラノイヘツネ） 師嗣の子曆仁中左大臣となる世に嵯峨大臣又は大炊御門殿とよばる

いえてる 毛受家照（メンジユイヘテル） 尾張の人本名照景字を莊介後勝介といふ年少にして柴田勝家に仕へ小姓頭より累進して一萬石を食む長島の戰敵勝家の馬標を奪ふ家照敵中に入り其奪へる者を斬り標を取て歸る天正十一年賤ヶ嶽の戰勝家の軍利あらず家照奮慨して猛進し自ら勝家と稱して勇戰し遂に嶋左近と鬪て死す年廿五

いえとき 足利家時（アシカガイヘトキ） 尊氏の祖父なり治部大輔頼氏の子にして從五位下伊豫守に叙任せらる我一命を約するも子孫三代の間に必ず天下を掌握せさせ給へと八幡祠に祈願して自刄すといふ

いえなが 足利家長（アシカガイヘナガ） 高經の長子從五位下陸奥守に任ぜらる延元二年源顯家と戰ひて死す

いえなが 伊賀平內左衞門家長（イガヘイナイザエモンイヘナガ） 平家方の侍大將にして八島の役に奮戰し平知盛と海に投じて死す

いえなが 內藤家長（ナイトウイヘナガ） 參河の人清長の子小字金一郎又は彌次右衞門德川家康に仕ふ弓術の名人にして數々軍功あり天正十八年小田原攻めの軍に從ひ功を以て上總佐貫城二萬石を食む關ヶ原の役起るや島居元忠と共に伏見を守り奮戰して自殺す時に年五十五

いえなり 石川家成（イシカハイヘナリ） 清兼の子初字彥五郎日向守と稱す永祿三年德川家康に從ひて丸根城を攻め軍功あり又一向宗の賊徒を鎭定し今川氏眞を降し功に依て其城を賜はる元龜元年九月酒井忠次と共に織田信長を近江に援け敵將佐々木承禎と戰ふ天正八年家事を子康通に讓り致仕して老休田を賜はる後康通卒して又家事を見十四年十月七十六を以て卒す

いえなり 德川家齊（トクガハイヘナリ） 德川十一代の將軍なり一橋治濟の子小字豐千代天明元年五月入りて家治の後を嗣ぎ從二位權大納言に拜す七年三月征夷大將軍となり正二位內大臣となる兼職もとの如し家齊老中松平定信鳥居正倫の旨を納れて權臣田沼意次の封を削り城廓を毀つ寬政元年五月蝦夷亂る家齊松前道廣に命じて之を伐たしめ目付勘定役等を遣はして東部を伐たしむ文化元年九月魯西亞の國使長崎に來りて隣交をもとむ家齊目付遠山景晉をして國禁を示し支那朝鮮和蘭の外は一切通信をなさゞるを明言す四年四月魯人蝦夷地に寇す南部津輕の二藩松前氏を援けて之を卻け北國の列藩守備を嚴にす十三年二月家齊右大臣に進む文政元年元字小判及び四銖金を改鑄す五年三月家齊從一位左大臣となり十年太政大臣にのぼる天保六年十月天保錢を發行す七年家齊征夷大將軍を辭して大御所といふ十二年正月薨ず年六十九三月朝廷詔して正一位を贈る諡して文恭院といへり

いえのぶ 德川家宣（トクガハイヘノブ） 德川六代の將軍なり家光の孫にして綱重の第一子小字左近後虎松丸元服して甲綱とよぶ初め綱重薨じて綱吉の立つや家宣嫡子を以て正統を承けざるを悶み秩祿十萬石を加へらる官位正三位權中納言たり綱吉世子を喪ふに及びて迎へられて嗣主となり權大納言にのぼる寶永六年五月征夷大將軍となり正二位に進み內大臣兼右近衞大將右馬寮御監を兼ぬ家宣有司の言を納れて貨幣改鑄惡質匡正の法を實行す七年四月新令を發して文武の奬勵風俗の矯正等を訓示せり正德二年十月薨ず年五十一朝廷正一位太政大臣を贈る諡して文照院といへり

いえはる 德川家治（トクガハイヘハル） 德川十代の將軍なり家宣の第一子小字竹千代寬保元年八月從二位權大納言に叙任せらる寶曆十年九月正二位にすゝみ征夷大將軍內大臣に拜せらる明和二年五月醫學館を建つ九年四月五錢の銀幣を造り九月文字銀を鑄又寬永通寶を鑄る安永元年九月南鐐新幣を行ふ九年九月右大臣に陞る天明六年九月薨ず年五十朝廷正一位太政大臣を贈る諡して浚明院といふ家治性暗愚權臣田沼意次暴威を恣にして上下爲めに其虐政に苦しむ

いえひさ 島津家久（シマヅイヘヒサ） 貴久の第四子中務大輔と稱す天正十二年三月兵三千を以て有馬義純を援ひ龍造寺隆信を破る十四年秋月種實を援ひて筑前を略取し筑紫廣門を朝日城に攻め高橋紹運を富屋城に殺す是歲大友義鎭援を豐臣秀吉に乞ふ秀吉仙石秀久長曾我部元親十河存實をして豐後に至らしむ家久義久の命に依て兵一萬を率ゐ日向より豐後に入り年滿に陣す時に義鎭臼杵を守り義統豐前にあり家久兵を分ちて臼杵を攻めしめ自ら戶次利光の鶴城を圍む秀久元親存實來りて利光を救ふ家久必死を期し大に戶次川に戰て之に克つ遂に鶴城を降して府內に迫る十五年羽柴秀

いえな

いえの

いえひ

いえと

長日向に入る家久耳川の城を守りて出でず秀長圍む事數旬家久力盡きて降り後毒殺せらる

いえひとしんのう　家仁親王（イヘヒトシンナウ）　文仁親王の子寶永五年十二月東山帝の猶子となる六年四月親王となり正德三年十二月式部卿に任ず享保九年二月二品に叙し隨身兵仗を賜はり明和四年十二月に至て一品に進む尋で薨ず年六十五後桂光院と號せり

いえひら（キヨハラノイヘヒラ）　清原家衡　武則の子なり寛治五年源義家同義光のために城を圍まれ糧盡き降て斬らる

いえひら（フヂハラノイヘヒラ）　藤原家平　關白家基の第二子正和二年七月關白となる元亨四年五月薨ず年四十一に岡本殿といふ

いえひろ（コノエイヘヒロ）　近衛家熙　太政大臣關白基熙の子左大臣攝政關白より太政大臣に拜す享保十年三宮に准じ薙髮して貞覺と號す元文元年歳七十を以て薨ず豫樂院と號せり又吾樂軒昭々堂主人墨汝虛舟子の號を有し文事を好み茶を點じ書籍をあつめて家に蓄ふ

いえまさ（ウエムライヘマサ）　植村家政　高取の城主なり小字幸千代又新六郎といふ十一歳にして德川家康に見ゆ秀忠に仕ふ大阪冬の役從ひて茶臼山に陣せり慶長十三年從五位下に叙せられ志摩守と稱す夏の役復出で〻功あり寛永二年大番頭となる十八年大和高取の城主となり二萬五千石を食む慶安三年十月卒す年六十三

いえまさ（ハナスカイヘマサ）　蜂須賀家政　正勝の子小字小六初め織田信長に仕へ後豐臣秀吉に仕ふ天正中播州及び紀州を討平して功を收め三千石を賜はる四國平定するに及んで阿波に封ぜられ阿波守と稱す頗る令聞あり文祿四年征韓の師に加はり忠州に入て龜尾浦に戰ふ克たず慶長三年再び征して海軍に屬し敵艦を捕獲す家政晩に削髮して蓬庵と改め寛永十五年十二月卒す年八十一

いえみつ（トクガハイヘミツ）　德川家光　德川三代の將軍なり將軍秀忠の子小字竹千代元和九年七月征夷大將軍となる尋で正二位內大臣となり右大將御監を兼ぬる事故の如しこれより先列藩會同の期に當り將軍或は之を郊迎して上下の禮分定らずこゝに於て家光列侯を召して君臣の禮を執らしむ列藩皆これに服す寛永十一年七月太政大臣に拜す固辭して遂にうけず十四年天草の亂起る家光板倉重昌松平信綱をして之を伐たしむ重昌戰死し信綱賊を平げて還る十六年土井利勝を以て大老職となす大老こゝに始まる八月江戸城火あり諸殿舍皆焚く是歳家光井上正重に命じて天主教徒を嚴禁し紅毛漢人利亞の種族を咬留吧に放つ十七年二月江戸城新に成る正保四年四月薨ず年四十八朝廷正一位太政大臣を贈る大猷院と謚す家光英邁豪毅考祖の遺業をつぎて初めて其根蔕を固む名臣松平正之井伊直孝土井利勝酒井忠勝青山忠俊松平信綱板倉重宗阿部忠秋等又常に左右にありて籌策皆よろしきを得こゝに於て天下靡然として德川氏の化に服せり

いえもち（トクガハイヘモチ）　德川家茂　德川十四代の將軍なり將軍家齊の第六子初名慶福大老井伊直弼のために擁せられて立ち征夷大將軍に拜し正二位內大臣となる水戸齊昭等意を一橋慶喜に屬する者大に望を失ふ文久元年五月長岡の浪士英人を高輪に傷く英公使怒りて佛公使と共に横濱に退き將に兵を用ゐむとす幕府

百方陳謝して之を解く二年二月毛利慶親幕府に勸めて公武一致を行ひ以て東西の親睦を圖らむとす幕府永井雅樂をして其任に當らしむ然れども攘夷論盛に起りて遂行する事能はず永井空しく關東に還る七月家茂慶勝慶喜慶永をして機務に參與せしめ慶永を總裁とし久世廣周酒井忠義の老中並に所司代を罷め松平宗秀を所司代とし松平容保を京都守護職となす是月中納言三條實美少將姉小路公知等詔を奉じて東に下り勅を宣べて速に攘夷の震旨を擧げしめ且つ入朝を命ず三月家茂入朝す四月天皇男山に幸し將に攘夷の節刀を家茂に授けむとす家茂疾と稱して扈從せず慶喜をして之に代らしむ慶喜又急に疾と稱して東に還る時に島津家の士英人を生麥村に斬るの件を以て幕府其償金を迫られ四十五萬元を出して事止む元治元年家茂右大臣となり從一位にす〻むたまたま毛利氏の國老京を擾がすの擧あり幕府其罪を責めて征長の師を出さむとせり毛利氏恭順の意を示して罪を謝す然れども奇兵隊の事を擧ぐるに及びて遂に之を伐つ克たず二年五月家茂江戸を發して京にあり尋で大阪城に入り八月薨ず年廿一論して昭德院といふこれより德川氏の威令遂に行はれず

いえもと（フヂハラノイヘモト）　藤原家基　基平の子なり正應二年四月關白となり尋で左大臣と爲る一に淨妙寺と號す

いえもり（タグチノイヘモリ）　田口家守　和歌をよくす其詠萬葉集にあり

いえやす（トクガハイヘヤス）　德川家康　贈太政大臣廣忠の子幼字竹千代天文十二年今川義元の質子となりて駿河に赴く後外舅寇光のために謀られて織田信秀に拘せられ頗る艱難を嘗む十八年今川氏織田氏と和するに及びて國にかへる後十餘日再び駿河に質となる弘治二年正月元服して名を元信といひ次郎三郎とよび關口親永の女を娶る尋で義元の許を得て岡崎に歸り名を元康と改め藏人と稱す三年復駿河に往く永祿元年義元之を岡崎に還らしめ以て織田氏の侵すところを復せしむ三年五月義元大兵をあげて信長を攻め家康又丸根を攻めて功あり而して義元桶峽に殺さる家康乃ち岡崎城に還るこゝに於て近傍諸城の尾張に屬する者を拔き使を馳せて義元の子氏眞の出戰を促す氏眞暗愚怯弱これに應ずるなし而も德川氏の勢熾なるを擇ばず家康諸將の旨を納れ信長と和して盟約固きに至るや今川氏怒て兵を起しこれより年々相戰ふ八年家康盡く三河を平定し本多重次高力清長天野康景をあげて來行とし自ら名を改めて家康とよぶ九年十二月從五位下に叙し參河守に任ず尋で左京大夫となり族世良田氏を德川に復す而して甲將武田信玄と和し共に俱に駿州を伐つ然れども家康義元の舊好を忘るゝ事能はず使を遣して氏眞に說くに天下の形勢を以てし松平家忠をして遂に之を北條氏に聘送せしむ元龜元年正月家康濱松に徙りて威名四方を壓す人稱して海道一の武將とよぶ二月信長を援けて朝倉氏を伐つ四月京に入り六月淺井氏と姉川に戰ふ信長時に朝倉義景の族景健に當り共に大に之を敗る二年正月家康從五位上にのぼり侍從に遷る時に武田氏兵を遠州に出しまばしば家康と戰ふこゝに於て濱松に迫り火を城外に放つ而して信玄自ら大兵を擁して三方原に陣す家康信長の援を得て克たず退て濱松に入る甲兵追跡し

て門に滿ると雖も伏兵のあるを察して自ら退き去る天正元年正月足利義昭敎書を信玄に下して信長及び家康と和せしむ信玄應ぜず三年五月武田勝頼來て長篠を圍む家康再び信長の援を得て設樂に進み大に之を破り殆んど勝頼を獲むとせり尋で織田信忠を前軍となし進んで甲斐を侵す北條氏政兵三萬を出して家康信長を援く勝頼窮して天目山に死す而して信長の弑逆にあふや其將羽柴秀吉山陽の兵を率ゐて逆臣明智光秀を誅す家康乃ちこれと親和すと雖も信長の遺孤信雄を扶くるに至て之と對し小牧長湫の戰皆克つ時に天正十二年四月なり家康密かに土佐の國主長曾我部元親島山貞政と兵を合せて秀吉を夾擊せむとす秀吉大に懼れて和を信雄に請ふこゝに於て和成る十八年家康秀吉と兵を合せて北條氏を小田原に滅し關八州を定めて江戸城を修築す秀吉天下を得て征韓の師を出すに當り家康内助をなして國内の動搖を防ぎ其薨後をうけて伏見城に居り天下の事を聽く慶長四年石田三成增田長盛謀て前田德川兩氏を間疎せむとす諸老奉行等また家康の私婚を詰りて政柄を解かしむ天下騷然たり而して三成遂に佐竹義宣上杉景勝直江兼續と謀を合せて家康を圍らむと欲し五年二月景勝をして不穩の態を行はしむ四月家康兼續を諭して其實狀を確かめ七月を以て大兵を動かす家康の于秀忠前軍となりて小山に到る頃上國の變起る家康諸將と兵を督して美濃に向ひ岐阜犬山大垣を拔く東西の軍關ヶ原に對抗して戰ふこと一日家康遂に克ちて三成等敗走す後三日にして悉く亂人を剿滅し天下六十餘州德川氏に歸服せり六年正月朝廷家康を以て征夷大將軍に任ぜむとす家康固辭して受けずこれより家康銳意治を圖り藤原惺窩林信勝を登用して文學を興し禮典を定め書籍を刊行す八年二月征夷大將軍となり右大臣に進み淳和非學兩院別當源氏長者を兼ぬ九年四月職を辭し十二年三月駿府に老す十六年孫女を豐臣秀頼に妻はす十九年方廣寺巨鐘の事より發して東西漸く反目し淀君又奸口を信じて策臣片桐且元を斥く秀頼乃ち檄を飛ばして兵を募り十萬を得家康東海東山の兵を率ゐ秀忠陸奥出羽の兵を率ゐ井伊直孝藤堂高虎を以て先鋒となす時に慶長十九年十月なり進んで大坂城に薄り勝敗未だ決せずして和成る元和元年五月和破れて再び戰ひ大坂城陷り豐臣氏滅ぶ七月家康諸侯を伏見に見て新式目十三條を頒ち又朝廷式目十七條を定む二年正月病を得三月朝廷家康を拜して太政大臣となす四月薨ず年七十五朝廷悼みて爲に正一位を贈り謚を賜ひて東照公といふ

いえよし 内田家吉 遠江の人宇治川の戰に源範頼の麾下たり勇力衆に超ゆといへども粟津の一戰を仲の妾巴のために殺さる

いえよし 德川家慶 德川十二代の將軍なり家齊の子小字敏次郎寛政七年立つて將軍となる天保八年征夷大將軍となり左大臣に任ぜらる弘化三年五月米艦浦賀に抵りて互市を乞ひ嘉永六年六月同國兵艦四艘復來り水師提督ペルリ國書を呈す井戸學弘戸田氏榮ペルリを九里濱に見其請ふ所を聞きて家慶に報ず家慶明年を以て答を長崎にうけしむ米艦乃去る尋で家慶薨ず年六十一朝廷正一位太政大臣を贈る愼德院と謚す

いおーざん 猪王山（ホワロザン） 森右衛門 陸奥の人江戸の力士關の戸の門に入り國見山又は伊達ヶ關とよぶ入幕して猪王山と改め安政元年大關の地位を占む

いおせ 若櫻部五百瀨（ワカサクラベノイホセ） 壬申の亂天武帝に從て戰功あり持統帝の十年卒す直大壹を贈らる

いおり 一尾伊織（イチヲイオリ） 茶人なり名は道尙號は宗碩、一庵とも徹齋とも號せり元祿二年三月歿す年九十一

いが 稻富伊賀（イナトミイガ） 稻富流銃法の開祖丹波の人にして細川忠興の臣なり曾て征韓の役に從ひて武功をあらはす

いかしこめ 伊香色謎（イカシコメ） 開化天皇の皇后なり初め孝元帝の妃となり彦太忍信命を生み後開化帝に召されて崇神帝及び御眞津比賣を生む

いかつるひこのみこと 五十鶴彦命（イカツルヒコノミコト） 崇神帝の皇子にして母は御間城姫皇后なり

いかのすけ 山内伊賀亮（ヤマノウチイガノスケ） 九條家の士なり後辭して美濃に漂泊し天一坊の謀主となる伊賀亮才智あり遂に策を畫して江戸に入る町奉行大岡忠相のために訊されて事露はるゝに及び屠腹して死す時に年四十

いかのつぼね 伊賀局（イガノツボネ） 新田義貞の臣篠塚伊賀守の女新待賢門院に仕ふ正平二年六月藤原基任の惡靈現はれて后に報いむとす局惡靈と相語り后に祝きて其冥福を祈る惡靈出でず高師直の吉野を犯すや帝出でゝ賀名生に幸す門院僅に數人を從へて赴く吉野川に到れば橋板半斷えて涉る可らず局巨松の枝を折りて接續し以て門院及び諸妃を濟す敵退くの時剛力者をして其枝を折らしめしも遂に能はざりしと局後楠正儀に嫁せり

いかりのすけ 荒波碇之助（アラナミイカリノスケ） 尼子十勇士の一人なり初め兵庫の舟夫なりしが山中鹿之助に屬して勇力の聞え高く大船の碇を拔きて其名を得たり

いきうじ 伊岐氏（イキウジ） 二條天皇の宮人大藏大輔致遠の女六條帝を生み奉る

いきな 調伊企儺（ツキノイキナ） 歸化人帶理使主の後號して調吉士といふ欽明帝の朝紀男麻呂に從て新羅を伐つ軍利あらず捕へらる新羅人刀を拔きて之に逼り裸を脫し臀をあらはして日本に向ひ日本の將我が臀肉を啖へと叫ばしむ伊企儺叫んで曰く新羅王我が臀肉を啖へと遂に殺さる其子男子父の屍を抱て死し妻大葉子悲歌を詠じて傷む

いきみ 犬養王十君（イヌカヒノイキミ） 壬申の亂に弘文帝に從ひ將として進み天武帝の將村國男依と戰ひて死す

いきょー 服部惟恭（ハツトリヰキヨウ） 南部の次子字は愿卿詩に巧みなり元文五年三月歿す年十七遺稿に鍾情集あり

いくぐいのかみ 活杙神（イククヒノカミ） 角杙神の妃なり

いくはのとゞのすくね 的戸田宿禰（イクハノトヾノスクネ） 初名盾人應神帝の十六年平群木兎と共に新羅を伐つ仁德帝の十二年高麗鐵盾鐵的を獻ず帝高麗人を朝廷に饗し群臣をして其盾的を射さしむ衆能く穿つものなし戸田宿禰直に之を貫く帝大に之を嘉みして今の名を賜ふ十七年新羅に赴きて朝貢の闕くるを責む

いくほーもんいん 郁芳門院（イクハウモンヰン） 白河の皇女媞子内親王之なり齋宮となり三

后に准ず永長元年八月崩ず年二十一

いけぬし　大伴池主（オホトモノイケヌシ）　和歌に巧みなり其詠は萬葉集にかゝげらる

いけのぜんに　池禪尼（イケノゼンニ）　従四位上少納言藤原宗兼の女刑部卿平忠盛の後妻家盛頼盛を生む

いけはやわけのみこと　池速別命（イケハヤワケノミコト）　垂仁天皇の皇子母は葛城入媛允恭帝の時姓を賜はりて阿保君といふ

いけもり・多治比池守（タヂヒノイケモリ）　左大臣島の長子なり持統帝の朝直廣肆を授けられ文武の朝改て従四位下に叙せらる和銅元年民部卿となり造平城京司長官となる尋で従三位太宰帥に叙任せらるる靈龜元年上書して華人の相替年限を延べ帥以下の綿を給するを停めむと乞ふ許さる明年中納言にうつり正三位大納言にすゝむ天平二年従二位に至りて薨ず

いことひめ　五十琴姫（イコトヒメ）　物部膳咋の女景行帝の妃となりて五十功彦命を生む

いさ　射狹（イサ）　崇神天皇の皇子豐城入彦八世の孫始めて車を製造し又車の上蓋を作る

いさいぼー　以哉坊（イサイボウ）　俳人美濃の人安田二桂と稱す　雪炊菴、無非庵の號あり諸國名錄　百里驚、夏の山等を著はす

いざなぎのかみ　伊弉那岐神（イザナギノカミ）　開闢の頃惶根神に次いで生れたまひし男神なり女神伊弉那美神と高御産靈神の命を奉じて天の浮橋に立ち天瓊矛を執て滄溟を探る矛滴凝て島となる所謂於能碁呂島なり二神降り住み始めて男女婚交の道を爲し給ふ依て日の神、月の神、素盞嗚尊等を生む尋で國土を治め給ふ

いざなみのかみ　伊弉那美神（イザナミノカミ）　男神伊弉那岐神に配したまひて共に我國土を成る殁したまひて黄泉に到れる時男神來る伊弉那美神欣んで共に還らむと約し黄泉神に之を諮らむと告げて入る久うして出で給はず男神怪みて戸を開きて覗へば屍體蛆とゞろきて惡醜臭ふべし驚きて逃れ去り給ふを見て伊弉那美神憤怒し泉津醜女及び雷神をして追はしむ尊走りて日向の小戸の橘原に到り禊ぎ滌ぐ又此神男神と千引岩を隔て、誓ひ給はくは我日に千五百人の命を與へむとこゝに於て生死の數相違する所以なりと

いさぶろー　嵐猪三郎（アラレキサブラウ）　初代　大阪の役者初代吉三郎の三男なり環子又は冠子と號し中村十藏の門人にして初名を中村太三郎後嵐冠十郎といへり文政八年五月殁す

いさぶろー　西川伊三郎（ニシカハイサブラウ）　初代　人形つかひなり大阪の人嘗て宮廷に召されて此伎を演じ裏菊に一文字の徽號を賜はる伊三郎初め冠二といひ後伊三郎と改む天明五年十一月殁す年六十二

いさぶろー　西川伊三郎（ニシカハイサブラウ）　二代　人形つかひなり本名萩野忠二郎初代の門人吳延と號す弘化三年八月殁す

いさぶろー　西川伊三郎（ニシカハイサブラウ）　五代　人形つかひなり吉田陸奥大掾の子初名吉田平吉四代伊三郎殁して其後を嗣ぐ明治六年正月殁す年四十三

いさぶろー　芳村伊三郎（ヨシムライサブラウ）　初代　杵屋正次郎の門人なり寶暦中中村座の立唄を勤む

いさむ　近藤勇（コンドウイサム）　刺客なり武藏の人名昌宜小字勝太父を宮川久二といふ性勇悍劍を近藤某に學び氣を以て人を壓服す幕府の召に應じて新徽組に入り土

方歳三と共に其指揮官となる文久三年將軍家茂に從ひて京に赴き歳三等外數十名精鋭を撰拔せられて螢下に戍り新選組と改稱す時に勇は同組の隊長たり而して無賴の徒を鎭壓し古宮後太等の壯士を斬る幕府勇を以て上班騎士と爲さむとす勇之を辭し新選隊長を以て居る同年七月長藩の兵と戰ひ又功あり慶應三年十月將軍慶喜に從て伏見に駐り非常の備を嚴にす明治元年正月官軍と伏見に戰ひ重傷を蒙り東に敗走して江戸に入り名を變じて大久保大和といひ歳三と甲斐に赴きて兵を募り官兵と勝沼に戰ひて利あらず時に官軍の參謀香川敬三千住にあり勇の慓悍にして無謀なるを察知し甘言を設けて之を招き相俱に議せむと請ふ勇歳三の諫止を斥けて赴き直に捕へられて斬に處せらる

いしかわのいらつめ　石川郎女（イシカハノイラツメ）　遊女なり字を大名兒とよぶ大津皇子に召されて内命婦となり寵愛せらる和歌に巧みにして其詠萬葉集に出づ

いしかわまろ　蘇我石川麻呂（ソガノイシカハマロ）　馬子の孫倉麻呂の子なり皇極帝の朝中臣鎌足と共に蝦夷入鹿を誅す孝德帝の朝右大臣に拜し朝政に參與す大化五年蘇我日向石川麻呂を皇太子に譖す太子信じて帝に告ぐ帝大伴狛をして其反狀を問はしむ石川麻呂驚嘆して倭に走り遂に縊死す尋で皇太子日向の讒口を知り悔悟措かず日向みづから太宰の帥となす

いしとりとめのみこと　石凝姥命（イシコリトメノミコト）　天兒屋根命の孫天糠戸神の子なり岩戸開きの時鏡を作る鏡作連の祖なり又其作の鏡一は紀伊に一は伊勢に祀らる又紀州一の宮同國名草郡日前國懸宮はは即ち此神なりといふ

いしづち　石槌（イシヅチ）　島之助　伊豫出生の力士なり初め白山新三郎といひ紀州侯の抱となる叩き込みの名人にて常に勝を制し寛永中尤も名聲を博せり体量四十五貫身の長六尺四寸七分膂力衆人に超ゆといふ

いしひめ　石姫（イシヒメ）　宣化帝の女欽明帝の妃後皇后となり箭田珠勝大兒皇子、敏達帝、笠縫皇女を生む

いしわらけんぎょー　石原檢校（イシハラケンゲウ）　琵琶法師にして三味線にも巧みなり初め琉球に航して小弓を見工夫して三絃をつくる或はいふ中小路檢校之を傳ふるなりと未其孰れなるかを知るなし

いすずよりひめ　五十鈴依媛（イスズヨリヒメ）　綏靖帝の皇后にして媛蹈鞴五十鈴媛の妹なり安寧帝を生む

いせ　伊勢（イセ）　歌人なり伊勢守藤原繼蔭の女七條后の宮人たる時藤原仲平に通じ又宇多帝に寵愛せられ寛平の末行明親王を生む帝位を退くの時伊勢又退きて五條の里第に居り敦慶親王等と通じて女中務を生む歌は稚代の名人にして三十六歌仙の一人に選まる

いせだいじょー　伊勢大掾（イセダイジョウ）　三絃に巧みなり薩摩淨雲の末或は其子なりと常に境町の操座にて興行すと

いせのたゆー　伊勢大輔（イセノタイフ）　歌人なり伊勢の祭主大中臣輔親の女上東門院に仕へて紫式部、和泉式部、小式部等と名を齊しうす藤原朝忠、小野道風と通じたるが後越前守高階成順の妻となる和歌に巧みにして其才媛人を駭かせり曾て藤原道長の側に侍す時に櫻花を献ずる者あり道長大輔をして和歌を詠ぜしむ大輔立どころに筆を乘りて書す古の

ならのみやこの八重櫻けふ九重に匂ひぬるかなと道長嘆賞措かざりきといふ

いせん 狩野伊川（カノイセン） 木挽町狩野の第六世なり名は榮信惟信の男玄賞齋と號す法印に叙せられて伊川院といふ水墨の草畫は尤も巧みにして尚信の風ありと稱せらる又水墨に金泥を散らすは此人に始まると文政十一年七月歿す

いそーじ 日下部伊三次（クサカベーサヨジ） 勤王家なり薩州の人名は信政父に從て水戸に赴き烈公に愛せらる安政五年京にあり時に内勅水戸に下りて攘夷の實行を見むとするに際し伊三次大に盡力し幕吏のために捕へられて獄に入る拷問百出伊三次遂に屈せずして藩に還さる十二月風疾を以て歿せり

いそたり 加藤磯足（カトウーソタリ） 歌人なり尾張の人七右衛門といふ本居宣長に學び和歌に達す

いそのかみのおーじ 石上皇子（イソノカミノワウジ） 欽明帝の皇子母は倉稚綾媛なり

いそのかみのふるのおーかみ 石上布流大神（イソノカミノフルノオホカミ） 布都大神ともいふ佐士布都甕布都或は布都御魂の稱あり天照大神の建御雷神を再び中國に降さむとするや建御雷曰くわれ自ら降らずとも刀佐士布都神を降さむと此神乃ち石上に祀られて布留社といふ神體は妻藏鳴尊授くる所の十握劍なりと

いそのかみべのおーじ 石上部皇子（イソノカミベノワウジ） 欽明帝の皇子母は堅媛なり

いそのぜんじ 磯禪師（イソノゼンジ） 舞妓なり讃岐の人鳥羽院の時藤原通憲に從ひて舞樂を傳ふ乃ち男舞なり姿は水干立烏帽子に太刀を佩く

いそめ 小餘綾磯女（コヨロギノイソメ） 狂歌師なり紀藩の士識訪銀次郎の妻初名ひまの内子といひ俗名を磯子とよぶ天明三内子の一人なり嘉永五年八月歿す

いたゆー 豐竹伊太夫（トヨタケーダイフ） 浄瑠璃家なり陸奥茂太夫の門人合羽伊太夫といふ寛延二年筑前掾藤原爲政と受領す

いちいのつぼね 一位局（イチヰノツボネ） 飛鳥井雅親の女本姓藤原雅子といふ土佐光信の風を學んで畫をよくす永正年間の人

いちおー 大久保一翁（オホクボイチオウ） 初名三市郎後忠寛志摩守又は右近將監と號す石泉と號せり德川十一代より十五代までに歴仕し小納戸より目付役となり進で蕃書調所の頭取となる乃ち勝麟太郎に就て蘭書を讀み大に啓發するところあり十三代將軍の時駿府町奉行となり尋で京都町奉行より御側用取次に轉じ更に外國奉行にうつる此時に當り鎖國攘夷の說喧囂として紛々辨ずべからず一翁獨職に耐へずして退き少時閑散の地にありしが征長の事起るに及びて水野痴堂と共に顧問役にあげられ將軍慶喜の立つにいたりて會計總裁となる明治二年八月靜岡藩權大參事に任ぜられ四年十一月同縣知事五年東京府知事八年十二月教部少輔十九年三月元老院議官に任じ勅任官一等に叙せられ同二十年華族に列し二十一年七月從二位に叙せらる尋で薨す時に年七十二なり

いちきしまひめのみこと 市寸島比賣命（イチキシマヒメノミコト） 又の名は佐夜利比賣命といふ安藝嚴島に祀れる女神なり

いちぐ 一具菴一具（イチグアンイチグ） 江戸の俳人姓名は高梨里春羽前の人なり初め岩城の專稱寺にありて僧たりしが後俳に遊びて東西に行脚し遂に江都に來る中橋に

居て弟子に教ゆ門に集るもの甚多し性剛毅而も德望衆を和らぐ嘉永六年十一月歿す年七十三

いちごろー 蓮田市五郎（ハスダイチゴラウ） 櫻田門外の刺客なり名は正實通稱市五郎苦學して町方同心に用ひられ後寺社方の手代となる井伊大老を刺すの後本多修理亮邸に囚はる性至孝慈仁其母姉に寄するの書一讀人の鵬を斷たしむ明治三十五年從五位を追贈せらる

いちざえもん 手品市左衛門（テジナイチザエモン） 音曲家なり土佐掾の門人手品節といふ一派をうたひ創む一説にいふ伊勢掾又長門太夫等の門人と又謂ふ手品節は河東の源なりと

いちじょーのき 一條君（イチデウノキミ） 清和帝の皇孫三品貞平親王の女京極御息所に仕へ和歌を善くす其詠後撰集及び拾遺集等にあり

いちぞー 市川市藏（イチカハイチザウ） 大阪の俳優尾上多見藏の次男にして市川鰕十郎の養子となる安政四年江戸森田座に中村福助と天竺德兵御の劇を演じおのれ德兵衛に扮し福助の宗鑑に腹を切らせ其首を介錯せむとするに當り機敏に見物せる細川藩の武士五人其父を強ひて不倫を行ふは憎むべしと叫び刀を拔て市藏を斬らむとす市藏辛うじて逃れ舞臺番一人殺され數人傷く是に於て市藏の伎眞に迫るの評高し後大阪に歸りて死す

いちぞー 片岡市藏（カタオカイチザウ） 大阪の俳優屋號松島屋俳名我升幼名鐘三郎といひ又鐘彌と改む四代目仁左衛門に從ひ市藏と改名す實惡の役評判よく江戸に下り名古屋に赴き至る所其名高し中にも天保十二年春大阪にて若太夫座太閤記の光秀は一代の大當りなりしと

いちのおへや 一御部屋（イチノオヘヤ） 德川家宣の側室にして家千代の母太田宗庵の女明和三年六月逝去す又右近の方といふ

いちば 貞松齋一馬（テイシヨウサイイチバ） 正風遠州流の挿花の開祖なり本名米澤寛篤溪龍又は乾龍の號を以て揮毫するに書體頗る妙なり俳諧は樓川といひて神田庵二世を繼ぐ挿花の書衣香三册を著せり天保九年十月歿す年七十五

いちべー 古川市兵衛（フルカハイチベエ） 京都の人幼名巳之助後幸助初め鴻池家に事へ後江州の人古川太郎左衛門の養子となる生絲商を以て外人と賣買し器械繰の絲を作る明治十年澁澤榮一と共に足尾銅山を添田欣一より買ひ求む澁澤氏退くに及んで市兵衛の專有に歸し運氣漸く生す十八年阿仁銅山院内銀山を買ひ炭礦を併せて全國六十九礦區を有するに至る二十五年功に依て勳四等となり三十三年從五位となり三十六年四月歿す年七十二

いちまつ 佐野川市松（サノガハイチマツ） 初代 大阪の俳優なり初名十吉後萬菊といふ藤川紫右衛門の弟子にして滑稽劇をよくす寛延元年七月歿す年五十八

いちまつ 佐野川市松（サノガハイチマツ） 二代 大阪の俳優初名甚之助俳名盛府初代の門人にして新萬屋といふ小姓久米之助に扮するの日石燈の文樣を染めて着す人呼んで市松染といふ

いちまつ 佐野川市松（サノガハイチマツ） 三代 江戸の俳優初め坂東愛藏といふ市村羽左衛門の弟子にして立役をつとめ後松本山十郎といひて悪方となり再び立役にかへる天明五年八月歿す

いちみさい 吉岡一味齋 劍術家なり毛利氏に仕ふ長女その容色あり同藩士京極内匠之を娶らむとす一味齋其奸人なるを知て許さず内匠大に憤り遂に黨人春木藤藏と共に暗殺して逃れ去る

いちむ 石川一夢 講談師なり初め塗物渡世にして會津屋佐兵衛とよびしが廢業して講談を習ひ一口とよび一夢と改む安政元年五月歿す年五十一

いちゅー 岡西惟中 醫にして俳をよくす因幡の人始め一有後一時軒と號す醫を杉田望一に學び俳を西山宗因に修む元祿五年八月歿す年五十四

いちゅー 小西惟冲 潛齋といふ播磨の人博學多識曾て大日本編年史二十卷を編む

いちよー 樋口一葉 小說家なり幕府の士樋口則義の女名を夏といふ學を好み文を善くす殊に小說を作るの才に長け密かに筆を執りて闇櫻一篇を著はすに世人皆其筆致を唱へざるものなし時は維れ明治二十五年二月なり一葉これより先眞諸大家に就て說を叩き類に稿を起す曰く濁り江曰くわれから曰く經札曰く十三夜曰く丈くらべ每篇出づる每に洛陽の紙價爲めに貴し明治二十九年一月悼ましいかな病を以て逝く時に年僅に二十五一葉又普通文に巧みにして圓滑奇曲の才筆情致溢るゝに似たり且つ和歌に妙にして咏吟秀逸多しといふ

いちらいほー し 一來法師 三井寺の勇僧なり治承四年宇治川の合戰に筒井淨妙の戰ひ破るゝを見て奮然橋桁に上り淨妙の肩の上を飛び越えて奮鬪數人を殺せり

いちろー 島田一郎 石川縣人にして金澤藩の足輕なり戊辰の亂軍功ありて擢でられて下士となり累進して陸軍大尉となり職を辭するの後金澤の忠告社に入り政論家を以て目せらる明治十年西南の役起るや隆盛に應じて事を擧げむと欲して及ばず事平ぎて後同志と謀り大久保利通を東京麴町紀尾井坂に刺す時は明治十一年五月なり一郎官に自首し斬に處せらる

いちろざえもん 武衛市郎左衛門 武衛流砲術の祖なり名は義樹元祿九年二月歿す

いちろべー 夢市郎兵衛 江戸の俠客なり寛永正保の間俠名四方に鳴る力士明石志賀之助を扶けて京の力士仁王仁太夫と角せしむ志賀之助勝つ仁太夫の徒大に怨み途に之を殺さむとす市郎兵衛志賀之助をして脫せしめ自ら其徒を禦ぎて心膽を寒からしむ後髮を削りて祐生と改め相摸に隱れて死す

いづ 赤井伊豆 淺井長政の臣美作の子なり京極高次に仕へて部將となる慶長年間大津城に據て大阪方の將毛利元康久留米秀包の兵を防ぎ勇名天下に高し

いっかん 一觀 支那の瓦工なり天正四年織田信長の安土城を築さし時明樣の瓦を製して用ふこれより本邦製の布目瓦廢たる

いつきたゆー 宮本齋宮太夫 淨瑠璃家なり初代豐前掾の門下初は米商にして清水屋太兵衛とよべり後削髮して延壽齋と號し享和中歿す年七十三

いっきゅー 一休 紫野大德寺の高僧名は宗純初名周覺、狂雲子、夢閨、瞎

驢、國景等の別號あり後小松帝の孽子にして大德寺宗曇の弟子となり佛道を修行す性磊落不羈書畫をよくし狂歌をよむ明松や冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなしの詠尤も人口に膾炙す文明十三年十一月寂す年八十八

いっく 十返舍一九 小說家なり本名重田貞一幼名幾次郎初め志野流の香を嗜み薰熟香の十返に緣みて十返舍と號す又醉齋と號せり父歿後駿府の市井屢吏を調ぎしも幾許ならず弟に讓りて大阪に遊び淨瑠璃作者となり近松餘七といふ寛政六年江戸に來り並木千柳若竹笛躬と謀りて木下陰間合職を著はし大に世に行はる享和二年道中膝栗毛を著はし又江湖の好評を占む性放逸不拘書齋には書籍雜然どして列り筆硯の側杯盤狼藉たり嘗て夏曉に早起し殘月を賞して日本橋に到り興に乘じて遂に京大阪に遊び三月餘にして還る室中の狀故の如し天保二年八月病歿す年五十七

いつこ 藤原殿子 後圓融帝の後宮なり内大臣公忠の女寵を得て後小松帝及一皇女を生む後小松帝立つに及びて准三宮となり通陽門院といふ文明五年十二月薨ず年六十

いっさ 一茶 俳人なり信濃の人通稱小林彌太郎初め素丸に學び後隨奇成美に隨て俳の蘊奧をたづれ更に一機軸を出す性磊落不羈權門といへども悞れず賤者といへども卑まず曾て加賀侯之を召すに應ぜずして曰く御用あらば此方へ御座れと以て其風姿を察すべし江戸に出で下谷坂本に住居し俳諧寺と號せり曾ておらが春と稱して自句集を印行す文化十一年歸國文政十年十一月歿す年六十五

いっさい 佐藤一齋 德川家の儒官名は坦字は大道一齋と號す愛日樓老書軒は別號なり江戸の人初め信行といひ幾久藏とよぶ二十一歲改めて又捨藏といふ父は岩村侯の國老たり一齋年少にして書を讀み文字を好くし武技を練り諸禮を知る寛政二年仕籍に列し上京して林述齋の門に入る又井上四明鷲見星皇の門に出入し其講論を聞く此時天下祖徠の學風に染み相唱へて其餘臭を脫する事能はず一齋慨然として之を嘆き辨道薙蕪二卷を著はして啓蒙する處あり三年八月職を免ぜられ四年大阪に往きて中井竹山に學び京都に游びて皆川淇園を見て還る十二年平戸侯に召されて其封地に赴き途長崎に入り清客と交る遂に平戸に抵り經を維新館に講ず聽く者三百餘人後罷めて歸り文化二年を以て林門の塾長となる尋で岩村侯の國事に參與し廩米十五口を得姫路平戸又贈るに俸米を以てせり天保十二年遂に幕府の儒臣に列し祿二百苞を賜はり別に俸米十五口を給せられて昌平官舍に住す名聲天下に聞えて人皆其學德を仰ぐ侯伯以下其門に出入するもの數十家士民の師禮を修むるもの無慮三千人嘉永二年海防時務策を上り廩米百苞を賜はり布衣格に列す安政六年八月病歿す年八十八著書愛日樓文集、言志錄、俗簡焚餘、九卦講義、濟胡略記、大學論語中庸孟子近思錄傳習錄關外書、白鹿洞揭示示問等枚擧するに遑あらず

いっさい 谷一齋 京都の儒者名は松字は宣眞三介と稱す一齋又は巳午と號す土佐の人なり學を父時中に受け後野中兼山及び小倉三省に修む博學多識

の聞え高かりしも實は性魯鈍一に勉強の功果を積みたるものと傳へらる元祿八年三月江戸に歿す年七十一

いっし 一之（イッシ） 黐僧なり江藏主と稱す明兆に學びて佛像及び人物を善くす

いつじょー 後藤一乘（ゴトウイッジョウ） 金工なり名は光行俗稱を八郎兵衛といふ法橋に叙せらる後薙髪して一意といひ新案の圖を彫りて名高し明治九年十月歿す年八十七

いっせー 前原一誠（マヘハライッセイ） 長州の藩士なり初名彦太郎明治二年兵部大輔となり從四位に叙せらる三年九月大臣と論合はずして國に歸る九年神風連の亂に加はりて官兵と戰ふ利あらず途に捕はれて斬に處せらる

いっそー 中村一唱（ナカムライッソウ） 一唱流笛の祖なり初め院の北面にして後笛師となる慶長五年十一月歿す年七十九

いっそん 古肇一村（コヒッイッソン） 鑑定家にして古肇別家の祖なり了佐の三男勘兵衛といふ慶安三年十月歿せり

いっちゅー 都一中（ミヤコイッチュウ）— 淨瑠璃家なり山本土佐掾の門人初めは本願寺の僧なりしが後還俗して音曲を修め土佐掾の風に艷美を加へて一中節を創む初名須賀千朴後都太夫一中と改む享保八年九月歿す

いっちょー 英一蝶（ハナブサイッテフ） 黐人なり大阪の人本姓多賀名安雄字君受幼名伊三郎後治右衛門又助之進といふ一蝶或は翠雲翁、牛丸蓊斗堂、一蝶閑人、一閑山人、隣樵庵、隣濤庵、曉雲、六巣、淵雲、寶蕉、和央、雲堂の數號を有す狩野安信に學びて狩野信香或は又安雄とよぶ技日に進みて戲黐の妙を極め雅趣掬すべし元祿中當世百人一首を著はして罪を得三宅島に流さる島中にありて石土木皮を以て繪具とし頗に黐に力む寶永六年九月赦にあひて歸り名を改めて英一蝶といふ晩年薙髪して朝湖といひ享保九年正月歿す年七十三芭蕉、其角、嵐雪、横谷、宗珉、紀文とは交友なり又隆逢節朝妻等の數曲を作る

いってつ 稲葉一鐵（イナバイッテツ） 初名貞通又は長通字彦六後一鐵と號す美濃の人なり父祐宗土岐氏に從ひて軍功ありしが一鐵にいたりて曾根城に居り以て齋藤氏に屬す永祿七年織田氏の勢威漸く熾んなるに及びて之に服し井戸十郎の河戸の柴を拔き之を子貞通に守らしむ元龜六年一鐵信長家康と共に軍を姉川に出して淺井朝倉の兵と戰ひ遂に之に克ち功を以て信長の諱字を賜はる天正元年七月足利義昭を宇治の眞木島に攻めて之を陷れ八月朝倉義景の首を獲て信長に献ず三年柴田勝家と加賀の賊徒を伐ち又紀伊の勇士雑賀孫一郎等を説服す信長亡後一鐵秀吉に屬し長湫の役從ひて功あり乃ち三位法印に叙せられ天正十六年十一月を以て卒す初め一鐵の信長に歸するや素より心服せず信長之を知り欺きて殺さむと謀り一日一鐵を茶室に招きて饗す接伴の三士一鐵に勸めて軸黐の賛を讀ましむ軸は韓愈の聯句なり三士其意を問ふ一鐵文才あるを以て立處に之を説く言語明朗聞く者感嘆す信長物側にありて其雅量に感じ遂に殺す事を止むと

いっど 東條一堂（トウデウイッドウ） 儒者なり上總の人名は弘字は子毅一堂と號す通稱文藏幼字和七郎其家豪農にして近郷の人に重んぜらる一堂年少農夫となるを欲

せず去て江戸に赴き研學多年京に游びて再び江戸に還り朝川善庵佐藤一齋龜田綾瀬尾藤二洲等と交る後湯島に住居して昌平黌に隣る校の教官及び諸生贄を執る者門に充つ尋で神田お玉が池に移り福山藩主阿部氏の爲めに賓師となる嘉永中外夷來る一堂藩主に就て西洋の狀を説き内國の士氣を發ひ軍備を堅實ならしむるの急務を述ぶ安政四年七月病歿す年八十

いっとく 本松齋一得（ホンシヨウサイイットク） 初代 本松齋遠州流挿花の元祖なり淺草常林寺の住職にして日寛といふ文政三年正月歿す年百三

いっとーさい 伊藤一刀齋（イトウイッタウサイ） 一刀流の開祖名は景久伊豆の人なり諸國を遍歴して道場に試合を爲すこと三十三度其技天下に鳴る

いっとーさい 吉田一刀齋（ヨシダイッタウサイ） 劍客なり遠州の人寛永武術上覽の時羽我一心齋と技を較し遂に勝敗なくして止む

いつねい 一寧（イッチイ） 高僧なり宗の台州胡氏の子曾て元主のために説かれて我國に來り問牒なりしが平貞時に知られ捕へられて豆州に流さる然れども其德高きに依り宥されて巨福寺に住し圓覺淨智二寺に移る正保二年後宇多上皇に召されて京に往き眷遇を蒙る極めて大なり久保元年十月病んで癒に就き奄然として化す年七十一

いっぷー 西澤一風（ニシザハイッフウ） 狂言作者なり本名山本治重俗稱正本屋九右衛門大阪にありて書を售る後吹竹座の狂言作者となり紀海音等と名を齊しうす享保十六年五月歿す時に年六十七

いっぺん 一遍（イッペン） 諸國遊行の僧なり幼名松壽丸智眞隨緣遊行の名あり姓は越智名は通秀別府氏と稱す伊豫國主河野七郎通廣の子七歳にして伊豫の天台宗智得山に上り建長五年三月薙髪名を隨緣とよぶ建治元年十二月紀州熊野神社に百日參籠し融通念佛すこれより本願念佛の金札を荷ひ諸國を遊行して貴賤道俗を教化す正應二年八月寂す年五十一

いっぽー 西澤一鳳（ニシザハイッポウ） 戲作者なり號は李叟通稱は九郎右衛門又理助狂言堂或は綺語堂とよぶ嘉永五年十二月歿す年五十一

いっぽー 英一蜂（ハナブサイッポウ） 黐人なり一蝶の子或はいふ門人と名は信勝春愈と號す元文二年十一月歿す年四十七

いっぽー 森一鳳（モリイッポウ） 圓山派の黐人森徹山の養子にして俗稱文平嘉永年間の人なり

いづみしきぶ 和泉式部（イヅミシキブ） 女流歌人なり越前守大江雅致の女和泉守橘道貞に嫁して小式部を生む又いふ小式部は藤原保昌に嫁して生むと道長に召されて上東門院に仕へ和歌の譽頗る高し而して爲尊親王と通じ道貞と別る後親王薨じてその弟敦道親王と通じこれと絶たざるに藤原保昌に嫁し又道命阿闍梨とれんごろにす蓋し其行狀に於ては極めて忌むべきものありしなり然れども口をひらけば咳唾珠をなす曾て書寫山の性空上人に贈りていふくらきよりくらき道にぞ入りぬべき遙にてらせ山の端の月と又小式部を喪ひて殘しおきて誰をあはれと思ふらむ子はまさるらむ子はまさりけりと天下傳へて絶唱となす

いづみだゆー　林和泉太夫　京都の人元祿中淨瑠璃の名人を以て評判高し

いづも　竹田出雲　初代　大阪竹本座の座主なり阿波の人次郎兵衛といふ名は清一或はいふ清直と初め江戸にありて砂時計を發明し又操人形を考案す後京に上りて人形を朝に献ず萬治元年出雲掾を授けられ寛文二年始めて大阪に操芝居を興行せり享保十一年五月近江掾を授けられ十二年九月歿す年八十

いづも　竹田出雲　二代　竹本座主にして淨瑠璃の作者なり初代の子名は清定幼字三四郎千前軒と號す世に小出雲ともいへり嘗て三好松洛並木千柳と共に假名手本忠臣藏を著はす而して名聲籍甚人其作物を賞揚せざるものなし寶暦六年十月歿す年六十四

いつろ　一路　隱遁者なり一休曾て之と問答すと泉州堺の閑村に居る人の食を與ふれば則ち受けて世を途る一日村童戯に馬糞と馬鞋とを盛る一路見て我食既に絶てりとなし途に斷食して死す

いてん　以天　紫野大德寺の高僧にして茶事に通ず機雪と號せり後柏原天皇の時正宗大隆禪師の號を賜はり又相州小田原の早雲寺を創む天文二十三年同寺に寂す年八十三

いとくてんのー　懿德天皇　四代の天皇御名大日本彦耜友命安寧帝の第二子なり位にあること三十四年御年七十七にて崩ず御陵は畝傍山南にあり

いとで　五十迹手　天日槍の苗裔筑紫の伊覩縣に居る仲哀帝の八年帝の熊襲を親征して筑紫に抵るや五十迹手之を穴門に迎へ帝の御稜威のかゞやくを祝して五百枝の賢木に瑞劍鏡をかけて御船の舳艫に立つ帝之を嘉みして名を伊蘇志と賜ふ伊覩は伊蘇の訛れるものにして五十迹手の子孫は世々伊覩縣の縣主たり

いーとよあおのとーじょ　飯豐青皇女　履仲帝の皇子市邊押羽皇子の女なり忍海部の女王と稱す清寧帝崩じ嗣なし皇女の二弟億計・弘計の皇子相讓つて位に即かず依て皇女太政を執る之を飯豐青天皇と稱す十一月崩ず年四十五

いなぎみ　大伴稻公　天平十三年從五位下に叙し因幡守に任ぜらる勝寶元年正五位下にすゝみ兵部大輔となる六年上總守に轉じ正五位に叙せられ尋で從四位下にのぼる又大和守に遷る和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ

いなしき　荒本稻布　和銅寶龜年中の人其詠歌は萬葉集にあり

いなせいりひとのおーじ　稻背入彥皇子　景行天皇の皇子母は五十河媛なり皇子の子御諸別は播磨半國を賜はり其子は針間別佐伯直の姓を賜はる

いなたり　土師稻足　天平中の人和歌をよくす其詠は萬葉集にあり

いなづま　稻妻　雷五郎　常陸の人年二十にして江戸に來り力士佐渡ヶ嶽の弟子となりて横の島才助とよび土俵に上る文政七年稻妻と改名し文政十一年四方大關となる後横綱を張り雲州侯の抱力士となれり

いなば　門田稻葉　狂歌師なり通稱寺井庄兵衛葬具問屋なり初め齋藤彥麻呂の門に入りて學びしが後六樹園五老の門に入り年々齋又は門田稻葉とよびて狂歌をよむ又葛垣内ともいへり文政十三年五月五十四にて歿す

いなばとぞー　因幡小僧　本名は新助有名なる盜賊なり天明中一橋家外武宗寺院町方を荒らしたるを以て捕へられ同五年十月淺艸獄門の刑に處せらる年三十四新助は武藏足立郡新井村の農市右衛門の子なり

いなばのやがみのうねめ　因幡八上采女　天平寶龜年間の人和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ

いなひと　橘本稻彥　國學者なり通稱中臺安藝の人本居宣長に學びて業成る文化六年九月歿す年二十九

いなひのみこと　稻氷命　鵜茅葺不合尊の第二子母は玉依姫なり紀には母の御國に入るといひ記には東征の時暴風に逢ひて海に投じたまふといふ

いなひのわかいらつめ　稻日稚郎姫　景行天皇の皇后播磨稻日大郎姫の妹なり景行帝之に幸し眞若王彥人大兄王を生む

いなめ　蘇我稻目　高麗の千石川宿禰の支孫なり宣化帝の元年に大臣となる欽明帝の朝百濟佛像を献ず帝稻目をして之を拜せしむ稻目大に喜び向原寺を建て、崇峻光もつとむ二十三年大伴狹手彥高麗より還り其獲るところの美女甲刀鐘幡を稻目に遺る稻目美女を納れて妻となし輕曲殿に居らしむ三十一年薨ず

いねまる　三桝稻丸　大阪の俳優なり三桝大五郎の門人家名京桝屋梅笑と號す

いねんぼー　惟然坊　俳人なり俗稱廣瀨清右衛門美濃の人世々釀酒業を營みて巨萬の富を積めり惟然俗事を厭ひ妻子を捨てゝ俳諧の道に入り芭蕉に學んで途に一家を成す初名藁牛芭蕉歿後行脚の途に出で飄々として其行く所を尋定めず後年女某惟然を慕ひて行方を尋れこれに逢ふ惟然おもたさの雪は拂へども〳〵の句を書き以て女に與へ就伏して遂に家に還らしむ正德五年二月惟然歿す句集あり世に行はる

いのうえないしんのー　井上内親王　光仁帝の皇后聖武帝の女なり養老五年伊勢齋宮となり天平中二品に叙せらる光仁帝儲王たりし時納れて妃となし位に即くに及びて皇后となす寶龜三年后巫蠱に坐して廢せられ四年十月薨ず

いばらと　藤原茨子　堀河帝の女御なり大納言實季の女承德二年女御となり鳥羽帝を生む康和五年正月薨ず年二十八後皇太后を贈らる

いばらのすけ　藪中茨之助　尼子十勇士の一人なり元播磨國室明神の祠官主水正の子なり卯之助と稱す夙に任俠闘を好みて人に忌まれ茨之助と呼ばる室津の傾城浮橋に契りて父の怒を得途に四方に流寓す

いふきゅー　伊孚九　清の吳興の人畫をよくす歸化して名を海有といひ也堂又華野とよぶ池野大雅與謝蕪村等と其趣を同一にすといふ

いほきいりひこのおーじ　五百城入彥皇子　景行天皇の皇子にして母は八坂入媛なり曾て播皇子の國縣に封ぜられし時皇子は朝にありて儲位に擬せら

いほまろ 忍海五百麻呂（オシウミノイホマロ） 比古由牟須美命の後和歌をよくするを以て名あり其詠萬葉集に出づ

いまき 大原今城（オホハラノイマキ） 敏達帝の孫百濟王の後なり寶字中正六位上を歴て左少辨となり從五位上上野守となる寶龜二年位を褫はれ更に又從五位上に復し兵部少輔となり駿河守に遷る和歌に巧みにして其詠萬葉集にあり

いまけびと 佐伯今毛人（サヘキノイマケビト） 聖武帝の朝東大寺創立に當て功あり寶字中從四位下に叙せられ攝津大夫兼造東大寺長官となる後恰土城を築くを管理し造西大寺長官にうつる寶龜六年遣唐大使となり翌年往く途中病を發して遂に果さず延暦中從三位皇后宮大夫に拜し遷都に當りて造長岡宮使となる三年正三位參議に拜し民部卿に進み太宰帥に遷る性佛を好み租俸の半を以て經を寫すの料となす八年致仕し九年薨ず年七十二

いまでがわのいんのとのえ 今出川院近衛（イマデガハノキンノコノエ） 檢司權中納言伊平の女歌に巧みなり其詠續古今集以後五代の勅撰集に入る近衛一生嫁がず一生仕へず寡居して終るといふ

いもと 妹子（イモコ） 二條天皇の中宮にして鳥羽天皇の女なり世に乙姫宮と稱す永暦元年病に依て薙髮し戒を受く法名實相覺高松院と號す安元二年六月押小路殿に崩ず年三十六（イモコ）

いもと 小野妹子（オノノイモコ） 推古帝の朝冠位大禮となり遣隋使となる歸途百濟のために隋の答書を奪はる帝敢て其罪を咎めず後再び隋に赴き使節を果すといふ

いよしんの！ 伊豫親王（イヨシンナウ） 桓武天皇の皇子延暦中四品より三品に進み式部卿中務卿を兼ぬ大同二年十二月藤原宗成親王に不軌をすゝむ親王拒みて容れず乃ち之を奚大納言藤原雅友に告ぐ雅友藤原內麻に告ぐ親王大に懼れ具に宗成の反を勸むるの狀を奏す宗成囚はれて親王を謗す帝信じて親王の號を削り母と共に河原寺におく親王及び母途に藥を飲んで死す時人之を悲しまざるなし弘仁十年詔して親王の號を復し承和六年一品を贈る

いよぞ！ 田村怡興造（タムライヨザウ） 甲斐の人明治八年八月を以て陸軍士官學校に入り卒業後累遷して大佐より少將に進み正五位勳二等功二級に叙せらる三十三年四月參謀本部次長となり精勤無比盛名隆々今信玄の評を得るに至れり三十六年十月逝去年五十朝廷特旨を以て從四位に叙し官一階をすゝめて中將となす怡興造常に朝鮮經營論を抱き漁業農業殖林を以てわが人民の永久根據地を作るべしと又軍政整理論を唱へて軍備機關の縮小整頓を主とし二年兵役論歸休兵制論を斥く

いよのおーじ 伊豫皇子（イヨノワウジ） 一に今岡皇子と號す孝靈天皇の第三子詔して西戎南蠻を伐つと後伊豫に止りて國主となる越智氏の祖なりと

いりんあん 朝山意林庵（アサヤマイリンアン） 京都の儒者にして名は素心字は藤丸意林庵と號す曾て五山の長老に學び又朝鮮人李文長の說を聞く寛永中駿河に赴き歸て西海に赴く承應二年後光明帝のために易經を殿上に釋く眞に稀世の名學なり寛文四年九月七十六を以て歿す

いるか 蘇我入鹿（ソガノイルカ） 蝦夷の子一に鞍作といひ林臣と稱す皇極帝の朝政權を

專にし威勢父を凌ぐ入鹿我が女の生める古人大兄皇子を立てむと欲し先づ山背大兄を班鳩に襲ひ其膳駒山に逃るゝを追ひて遂に之を殺す蝦夷聞き狂暴に過ぐるを罵る然れども入鹿改善の志なく僭上して私邸を宮城に擬し男女を稱して王子とよばしめ錦削寺を起し又別莊を畝傍山の東に造る出入の儀天皇の如く兵士五十を率ゐて護衛を嚴にせり天智帝大に之を惡み中臣鎌足と謀りて誅戮を加ふ

いろは 尾上いろは（オノヘ） 初め片岡辰之助と稱し桃理と改む尾上多見藏の門弟なり後尾上梅之丞といひ又改めて嵐富三郎と云ふ

いわいべのなりなかのむすめ 祝部成仲女（イハヒベノナリナカノムスメ） 歌人なり其詠載せて新拾遺集等にあり

いわきな 石寸名（イハキナ） 大臣蘇我稻目の女用明帝の元年正月宮に入りて嬪となり田目皇子を生む

いわきのおーじ 磐城皇子（イハキノワウジ） 雄略天皇の皇子なり天皇の二十三年星川稚宮皇子と叛を謀りてあらはれ共に焚死す

いわどろ！ 坂東岩五郎（バンドウイハゴラウ） 俳優なり家名阿波屋俳名岩子坂東國五郎の門人にして敵役の名人とよばる寶曆初年より芝居に出で寛政七年八月歿す年四十八

いわさかのいちのべのおしわのおーじ 磐阪市邊押磐皇子（イハサカノイチノベノオシハノワウジ） 履仲天皇の皇子母は黑媛なり安康帝位を皇子に傳へむと欲し豫め後事を押磐皇子に託す大泊瀨皇子大に之を嘲み皇子を誘ひて猪獵をなし遂に之を射殺す後に皇子の御子弘計王位につくの日皇子の骸を索め塚を築きてあつく葬るといふ

いわすびめのかみ 石巢姫神（イハスヒメノカミ） 伊非那岐神の子或は磐筒之女神ともいふ

いわずみ 境部石積（サカヒベノイハツミ） 大彦命の後允恭天皇の朝石積の祖國境に標を立つ因て坂合部の姓を賜はる後境部と改む白雉四年巨勢藥水と支那に往き留學して業成る天武帝の十年邑六十戶を賜はり新字四十四卷を制すといふ

いわつくわけのみこと 磐衝別命（イハツクワケノミコト） 垂仁天皇の皇子母は綺戶邊なり

いわつちびこのかみ 石土毘古神（イハツチヒコノカミ） 伊非那岐神の御子にして上筒三男神と同じとの說あり（クスノイハテ）

いわて 樟磐手 壬申の亂に天武帝に屬す詔を奉じて吉備に往き兵を徵す此時國司當麻廣島を殺せり

いわのひめ 磐之媛（イハノヒメ） 仁德天皇の皇后にして葛城襲津彦の女なり妬心深くして常に天皇を苦しめ奉れり曾て天皇皇后の留守に乘じて八田皇女を納る后還りて之を知り難波に到りて船を下らず天皇の迎ふるを斥けて山背より倭に赴き宮を筒城岡の南に營みて居る天皇口持臣をして之を諭す后從はず天皇乃ち親ら來りて后を見むと欲す后奏していふ天皇八田皇女を納れて妃となす妾共に事ふるを欲せずと天皇悵然として還る三十五年六月后筒城宮に崩ず履仲帝住吉仲皇子反正帝允恭帝はみな此后の生むところなりといふ（イケダノイハマヘ）

いわまえ 池田磐前 寶龜中の人和歌に巧なり其詠萬葉集等にあり

いんえー 寶藏院胤榮（ハウザウヰンインエイ） 寶藏院流槍術の開祖なり南都の僧にして覺禪坊法印と稱す刀法を上泉伊勢守に學び槍法

を大膳大夫盛忠に受く而して鎗槍の法を案出し技を將軍義昭の前に行ふ慶長十二年正月歿す年八十七

いんきよ　北村鶴居（キタムラカクキヨ）　江戸の國學者なり名は節信字は信節通稱彦助後に彦兵衛といふ別號靜齋又靜舍安政三年六月歿す年七十三嬉遊笑覽を著はせり

いんきよーてんのー　允恭天皇（インキヨウテンノウ）　第二十代の天皇御名は雄朝津間稚子宿禰仁德帝の第四子なり大和遠明日香宮にありて天下を治めしめ事四十二年曾て姓氏の混亂を愛ひ探湯を置て以て之を正す

いんくんし　嵯峨隱君子（サガノインクンシ）　醍醐天皇の皇子童形にして白髮なりしと傳へらる

いんげんぜんじ　隱元禪師（インゲンゼンシ）　明國福州の僧名は隆琦姓は林氏承應元年招かれて我國に來り山城宇治の黃檗山萬福寺を創む後水尾上皇將軍家綱皆崇信し列侯群臣の歸依するもの甚多し延寶元年四月歿す年八十

いんせき　井上因碩（ヰノウヘインセキ）　棊の名人なり初名桑原道節本因坊道策に就て奧旨を得寶永中其名高し

いんぼ　宮崎筠圃（ミヤザキキンポ）　儒者なり名は齊字は子常初名淳筠圃と號し常之進と稱す尾張の人初め業を伊藤東涯にうけ後闇齋に就く能く赤貧に安んじて研學し詩史經書悉く之を讀む又墨畫の竹をよくし山科李溪等と併せられて平安四竹の名を得たり安永三年十二月歿す年五十八

うえもんのすけのつぼね　右衛門佐（ウエモンノスケ）　德川綱吉の侍女初め常磐井局と稱す權中納言藤原兼俊の女にして後水尾天皇に奉侍せしが帝崩じて後淨光院夫人の召に應じて東に赴き明信夫人に紀伊に仕へ三年にして幕府に出づ寶永三年二月卒す

うえもんのすけのつぼね　右衛門佐（ウエモンノスケ）　櫛笥元帝の妃にして松室重敦の女初め柏木といひ後伊勢と改む職仁親王吉子內親王久嘉親王を生みて中臈となり薙髮して心觀院と號せり

うおかい　朝野魚谷（アサノウヲカヒ）　本姓は忍海原連といふ延長七年播磨大掾に任ぜらる醫を善くせり

うおね　藤原魚名（フヂハラノウヲナ）　太政大臣房前の子勝寶の初め迎神使となり宇佐大神の神輿を京に奉じて入る寶字中從四位上宮內卿に任じ神護二年從三位に進み景雲二年參議となる寶龜初年正三位大納言に轉じ中務卿を兼ぬ後內大臣となり天應元年に至て正二位左大臣にすゝむ延曆元年事に座して大臣を免ぜられ太宰府に往く途中病に罹り京に還て薨ず年六十三世に河邊大臣といふ

うがく　中西雺岳（ナカニシトウゲノ）　天文學者なり名は敷邦字は子直通稱金吾清道の子儒を中井竹山菅東海にうけ天文を吉田明卿にうく文化八年三月司天台に事へ天保八年辭し尋で歿す年六十五

うかのみたまのかみ　倉稻御魂神（ウカノミタマノカミ）　須佐之男命の女にして大年命の妹母は大山祇の女大市比賣なり又宇賀能賣神ともいふ稻荷神社の中社は此神を祀ると

うと　原田宇古（ハラダウコ）　俳人にして大和の魚商なりと芭蕉翁に學びて其業成る

うとん　右近（ウコン）　歌人なり右近少將藤

原季繩の女百人一首中にある忘らるゝの詠尤も人口に膾炙せり

うさい　稻葉迂齋（イナバウサイ）　肥前唐津侯の儒臣なり名は正義初名は通經十五郎と稱し十左衛門と改む江戸の人なり年十三にして淺見絅齋の門人伴部安崇赤井直義に就て經義を學び後佐藤直方に就く晚年山崎派の學燈を以て推尊せられ列侯の間にも重んぜらる寶曆十年十一月歿す年七十七著書に迂齋文集、同續集、別集、和書集、學話、初學案無辨等あり

うぎえもん　市村宇左衛門（イチムラウザエモン）　初代泉州堺の俳優なり初名村山又三郎名古屋山三の門人にして早く江戸に來り數寄屋町の地に大歌舞伎狂言の座を立つ寛文四年玉川主膳と謀て二番三番の續物を演じ大芝居と稱せらる貞享三年七月歿す年五十二

うぎえもん　市村宇左衛門（イチムラウザエモン）　二代江戸の俳優上州の人村田九郎右衛門に發はれて二代目をつぐ

うぎえもん　市村宇左衛門（イチムラウザエモン）　三代二代目の長子にして幼名竹之丞とよべり

うぎえもん　市村宇左衛門（イチムラウザエモン）　四代江戸の俳優二代目の次男にして幼名を竹之丞といふ性佛を子むの故を以て延寶六年二十五歲の時西行發心の演戲をなし舞臺より笈を負ひて諸國修行の途に上る法名誠阿京に到りて叡山に上り勤學數年橘大僧都阿闍梨に拜す後江戸に來りて本所五ツ目に自性院を建て念佛に耽る享保三年十月六十五にて寂す

うぎえもん　市村宇左衛門（イチムラウザエモン）　五代江戸の俳優なり四代目の姉婿にて其あとをつぐ

うぎえもん　市村宇左衛門（イチムラウザエモン）　六代江戸の俳優幼名を竹松とよぶ

うぎえもん　市村宇左衛門（イチムラウザエモン）　八代江戸の俳優なり初名竹の丞俳名何江寛延元年始めて羽左衛門と改む寶曆十二年五月歿す年六十六

うぎえもん　市村羽左衛門（イチムラウザエモン）　九代江戸の俳優なり初名市村龜藏といひ狂歌を好くす狂名橘太夫元橘と稱せしも後家橘と改む天明五年八月歿す年六十二

うじあき　大館氏明（オホダテウヂアキ）　新田義貞の臣大館宗氏の子にして左馬助となる兄幸氏と共に源顯家に從ひ延曆寺を救ひ園城寺を拔く後義貞の命を奉じて江田行義と兵三千に將として進み赤松則村を室山に敗る又伊豫守護となり得能氏と兵を合せて近傍の諸城を略取し兵勢稍々振ふ敵銳を盡して進み來り其城を圍むに當り氏明奮戰之を却け遂に城中に自刄す

うしかい　大伴牛養（オホトモノウシカヒ）　和銅二年從五位下に叙せられ遠江守となる養老年中累進して從三位兵部卿となり山陽道鎭撫使となる勝寶元年正二位中納言にて薨ず和歌を詠じて萬葉集にかゝげらる

うしかい　上毛野牛甘（カミツケノウシカヒ）　寶龜中其名あらはる和歌に巧みにして其詠萬葉集にあり

うじぎみ　橘氏公（タチバナノウヂミ）　清友の子檀林皇后の弟なり承和十一年右大臣に拜し從二位に叙せらる十四年薨ず年六十五世に井出右大臣といへり從一位を贈らる

うじなよ　大館氏清（オホダテウヂキヨ）　氏明の子正平十年吉野行宮に給事し十六年伊勢國司源顯能の部下に屬して伊賀の關岡城を

守り文中二年仁木義長と鈴鹿山に戰て仁木義信を斬り顯能と共に進んで遂に義長を破る顯能其功を賞して關岡氏の女を娶はし其姓を冒さしむ時に橋本正高兵を紀伊にあぐ足利義滿山名義理を遣はして之を攻む正高援を氏清に乞ふ氏清擊て義理を破る應永十九年卒す年七十六

うじさよ 山名氏清（ヤマナウヂキヨ） 時氏の四子なり民部少輔となり陸奥守に任ぜられ丹波守護となり更に和泉守護を加へらる已にして弟時義但馬にありて暴横なり時義死して其子時熙氏之ますます放恣を極む義滿の命により氏清は其甥滿幸と共に擊ちて之を平ぐ後時熙氏之京に至りて哀を義滿に請ふ義滿之を釋す滿幸是に於てか義滿の處置を怪み氏清に謂て曰く是れ我を擊たむとするなり請ふ先づ發せむと乃ち氏清兵を率ゐて和泉より滿幸丹波より發す氏清進みて時熙を大宮に破りしも一色詮範の來攻に會し遂に敗死す年四十八

うじくに 宗像氏國（ムナカタウヂクニ） 筑前の人宗像神社の大宮司にして從五位下攝津守となる薊永中兵亂に乘じて神田八百七十餘町を併領し白山に城きて居る

うじさだ 宗像氏貞（ムナカタウヂサダ） 黑川隆像の子字鍋薊丸天正中白山城に居りて立花氏の兵と戰ふ十四年三月歿す

うじさと 蒲生氏郷（ガマフウヂサト） 本名敎秀又賦秀といふ小字鶴千代近江の人父賢秀と共に信長に見え字を忠三郎と改め以て仕ふ永祿十二年八月大河内城を攻め單騎馳驅して軍功あり信長女を以て之に娶す元亀三年信長越前を伐つに當り氏郷潛かに出でゝ勇戰して敵百二級を獲て獻ず信長其驍勇なるに驚く天正十年信長の弑せらるゝに及び氏郷信長の夫人生駒氏を白野城に迎へ信雄に從ひて京に入る豐臣秀吉之を賞し事平ぐの日に於て江州の田五千石を與ふ尋で從五位下に叙し飛驒守と稱すこゝに於て伊勢松島城十二萬石を食む十五年春秀吉に筑紫に從ひ軍功頗る多し功を以て正四位下に進み左近衛權少將となり松坂城にうつる十六年三月東征に從ひ功に依て騎標三階笠の許を受く又北條氏規を韮山に攻め氏房の將廣澤重信の夜襲にあひ自ら丈八の矛を執て戰ひ重信を殺す七月氏房又春日左衛門尉をして夜襲せしむ氏郷再び勇鬪して之を卻く八月征奥先隊となり會津六郡仙道五郡越後北河田四十二萬石に封ぜられ陸奥出羽の鎭護職たり然れども氏郷之を懼ばず秀吉家康と謀議し會津の守護を以て氏郷に命ず氏郷佐久間右衛門を得て此任に當り田丸直昌關一政の諸族を隷屬となし以て黑川城に入り諸邑を鎭撫す伊達正宗師を出して氏郷と合し亂民を擊ち岩手宮澤古川松山二本松等を定む十九年氏郷會津を發して西上し秀吉に見え事狀を述ぶ三月九戸政實叛す中納言秀次及び家康元帥として進み氏郷正宗前軍に將として赴き一擊して平げ九戸城を陷るこゝに於て氏郷葛邑十九郡を併せ遂に百萬石を領す十一月氏郷京に往き十二月參議に拜し從三位に叙せらる文祿元年征明の師起るや那古耶の行營に從ふ同四年二月吐血を以て大阪に薨ず年四十初め秀吉氏郷の豪邁なるを愛して大封を與へ而して後之を悔ゆ石田三成秀吉に謂ていふ臣氏郷を校るに武略膽大將帥の器なり殿下熟察せず

んば悔ゆるところあらむと乃ち勸めて氏郷を滅さむとし直江兼續と謀り瀨田正忠に命じて萊に毒を盛らしむ氏郷飲んで病を得其危篤に陷るや乃ちかざりあれば吹かれど花は散るものを心みじかき春の山風と詠ぜり秀吉其他意無きを知て甚嘆惜すといふ

うじざね 今川氏眞（イマガハウヂザネ） 義元の長子小字五郎といふ永祿三年五月從五位下に叙し治部大輔に任ず後上總介と稱して相伴衆に列す永祿二年義元の桶狹間に歿するや氏眞立ちて國政を視るに甚だ冷淡なり謾口行はれ阿諛重んぜらる而して氏眞國中士民男女の中元に拍舞する慣例あるを欣び自ら赴きて盛に行はしむ國人靡然として淫微に傾き奢侈行はれ正業遂に振はず然れども氏眞毫も顧るところなし永祿十一年五月武田信玄人を遣はして曰く請ふ東三州の地を以て我に附せよ足下のために弔戰して信長に報いむと氏眞信玄の信長と姻戚あるを以て應ぜず十一月信玄兵を率ゐて來り攻む氏眞の臣瀨多陸奥守高山勝喜歎を信玄に通ず氏眞軍敗れて城に入る信玄の兵長驅して來る氏眞大に懼れ終に土岐の山家に逃る信玄の將山縣昌景駿府に入りて火を放ち以て侵略す元亀元年正月信玄花澤を攻む氏眞妻子を携へて小田原に逃れ北條氏康に據る氏康の子氏政信玄と結んで氏眞を殺さむとす氏眞大に驚き避けて德川家康に投じ其救護を得て八百貫の地を領す而して國家を回復するの志なく遠く京師に遊び信長の盛大を見て欣羨し其の爲めに蹴鞠の伎を演ずるに至る天下嘲笑せざるなし天正十年信長武田氏を滅し駿府を家康に與ふ家康其半を以て氏眞に歸せむとす信長許さず氏眞遂に食邑を失ひて京に赴き髮を削りて宗關といひ慶長十九年十二月江戸に來りて歿す年七十七

うじずみ 岩松氏純（イハマツウヂズミ） 尙純の子小字滿家丸享德中昌純の後を承けて立つも權橫瀨成繁に制肘せられて鬱憤晴れず終に自殺す

うじたけ 荒木田氏筠（アラキダウヂタケ） 字は春生齊震と號す通稱丹下伊勢山田の祠官にして從五位下に叙せらる

うじたね 千葉氏胤（チバウヂタネ） 貞胤の子千葉介といへり從五位下に叙す正平六年足利直義に屬して男山に據り又尊氏に從て直義と薩埵山に戰ふ明年新田義宗と笛吹坂に戰ひて之を破る十八年美濃に歿す

うじちか 今川氏親（イマガハウヂチカ） 今川義忠の子文明十二年父の戰死するや氏親母に抱かれて山中に匿れ後出でゝ伊勢長氏に扶けられ又府第に入る氏親修理大夫となり上總介を兼ぬ永正十三年八月氏親兵を發して大河内某を安部山城に攻め遂に之を拔く

うじつぐ 宇都宮氏綱（ウツノミヤウヂツナ） 下野守公綱の子小字加賀薊丸從五位下下野伊豫守となる延元の初め公綱の源顯家に從へる時芳賀禪可氏綱を挾んで叛し顯家に攻められて破る禪可乃ち氏綱を足利義詮に託す後足利尊氏の弟直義と爭ふや氏綱尊氏に從ひ千五百の兵を率ゐて直義の將桃井直常と利根川に戰ひ遂に之に克ち兵勢大に振ふ後年禪可の足利基氏を恨みて兵を擧ぐるに當り基氏氏綱を疑ふ氏綱馳せて基氏が小山の軍營に抵り異心なきを說く基氏釋然たり建德元年卒す

うじつね 北條氏綱（ホウデウヂツナ） 長氏の子小字千代丸後新九郎と改む永正十六年父に嗣ぎて小田原を治し遺訓を守りて關東統一の策を圖る大永中足利高基と婚を結びて上杉氏を謀り江戸河越兩城を拔く勢遠近を壓服す天文七年氏綱兵を率ゐて足利義明を小弓に攻め里見義弘と鴻臺に戰ふ義弘敗走義明獲らる北條氏の聲勢益々生じ小田原の殷富日に加はる十年七月卒す年五十五

うじつね 足利氏經（アシカガウヂツネ） 高經の子なり正平七年九州探題となり菊池武光と戰つて克たず逃走して京に歸り僧となつて終るところを知らず

うじとも 結城氏朝（ユフキウヂトモ） 朝光第十一世の孫初字七郎中務大輔左衛門尉と稱す永享十二年正月足利持氏亡ぶ子春王安王來りて氏朝に據り氏朝之を扶護して恢復を圖らむとし老臣水谷隆持等と議す事京に聞ゆ上杉清方同持房共に將軍の命を奉じて來り攻め結城を圍む氏朝拒戰利あらず城遂に陷る春王安王擒となり氏朝死す時に年四十

うじとよ 今川氏豐（イマガハウヂトヨ） 今川氏親の子左馬介と稱し名古屋の城に居る後織田信秀のために欺かれて其城を奪はる

うじなお 北條氏直（ホウデウヂナホ） 氏政の子小田原の城主なり小字國王丸後新九郎と改む從五位下左京大夫となる天正中父に嗣ぎて立ち類に關東の疆土を開拓し織田德川と結んで武田と斷つ十六年五月豐臣秀吉使を遣はして氏直の入朝を促す父氏政諸老と議して直に之を斥く蓋し北條氏が舊領上州沼田の地を得ざりしに本づくなり十七年七月秀吉富田知信津田重信をして沼田の疆界を理め後小田原に遣はして再び入朝を促す氏政氏直應禮せず秀吉怒りて終に東征に決す十八年正月氏直秀吉の大舉を聞き諸老をあつめて議するに論難百出決する能はず僅に城郭を修めて備ふ三月秀吉の大軍來り侵し配下の諸城荐りに陷り小田原重圍の中にありて累卵の如し秀吉黑田孝高等を城中に遣はし相豆二州を保ちて退き以て心を改むるの實を示さしむ氏政聽かず秀吉皷譟して攻め氏政氏鄕を執へて自殺せしめ氏直を高野に放つ然れども之を恩遇して伯耆に封ずるの約あり果さず終に十九年十一月卒す年三十

うじなが 成田氏長（ナリタウヂナガ） 長泰の子下總忍城にありて左馬介といひ下總守と稱す天正十八年豐臣秀吉の小田原を伐つに當り氏長抗して降らず石田三成來り圍み水攻となす氏長屈せず然れども其長く爭ふ可らざるを知りて降る元和二年十二月卒す

うじのぶ 金春氏信（コンパルウヂノブ） 金春流申樂の祖なり大和の人世々春日社の社人にして秦河勝が後なりといふ氏信初名武田式部通稱彌三郎後七郎禪竹と號せり從五位下式部權大夫となる嘗て新曲六十六番を作りて宮中又は春日社に奏す應仁亂關白兼良に南都に從ひ終に家領を失ふ應永八年歿す年八十六

うじのり 赤松氏範（アカマツウヂノリ） 則村の子にして性勇悍無雙膂力衆に超ゆ父の沒後南朝に歸順して中納言藤原隆俊に從ひ足利義詮を京都に攻む義詮敗れて走る時に敵將長山頼基勇名あり大斧を振て氏範に迫る氏範其柄を攫み力に任せて之を奪ふ頼基懼れて退き走るこゝに於て大に奮戰し敵を殪すこと幾十人なるを

知らず後足利直冬に從ひ山名時氏と共に義詮を攻め桃井直常と兵を合せて足利尊氏と東寺に戰ふ正平十五年護良親王の御子隆良親王に從ひ畠山國清の兵を邀へて擊つ後節を變じて足利氏に降り關白頼基の軍と大に戰ひ身に重傷を負ひ力盡きて降る程なく播磨に歸るを得て兵を中島の鄕に起す時に正平二十年なり元中三年足利氏の軍と清水に戰ひて敗れ子氏春等と悉く又に伏して殪る

うじのり 北條氏規（ホウデウヂノリ） 氏康の子小字助五郎美濃守と稱す伊豆韮山の城主なり天正十八年秀吉大舉して小田原を征するや氏規韮山を固守して降らず蜂須賀至鎭福島正則生駒親正織田信雄の兵多く傷く小田原陷るに及びて德川家康之を諭して降らしむ氏規乃ち城を家康に致して成ざを謀す豆相武三州を以て氏政父子を封ずるの議成らざるに氏政自殺す氏規氏直に從て終に高野に入る次祿三年九千餘石を得て河内狹山に居る慶長五年二月卒す

うじのわきいらつこ 菟道稚郎子（ウヂノワキイラツコ） 應神天皇の皇子母は皇妃宮主宅媛なり性學を好み百濟の人阿直岐を師とす阿直岐王仁をすゝむ皇子又之に就て修めひろく經典に通ぜり四十年正月皇太子となる明年天皇崩ず皇子位を仁德帝に讓る仁德帝從ほず皇子菟道に退き互に讓る事三年皇位爲めにむなし皇子帝の志の堅きを見て其奪ふ可らざるを知り決然意を定めて自殺す帝大に慟哭して遂に位に即くといふ

うじはる 氣比氏治（ケヒウヂハル） 彌三郎大夫と稱す越前の人氣比宮の大宮司たり延元中王事につとめ敦賀に築きて新田義貞及び尊良親王を迎ふ後親王金崎に入るに當り氏治奮戰城陷り親王自殺するに及びて殉死す

うじひろ 宗像氏弘（ムナカタウヂヒロ） 筑前の人氏信の子文安元年宗像神社の大宮司となり左衛門尉兼攝津守となる後大內政弘に屬して少貳氏の兵と戰ふ

うじまさ 小山氏政（ヲヤマウヂマサ） 下野の人秀朝の子にして左衛門佐となる正平中官軍に屬して男山を援け利あらず遂に戰死す

うじまさ 北條氏政（ホウデウヂウヂマサ） 氏康の子左京大夫に任じ從四位下相摸守となる永祿六年里見義弘太田資正と下總鴻巢に戰ひて大に之を破り大多喜勝浦を拔き上總を併す十一年十二月武田晴信の今川氏眞を逐ふや氏政父と共に其信を卻け氏眞のために國を復せむとす而して大兵を動かさゞるに和す元龜元年十月氏政父の後をうけて東國經營につとめ天正五年を以て老し自ら截流齋とよぶ武田勝頼德川織田兩氏と爭ふに當て姻を氏政に請ひこれと結んで援軍を促す後勝頼上杉景虎を援ふの約に背くを以て氏政恚て和を破り好を斷つこゝに於て德川織田兩氏に藁し之を援けて勝頼を滅さしむ天正十一年豐臣秀吉既に天下に號令してしばしば氏政の入朝を促す氏政時に驕恣に陷り國力富むと雖與望乖離して變幸重んぜらる而して傲然山東の雄威を弄し秀吉に抗するの志あり十四年八月氏政弟氏規をして京に赴かしめ以て織に貢を塞ぐ秀吉大に怒り十八年三月兵二十五萬を發して小田原に薄る氏政の驕臣上杉憲秀欵を秀吉に送り小田原配下の城寨皆風を望んで降る秀吉人をして氏政に降を勸め豆相二州

を得て先祀を存するの可を説かしむ氏政從はず七月遂に自殺す年五十三其辭世に曰く吹くと吹く風ならばこそ花の春紅葉の殘る秋ならばこそと

うじみつ 足利氏滿（アシカガウヂミツ） 鎌倉管領基氏の子なり父の後をうけて管領となる正平二十三年平の一揆を河越城に滅し宇都宮の亂を鎮定す又新田義宗脇屋義治と戰ひて之を敗り武勳四隣に聞ゆ文中二年左馬頭となり進んで左兵衛督となり從三位に陞る天授年中將軍義滿頗る政事に倦み人望漸く乖離す氏滿密に代らむとするの志あり上杉憲春死を以て極諫して止むこの時小山義政の亂を起すを聞き討て之を滅し鎌倉田村則義を殺す天授四年小山五郎の男櫛城を拔き遂に其一族をつくせり同五年義滿陸奥出羽を以て氏滿に授く應永五年歳四十を以て薨ず法名道全永安寺と號す子五人あり

うじやす 北條氏康（ホウデウウヂヤス） 氏綱の子初字新九郎從五位下相摸守となる氏康領土を治めて柔剛宜しきを得文武兼れ備はり膽略非凡なり衆臣皆威服して名主となす上杉憲政の臣長尾景虎常に之を懼れ嘆じて曰く關東の大敵は彼のみと而して憲政驕怠更に意に止むるなし意玄益々憂ふ天正十五年四月氏康上杉氏と度伴りては走り走り鋒を交ふること數度伴りては誘ふ上杉朝定同晴氏同憲政等勢に乘じて小田原に薄る氏康諜して敵狀を審かにし急に起つて奮擊勇戰將士一以て百に當らざるなし敵殺傷二萬餘人朝定擒はれ憲政晴氏身を以て免る八州の諸族報を聞て北條氏に從ふ者九十餘姓氏康の名四方に喧傳す二十年氏康兵を率ゐて憲政を攻め遂に之を越後に走らす二十三年更に古河を攻め晴氏を執へて波多野に逐ひ後釋して鎌倉に移す永祿三年上杉輝虎將軍の命を以て管領と稱し里見太田の援を得て小田原を伐つ氏康其勢威を避けて持久の策を用ひ輝虎の短促急激の性を利用して將士を乖離せしむ輝虎克たずして越後に歸る時に氏康今川氏武田氏と結び國を子に讓りて老し万松軒と號す六年氏康里見義弘太田資正の兵と大に鴻臺に戰ふ氏康の將遠山丹波守富永三郎左衛門急進して伏に陷り敵の獲る所となる氏康諜して敵の驕れるを察し日暮霧に乘じて四面より擊ふ義弘資正敗走して將士死する者五千餘人なり十一年十一月武田晴信和を破て今川氏を侵し氏眞を逐ふ氏康其信を無視するを惡み氏眞のために府中城を修め以て恢復を圖る晴信大擧して小田原を攻めむとし戰はずして去る元龜元年十月氏康卒す年五十六

うじより 佐々木氏頼（サヽキウヂヨリ） 時信の子左衛門尉檢非違使たり六角氏と稱す元弘中北條時益に從て屢々官軍を禦ぎ後足利尊氏に從て近江守護となる正平中尊氏直義と爭ふや氏頼中立して雍を西山の側に避く乃ち薙髮して崇永と號す後足利直冬等の尊氏を京に攻むるや氏頼遂に尊氏に應じ細川清氏等と禦ぎ戰ふ尊氏吉野を犯し平石城を拔く氏頼高山氏を滅して其食邑を得るに當り仁木義長已の舊封と稱して強て之を奪ふ氏頼嘲んで島山國清と通じ義長を攻めて伊勢に奔らす後年延曆寺の僧日吉神輿を奉じて京に入り南禪寺の僧妙葩を訴ふるに際し氏頼後光嚴院の勅を奉じて宮城の東門を守り力鬪して之を卻け數十人を殺傷す後光嚴院其勇武を嘉賞す氏頼建德元年を以て卒す年四十五

うすぐも 薄雲（ウスグモ） 芳原の名妓信濃屋藤左衛門の妓樓にありて才色共に秀づ曾て某侯三千金を抛ちて之を購ひ去り挑めども從はず一室に幽せられて呵責數々加へらる薄雲遂に從はずして殺さる蓋し王侯の前にも屈せざるの義氣あるものなり

うたえもん 中村歌右衛門（ナカムラウタエモン） 初代 大阪の俳優家名加賀屋俳名一洗幼名柴之介金澤藩の醫大關俊安の子なり中村源左衛門の弟子となり實悪の名人とよばる寛政三年十月歿す年七十八

うたえもん 中村歌右衛門（ナカムラウタエモン） 二代 京都の俳優初名水木東藏天明三年二代目を嗣ぎ寛政六年中村東藏と改む十年三月歿す年四十七

うたえもん 中村歌右衛門（ナカムラウタエモン） 三代 二代の實子大阪の俳優なり家名加賀屋俳名芝翫後梅玉百戲園と號す俗稱市兵衛幼名福之助寛政元年初めて中の座へ出勤し六年歌右衛門の名を嗣ぐ伎藝秀逸非凡の評ありて其榮華當時の富豪と匹敵せり文化五年三月江戸に下り中村座に出づ天保七年門人芝翫に四代目を嗣がしめ子鶴助を芝翫となし自ら玉助と改む同九年七月歿す年六十一

うたえもん 中村歌右衛門（ナカムラウタエモン） 四代 家名成駒屋別號魁香舍俳名翫雀幼名吉太郎江戸下谷孔雀茶屋某の子にして藤間勘十郎の養子となり龜三郎と改む初め中村藤太郎と稱して梅玉の門に入り大阪に赴きて修業す名人の譽あり嘉永五年二月歿す年五十七

うたと 中島歌子（ナカジマウタコ） 歌人なり江戸の人水戸藩御用宿中島又左衛門の女幼名とせ子初め水戸藩主林忠右衛門に嫁ぐ忠右武田耕雲齋等の事に與みして戰死す歌子爲めに捕へられて獄にある事數月赦されて後加藤千浪に學び和歌書法に通ず明治初年より專ら子女教育の任に當り遂に女子大學の講師に聘せられ三十六年一月に至りて歿す年六十三朝廷特に從七位を贈る

うたじゅーろー 中村歌十郎（ナカムラウタジフラウ） 家名淡路屋俳名芝童大阪道頓堀芝居茶屋淡路の悴本名淺尾榮三郎三代目歌右衛門の門人となる嘉永元年四月歿す年四十四

うたた 神谷轉（カミヤウタ、） 出石藩仙石家の臣なり仙石久道族仙石左京を寵愛し其專横を看過す久道子久利幼にして封を嗣ぐに及び左京奸策を恣にして陰謀を企つ乃ち我子小太郎を立て久利に代らしめむとせり〻に於て久道を毒殺し忠臣河野瀬兵衛を殺し將に久利を圖らむとす轉亡命して江戸に來り澁川伴五郎の家に匿れ後虛無僧となり友鷺と號して晦ます左京老中酒井雅樂頭と善し故を以て轉藩中の變を訴ふるによりなし會々寺社奉行脇阪安董の公平なるを知り其邸に至りて訴へ遂に左京と對決して好狀をあばく轉後召されて仙石家の家老となるといふ

うたてんのー 宇多天皇（ウダテンナウ） 第六十代の天皇御名は定省光孝帝の第三子御母は皇后班子なり在位十年位を皇太子に讓りて朱雀院に入り亭子院と號す後薙髮して金剛覺といひ世に寛平法皇と崇められる菅原道眞を儒家よりおこして顯官となし藤氏の專政を抑制せむと企てしが果さず又學を好み詩文を樂み繪畫を愛す曾て當世の名家をして殷周以來の名賢の像を紫宸殿の障子に圖せしめ

之を聖賢の障子といふ承平元年崩ず壽六十五

うたのすけ 狩野雅樂助（カノウタノスケ） 正信の子元信の弟名を之信といふ又栩隱と號せり山水花鳥に巧みにして元信の風ありと稱せらるたまたま三好松永の亂に當りて京に安ずる能はず遁れて三井寺に入り扇面を畫きて竊に鬻ぐといふ

うたまろ 喜多川歌麿（キタガハウタマロ） 初代 有名の浮世繪師なり本姓鳥山豐章俗稱勇助後勇記一愈主と號し紫屋と號す少壯にして遊蕩狹斜の巷に入りしも中頃改悛して業を父石燕に受け筆力勁健の稱あり曾て美人畫を描き艷麗前後に比なく名聲天下に聞ゆ又春畫を好くし多くこれを描けり又俳優肖像畫の如きは豐國の糟粕を嘗むるの弊を避けつとめて新案を出せりといふ文化元年繪本太閤記の圖を錦畫となし遊女など畫き加へて發行せしより罪を得て獄に下され二年五月赦されて病歿す年五十三吉原年中行事の畫は世人の尤も賞賛するところなりとす

うたまろ 喜多川歌麿（キタガハウタマロ） 二代 戯作者戀川春町の門人幸町といふ通稱を鐵五郎といふ二世春町と稱して戯作を爲しゝが浮世繪を畫くを以て初代歌麿の婿に入夫し遂に二代目となるといふ

うたまろ 壬生宇多麻呂（ミブノウダマロ） 天平九年遣新羅使大判官となり從六位上に叙せらる十八年正六位上にのぼり尋で外從五位下右京亮となる勝寶六年玄蕃頭となる宇多麻呂和歌に巧みにして其詠萬葉集にあり

うたろく 中村歌六（ナカムラウタロク） 梅玉の門人初名中村もしほ家名を播磨屋といひ俳名を梅枝といふ大里冠の引立にて大役をつとめ文政年中江戸へ來りて女形をつとむ幾許ならず再び大阪に歸り益々人氣を得て嘉永中又も江戸に來れり

うたんじ 市川右團次（イチカハウダンジ） 大阪の俳優なり小團次の子にして初名を福太郎俳名を家升とよぶ

うちとないしんの一 有智子内親王（ウチコナイシンノウ） 嵯峨天皇の皇女史典に精しく詩文を善くす弘仁五年加茂齋院となり十四年二月花宴に於て天皇遊宴の時詩を賦して奉る天長十年二品に叙せらる承和十四年十月薨ず年四十一

うちつね 藤原内經（フヂハラノウチツネ） 内實の子文保二年關白となり正中二年薨ず年三十五芬陀梨華院と號す

うちと一 本居内遠（モトヰノウチトホ） 國學者なり尾張の人初名健次郎又は彌四郎又は又次郎秋津と稱す木綿垣、楪園は其號なり本姓濱田氏後入て本居太平の養子となる紀伊侯に仕へて重んぜらる曲亭馬琴とは交友なりしといふ安政二年十月歿す年六十四著書和歌の浦鶴、古學大意、古事記年立、小野小町考、妹脊山考、冠制革制考、古調考、紀伊國神社考等あり

うちまさ 一條内政（イチデウウチマサ） 櫨中納言兼定の子小字吉房子といふ天正元年兼定の臣長曾我部元親兼定を逐ひて内政を立つ二年十二月從五位上左近衛少將に任じ五年正月中將となり從五位上にいたる八年五月内政元親を伐ちて克たず遂に自殺す

うちまろ 藤原内麻呂（フヂハラノウチマロ） 眞楯の子大同中從二位右大臣となり弘仁三年十月卒す年五十七内麻呂性温順寛大優に雅量あり衆皆心服して其德を仰ぐ世に長

岡大臣といへり朝廷特に從一位左大臣を贈る

うつしとめ 鬱色謎（ウツシコメ） 孝元帝の皇后鬱色雄命の妹孝元帝の七年立て皇后となる大彦命、少名日子建猪心命、開化天皇、遶迹々姫命を生む

うつしひかねさくのみこと 宇豆斯日金析命（ウツシヒカナサクノミコト） 綿津見神の子にして阿曇連等の祖なり

うぬぼれさんじん 自惚山人（ウヌボレサンジン） 小說家なり池田屋久三郎といひて烟艸屋を業とせしが後名を淺野右衛門と改め北水と號し天文曆數を教ゆと稱して諸國を遊歷す

うねのじょー 石河嘴之丞（イシカハウネノジョウ） 御天守下番露村啓次郎の次男にして石河麻次郎の養子となる天保二年小普請を命ぜられ翌年表火之番となり翌年又支配勘定出役となり十二年に至て職を免ぜられ翌年再び小普請入となる然れども内心顯職に居らむ事を謀り奉行鳥井甲斐守が水野越前守及び若年寄堀田攝津守等を除かむとするの議に與みし機を俟つ甲斐事の露顯を憂へ嘴之丞を甲府に逐ふ嘴之丞大に怒り上書して甲斐の秘事を訴ふこゝに於て甲斐禁錮となり嘴之丞も扶持米召放たる

うねめ 采女（ウネメ） 平城帝の朝采女某容貌艷麗天皇之を召す事一日にして廢す采女某恨みて猿澤池に投じて死す天皇其情を悼み池邊に行幸して歌を詠ず柿本人麿又詠じて采女の靈を慰むと

うねめ 伊藤采女（イトウウネメ） 伊達家の臣なり國老伊達宗勝の專横を憤りて之を除かむと謀り伊藤廣孝氏家傳治と共に事を企てむとして能はず却て擒にせられ幽せらる

うひじにのかみ 泥土煮神（ウヒヂニノカミ） 豐國主神に次ぎて生る〻の神この時水陸未だ判れず泥土地を覆ひ居たれば名くと

うひょーえのつぼね 右兵衛局（ウヒヤウエノツボネ） 從三位藤原相尙の女藤三位局と稱す靈元帝に仕へて皇子皇女を生む薙髮して壽光院と號したり

うまかい 伊豫馬養（イヨノウマカヒ） 持統天皇の時の儒者皇太子の學士となり從五位下に至る曾て大寶令を撰するの功を以て功田六町封百戶を賜はる馬養又丹波與謝の郡司たりし時文を作りて平口の浦島子が事を記すといふ

うまかい 藤原宇合（フヂハラノウマカヒ） 不比等の子式家の祖なり靈龜中遣唐大使となり歸て後正四位上式部卿となり神龜元年を以て蝦夷を伐つ功に據て從三位勳二等を授けられ累遷して正三位參議太宰帥を兼ぬ天平九年薨ず年四十四

うまかい 粟田馬養（アハタノウマカヒ） 能く華言に通ず天平二年太政官の命を奉じ諸蕃異域の語を譯せしむるの目的を以て大學生に華言を授く

うまき 加藤美樹（カトウウマキ） 國學者なり姓は藤原靜の舍といふ通稱大助又五郎左衛門といふ幕府に仕へて大番の士となり二百俵をうく加茂眞淵を師として學び業成る曾て浪花に駐る時京攝の士爭ふて其教をうくといふ安永六年六月歿す年五十三著書、源氏物語雨夜だみ辭、土佐日記註、古事記解、伊勢物語註解、假名問答、木曾路の記、靜の舍集等あり

うまこ 蘇我馬子（ソガノウマコ） 大臣稻目の子島大臣といふ敏達帝の元年大臣となる十三年鹿深臣佐伯連百濟より彌勒の石像

及び佛一體を得て還る馬子請ひて之を求め高麗懸便を以て師となし佛堂を作りて崇拜す十四年二月塔を大野丘北に建て大齋會を設け舍利を塔柱頭に藏む時に國中惡疫流行す物部守屋奏上して佛を滅せむと請ふ聽さる乃ち佛殿塔宇を燒き佛像を毀ち馬子が崇信する三尼を捕へて禁錮す馬子大に悲しみ哀願して三尼の禁を釋き以て我疾病平癒を佛に禱らしむ帝崩ず用明帝立つ馬子猶大臣たり二年四月帝病篤し詔して佛を崇信せむとす守屋及び中臣勝海固く諫めて可かず馬子聖德太子と謀て豐國法師を引て宮に入らしむ守屋大に怒り遂に兵を聚めて守る事尤も殿重なり帝崩ずるに及び守屋穴穗部皇子を立てゝ天位に即かしめむと欲す馬子皇后と謀て穴穗部を殺し聖德太子と共に守屋と戰て之を滅す馬子佛陀の力となし乃ち法興寺を建つ崇峻帝立つに至りて帝馬子の驕慢暴戾を憤りしばしば忿言を放つたまたま山猪を獻ずる者あり帝之を指しく曰くいつの日か朕が疾むところの人を斬る事此猪を斬るが如くせむと依て密に兵仗を宮中に設く馬子聞知して大に懼れ東漢駒をして遂に帝を弑せしむ

うまこ

漢駒これに依て馬子の寵を得其女河上娘と通ず馬子憤怒し駒を捕へて虐殺せり推古帝の朝馬子病篤し男女一千人爲めに僧尼となりて快癒を佛に禱る卅四年薨ず馬子曾て聖德太子と共に天皇紀國紀臣連伴造の本紀を撰す

うましあしかびひこじのかみ　可美アシカビヒコヂノカミ　天地開闢の初渾沌たる間に蘆牙彦舅神　天地開闢の初渾沌たる間に蘆芽の萌生するが如く生れましましたる神なり

うましね　味稻ウマシネ　大和吉野の人和歌を能くす其詠は萬葉集にあり

うましまてのみとと　可美眞手命ウマシマデノミコト　可美眞手命饒速日命の子にして母は土豪長髓彦の妹三炊屋姫なり神武天皇の東征して長髓彦と孔舍衛阪に戰ふや皇師利あらず轉じて菟田に赴き魁帥兄猾が斬る饒速日命長髓彦を殺して降り遂に物部の祖となる可美眞手命十種の天瑞寶を天皇に獻じ神劍を殿內に奉じて天皇のために鎭祭のことを司れりこゝに於て天皇御殿の上に御するや可美眞手命內物部を率ゐて儀衛を嚴にす二年二月詔して命の忠勤を賞し奏するに股肱の任を以てせり

うまなが　田目馬長タグナノウマナガ　和歌をよくす其詠萬葉集にあり

うまのないし　馬內侍ウマノナイシ　右馬權頭源時明の女一條院皇后の女房にして中古三十六歌仙の一人に撰まる藤原道隆と契りて贈答の歌あり

うまびと　田邊肥人タナベノウマヒト　天平寶龜年間の人其詠歌は萬葉集に見えたり

うんき　雲居ウンキヨ　攝州勝尾寺の奇僧生國不明なり性高潔恬淡常に墻重之と交り親む大阪の役重之の甲冑を預かり其戰死するを聞きて軍に赴き東軍の士稻田九郎兵衛に逢ひ托するに彼の甲冑を以てす後仙臺侯に召されて松島瑞巖寺に居る幾許ならずして去る曾て濃州青野原を過ぎ盜賊に逢ひて物を與へ感化して僧となすと德の高き率れ斯くの如し

うんけい　雲慶ウンケイ　有名なる佛師後鳥羽より順德頃の人名は譽備中法印と稱す東寺大佛師に補せられて蓮華王院二十八部衆及左右千體中二百軀を作る又

建仁二年東大寺南大門仁王東の方を作り建久八年東大寺四天辰巳の方の多門天を作る其他製作物今世にのこるもの多し蓋し鎌倉佛師の祖なるべし

うんと　雲藤ウンコ　京師の俳人千百翁と稱す剃髮して助給といふ又五條橋東千觀松片陰に寓して迎光庵と稱す享保十三年五月歿す年六十四

うめあき　槍圓梅明ヒノキエンウメアキ　狂歌師なり俗稱田中重兵衛臥龍圓梅麿に學んで狂歌を巧みにす天保調と唱へて一種の幽玄體を創めたり安政六年十一月歿す年六十九

うめまろ　春廼舍梅麻呂ハルノヤウメマロ　小說家なり俗稱小山平吉のち平七春鳥、梅舍、梅圓、墨春亭と號す天保時代の人

うめまろ　臥龍圓梅麿ガリウエンウメマロ　狂歌師なり姓は渡邊陶器商にして鳥屋藤右衛門といふ狂歌に巧みにして花圓側の棟梁なり天保十一年十二月歿す年七十八

うめわかまる　梅若丸ウメワカマル　北白河吉田少將の子五歲にして父を喪ひ七歲にして叡山に上る穎才を以て人に嫉まれ憂ひて山を脫し路大津を過ぎて人買盜賊信夫藤太といへる者の爲めに欺かれて東下し武藏隅田川に來りて長途の難に病を發して死す倘志圓之を憐み屍を木母寺に葬る

うんりゅー　雲龍ウンリウ　久吉　筑後の人幼名喜太郎江戸の力士となりて安政五年橫綱を張る後年寄となりて追手風と呼べり

えー　葛飾榮カツシカエイ　北齋の第三女畫に巧みなり堤等琳の門人南溟等明の妻となる等明死して再嫁せず父と同居し父の ポツキと呼ぶを取て應爲と號す洒落にして義俠大丈夫に勝る晚年佛門に入りて女仙たらむ事を期し終に往く處を知らず

えーえん　永緣エイエン　興福寺の別當なり花林院權僧正と號す九歲にして南都に赴き慈善法師の敎を受け後緣一乘院の賴眞法師に從ひ年四十に達せずして維摩講師の詔を受く而して七大寺を勾當して化導益々盛んなり常に車に乘りて宮に入るを許さる永緣和歌を善くし初音の僧正とよぶ蓋し其名はきくたびに珍らしければ時鳥いつも初音の心地こそすれとの詠によれるものなり天治二年四月寂す年七十八

えうかし　兄猾エウカシ　熊曾にして神武天皇の軍を拒ぎ宇陀による然れども敵する能はずして殺さる弟猾は出でゝ降れり

えお　阿部兄雄アベノエヲ　道守の子延曆末年從五位下に叙し少納言中衛少將を經て從四位下大膳大夫となる後正四位下畿內觀察使に移り職務中に卒す兄雄人となり剛直才文武を兼備せりといふ

えーが　琴通舍英賀キンツウシヤエイガ　初代　狂歌師なり通稱森庄藏家號を丸屋と呼びて古着を渡世となす庭訓舍綾人を師として學び琴通舍英賀と號す後松壽側の連頭たり天保十五年七月歿す年七十五

えがお　美圓垣笑顏ミンガキエガホ　小說家なり通稱美濃屋甚三郎愛亭と號す書肆を售りて涌泉堂とよぶ後狂歌を狂歌堂眞顏に學びて涌泉亭眞淸といひ弘化三年九月歿す年五十八

えーがく　狩野永岳カノエイガク　永俊の義子繼殿助といふ畫は永納をつぐといへども四條風の筆意を雜へて家格を變ず天保

年中の人といふ

えーかん 永觀（エイクワン） 文章博士源國經の子十一歳禪林寺の深觀僧都に從て受業し華嚴法相を聽く應德二年勅を奉して維摩會の講師となり承應三年東大寺に住す天承二年の秋病を得て寂す年八十

えーかん 虎屋永閑（トラヤエイカン） 淨瑠璃家なり一に大蔭摩と稱す虎屋源太夫が門人なり貞享元祿の間永閑節をはじむ

えーき 老鼠堂永機（ラウソダウエイキ） 俳人なり本名穗積築之父は長州侯の侍醫にして永機を江戸に生む永機長じて俳に志し晋子八世を繼ぎて老鼠堂と號す永機卓才俊邁にして畫は晏川を師とし茶は宗蓮に學び書は其角に法る而して句體暢達天下其風を慕ひて門に集るもの常に千餘人明治三十七年一月逝く年八十二著はす所み〳〵な艸、新五元集、俳諧獨歩、俳諧自在、七多羅樹、明治枯尾花等あり

えきけん 貝原益軒（カヒバラエキケン） 儒者なり名は篤信字は子誠益軒又は損軒と號せり通稱久兵衛柔齋ともよべり父寛齋醫を業とす益軒從て醫術を知り後佛書を讀み儒を兄元端にうけ佛を棄つ明曆中京に出で〳〵松永尺五山崎闇齋木下順庵等に從ひ業大に進む初め陸王の學を喜びしも其非を知て洛閭に歸し力學多年博覽衆に秀づ性謙遜にして傲らず强記にして見聞するもの一も忘るゝなし而して其學風簡易を旨とし記するに必ず國學を以てす又和歌を好みて詩を嗜まずこれ和歌は簡易にして國俗に適へばなりと正德四年歿す年八十五著書、愼思錄、和漢名數、初學作法、養生訓、玉篇訓、武訓、文訓、君子訓、初學訓、家道訓、童子訓、日本釋名、大和本草、自娛集、三禮口訣、樂訓、樂譜、花譜、諸州廻、和字解、大疑錄、貝原家訓、大和俗訓、大和廻、和名本艸、木曾路の記、扶桑記勝等あり

えきさい 狩谷掖齋（カリヤエキサイ） 儒者なり兼ねて國學に通ず名は望之字は雲卿掖齋は其號なり少時律令學に志し六典唐律諸書を涉覽す後宗儒の經學を究め其非を看破して漢唐の學に歸せり幾許ならず閑居して常閑齋院といひ蟬翁とよび歷代古泉貨を愛既して六漢老人といふ曾て源順の和名鈔を校訂し本邦度量衡權考を著す掖齋好んで書をあつめ唐鈔宋槧元刻晋唐の碑刻法帖より我國典の珍本概れ藏せざるものあらざるなし天保六年七月沒す年六十一なり

えぐちのきみ 江口君（エグチノキミ） 攝州江口の遊女名は妙といふ和歌をよくす西行曾てこゝを過ぎりて雨に逢ひ宿をもとむ妙聽かず西行一首を詠じていふ世の中を厭ふまでこそ難からめ假の宿を惜む君かなと妙和していふ世を厭ふ人とし聞けば假のやどに心留むなと思ふばかりぞ西行大に感じ强ひて宿をもとめ終夜閑談して別れ去る

えけーほーし 惠慶法師（エケイホフシ） 寛和の頃の人和歌をよくす中古三十六歌仙中の一人なり

えーさい 榮西（エイサイ） 備中の人明菴と號す十四歳にして叡山に上り十八にして虛空藏求聞持の法を受く又伯耆大山に基好といふ者あるを訪ひて密乘を聞き仁安三年商船に乘じて宋に赴く歸て禪道を唱へ能忍を論じて說破一座を驚かす建久三年香椎宮の側に建久報恩寺を構へ始めて菩薩大戒の布敎を行ふ六年聖福寺を建て建仁二年眞言止觀の二院を大禪苑の中に設く建永元年東大寺の

幹事となり建保元年僧正に擢でらる三年相摸鎌谷に壽福寺を營み以て滅所となさむとす然れども去て京に赴き七月に至りて寂す平生著はすもの興禪護國論三卷、一代經論總釋、日本佛法中興願文、不二門論、三部經開題等各一卷あり蓋し禪宗の始祖といふべし

えきか 大分惠尺（オホキタエサカ） 壬申の亂天武帝に從ひて軍功あり帝即位の三年惠尺病篤し帝慰撫する事懇なり卒して後外小紫の位にすゝむ

えーざん 菊川英山（キクカハエイザン） 浮世畫師なり名は俊信俗稱萬五郎一に爲五郎重九齋と稱す初め父に就て學び後北齋歌麿の風に倣ひて研く文化年中團扇畫を描きて大に行はる豐國とは親交ありしといふ

えーし 藤原瑛子（フヂハラノエイシ） 太政大臣實家の女昭訓門院と號す正安三年正月法皇の宮に入り嘉元三年九月尼となり貞性覺とよぶ

えしき 兄磯城（エシキ） 神會にして弟磯城と共に山城の磯城に據る神武帝東征して之を誅す

えしきぶ 繪式部（エシキブ） 平繁兼の女なり畫をよくし又和歌をよくす

えーしょー 菊川英章（キクカハエイシヤウ） 浮世畫師なり本姓詳ならず淺野英京と同門なるを以て時人殊に光一英章といふ春畫など に巧みなりしとか又狂言をも作れりと文政年間の人

えーしょーいん 英勝院（エイシヨウヰン） 德川家康の側室なり太田康資の女十三歳にして德川氏に侍女となり後萬方と改め家康の寵となる家康秀頼と和するの時木村重成大阪の使者となりて來り家康が瞽書の血判簿と稱して取らず家康曰く吾年老て血少きなりお萬請ふ再び我手を刺せとお萬家康の手を把り密に我指を刺して重成を詐く重成知らずして歸るといふ寛永十九年八月逝く

えーじんしんのー 榮仁親王（エイジンシンナウ） 崇光帝の子母は三位局なり後光嚴帝の位を遜るや帝其子緒仁を細川頼之に托す而して崇光帝も榮仁を頼之に託して曰く承久以來皇嗣武人の手に依て決せらるる旣宜しく之を斷ぜよと頼之辭して行はず旣にして緒仁立つこれを後圓融帝となす故を以て崇光帝後光嚴帝を怨み常に相よからず崇光帝崩ず其莊園皆禁闕に歸して榮仁爲めに所領なしこゝに於て又怏々として樂まず竟に大光明寺に入りて薙髮し通智と號す應永五年將軍義滿直仁親王の甍後其居をあげて榮仁に獻ず十年斯波義重が有栖川の山莊にうつる二十三年十一月薨ぜり年六十六蓋し有栖川宮の祖先なり

えーせん 池田英泉（イケダエイセン） 浮世繪師なり名は義信又は菱龍字は泥壁俗稱を善四郎といふ又里介溪齋と號し一壺庵、國春樓、北齋、無名翁、可候ともよべり初め狩野榮川の門人白珪に學び後菊川英山の門に入りて浮世繪を習ふ美人畫の妙を得て三世豐國と拮抗す又戲作に從事し並木五瓶に就く浮世繪譜、錦袋畫譜、容艶畫史、武勇魁圖會等の著あり

えーせん 狩野榮川（カノエイセン） 木挽町狩野四世の畫人周信の子名は古信江戸の人なり法眼に叙せらる享保十六年正月三十六にて卒す

えーせん 狩野榮川（カノエイセン） 木挽町狩野五世の畫人古信の男名は典信白玉齋と號

す法印に叙せられて榮川院と稱せり德川家治の寵を得て旗下に列す寛政二年八月歿す年六十一

えせんにおー 惠仙尼王（エセンニワウ） 後陽成帝の第四皇女なり慶長七年九月尼となり寛永元年還俗して東御所と稱す二十一年八月歿す年五十天祥院宮（ヒヤシヤウヰンノミヤ）といふ

えーたく 小林永濯（コバヤシエイタク） 畫家なり名は德宜通稱秀次郎鮮齋と號す父は魚商にして三浦屋吉三郎といへり年十三狩野永悳に學び業成りて大老井伊家に仕ふ櫻田變後仕を辭して諸國に流寓し後江戸に還りて日本橋に居し又向島小梅村に移る曾て伊太利公使のために畫き英人フエロノサの爲めに描く明治二十三年五月肺患を以て歿せり年四十八

えちご 福原越後（フクハラエチゴ） 長州藩の家老なり名は元淵文久元治中攘夷の朝旨一變して三條以下の七卿長門に奔る而して長藩を忌むの幕士議して異圖ありと告ぐこゝに於て朝議毛利家を罪ありとして之を斥く越後大に憤び兵を帥ゐて上京し主家の罪を赦されむ事及び攘夷の實行を朝に請ふ會津桑名諸藩其漫りに兵を引率するの罪を鳴らし朝臣又征長の已むを得ざるを說くこれより兵端忽ち發し越後來島又兵衛等と共に勇戰して京を驚かす會津桑名二藩薩州の應援により大敗して大舉して伐ち長兵衆寡敵せず して敗走す時は元治元年八月なり慶長元年十二月尾張侯討長の兵を督して罪を毛利侯に問ふ越後等素より免るゝに道なし乃ち自殺して首を致すといふ明治二十四年四月朝廷正四位を贈る

えちごのじょーじょー 部越後掾（ミヤコエチゴノジヨウ） 淨瑠璃家なり京都の人初め萬太夫と稱す

えちぜんのしょーじょー 豐竹越前掾（トヨタケエチゼンノジヨウ） 淨瑠璃家なり大阪の人遊麗軒と號す初名竹本采女後豐竹若太夫と改む竹本筑後掾に學ぶ元祿中豐竹座を興し操芝居を興行す享保三年上野掾を拜受し十六年越前少掾となる時に淨瑠璃座豐竹竹本二派に分れ豐竹東に位す延享二年座元を引きて退隱し明和元年九月病歿す年八十四

えっしないしんのー 悅子內親王（エツシナイシンノウ） 後嵯峨帝の第二女母は西園寺太政大臣公經の女なり弘安七年二月內親王となり尊で三宮に准じ延政門院とよぶ同八年八月出家遍照覺といふ元弘二年二月歿す年七十四

えーとく 狩野永德（カノエイトク） 畫家なり古永德といふ松榮の長男初名州信後重信通稱源四郎織田信長に仕へて近侍たり法眼より法印にすゝみ名聲大に揚る山水花鳥人物は殊に巧にして元信と頡頏するの勢あり曾て安土城中の畫の間一式を描き後太閤の聚樂殿に筆を取り桃山御殿百雙の屏風其半を描く天正十八年九月歿す年四十八

えーとく 狩野永悳（カノエイトク） 伊川院法印の子にして元信の宗家祐清の養子となる幼名熊五郎長じて晴雪齋とよぶ實名元信嘉永元年十月幕府醫師並仰せつけられ安政四年十二月法眼に叙す維新後朝廷の御用を來じ博覽會審査官を命ぜらるゝ事數度なり明治二十三年十月帝室技藝委員となり同十二月病を得二十四年一月歿す年七十八

えなお 加藤枝直（カトウエナホ） 江戸の歌人なり通稱又兵衛芳宣園といふ初名爲直枝直と改む少にして江戸に出で與力となり

て大岡越前守に隸屬す加藤眞淵の江戸に來るや交を結び其居をおのれの邸內に徙さしむ和歌を專攻して妙域に達し其名四方に聞ゆ東謠は乃ち其秀逸なるを輯めしものなり天明五年八月歿す年九十四其筆にするもの新撰梅曲、改正觀世流謠曲、享保御定書立案等あり

えーのー 狩野永納（カノエイナウ） 畫家なり山雪の子一陽齋といふ又梅岳、山靜居翁等の別號あり字は伯受縫殿助といふ永納は其名なり安信に就て奧旨を得狩野正風の一家を爲す又本朝畫史を著はして世に行はる元祿十年歿せり

えひとのみこと 兄彥命（エヒコノミコト） 孝行天皇の皇子母は八坂入媛なり

えびじゅーろー 市川鰕十郎（イチカハエビジフラウ） 初代大阪の俳優なり家名を播磨屋といふ俳名新升初名市藏と名乘り寛政元年大阪北の新地芝居に出づこれより賣り出し文化六年江戸に下りて評判よく十二年九月七代目三升と師弟の約を結び鰕十郎と改名す乃ち名殘狂言として妹背山ふか七を演し好評人を驚かしたるより江戸の狂歌師蜀山、眞顏、京山、京傳、三馬、馬琴皆賞賛の歌を贈る大阪に還りて後は梅玉、歌右衛門、大里冠等一座し敵役の實惡古今無類の出來なりしが文政十年七月に至りて歿せり年五十一

えびじゅーろー 市川鰕十郎（イチカハエビジフラウ） 二代大阪の俳優なり俳名新升幼名を助藏といふ文化十二年初めて角の座に出で夫より梅玉の引立てを受け何の狂言も評判よかりしが病に冒されて出勤を妨げられ文政十二年十一月にいたりて歿す年二十四

えびじゅーろー 市川鰕十郎（イチカハエビジフラウ） 三代大阪の俳優なり俳名新升中山紋十郎の弟子となり後初代の鰕十郎に就て學ぶ乃ち改名して瀧十郎といひ文政十三年梅玉の引立に依て初めて角の座に出づ天保五年同座にて鰕十郎と改名し目德璃寛等と一座す天保七年九月歿す年五十

えびじゅーろー 市川鰕十郎（イチカハエビジフラウ） 四代大阪の俳優なり家名小紅屋俳名眼玉幼名を松島巳之助といふ初め濱芝居の實惡松島清藏の門人後市川市十郎と稱して各座に修行し天保二年江戸河原崎座に下る弘化二年角の座に出で師白猿と一座し四代目鰕十郎となる同四年坂東壽太郎と改め嘉永二年市川眼玉と呼びしが又元の鰕十郎に返りて大星由良之介を勤め上手の名を取る安政五年十月歿す年五十

えーふ 元田永孚（モトダエイフ） 儒者なり熊本の人通稱を三左衛門といふ宮中の侍講となる明治二十四年一月歿す年七十四

えーふく 奧村永福（オクムラエイフク） 前田家の臣字を助右衛門といふ元龜元年織田氏越前金崎城を攻む前田氏これが先鋒たり永福乃從ひて苦戰し功多し天正十二年佐々成政大兵を率ゐて末森城を襲ふ永福勇戰奮鬪し大に之を敗る十五年秀吉の島津氏を征するや前田氏豐前岩石城を攻め永福又先登して城に入る又北條氏を小田原に伐つや永福前田氏の先鋒として八王寺城を陷る功を以て榮拔せられて朝散大夫伊豫守となり遂に豐臣姓を名乘る後德川氏に謁し陪臣を以て賞狀を得蓋し異例なりと寛永中病を以て靜居し尊で歿す年八十四

えまやがくすけ 繪馬屋額輔（エマヤガクスケ） 初代

狂歌師なり俗稱松下虎之輔後賀久輔といふ號を英一蝶高蕎谷に學び狂歌を朱樂菅江に修めて北斗側の棟梁たり嘉永七年正月歿す年七十四

えまろ 角兄麻呂（ツノエマロ） 筵老中六位を歴て從五位下にすゝむ神龜中丹後守となり卿を得て流さる其和歌載せて萬葉集にあり

えみし 賀茂蝦夷（カモノエミシ） 壬申の亂に天武帝に從ひ將軍大伴吹負に屬して戰ふ功を以て勳大壹を授けらる持統帝の九年卒す直廣參を追贈せらる

えみし 蘇我蝦夷（ソガノエミシ） 馬子の子推古帝の三十四年大臣となる豐浦大臣といふ帝崩ずるや蝦夷弟倉麻呂と共に群臣の議一致せざるを知り之を統一して田村皇子を立てむと欲す而して叔父摩理勢の山背王を立てむとするを知て直に兵を遣りて攻殺し遂に群臣と共に田村皇子を立つ舒明帝これなり皇極帝の朝に及び蝦夷驕慢甚しく上宮乳部の民を聚めて己れが墳墓を營ましむ十月蝦夷病む子入鹿大臣に擬して入朝す其暴戾父に劣らず天智帝中臣鎌足と心を協せて遂に入鹿を朝に殛し蝦夷を其家に誅す

えもり 植木枝盛（ウエキエモリ） 新聞記者にして政治家なり土佐の人父は山内家に仕ふ枝盛十四歳の時藩校に入りて俊才の名あり東京に來りて後箱崎邸内の學校に入りしも去て板垣退助に據り常に其意見を艸す明治九年猿人政府を論ずと題するの一篇を報知新聞に出して罪を得獄につながる西南の役起るに至りて國に歸り海南新誌を出す後四方に遊説して國會開設を論じ又自由黨創立の謀議に與る二十三年高知縣第三區より選出せられて衆議院議員となり二十五年一月病を得て歿す年三十七

えりょー 慧苑（エリヤウ） 寂山の僧徒なり文德帝の二皇子儲貳を爭ふに當り亮惟仁のために大威德護摩法を修して驗德あり惟仁遂に立つ清和帝是なり

えんう 宵山延于（アヒヤマエンウ） 水戸藩の儒臣字は子世通稱甚介雲龍又は拙齋と號す業を立原萬に受け柳子厚の文を學びて文才大に進む年二十江戸に來り紀平洲山本北山と交る時に水藩の學士高橋坦宜藤田幽谷川口綠野皆名聲を天下に藉かし互に相拮抗す然れども文辭の技にいたりては延于の右に出づる者なく各々其妙に服せり文公の大日本史を撰するや延于神祇志六卷を撰し武公の遺志を繼ぐの日延于又禮義典服二志を撰ぶ哀公封を襲ぐの日更に建言して史局をひらき水戸藩史を修し稿成りて東藩文獻志と曰ふ刪潤未だ完からざるに公薨じ史局廢せらる烈公立つ公弘道館を起すや延于小姓頭に任じ總裁を兼れ孜々として惰らず聲譽大に揚る天保十四年九月歿す年六十八

えんえほーしんのー 圓惠法親王（エンエホフシンナウ） 後白河帝の皇子なり天王寺別當法印權大僧都となる

えんとー 宵山延光（アヒヤマエンクワウ） 水戸藩の儒官なり字は伯卿通稱量太郎佩弦齋、晩翠、春夢居士等の號あり延于の長子父祖の志をうけて勤學多年天性强記の故を以て見聞一たび過ぐれば終身これを忘れずといへり嘗て繼述傳を著はし又赤穗四十七士傳を作る年十八水戸侯に召されて彰考館編修に補し後進んで總裁となる弘道館立つの日烈公のために擢でられて教授となり百石を食む父歿後教

頭となり會澤恒藏藤田東湖と相並んで藩の教化を事とす又側用人より馬廻頭に進む文久中藩の暴徒を平げ慶應四年弘道館の騷黨と戰ひ遂に之を鎮定す明治二年朝廷に徵されて大學中博士となり從六位に叙す同三年九月六十四を以て歿せり著はすところ國史紀事本末七十三卷、論贊、南狩野史、佩弦齋外集、四十七士傳、雪夜清話、野史纂略、征韓雜あり志等

えんぎぶろー 實川延三郎（ジツカハエンザブラウ） 大阪の俳優實川家二代目の人にして額十郎の養子なり家名井筒屋俳名延若額十郎に就きて研き淺尾延三郎といひ京の宮地芝居に出づ天保二年大阪中の座に出で後師の家をつぐ十一年角の座に出で翌年中の座に喝采湧くが如し不幸眼病にかゝりて盲目に及ぶ然れども平癒して再び舞臺にあらはれ日蓮上人の役にて大入大當を取る元治年中病歿せり

えんし 柳亭燕枝（リウテイエンシ） 落語家なり江戸の人通稱長島傳次郎初代柳枝の門に入りて學び其名を嗣ぐ文久二年燕枝と改め談州樓と號す明治三十三年二月歿す年六十三

えんじゅさい 清元延壽齋（キヨモトエンジユサイ） 清元淨瑠理の開祖なり江戸横山町の醬油及茶商岡村屋藤兵衛の子幼名吉五郎といふ寛政六年富本清水延壽齋に學び富元齋宮太夫とよべり文化中雙後路清海太夫と改め尋で師の姓を襲ぐ文化十三年幕命に依て清元と改め延壽太夫といひ一派をひらく後薙髮して二世延壽齋といふ文政八年五月人のために殺されて死す年四十九

えんじゅだゆー 清元延壽太夫（キヨモトエンジユダイフ） 延壽齋の子已三次郎といふ初名榮壽太夫文政十年二世を嗣ぐ弘化二年清元太兵衛と改め安政二年二月歿す年五十四

えんじょほーしんのー 圓助法親王（エンジヨホフシンナウ） 後嵯峨帝の第七皇子剃髮して圓滿院に住す二品に叙し園城寺長吏となる弘安五年八月入滅す年四十七

えんしん 伊東燕晋（イトウエンシン） 軍談師にして伊東派の開祖なり嗣莚と號す通稱仙右衛門天保十年十二月歿す

えんすい 猿雖（エンスヰ） 俳人なり伊賀の人芭蕉の門人にして西龍庵と號す通稱内神屋惣七郎寶永元年十一月卒す

えんちょー 圓澄（エンチヨウ） 延曆寺の座主なり武藏の人年少にして道忠菩薩に事へ鑒眞伴師の高弟となる二十七歳傳教大師に就て剃髮し具足戒を受く後天台座主となり承和四年十月寂す年六十

えんちょー 三遊亭圓朝（サンユウテイエンチヤウ） 落語家なり通稱出淵次郎吉二世圓生に學びて橘家圓太郎とよぶ安政四年眞打株となり專ら芝居噺を演ぜしが後人情噺を初め盛名一時に發す明治三十三年八月歿す年六十二自作の人情噺に鹽原多助、牡丹燈籠、累が淵、安中草三、業平文治、皿山奇談、美人の生埋、江島屋騷動等あり

えんたつ 綠達（エンタツ） 僧なり和歌をよくす其詠のせて萬葉集にあり

えんのしょーかく 役小角（エンノセウカク） 呪術者なり大和葛城上郡茅原村の人夙に佛に志し家を捨てゝ葛城山に入る苦行十餘年鬼神を驅役し汲水採薪意の欲するところ命を用ゐざるものあれば呪を唱へて之を傳す韓國廣足從ひて學び其術を害ありとなし文武帝に奏す帝詔して小角を囚へしめしに小角空を驅りて逃れ吏も終に及ばず乃ち其母を捕ふ小角憂

ひて自ら出で、刑に就き伊豆島に流さる後赦されてかへり母と共に唐に往くといふ

えんば 立川焉馬（タチカハエンメ） 小説家なり烏亭と號す烏亭焉馬の初代なり又淡州樓又は栗山人柿發齋と號す通稱和泉屋和助江戸本所の大工棟梁なり本名中村英祝狂名を野見てうなごん墨金といへり狂歌をよくし院本をもつくれり文政五年六月歿す年七十一芝居年代記十二卷を著はす

えんば 烏亭焉馬（ウテイエンメ） 二代 小説家なり初め幕府の與力にして山崎賞次郎といふ七國樓と號して狂歌に遊び松壽樓永年と稱せり後六樹園に學びて蓬萊山人とよび文政十一年二代目焉馬を嗣ぐ而して弘化三年に至り近松門左衛門の名を襲して中村座に淨瑠理を出せし事ありといふ性角力を好み吉田追風に就て行司となると文久二年七月歿す年七十一

えんゆーてんのー 圓融天皇（エンユウテンナウ） 御名守平村上帝の第五子なり帝深く佛に歸依し位を遜るの後髮を削て金剛法と號す在位十五年正暦二年崩ず齋三十二

えんりょー 伊藤蕭淺（イトウエンリヤウ） 講談師なり本姓漆畑新介初名を淺宇といふ安政二年七月歿す年五十五

おあねのきみ 小姉君（ヲアネノキミ） 欽明帝の妃なり蘇我稻目の女崇峻帝及び穴穂部間人皇后を生む

おあん 於安（オアン） 近江彦根の人石田三成の臣山田去歴の女なりと傳ふ世にあるお安物語と云ふは三成の大垣城に據れる時田中吉政の之を攻むるの狀を童蒙に話する體を以て記述せるものなりといふ

おい 坂上老（サカノウヘノオイ） 壬申の亂大伴吹負に從ひ功を以て直廣壹を賜はる文武帝の三年卒す

おいかぜ 吉田追風（ヨシダオヒカゼ） 相撲行司なり名は家次通稱善左衛門越前福井の士にして志賀正林の古式を傳ふるを以て遂に後鳥羽帝の相撲節會に召され從五位を授けらる天福二年四月歿す子孫後肥後細川家に仕ふ

おいまろ 境部老麿（サカヒベノオイマロ） 神八井耳命の後なり和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ

おーいちひめのかみ 大市比賣神（オホイチヒメノカミ） 大山祇神の女須佐之男神の妻なり

おーいなしろわけのみこと 大稻背別命（オホイナシロワケノミコト） 景行天皇の皇子なり母詳ならず

おーいらつこのおーじ 大郎皇子（オホイラツコノワウジ） 繼體天皇の皇子なり母は皇妃稚子媛といふ

おーいりきのみこと 大入杵命（オホイリキノミコト） 崇神天皇の皇子なり母は尾張大海媛といふ

おーいわ 紀大磐（キノオホイハ） 小弓の子なり父の訃を聞きて新羅に赴き小鹿火の兵馬船艦を奪ふ小鹿火恨みて蘇我韓子宿禰に譖す小弓韓子を殺し顯宗帝の三年に於て任那に據り高麗に通じて四三韓に王たらむとす百濟王怒て兵を出し遂に之を伐つ大磐敗れて其終るところを知らず

おーうすのおーじ 大碓皇子（オホウスノワウジ） 景行天皇の皇子日本武尊と孖生なり母は稻日大郎姫皇后といふ皇子書て帝の詔を

奉じて美濃に往き國造神骨の女の美を撿す而して遂に其次女に通ぜり後封を同國に賜はりて居るといふ

おーえのとーじょ 大江皇女（オホエノクワウジヨ） 天智帝の女にして天武帝の妃となり長親王弓削皇子を生む文武帝の三年十二月薨ず

おーがかどわけのみこと 大我門別命（オホガカドワケノミコト） 景行天皇の皇子なり

おかじ 紀男梶（キノヲカジ） 天平十五年外從五位下に叙し彈正弼に任ず十七年從五位下に進み十八年太宰少貳となり勝寶二年山背守となり寶字四年和泉守に轉ず和歌に巧みにして其詠萬葉集中に見ゆ

おかぜ 清原雄風（キヨハラノヲカゼ） 歌人なり明後の人名は藏宇は伯高崑岡と號す通稱忠次郎常に座して膝を搖頭するを以て頗々先生とよばる初め醫を學び傍ら歌文を研究す岡侯選んで學館の司業となす後諸國に游び奇行太だ多し寛政季年江戸に來りて小澤玄達と稱し醫を業とす又加藤千陰村田春海と交り歌を以て贈答するに二家共に其秀英に驚かざるなし

こゝに於て諸侯召して客となし藩主岡侯再びあげて邸門に出入せしむ文化七年八月歿せり年六十四著はすところ怜野集、古人贈答歌抄あり門人正木千幹其和歌を集刻し號して雄風集といふ

おかね 近江於金（アフミノオカネ） 近江國海津の遊女なり大力無雙を以て當時に現はる曾て馬逸して狂奔す於金其手綱を踏へ容易に之を止むるを得たりといふ

おかまろ 海大養岡麻呂（ウミノオホカヒノオカマロ） 和歌をよくするを以て其詠萬葉集になさめらる

おきあき 陶興明（スエノオキアキ） 晴賢の父其先は百濟王餘璋より出づ大内氏と同族なり大内義隆に仕へて尾張守と稱し入道して道麒と號す天文元年十一月龍造寺氏を九州に伐ち二年少貳資元を立花城に攻む後龍造寺家兼のために破られて園部城に入る義隆自ら兵を出して援ふ事平ぎて少貳の邑を與へらる

おきかぜ 藤原興風（フヂハラノオキカゼ） 道成の子院藤太といふ延喜十一年相摸掾に任ぜられ從五位下に叙せらる其詠歌古今集中にあり

おきかつ 寄木興勝（アヂキオキカツ） 福岡藩の儒學者字は定遠又は季方通稱次右衛門五龍山人と號す長崎にありて儒學を修め儒學師となる文化九年六月病没す著書に南海紀聞、蠻人白狀解等あり

おーきた 境部大分（サカヒベノオホキダ） 大彦命の後其先は允恭天皇の時勅を奉じて國境の標を立つ依て姓を坂合部連と賜ふ文武の朝遣唐使に任じ高橋風間に從ひて如く養老二年多治比縣守と共に國に歸る

おきなまろ 黒澤翁滿（クロサハノオキナマロ） 伊勢桑名の人國學者なり名は重禮葛居と號す武州忍藩に仕へて大阪留守居役となる本居宣長に師事して學識あり萬葉集、古今集大全、難波職人盡歌合、異人恐怖傳、言靈のしるべ、葛居集、貌姑射祕言等をあらはせり

おーきびのもろすゝみのみこと 大吉備諸進命（オホキビノモロスヽミノミコト） 孝安天皇の皇子母は押媛皇后なり

おきまさ 荒木田興正（アラキダオキマサ） 字は董卿鼎湖又は南陵と號す通稱敷馬伊勢山田の祠官にして從四位下に叙せらる

おーきまちてんのー 正親町天皇（オホギマチテンナウ） 後奈良天皇の御子諱は方仁母は藤原榮

子なり年四十二にして即位す三年四月其禮をあげ毛利元就其贄を献納すと天皇使を織田信長に遣はし天下平定の詔を賜ふ天正十四年十一月位を皇太子に讓り文祿二年崩す壽七十五

おきみち 青山興道 五世の祖延久は佐竹氏に屬して水戸の城主たりしが曾祖延孚に至り退隱して磯原に居る祖延友父道親共に仕へず興道年少にして學を好み教授して自ら給す後水府侯に召され史館に入る興道字は子誠號は四鳩又は一谿通稱を清内とよぶ寶曆中病んで歿す年五十五

おきめ 置目 近江國狹々城山倭帝宮根の妹なり顯宗帝の父磐坂市邊押磐皇子大泊瀬皇子のために殺され其屍の所在不明なり置目之を知りて告げ且つ同瘞せる佐伯部賣輪と識別して全く葬儀を完うする事を得たり

おーきよ 岡山應擊 岡山派の商人の祖なり初名仙嶽後應擊通稱主水字は仲選仲均僊齋又は鳴水漁夫と號す丹波の人年少京に出で石田幽竹に學びて研成多年遂に一家の風をひらき寫生的の筆致の妙前後に比なし人以て探幽以來の大家となす世に應擊の畫風を唱へて岡山風又は四條風上方風といへり寛政七年七月歿す年六十三

おーくさかのおーじ 大草香皇子 仁德天皇の皇子なり妹幡梭容色あり安康帝召て皇太子大泊瀬皇子の妃となさむと欲し根使主を遣して旨を傳ふ大草香皇子喜びて押木珠縵を献じ以て證となす根使主途中に之を奪ひ帝に佯りて曰ふ大草香命を奉ぜず其言極めて無禮なりと帝大に怒り大草香を殺して其妃中蒂姫を奪ひ幡梭皇女を取て大泊瀬の妃となすこゝを以て大草香の子眉輪王帝を弑して父の仇を報ず

おーぐち 漢山口直大口 後漢靈帝の後にして佛工なり孝德帝の白雉元年佛一千體をつくる

おーくにぬしのかみ 大國主神 須佐之男尊六世の孫父は天冬貴努神母は葦國若姫なり曾て稻羽の八上比賣を娶れる故を以て諸兄に嫉まれ數々害を蒙む尊謀するに難事を以てして其心を試む尊の女須勢理媛助けて禍なき事を得せしめたり尊乃ち媛を賜ひて妃となし出雲に赴きて酋長たらしむ大國主乃ち媛を正妻として八上姫、神沼河比賣、島耳神、三穗津姫神を庶妻とす又此神別名多し曰く大己貴神曰く葦原醜男曰く八千戈神曰く大國主神曰く顯國玉神と後武甕槌神の來るにあひ國土を奉げて天神に歸す

おーくにみたまのかみ 大國御魂神 大年神の子母は神活須毘神の女伊怒姫なり

おくみち 安倍奥道 寶字六年從五位下若狹守に任じ從四位下内藏頭にのぼる和歌に巧にして其詠萬葉集にあり

おくむらえーふくのつま 奥村永福妻 天正十一年永福の末森城を守るや佐々成政一萬五千を以て薄る永福等苦戰尤もつとむ其妻乃ち紙弱の身を起して晝夜城中を巡回し或は白粥を煮て士卒の饑を救ふこれに依て士氣ふるひ城爲めに陷らざるを得たり

おーくめのかみ 大來目神 天孫降臨の時天忍日命と共に前驅をつとむ來

目部の遠祖なり

おくら 山上憶良 大寶三年粟田眞人に從て唐に入る慶雲元年歸朝し和銅の末從五位下となり靈龜中伯耆守となる養老年中東宮に侍し聖武の朝筑前守に轉ず天平五年六月卒す年七十四憶良和歌に巧みにして其詠萬葉集に出づ又類聚歌林の著あり

おぐらのおーじ 小倉皇子 後龜山帝の皇子正長元年七月伊勢に赴き北畠滿雅に從りて南朝恢復を圖り兵を擧ぐ永享元年七月大和國人越智十市布施萬財氏等皆皇子に應ず畠山持國討て之を破る土岐氏將軍の命を以て滿雅と戰ふ皇子成ぎを行ひて京に還り薙髮して萬壽寺に入る十二年八月大僧正義照皇子を勸めて再擧を謀らしめ令旨を菊池氏に傳ふ事露はれて義照西國に奔り遂に殺さる

おぐりとーずけのすけ 小栗上野之介 初名は又一後忠順幕後守と稱す德川幕府の臣なり年少にして學を好み識廣く四洋の事に及ぶ海軍所並に造船所の如き皆其創唱するところなりとす年二十歲米國に使し歸て貨幣の改良を企つ後勘定奉行となり將軍慶喜を苦諫して職を免ぜらる幾許ならず敵されて上州高崎に赴き專ら兵制の事を司る明治維新の後しばしば紙幣發行の事を行はむとして果さず頻に德川氏の回復を圖れりといふ

おぐろまろ 藤原小黑麿 烏養の子寶龜中參議となり陸奥の亂を平ぐ天應元年陸奥按察使を兼ね兵部卿となる後又蝦夷を伐ち功を以て從三位に叙せらる幾許ならず中納言に任じ大納言に進み十三年に至て薨ず年六十二

おけつぐ 石上宅嗣 中納言乙麿の子勝寶の初め朝散大夫となり治部少輔に任ず寶字中藤原良繼の事に坐し大伴家持と共に法延に問はる事日ならずして解く景雲の初年參議に任じ寶龜中太宰帥となる又式部卿にうつり藤原永平等と策を定めて光仁帝を立つ中納言にのぼり姓物部に復し數年にして石上となり大納言を以て天應元年卒す宅嗣夙に文學に志し經史に通じ文章に長け書に妙なり

おけつひめ 姥津媛 開化天皇の妃天足彦國押人命の女にして彦坐王を生む

おーげつひめのかみ 大宜都比賣神 伊奘那岐神の第十七子一に保食神といふ素盞嗚尊逐はれて此神の處に來れる時鼻口及び尻より食物を出してすゝむ尊怒て遂に之を殺す又いふ大年神の子羽山戸神大氣都比賣神を娶て若山咋、若年、久々年神等を生むと

おーとー 川田甕江 儒者なり名は剛字は毅卿幼名竹次郎後城三郎と改む備中松山藩の士初め山田方谷に學び後昌平黌に入る又藤森天山に就く明治戊辰京に來り藩主のために百方陳謝して其萬全を企つ後大學博士となり宮内省四等出仕より諸陵頭東宮御用掛にうつり貴族院議員となり文學博士を授けられ學士會員に列なり國學院講師となり東宮侍講にあげられ正四位勳四等に叙す明治二十九年二月病を以て歿す朝廷御物を賜ひ從三位を贈る

おーとく 岡松甕谷 儒者なり初名辰五後辰字に君益甕谷と號す豊後の人

業を帆足鵬齋に受け才學を以て藩中に現はる明治維新後大學少博士となり延岡藩に赴く幾許ならず熊本に抵り轉じて昌平黌教授となる後東京府立中學及び高等師範學校等に教授し學士會員に列す明治二十八年二月歿す年七十六

おーとく 龜田鵬谷（カメダアウコク） 儒者なり名は長保字は申之助幼名穀鶯谷と號し學孔堂といふ通稱保次郎晩年嚶彦と稱し本教々舍稽古樓等の別號を用ふ下總の人龜田綾瀬の女に配して儒を學び博渉多聞衆に推さる又國典に精しく神道に通曉し堂々一家の見識を備へて當世にあらはる蓋し和魂漢才の主唱家なり後關宿侯に事へて尊王攘夷の説を持し侯のために納れらる侯逝きて藩中に忌まれ罪を得て獄に下さる赦されて江戸にうつり明治十四年八月を以て歿す年七十五

おとし 物部尾輿（モノノベノオコシ） 荒山の子欽明帝の朝大連となる二年九月帝新羅を伐たむとす尾輿其輕々しく征服すべからざるを説きて止む十三年百濟佛像經論を献ず帝其敬拜するの可不可を群臣に諮ふ蘇我稻目頻に可を主張す尾輿中臣鎌子と共に其不可を説く帝乃ちこれを稻目に賜ふ尋で諸國惡疫起る尾輿再び奏して邪教の害となし寺舍を焚き佛像を難波堀江に投ず

おーととおしおのかみ 大事忍男神（オホコトオシヲノカミ） 伊奘那岐伊奘那美兩神兒島を發見したる後生みたる御子なり又いふ男神混身の時生るゝと

おさかのおーなかつひめ 忍阪大中姫（オサカノオホナカツヒメ） 允恭天皇の皇后にして稚毛二派皇子の女なり允恭帝未皇子たりし時に納れて妃となす反正帝崩ず群臣允恭帝の踐祚をのぞめども帝多病の故を以て辭して聽さず群臣大に憂ふ時に皇后水盤を捧げて帝の側にあり勸むるに即位の事を以てす帝應へず皇后退かずして立つ事數刻殿冬の故を以て水盤の水氷り溢れて腕にかゝるもの皆凝る皇后爲めに將に凍死せむとせり帝大に驚き直ちに扶けて問て曰く群臣の奏請する處理灼然たり何ぞ終に辭せむやと群臣大に喜ぶ明年乃ち皇后となる帝たまたま皇后の御妹衣通郎姫を納るゝに及びて皇后大に妬み雄略帝を生むの夕帝の出で〻幸するを聞き憂憤して焚死せむとす帝大に驚き朕過てりとひたすらに慰撫して事釋くるを得たり皇后性壯烈男子を凌ぐの氣概あり曾て母に從て家に在るの夕鬬鷄國造馬に乘りて籬を窺ひ戲れに問て曰く能く闘を作れるかと而して闘一聲を得て巍を拂ふの料とせむと皇后其侮慢を心におもひ遂に忘れず後國造を召して罪を訊す國造叩頭して哀訴尤もつとむ皇后憫んで之を赦し姓を貶して稻置となす皇后の嚴正なる率れ斯くの如し

おさかべしんのー 忍壁親王（オサカベシンノウ） 天武帝の皇子母は宮人尼子媛九年詔を奉じて川島皇子及び諸臣等と日本紀を撰す又文武の朝藤原不比等と律令を撰み三品に叙せらる慶雲二年五月薨ず

おーざつまし（シュセンダイフ）**ぜんだゆー** 大薩摩主膳太夫（オホザツマ） 市村竹之丞の弟善藏といふ淨瑠理を善くし薩摩節といふをうたひ出す此曲後廢れたれども適々歌舞伎荒事の場に用ひらるといふ

おさべしんのー 他戸親王（ナザベシンノウ） 光仁帝の第四子寶龜二年正月皇太子となる三

年五月母の罪に座して廢せられ尋で大和に幽せらる六年四月薨ず年十五

おさむ 石井收（イシヰチサム） 水戸藩の學者なり通稱彌五兵衛延寶中右筆となり彰考編纂掛にすゝみ三笑花と號す詩に巧みにして日東の李白と稱せらる享保九年歿す年七十六曾て破日蓮編を撰ぶ

おじか 紀小鹿（キノチシカ） 名は小鹿安貴王の妻となりて市原王を生む後大伴家持と通ず和歌に巧にして其詠萬葉集に見ゆ

おしくまおー 忍熊王（オシクマワウ） 景行天皇の皇子母は大中姫なり譽坂皇子と兵を起して神功皇后の京に入るを激へ擊つたまたま譽坂王死するを以て住吉に退き菟道に出で武内宿禰と戰ひ利あらずして逢坂に走り又敗れて瀨田に赴き湖に投じて死す

おしさかひこひとおーえのおーじ 押坂彦人大兄皇子（オシサカヒコヒトオホエノワウジ） 敏達天皇の皇子母は廣姫皇后なり

おしのわけのおーじ 忍之別皇子（オシノワケノワウジ） 景行天皇の皇子母は八坂入姫皇后なり

おしひめ 押媛（オシヒメ） 孝安天皇の后にして天足彦國押人命の女なり天皇の二十六年二月皇后となり孝靈帝及び大吉備諸進命を生む

おーしゅー 奥州（アウシウ） 元祿年間の名妓にして東都吉原三浦屋の抱へなり俳をよくす

おーしゅー 中井櫻洲（ナカヰアウシウ） 鹿兒島藩士横山詠助の第一子幼名休之進後弘櫻洲と號す年少にして造士館に入り業成る時に天下攘夷説沸騰して騷然たり櫻洲之を憂ひ姓名を鮫島雲城と換へて江戸に走り事を爲さむとして直に藩邸に囚へらる然れども屈せず遂に逃亡して土佐に赴き諸名士と交りて謀策し幾許ならず宇和島侯の顧問となる明治元年正月各國公使接待掛となり英公使遭難の危急を救ふ神奈川縣判事となり東京府判事に轉じ軍資調達の任に當る而して奥羽征討軍の糧食方を司り功尤も多し三年官戸籍改正令にあひて本國に歸り四年四月桐野利秋の幹旋に依て西鄕隆盛に屬して上京し兵部大錄となる五年五月米國に航し九年三月歸朝して工部大書記官より滋賀縣知事にうつり正五位に叙す二十一年五月勳三等に叙せられ二十二年元老院議官となり從三位にすゝむ二十三年九月貴族院議員となり二十六年京都府知事に任ぜられて正三位勳二等にのぼる二十七年十月薨ず年五十七櫻洲書を鮫島翁に學び其技妙を以て唱へらる

おーしょ 石川櫻所（イシカハアウショ） 醫師なり奥州の人名は耳信陸丹庵と號す西洋醫術を伊東玄朴に學び又蘭人に親炙す仙臺侯に仕へて醫員となり後幕府に召されて法印となる常に政務に參與し戊辰の際の如き慶喜公に從ひて大阪より江戸に歸り寛永寺に入り水戸に移る後獄にある事十一年赦されて松島にかへる明治四年兵部省軍醫寮に出仕し從六位軍醫介より遂に從五位軍醫監に進む既にして病を以て辭し十三年二月にいたりて歿す年五十九著書には養生訓、内科簡明等あり又詩をよくして香雲閣詩鈔を出せり

おーじんてんのー 應神天皇（オウジンテンノウ） 第十六代の天皇なり仲哀帝の御四子御母は神功皇后なり譽田別尊と稱す幼にして

聰明英智聖容威儀具はる初め皇后の天皇の孕にある時遺詔を奉じて三韓を征す天皇生るゝに及びて腕上に肉起ること鞆の如し乃ち皇后の雄裝して負ひし所の物に似たり因て大鞆別命といふ亦胎中天皇ともいへり辛巳の歲二月皇后天皇を奉じて豐浦宮に至り仲哀帝の喪を發し將に京に赴かむとす庶兄皇子忍熊二王兵をあげて皇師を播磨に要す時に皇子坂王獵して獸のために殺さる忍熊王住吉に退き武內宿禰の軍を邀へて利あらず又菟道に走り遂に敗死す群臣皇后を尊びて皇太后といふ皇太后乃ち政を攝す癸未の歲天皇位に即く二年仲姬を立て皇后となす五年諸國に令して海人及び山守部を定め伊豆に令して船を作らしむ六年近江に幸し十九年吉野宮に幸す四十年菟道稚郎子を立て皇太子となす明年崩ず齡一百一元明帝の和銅五年天皇を豐前宇佐に祀り八幡大神宮と稱す

おすみ　田邊小隅（タナベノチスミ）　文武帝に仕へて壬申の亂に從ひ兵を間道より進めて田中足麿の營を襲ひ大に克つ小隅勝に乘じて進み多品治のために邀擊せられ敗走して終に往くところを知らず

おーすわけのおーじ　大酢別皇子（オホスワケノワウジ）　景行天皇の皇子にして母は八坂入媛皇后なり

おーそしとわけのみとと　大曾色別（オホソレコワケノミコト）　景行天皇の皇子なり

おーたのひめみと　大田皇女（オホタノヒメミコ）　天武帝の妃にして天智帝の女なり大來皇女大津皇子を生む

おーち　文室大市（フンヤノオホチ）　長親の子勝寶中兄淨三と共に姓文室を賜はる中頃髮を削て僧となり後出仕して從二位大納言兼治部卿となる寶龜十一年薨ず年七十七

おちゃのつぼね　阿茶局（オチャノツボネ）　通稱須和武田信玄の士飯田久右衛門の女なり今川氏の臣神尾久宗に嫁す家康の質として今川にあるや局之を遇すること甚あつし家康大に德として忘れず後今川氏の滅ぶるに及びて家康に仕へ駿府に居る局才幹衆に秀で事理を辨ずる明晰なり大阪の役家康の旨を奉じて城中に赴き淀君並びに大藏局常光院尼等に謁して和議の事を議すいふところ整然たり淀君悅服す寛永元年秀忠の女東福門院中宮となる局從ひて京にあり依て一位に叙せらる十四年正月逝く

おつぐ　藤原緒嗣（フヂハラノオツグ）　百川の子光仁帝百川の輔翼を德とし緒嗣を擢んで參議となす龍遇頗る深し後山城守となり菅野眞道と共に建議して皆納れらる弘仁八年中納言に拜せられ尋で從二位大納言にのぼる天長二年右大臣となり八年左大臣に進み正二位に叙すしばしば骸骨を請ひて許されず承和十年薨ず年七十世に山本大臣といふ嘗て姓氏錄及び日本後紀の撰に與かりて功あり

おーつのおーじ　大津皇子（オホツノワウジ）　天武天皇の皇子母は皇妃大田皇女なり後謀逆を圖り事覺はれて死を賜はる死する時詩を賦して曰く金烏臨二西舍一鼓聲催二短命一泉路無二賓主一此夕誰家向と

おつゆー　中川乙由（ナカガハオツユウ）　俳人なり初め伊勢山田の祠官にして度德圖書といふ後俳を芭蕉に受けて姓名を中川乙由又は梅我と改め麥林舍と號す性放逸豪直句體亦これに協へり而も蕉門十哲文考

の右に出づるものありしといふ元文三年歿す

おつんど　越人（ヱツヒト）　俳人なり熊本藩士佐分利平次といふ姓は越智氏越人又は蘆頭又は蘆友と號す俳を芭蕉に學び其十哲中に列せらる元祿十五年三月歿す

おーてき　長野橫笛（ナガノワウテキ）　通稱橘屋次郎兵衛蒔繪師なり品行嚴正にして學識あり故を以て同業者間に重んぜらる

おてのあま　小手尼（ヲテノアマ）　歸化せる尼なり百濟の人醫をよくするを以て孝謙帝の奇疾を治せむと乞ひ許されず尼其手織軟恰も嬰兒の如し依て小手尼とよべり

おーと　田口大戸（タグチノオホト）　寶龜八年從五位上に叙せらる和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ

おとうかし　弟猾（オトウカシ）　倭荒田に屯せる魁帥なり神武帝の東征するや弟猾直ちに歸順して之をれざらひ奏していふ磯城邑の磯城八十梟帥高尾張邑の赤銅八十梟帥みな皇師を拒ぐ臣大に之を憂ふ今當に天香具山の土を取り天平瓮を造り用て天社國社を祭り而して後虜を伐たば忽ちにして平かむと時に天皇も亦同じき靈夢を感じたり依て大に欣び乃ち弟猾並びに稚根津彥をして往て天香具山の土を取らしむ弟猾服をかへて賊軍の間を潛行し遂に土を得て還る功を以て後猛田邑に封ぜられ猛田縣主となる

おとしき　弟磯城（オトシキ）　倭磯城邑の酋長なり神武帝の東征に當りて兄磯城拒戰す弟磯城八咫烏の喚ぶに應じて歸順の心を示し帝の大前に到りて具に兄磯城の狀を申す帝弟磯城をして兄磯城を諭す肯ぜず乃ち稚根津彥の計を用ひて遂に之を殺す弟磯城功を以て磯城の縣主となるを得たり

おーとしのかみ　大年神（オホトシノカミ）　須佐之男命の子母は大市比賣命なり伊怒比賣を娶りて大國御魂神以下五神を生み又香用比賣を娶りて大香山戶臣神御年神を生む弟猾直ちに生む又天知迦流奚比賣を娶りて奧津日子神以下九神を生む

おとたちばなひめ　弟橘媛（オトタチバナヒメ）　日本武尊の妃なり穗積氏忍山宿禰の女皇子東征の日相摸より總に往かむと欲し海を渡りて海神怒りて船將に覆らむとせり時に橘媛曰くこれ海神の祟を爲すものならむ妾が身を投じて皇子の命を贖はむと乃ち身を起して海に入る風浪止みて船總國に着するを得たり後尊碓日嶺に到り東方を望み見て此事を追懷し嘆じていふ吾嬬はやと依て東國を稱して吾妻國といふ

おとね　石川老夫（イシカハノオホナ）　文武帝の朝直廣肆を授けられ從五位下美濃守となる和歌に巧みにして其詠萬葉集にあり

おーとのじのかみ　大戶之道神（オホトノヂノカミ）　活枝神に次ぐる男神なり

おとひと　萩原乙彥（ハギハラオトヒコ）　小說家なり鈴亭と號す通稱森語一郎萩原秋巖の養子となりて對梅宇とよぶ後二代梅春里谷娥となり歌澤節を作る依て能六齋の號あり明治十九年二月歿す年六十一

おとひと　春山弟彥（ハルヤマノオトヒコ）　國學者なり前田夏陰に古典を學び勝安房に測量術を聞き高島眉山に外國語を修む明治八年大阪師範學校に教授し十一年姬路中學校に教授す三十二年四月歿す年六十九

おとひめ　弟媛（オトヒメ）　仲哀帝の妃大酒主

の女仲哀帝に納れられて麝屋別皇子を生む

おとひめ 弟媛（オトヒメ） 應神帝の妃品陀若王の女應神帝納れて妃となす阿倍皇女淡路原皇女紀莵野皇女三野耶女を生む

おとひめ 弟姫（オトヒメ） 反正帝の夫人津野媛の妹帝に寵せられて財皇女高部皇子を生む

おーとびわけのかみ 大戸日別神（オホトヒワケノカミ） 一にいふ大直日神と同一なりと石巣比賣神の弟なり

おーとまどひこのかみ 大戸惑子神（オホトマドヒコノカミ） 大山津見神の第七子なり

おーとまどひめのかみ 大戸惑女神（オホトマドヒメノカミ） 大山津見神の第八子なり

おーとまべのかみ 大戸邊神（オホトマベノカミ） 大戸之道神の妃なり

おとまろ 忍坂部乙麻呂（オサカベノオトマロ） 養老中の人和歌をよくするを以て其詠萬葉集に出づ

おとまろ 石上乙麿（イソノカミノオトマロ） 物部目の後胤左大臣麻呂の子なり穎邁にして詩才に富み風姿又極めて高し曾て久米若女に姦して罪を得土佐に流されしも遣唐使の適任者なきを以て召還せられ乃ちこれに任ず後從三位中納言兼中務卿に拜せられ勝寶二年卒す詩篇今に存す名を懐風藻といふ

おとまろ 大伴弟麻呂（オホトモノオトマロ） 寶龜中衛門佐に任ぜしより從四位下右中辨にすゝみ征東副將軍となり又征夷大使となるのち延暦十三年を以て節刀を授けられ副使田村麿と共に蝦夷を伐ち大に之を敗る功を以て從三位勳三等に叙し皇太子の傅となる大同四年薨ず年七十九

おとまろ 丹治比乙麻呂（タヂヒノオトマロ） 家主の第二子神護元年從五位下に叙す和歌に巧みなり其作萬葉集に出づ

おとむろ 藤原乙牟漏（フヂハラノオトムロ） 桓武帝の皇后なり内大臣良繼の女延暦二年夫人となり翌年后となる平城嵯峨の兩帝及び高志内親王を生む九年三月崩ず年三十一謚して天立高藤廣宗照姫之尊といふ

おとめ 椋椅部弟女（クラハシベノオトメ） 物部直根の妻和歌をよくするを以て世にあらはる其詠萬葉集にあり

おーとも 縣犬養大伴（アガタイヌカヒノオホトモ） 天武帝に從ひて壬申の亂に功あり依て封一百戸位豐直廣に及ぶ大寶元年卒す

おーとものいらつめ 大伴耶女（オホトモノイラツメ） 佐保大納言安麿の長女なり天武帝の子穂積親王に嫁して今城王を生む後藤原麻呂と通じ又大伴旅人に嫁す神龜五年薨ず和歌に巧みなり其詠萬葉集に見ゆ

おとんど 大江音人（オホエノオトンド） 備中介本主の子業を菅原是善に受く天長中文章生に補せられ承和中秀才に擧げらる尋で備中目となり數年にして尾張に謫せらる寄されて京に歸り大内記より東宮學士となり遂に參議に拜し貞觀八年を以て從三位檢非違使別當左衛門督を兼ぬるにいたれり嘗て勅を奉じて弘帝範及び群書要覽を撰じ又菅原是善と貞觀格式を撰定す貞觀十七年薨ず年六十七

おーなかつひとのみこと 大中津日子命（オホナカツヒコノミコト） 垂仁天皇の皇子にして母は日葉酢姫皇后なり

おーなかつひめ 大中姫（オホナカツヒメ） 熊人大兄の女仲哀帝の妃となりて磐坂忍熊二王を生む

おにたけ 感和亭鬼武（カンワテイオニタケ） 小説家なり

一名一溪庵市井通稱前野羅一郎後曼切といふ本姓名橘又曼亭ともよべり算數に長じ撃劍を善くす一橘家に事へて勘定役となりしも養子して職を退き山東京傳に學びて小説を書く其兒雷也物語は尤も世にあらはる鬼武又齒に巧みなり谷文晁に受けしものなりといふ

おにつら 平泉鬼貫（ヒライヅミオニツラ） 俳人なり自休庵、槿花翁、佛兄、馬樂堂、囉々哩居士、即翁と號す攝津伊丹の人本姓加樂井氏改めて上島といひ通稱を與惣右衛門又三郎兵衛といふ松江維舟に從て俳に長じ伊丹調の一格を創む嘗て郡山の賤卒となり苦に堪へずして去る元文三年八月歿す年七十八

おーぬのいらつめ 大蕤娘（オホヌノイラツメ） 天武帝の夫人なり左大臣蘇我赤兄の女穂積親王妃皇女田形内親王を生む神龜元年七月薨ず正二位を追贈せらる

おぬひめ 難波小野媛（ナニハノオヌヒメ） 顯宗帝の后にして磐城王の孫丘稚子王の女なり嘗て宴に御して仁賢帝に禮ならず仁賢帝立つに及びて愧ぢて自殺す

おーねふとき 大根太木（オホネフトキ） 狂歌師なり本姓松本通稱山田屋半兵衛辻番請負を渡世となす俳名雁奴とよび狂と俳とに名を得又塵積樓の號あり

おのがわ 小野川（オノガハ） 喜三郎 力士なり近江の人大阪にありて草摺岩之助の弟子となり相撲川とよぶ又小野川才藏の門に入り其名を嗣ぐ後江戸に來りて谷風と對し其弟子雷電と拮抗す寛政中東の關脇となり尋で大關となる文化三年三月歿す年三十九

おーのまつ 阿武松（アブノマツ） 綠之助 高名の力士なり能登國鳳至郡七海村の產初名を長吉とよべり文化十二年江戸に來り武隈の門に入りて相撲を習ひ小車と稱す然れども武隈の爲めに忌まれて其門を脫し鎹山の門に入る奮勵數月序口に進み小柳長吉とよび文政二年を以て幕下二段に上り同五年先師武隈を破つて幕内に入り六年同八枚目七年小結八年關脇九年大關となり阿武松綠之助と改む十一年横綱に榮進し長門藩に抱へられ米五十俵を賜はる天保十四年年寄となり嘉永四年十二月六十一を以て歿す

おーば 大婆（オホバ） 德川秀忠の乳母なり父は岡部氏本夫は今川氏の家人河村善右衛門といふものなり家康のために召されて秀忠に侍するに及び尊ばれて大婆といふ其子某山中源左衛門の事に黨して罪を得れども禍大婆に及ばずこれ此人を重んずればなり病篤き日秀忠臨んで其請ふところを聞く大婆秀忠に諭すに德政を行ひて東照公の舊事を遵守するの道を以てするのみ秀忠再三其請ふ所を促す大婆遂に何事をも請ふなし秀忠起て行く數歩大婆遽かに呼で曰く老婆死に臨んで心に滯するところの者たゞ獨り賤息のみ然れども法令は天下の大法なり若し老婆の故を以て天下の大法を犯さば人殿下をよんで私ある者といはむ殿下の請ふところを强ふるは正に恩典の言なり願くば死後賤息を赦すこと勿れと正烈の節義まことに感ずべきものありといふべし又嘗て手づから飯を盛て嬉失走卒數十百人に與ふ本多正信側を過ぎ驚て曰ふ君は大君の乳母ならずや手づから此賤事を爲すそも如何と大婆容を正して曰く頃日人足下を批議して驕れりといふ吾信ぜず今初

めて其盲の眞なるを見るそも吾賢愚にありて今日に至れる者は君恩の致すところ大なればなり而して本を忘れて驕慢なるは愚夫愚婦の常なり吾の賤事を爲すは本を忘れざるが爲めのみ足下又昔日の彌八郎を忘るゝ勿れと正信歎服して去る

おーばえのおーじ　大葉枝皇子（オホバエノワウジ）　應神帝の皇子母は皇妃日向泉長姫なり

おーばと　大葉子（オホバコ）　調吉士伊企儺の妻なり伊企儺紀男麿に從て新羅を伐ち軍利あらずして捕へられ途に殺さる大葉子悲しみて歌を作りて曰くからくにの城のへにたちて大葉子は領巾ふらすもやまとにむきてと聞く者之を憐まざるなし

おーひとのみこと　大彦命（オホヒコノミコト）　孝元天皇の皇子母は鬱色謎皇后なり崇神帝の十年九月四道將軍となり又武埴安彦の亂を鎭む子武淳川別又將軍となりて戎夷の平定につとめたり

おひと　宇努男人（ウヌノヲヒト）　百濟の人稱奈子寫意彌の後豐前守に任ぜらる養老四年大隅日向の隼人の亂を平げて功あり男人和歌を能くして其詠萬葉集に見ゆ

おーひら　本居太平（モトヰノオホヒラ）　國學者なり伊勢の人稻掛棟隆の子にして茂穗といふ通稱十介本居宣長に學びて其養子となり通稱を三右衛門と改む紀州侯に仕へて班御側用人となる天保四年九月歿す年七十八萬葉山常百首、百人一首梓弓、有馬日記、藤垣內集、古學要、神樂歌新釋、姓氏錄考、關のうまや、已未紀行、玉鉾百首解等の著あり

おーひるめむちのかみ（オホヒルメムチノカミ）　大日靈貴神　伊奘諾尊の御女なり父尊の命を奉じて大八洲國の主とならせたまひ德光四方にかゞやく弟素盞嗚尊慓悍にして放逸なり大神の織殿に斑馬を逆剝て投じ以て織女をおどろかせり大神怖れ給ひ天の岩戸にかくれ給ふ天下爲めに暗憺たり諸神こゝに於て天安河原に神集ひに集ひ思兼命をして策を講ぜしむ思兼命乃ち天鈿女命をして俳優の態を爲さしめ諸神之を觀て歡樂喧噪せしむ大神此聲を聞きて大に怪しみ給ひ微しく御戸をひらきて覗ひ給ひしを手力雄命直ちに其御手を執りて扶け出し再び天下に照臨せむ事を請ふ大神之を許し給ふ依て素盞嗚尊の罪を責めて之を逐ふ

おーまたのおーじ　大派皇子（オホマタノワウジ）　敏達天皇の御子母は皇夫人老君舒明帝の時蘇我氏の專横を憂ひ數〻蝦夷を諫むれども遂に納れられず

おまつりわたる　祭和樽（マツリワタル）　狂歌師なり名は直常姓は源岡通稱武藏屋元次郎又新六髮結職なり三陀羅法師に學びて祭和樽といひ鈍々亭と號す太皷側の列者として其名高し文政五年歿す

おまろ　紀男麿（キノヲヒマロ）　欽明帝の二十三年新羅任那を侵す男麿大將軍となりて之を伐つ副將河邊瓊缶曾山に居り以て新羅を詰問す調伊企儺、蘇集部金餌、倭國造手彦等皆從ふ而して任那に到り先づ使を百濟に發して軍計を約せしむ使者印書弓箭を途に遺し新羅の得るところとなる依て兵を率ゐて來り戰ふ男麿力戰して之を卻く用明帝崩ずるや蘇我馬子に從て物部守屋を攻む崇峻帝の四年男麿又巨勢比良夫と共に大將軍となりて筑紫に赴き再び任那の事を問ふ

おーまんどころ　大政所（オホンドコロ）　豐臣秀吉

の母尾張の人初め木下彌右衛門に嫁して瑞龍院尼及び秀吉を生み後竹阿彌に再嫁して秀俊及び南明院を生む文祿二年薨ぜり

おーみ　調淡海（ツキノアフミ）　百濟の人管理使主の後和銅二年六位を歷て從五位下に叙せられ六年從五位上にすゝむ和歌に巧みにして其詠萬葉集にあり

おみみ　縣犬養男耳（アガタイヌカヒノヲミミ）　女孺なりのち光仁帝の妃にあげられて從五位下に叙せらる

おめぞー　市川男女藏（イチカハヲメザウ）　初代　二代目門之介の子幼名辨之介家名瀧野屋俳名新車又は海丸白猿の弟子なり藝風至て器用なる俳優なりしといふ天保四年歿す年五十三

おめぞー　市川男女藏（イチカハヲメザウ）　二代　大阪生れの俳優にて中山金藏といへり後榊山金藏と改め又四郎三郎といひ文政三年江戸に來りて中山桶藏といひしも七代目白猿の弟子となるに及んで市川雷藏といひ同七年二代目男女藏をつぐ家名瀧野屋文政九年歿す

おめぞー　市川男女藏（イチカハヲメザウ）　三代　二代目の實子幼名榊山金藏父と俱に大阪に往き江戸にかへり來て尾上新七といふ

おもいかねのかみ（オモヒカネノカミ）　思兼神　高皇產靈神の子智略諸神にまさる天照大神の天岩窟にかくれたまひし時諸神のために謀て岩戸を開くの策を授けたまふ

おもたるのかみ（オモタルノカミ）　面足神　天地開闢の時身體面貌の始めて定まりし神なり

おーやらずみ（オホヤラズミ）　大屋裏住　狂歌師なり元白河藩の士通稱久須美孫兵衛といふ仕を罷めて江戸に來り白子屋孫左衛門と改めて唐更紗を製して業となす人呼んで更孫ともいへり裏住初め俳に遊びて勢賀とよびしも後狂歌に志し杢網の弟子と爲て大奈言厚記といふ時に交友紙商乙平なる者あり裏住と共に狂歌を學び秋人と號す又二人能く野呂間人形を遣ひ飛流の能狂言を能くすこゝに於て裏住一日秋人を師に謁せしむるに當り未廣大名太郎冠者の風に扮し能がゝりを以て杢網の隱宅を訪ふ杢網又これに應じて狂言に擬へ初對面の式を終る其行狀眞に凡俗を脫するものありといふべし寛政元年定家卿五百五十年忌に會す全國詩歌連俳を弄ぶ草は皆手向の吟哦を來るべきを命ぜらる裏住乃ち菅江杢網等と謀て詠草を呈す曰く蛙も蛙も同じ歌仲間經よむもあり只啼くもありと秀逸を以て定家卿廟前の遍額名歌三十首中に收められ萩の屋の號を賜はる狂歌師の屋號こゝに始まる文化七年五月歿す年七十七

おーやひとのかみ（オホヤヒコノカミ）　大屋毘古神　五十猛神といふ大己貴命の兄なり曾て須佐之男命に從て新羅に赴き材樹の種子を得て紀州に還り之を播くといふ

おーやまくいのかみ（オホヤマクヒノカミ）　大山咋神　大年神の子又の名を山末之大主神といふ一說には建御雷神と同じとす

おーやまつみのかみ（オホヤマツミノカミ）　大山津見神　鴨建角身命又は三島溝樴耳一に大陶祇神といふ伊弉諾神の子にして山を司る木花散比賣、太市比賣、木花咲耶姫、玉依姫を生む

おーやまもりのおーじ（オホヤマモリノワウジ）　大山守皇子　應神天皇の皇子なり弟菟道稚郎子立ちて皇太子となる皇子大に之を怨み怏々

として樂ます父帝崩ずるに及び遂に兵を擧げて叛し稚耶子を莵道に誅はむとす稚耶子遁れ去る皇子知らずして河を渡らむとす舟人稚耶子の命に依て中流に舟を覆へし遂に皇子を溺死せしむ

おゆ　間人老（ハシヒトノオユ）　白雉五年遣唐判官となりて唐に赴く和歌に巧なり其詠萬葉集に見ゆ

おゆみ　紀小弓（キノヒユミ）　雄略帝の九年蘇我韓子大伴談小鹿火等と共に新羅を伐つ小弓發するに及び大伴室屋に依て采女大海を得乃ち赴きて克ち新羅王を走らす後陣中に病で薨じ大海其喪を收めて還る而して室屋に依て冢墓を田身輪邑に得たり

おより　村國男依（ムラクニノヲヨリ）　壬申の亂天武帝の麾將となりて美濃の兵三千を率ゐて不破を塞ぐ而して進んで弘文帝の兵を息長横河に破り境部薬を斬る事平ぐの後功臣を以て封百二十戸を得功田十町を賜はる天武帝の四年卒す

おりひとしんのー　織仁親王（オリヒトシンナウ）　有栖川職仁親王の子寶暦十二年十二月桃園帝の猶子となる十三年親王となり十四年三品に叙し兵部卿に任ぜらる明和九年中務卿となり落飾して龍淵と號す文政二年二月薨ず年六十七諡して文聚院と號せり親王入木の蘊奥を極め其技を光格帝に傳へたりといふ

おーわたつみのかみ　大綿津見神（オホワタツミノカミ）　上筒男、中筒男、底筒男三神が總名なりと乃ち海を司る神なり

おんあ　人見恩阿（ヒトミオンア）　北條高時の家士四郎入道とよぶ楠正成を赤坂城に攻むるや恩阿北條氏の衰運を察知し和歌を詠じて曰く花咲かぬ老木の櫻朽ちぬとも其名は苔の下にかくれじと時に年七十三

かあん　淀屋个庵（ヨドヤカアン）　茶人なり名は言當戲噺及び連歌をよくし茶事に通ず寛永二十年十二月歿す年六十七

かいおく　貫名海屋（ヌキナカイヰク）　噺家なり名は苞字は子善又君茂海屋或は崧翁と號す通稱泰次郎阿波の人初め狩野派の噺を學びて之をよくし後文人噺に變ず文久三年五月歿す

かいおん　紀海音（キノカイオン）　戲曲作者なり本姓槇埜氏鳥路觀契因又は曇因、貞我菴貞峨、鳥觀齋等の別號あり通稱善右衛門後善八初め宇治黄檗山に赴きて僧となり高節と稱す後醫と爲り又契沖阿闍梨の門に入り和歌を學ぶ元文元年法橋に叙す其著はすところの淨瑠理曲甚多し且つ俳に游んで躍布袋の作あり寛保二年十月歿す年八十

かいかくほーしんのー　海覺法親王（カイカクホフシンナウ）　邦高親王の子母は左大臣藤原公興の女なり親王後柏原帝の猶子となる永正六年二月勸修寺に入りて剃髮す

かいがたけりゅーえもん　階ヶ嶽龍右衛門（カイガタケリユウエモン）　加賀の人江戸力士雷の部屋に入り初名大勝とよび龍ヶ嶽と改め頻に技益を研きしが其甲斐ありて安政三年に大關となり上手投の妙を以て好角家中に其名を傳へらる

かいかてんのー　開化天皇（カイクワテンナウ）　稚日本根子彦太日々天皇といふ孝元帝の第二子母は鬱色謎命都を春日に遷して率川宮といふ在位六十年崩ず壽一百十一

かいげつどー　懷月堂（クワイゲツダウ）　浮世繪師なり姓名年代共に詳ならず而して諸書の傳說紛々たり然れども慶長元和以前に

此名の噺人ありて浮世繪の體を創め代々相嗣ぎ其噺元祿享保の頃に及びて世に行はれしものならむといふ或は寶永正德頃の人俗稱岡澤源七といひ或は元和中の人にして安慶源七といふ何れか是なるを知らず

かいじょー　開成（カイジヤウ）　彌勒寺の開祖なり光仁帝の皇子にして桓武帝の御兄なり天平の初め宮中を出でゝ勝尾山に入り善仲善算の二法師に從ふ天應元年十月寂す壽五十八

かいせき　佐田介石（サダカイセキ）　游說家なり肥後の人字は斷識等象齋とよぶ幼名觀鑑年十八京に出でゝ佛學を修め國にかへりて專念思を潛めて哲理を案ず時に西洋の星學入りて佛曆將に廢れむとす介石奮然として斯學を究め現實等象器を作る又經濟學を學び諸國を遊說す明治十五年十月越後高田に到りて病死せり年六十五

かいせき　野呂介石（ノロカイセキ）　儒者にして噺家なり紀州の人名は隆年のち第五隆字は松齡、十友或は矮梅、四碧、澄湖、混齋と號す初め池大雅に學び後清人伊孚九に就く世に竹石愛石と併せて噺家三石といふ文政十一年歿す年八十二

かいそん　常陸坊海存（ヒタチバウカイソン）　丹波の人幼にして僧となり心了とよぶ後源義經に仕へて武勳多し尤も舟利の事に通ず傳へいふ義經蝦夷地に入る時海存舟を常州鹿島浦に艤し風に乘じて發すと

かいもん　赤崎海門（アカザキカイモン）　薩摩の人名は楨翰字は彦齡通稱を源助といふ寛政の初年賴春水と共に昌平黌の講師となる文化年中歿す

かが　伏柴加賀（フシバノカガ）　島羽天皇の后待賢門院の侍女なり和歌をよくす源有仁に歌を贈りて曰くかれてより思ひし事よ伏柴のころばかりなる嘆きせむとはとこゝに於て伏柴の名あり

かがつめかいのかみ　加々爪甲斐守（カヤツメカヒノカミ）　德川家康の臣なり力三十人を兼ぬ寛永九年十一月城中吹上御前試合の時大久保忠教と伎を爭ひて破らる時に年七十一歲なり

かきつ　坂東家橘（バンドウカキツ）　俳優なり市村羽左衛門の三男幼名竹松家名立花屋後音羽屋明治元年八月十四代羽左衛門となりて市村座主となり後俳優專門となる十七年坂東氏を嗣ぎ二十六年三月歿す年四十八和事師としての名聲尤もあらはる

かきもんいん　嘉喜門院（カキモンヰン）　後村上帝の女御なり後龜山帝を生む門院琵琶に巧みに和歌に秀づ宗良親王新葉集を撰ずる時詠を門院に請ふ門院大納言藤原實爲をして百餘首を書し以て宗良に贈らしむ

かきゅー　式守蝸牛（シキモリクワギウ）　角力行司なり初名伊之助相撲赤膚を製して賣る又相撲隱雲谷川解を著す死する時年八十三

かくいんほーしんのー　覺胤法親王（カクインホフシンナウ）　直常親王の御子にして後土御門帝の猶子となり妙法院に入りて削髮す長享二年八月親王となり二品に叙せり永正五年天台座主となり天文十年正月寂す

かくうんほーしんのー　覺雲法親王（カクウンホフシンナウ）　龜山帝の第五子弘安七年十一月梶井の門室に入りて出家し正和四年二月二品に叙す文祿元年十一月座主に任じて普提院と稱す

かくえいほーしんのー 覺叡法親王　後光嚴院の皇子にして應安六年十一月出家す

かくおー 鹿島鶴翁　中臣氏にして鹿島神社の大宮司なり名は則與初め右衛門後大和と改む弘化中從五位下に叙し大和守に任ず安政五年致仕し慶應元年孫則文の罪を得るに及び又出で〻宮司となる明治二年有栖川宮江戸に入るの日來りて大捷を賀し從五位上に叙す明治七年十一月卒す年八十九翁和歌に巧みに學識深く常に塙保己一僧立綱と贈答し又歌學を芝山中納言持豊に就て修むといふ

かくおー 壺井鶴翁　有職故實學者なり名義知鶴翁と號し溫故軒といふ通稱安右衛門大阪の人考證精密にして博洽多識天下其名を唱へざるなし著はすところ源氏男女裝束抄、紫式部日記傍註、職原辨疑、職原抄解、裝束圖式頭書、枕草子裝束抄等有益のもの多し

かくかいほーしんのー 覺快法親王　鳥羽院の第七皇子本名圓性久安二年三月比叡山にのぼり安元三年五月座主嘉應二年五月親王となり養和元年十二月寂す

がくきょー 大郷學橋　越前鯖江藩の儒者名は穆字は穆卿學橋と號す少壯にして昌平黌に學び苦學多年業大にすむ大政復古に遭て藩の少參事に任じ明治十四年十一月歿す年五十二

かくきょーほーしんのー 覺行法親王　白河院の第三皇子永保三年十月御室に入り應德二年十一月御出家承德三年正月親王となり康和四年五月三品に叙す同八月二品にのぼり長治二年十一月卒す年三十一御名を覺念御室といふ

かくぎん 石井鶴山　佐賀藩の儒者名は有宇字は仲車年十七にして都講となり又藩の國學を教授し重用せらる鶴山時に妙を得山水奇勝盡く其筆に依て美化す寛政元年病を得四月歿す

がくじゅーろー 實川額十郎　大阪の俳優實川家初代の人家名井筒屋俳名延若初名淺尾八百藏といひ淺尾工左衛門の門人なり後中村仲藏の弟子となり一時中村を用ゐしが又元の淺尾に復して勇次郎といふ江戸へ來りて八ヶ年修業し歸りて名聲大に揚る文政七年額十郎と改め天保四年實川と改め座頭となる近世和實の名人なり天保六年十一月歿す年五十四

かくじょほーしんのー 覺恕法親王　後奈良天皇の第二皇子曼珠院に居りて二品に叙す元龜元年四月天台座主となり二年九月座主を辭し三宮に准ず天正二年正月薨ぜり金蓮院と號す

かくしょーほーしんのー 覺性法親王　本名信法又泉殿御室と號す鳥羽院第五の皇子なり保延元年三月入室同六年六月出家保元三年三月二品に叙し仁安二年十二月初めて總法務給に任ず貞永元年寂す年四十八

かくじょー 角上　俳人なり名は明因江州片田本福寺の住職後三井寺の傍に住す芭蕉の門に入りて俳をよくす延享四年五月歿す年七十三

かくしん 覺心　信濃の人年十五にして神宮寺に入り佛書を讀み十九にして東大寺に受戒す乃ち高野にのぼり三密教を修め金剛三昧院の行勇に謁し教外の旨を得又菩提戒を深草の道元に受

け入宋の僧思順に見ゆ遂に宋に赴き佛眼師を見てかへる建長六年高野の故寺にかくれ草で金剛三昧院に出世す弘安四年詔を奉じて都の勝林寺に入りしも幾許ならず去て紀州に赴く永仁三年十月寂す年九十二

かくしんほーしんのー 覺深法親王　後陽成天皇の第一の皇子母は中山親綱の女なり正保五年正月寂す年六十一なり

かくそんほーしんのー 覺尊法親王　俗名有定東山院の第三皇子なり三宮と稱す元祿十三年圓滿院に入り寶永五年八月親王となる正德四年名を公寛と改め享保二年一品に叙し三年天台座主となる元文三年三月薨ぜり

かくたい 瀧鶴臺　長州藩の侍醫なり名は長愷通稱彌八鶴臺と號す初め小倉尚齋に學び後山縣周南に就て復古學を闡く敏年にして藩の公子に侍讀し又江都に來て服部南郭の門に游ぶ幾許ならず藩主に召されて韓使の接待役を命ぜられ終に明倫館の祭主となる鶴臺學深く識汎くして儒名海内に布くのかたはら醫術又あらはる蓋し其師とする所は香川太冲、山脇東洋、吉益東洞の諸名醫なり安永二年正月歿す年六十五著はすところ鶴臺遺稿、同浸筆等あり

かくどーほーしんのー 覺道法親王　後柏原帝の第三皇子永正七年二月眞光院に入り十二月出家を尊海僧正に受く八年三月親王となり十六年正月二品に叙す太永七年十月寂す年二十八

かくねん 赤松鶴年　字は玄愛鶴年は其號なり京都の畫人にして岸駒に學ぶ

かくはん 覺鍐　高僧なり正覺と號す肥前の人なり興福寺の慧曉法師に依りて唯識論を習ひ保安二年仁和寺に回りて密灌を受く後高野に入り定尊阿闍梨に侍して益々密乘の疏典を極む藤原忠通常に鍐を崇信し大唐慧果阿闍梨の化身と稱せり康治二年十二月寂す年四十九

かくびょーえ 飯田覺兵衛　加藤清正の臣名は直宗といふ征韓の役晉州を攻て先登し黑田氏の士後藤基次と先を爭ふ秀吉功を賞して覺の一字を賜ふ乃ち稱して覺兵衛といへり寶永九年九月歿す又いふ加藤氏の封を失ふの時長崎に赴き筑前侯にあげられて二千七百石を領せりと

かくべー 安積覺兵衛　水戸藩の儒臣安積澹泊の曾祖なりと初め小笠原藩に仕へ勇名比なし關ヶ原大垣等の役に出で〻武功極めて多かりしも藩主に快からずして去り名を飯土用總内と改め京都に止る水戸侯之を小笠原藩に請ひ以て家臣となす

かくほーほーしんのー 覺法法親王　白河天皇の皇子なり仁和寺に入りて密法を學び後金剛峰寺に往くの途次一旅館の主人に懇請せられ一兒の殤亡するを蘇生せしむ大治二年二品に叙せられ仁平三年十二月寂す年六十二

かくめい 市川鶴鳴　河越の人にして高崎侯に仕ふ名は匡字は子人多門と稱せり十七歳大内熊耳に師事し業大にすむ乃ち藩の書記職にあげられしが去て信州に赴き飯田侯に仕ふ又去て尾州に游び鳴海の人梶川の女を娶る島津侯鶴鳴の賢を聞きて召くに厚禮を以て

す鶴鳴往く止る事三年西京に來り大阪に移り再び高崎侯の祿を受けて世子に侍讀す恩寵日に遲し寛政七年七月病で卒す 年五十六 著はすところ經說七部、老子考文、讀莊子、鶴鳴文集若干卷あり

かくよほーしんのー 覺曩法親王（カクヨホフシンナウ） 花園法皇の子天王寺の別當となり後二品に叙せられ和歌に巧みなり

かくりょー 林鶴梁（ハヤシカクリヤウ） 武藏の人名は長孺通稱伊太郎鶴梁と號す長野鹽山松崎慊堂に學び業成りて甲府公の儒官となる嘉永六年遠州中泉の代官に轉じ頗る令聞あり安政元年の震災海嘯に當ては倉庫を開きて民を濟ひ私金を投じて穀物を購ひ悉く慈善の道に分つ後羽州に轉じ銅坑を採掘して盛に工業の發達を圖れり明治十一年一月歿す 年七十三 著す所鶴梁文鈔あり

かぐろひめ 迦具漏比賣（カグロヒメ） 景行天皇の宮人幸を得て大江王を生む

かぐろひめ 迦具漏媛（カグロヒメ） 應神天皇の宮人幸を得て川原田郎女、玉郎女、忍坂大中比賣、豐富志郎女、堅石王を生む

かけー 石川賀係（イシカハガケイ） 大寶中の人和歌をよくす其詠は萬葉集にあり

かけー 山本荷兮（ヤマモトカケイ） 俳人なり尾州藩士にして芭蕉に學ぶ櫪木堂といへり

かげあつ 梶原景惇（カヂハラカゲアツ） 國學者なり字は復初藍渠と號す讃岐の人三痴學人と呼ぶ初め景惇時と書齋となよくし之をよくせしも後捨てゝ國典を研鑽し帝王編年の一國史を編む卷數一百五十卷遂に藩に召されて國史校讐の列に入る天保年間歿す 年七十三

かげお 三島景雄（ミシマカゲオ） 國學者なり字は子緯加茂眞淵と交りて國學の研究に從ふ

かげかず 加藤景員（カトウカゲカズ） 鎭守府將軍利仁の後なり加藤五と稱して檢非違使に補せらる曾て伊勢にありて平氏の士伊藤茂光に據る時に源頼朝伊豆にありて關東の將士多く之に屬す景員二子景廉光員を携へて出でゝ仕へ石橋山に戰ふ利あらず奮鬪して頼朝を脫せしめ二子別れて安房に去る

かげかつ 上杉景勝（ウヘスギカゲカツ） 初字喜平次尾張政景の子にして上杉謙信の養子なり曾て謙信の臣深澤九鬼の二人罪あるや景勝命を奉じて之を殺し功を以て父政景の食邑を得これより軍旅に從ひて功勳を樹て永祿季年に及びて越後全國と越中の半國を領すこの時北條氏康の子景虎發はれて謙信の膝下にありこゝに至りて能登佐渡を領せり鎌倉亡後二將互に爭ひ北陸大に亂る織田信長乃ち佐久間前田の二人を能登に柴田を越前に遣はし密に此間隙に乘ぜしめむとす而して景勝武田氏の援を借りて景虎を攻めこれを滅す天正七年佐久間前田佐々の兵來りて加賀能登越中を侵略せむとす景勝これに應じて戰ひ勝敗未決せざるに信長の訃報來り諸將皆國にかへる十二年九月羽柴秀吉の越中を伐つに當り使を景勝に遣はして佐々氏を援くる事無らしめ遂に好を通ず十三年四月秀吉佐々氏を降して景勝と會見し翌年入覲を以てせり景勝之に從ひ十四年京に赴き秀吉を聚樂に訪ふ秀吉大に欣び奏請して左近衛權少將彈正大弼從四位下に叙す十六年四月景勝參議に拜す十八年三月秀吉の小田原を攻むるや景勝利家と共に從ひ後征明の役那古屋の行營に往く文祿三年景勝從三位權中納言と

爲る慶長二年小早川隆景に代りて大老に列し三年正月會津に封ぜらる百二十萬石を食む秀吉薨後直江兼續の勸めによりて石田三成の異圖に加はり列侯の印章を僞造して盟書を作り推されて盟主となる乃ち三成の策を納れて城廓を堅うし兵食をあつめ遂に家康の罪十條を疏す家康人を遣はして之を諭して西上せしむれども景勝疾と稱して赴かず こゝに於て家康東征に決し兵十一萬に將として進發せり家康小山に據り秀忠宇都宮にあり時に上國の亂を報ずる者あり家康乃ち軍を回す直江兼續景勝に勸めて追擊せむとを以てするも景勝從はずして曰く蓍盟に背きて首惡の醜名を遺すを愧づと兵を回へして會津に入るこれより又伊達最上の兩族と大に戰ひ堯も覺るの色なし慶長六年七月家康關が原に克ち續きて奥羽征討を議するや諸侯歳歸順す景勝來らず家康之を諭すに信義の道を以てせり景勝遂に服して伏見に抵る八月家康景勝の封を削り米澤三十萬石を以て之に封ず後年大阪冬の役景勝兵に將として進み鶴野堤の戰に奮戰して功あり又夏の役京師を守護し八幡に次す元和九年三月年六十九を以て薨ず

かげかど 加藤景廉（カトウカゲカド） 景員の子加藤光に據る時に頼朝伊豆にありて關東の將士多く來應す景廉父と共に隷屬して軍に赴く頼朝北條時政をして日代平兼隆を伐たしむ約していふ戰利あらば必ず火をあげて報とせむと久しうして火擧らず頼朝憂へて景廉を遣し援くるに眉尖刀を以てす景廉起きて兼隆の館に到れば時政苦戰して窘窮せり景廉從兵洲崎三郎と共に進みて門に薄る敵兵矢盡きて少しく退く景廉門を破りて亂射し三人を殪す關屋八郎といふ者あり射に逢せり一矢を景廉に報いむと欲してもとむ洲崎三郎景廉と稱して前み遂に其矢に中りて死す景廉乃ち躍り入りて八郎を斬り兼隆の寢室に及ぶ兼隆戶に倚りて敵を待つ景廉冑を眉尖刀にかけ戶間より入る其狀恰も人の窺ふに似たり兼隆直に之を斫る刀楯に當りて深く沒す景廉闖入して之を殺し火を縱ちて館を焚き首を揚げて出づ頼朝大に悅ぶ後石橋山の戰利あらず父と共に苦戰して頼朝を脫れしめ箱根に入りて斷食すると三日兄光員と共に伊豆に往き轉じて駿河に來り富士の麓に匿る頼朝兵を收めて其勢を復するに及び出でゝ從ひ日代橋遠茂を伐ちて破る壽永三年源範頼に從ひて平氏を西海に伐ち周防より豐後に赴くたまたま病を得て鎌倉に還り癒えて後奥州征伐に從ふ梶原景時の罪を得るの日其親交あるを以て坐して采邑を沒せらる實朝に逢ふの日薙髮して妙法といひ覺蓮房とよびしが承久三年に至りて遂に歿せり

かげき 香川景樹（カガハカゲキ） 有名なる歌人なり因幡の人小字銀之助三歳にしてよく文を讀み詩を善くす後姨婿奥村氏の養子となり名を純德字を眞十郎とよぶ七歳歌を清水眞園に學び儒を堀南湖に問ふ十五歳百人一首註釋を撰み名づけて百首異見といふ十八京に往き縉紳家に仕へ終に香川景柄の養子となり寛政八年を以て從六位下に叙し陸奥介に任じ尋で長門介となる乃ち景樹と改め轉居して岡崎に居り門弟子を誨ふ桂園又は東塢亭と號す天保十二年從五位下肥後守となり十四年三月卒す 年七十六 新學

異見、中左日記、桂園一枝、活言考、萬葉集拙解、古今集正義、土佐日記創見、桂園集、同隨筆、またぬ青葉、六十四番歌枕、うす氷、桂の落葉等の著書あり

かげきよ 平景清（タヒラノカゲキヨ） 忠清の次子なり侍大將となりて勇名遠く聞ゆ屋島の役源氏の士笹尾谷國俊と戰ひ其兜の鍬を つかみて引かむとす國俊爭ひて鍬爲めに斷ゆ戰利なきに及びて逃匿し攝津に來る伯父大日坊といふ者密かに己を殺さむとすと誤信し遂に之を刺すこれより人よんで惡七兵衛といふ

かげしげ 大江景繁（オホエカゲシゲ） 後宇多帝北面の士にして寵用せらる後醍醐帝の時刑部大輔に任ぜり足利尊氏の帝を花山院に幽するや景繁左右に給事す而して帝に勸めて吉野の奥賀名生に幸せしめ僧兵三百人を得て兵威大に振ふ正平七年足利義詮男山行在を犯す官軍利あらず景繁奮鬪して死す

かげすえ 梶原景季（カヂハラカゲスエ） 景時の長子源太といふ左衛門尉たり選ばれて頼朝が寢室に宿直し騎射を以てあらはる曾て駿馬生月を頼朝に乞ふ頼朝景季の不遜を惡み聽さずして磨墨を與ふ景季喜んで之に騎し駿河浮島が原に到る佐々木高綱頼朝に謁するに及び頼朝乃ち生月を與ふ高綱之を率きて景季の側を過ぐ景季大に怨み以て高綱と抗爭せむとす高綱溫言之を給き事釋くこゝに於て進んで宇治河を渉り高綱に尋いで先登す後一の谷の戰に勇戰して菊池高望を斬り西海を鎭定して鎌倉に還る頼朝曾て叔父行家を惡む行家去て義仲に據る義仲敗るゝに及んで義經と往來す頼朝命を景季に傳へ義經を誅して行家を伐たしむ景季往き還り報じて聊爾を構ふ父景時又側より謀薦す義經遂に陷れられて又陳ずるの餘地なし文治年中景季頼朝に從ひて藤原泰衡を伐つ白河關に至りて頼朝幣を關明神に奉る景季和歌を詠じて以てすゝむ正治の初め其暴戾なるに依て諸將のために斥けられ鎌倉を去り駿河狐崎に至りて死す年三十九なり

かげずみ 志内景澄（シウチカゲズミ） 源義朝の臣なり義朝敗亡の後質を平氏に納れて時變を俟つたまたま義平に會し俱に密に六波羅に入り清盛を覘ふ怪まれて捕へられ遂に斬に處せらる

かげちか 大庭景親（オホバカゲチカ） 相模の人平太景能の弟平三郎と稱す保元の亂源義朝に從ひ白河殿を攻むたまたま罪あり平氏に依て免がるゝを以て頼政の兵を起すやこれに反さて平軍に投じ往て擊つ頼朝石橋山に據るの時弟股野景久と兵三千を率ゐて伐つ日暮る依て明日を以て進まむとす時に三浦義澄火を景親及び諸家の家に放つ景親望見して曰くこれ三浦黨の爲すところ若し明日に至らば必ず彼の來り援くるにあはむと急に進んで頼朝の兵を破る頼朝杉山に走り遂に跡を晦ます既にして再び其勢を挽回するに及び兵一千を率ゐて藍澤の宿に到る頼朝兵二十萬足柄を越え甲斐源氏兵二萬駿河に屯すと聞き景親窮蹙して降る頼朝拘へて片瀨河の邊に斬る

かげちか 香川景親（カガハカゲチカ） 歌人なり梅仙堂と號す京師の人宣阿の男元文四年十一月歿す

かげつね 伊藤景綱（イトウカゲツナ） 源義朝の臣保元の亂にあたりて爲朝の守れる門に向ひ子伊藤五伊藤六と共に其矢に中りて死す

かげつね 片倉景綱（カタクラカゲツナ） 伊達政宗の臣小字小十郎のち備中といふ政宗の大志

を輔けて兵を四方に出し每戰皆勝つ後秀吉の小田原を攻むるや伊達氏會師の期に後れ疑議百出す景綱政宗に說くに順逆の理を以てし速に兵を出さしむこゝに於て伊達氏の社稷また全きを得たり大阪の役老て病む乃ち子種綱をして赴かしむ曾て秀吉景綱の武勇を賞し三春五萬石に封ぜむとす景綱辭していふ臣已に伊達氏の祿を受くと又德川氏邸宅を江戸に賜ふ景綱又うけず政宗これに白石一萬六千石を與ふその收入實に十萬石に當るといふ元和元年十月歿す年五十九

かげとき 梶原景時（カヂハラカゲトキ） 鎌倉景政の後なり平三と稱す初め族人大庭景親に從ひて頼朝を石橋山に攻む頼朝敗れて土肥杉山に走り山中の古木に匿る景親追跡して來り百方之を索む景時其所在を知ると雖思ふ所あつて佯て謂ふ山中人跡なしと俱に傍峰に登りて去る頼朝兵威漸く熾に東國將士の來集するに及び景時土肥實平に就て降る頼朝其愚を重しとし才幹を愛して重用す壽永三年範頼義經兵を率ゐて義仲を討つ景時義經の軍に屬す而して其捷を報ずるの書尤も緻密なり頼朝大に喜ぶ一谷の役景時又義經に屬して頗る專横なり義經懼ばす景時去て範頼に從ふ範頼景時に謂て曰く城堅し後機の兵の到るを俟たむと景時の子景高之を聞き令を犯して挺身城門に迫る景時景季又出でゝ戰ひ城兵二千餘騎を遂へ擊て却く時に景季一人深く敵中に入り遂に其所在を失す景時大に憂ひ再び兵を出して城中に奮鬪し景季に値ひて相共に戰ひ敵兵眞鍋四郎を斬る時人稱して梶原の二度驅といふ文治元年義經平氏を鎭西に擊たむとし舟師を渡邊福島に治す景時逆櫓を用ゐむと欲す義經聽かず義經獨風濤を犯して進み屋島に抵る景時後れて來り先鋒たらむとを請ふ義經聽かず景時罵ていふ此人大將の器にあらずと義經大に怒り刀を把て斬らむとす景時又色を作して起ち刀を叩いて前む三浦義澄等隔てゝ事無きを得しめたり景時これより義經を惡むと甚だしく書を頼朝に遺て其功を害す頼朝信じて怒る西海平定するの後景時土肥實平と同じく近畿總追捕使となる而して頼朝に面する每に義經を譏するにつとめ他日必ず寇を爲さむことを說く頼朝景時をして伐たしめむとす景時辭す乃ち土佐坊昌俊を遣はし却て破らる景時益譏を構へ暴戾日に募る畠山河越の諸將大に之を惡み密に爲すところあらむとせり正治元年頼朝の薨するに及び諸將連署して景時の暴狀を訴ふ景時辯晰する能はず親族を將ゐて其の邑一の宮に歸る幾許ならず又潛かに鎌倉に來る頼家怒て之を責む景時歸て戰備を嚴にし將に兵を舉げむとするに及び頼家比企能員をして擊たしむ二年五月景時走て駿河に赴き蘆原飯田の諸族と戰ふ景時狐崎に力戰して飯田を斬る吉香友兼驍勇あり來りて景時を伐つ景時父子敗れて死し其首を梟せらる

かげとし 赤井景俊（アカヰカゲトシ） 丹波の人源義經の臣なり一の谷の戰に奮鬪して敵二十餘人を斬り能登守教經を刺さむとして能はず遂に戰死す

かげとら 上杉景虎（ウヘスギカゲトラ） 北條氏康の第七子なり小字を三郎といひ初名を氏秀といふ曾て今川氏のために武田信玄の養子となる信玄今川氏眞と斷つに及んで小田原にかへり本姓に復す後父の上杉輝虎と和するや又其養子となり長尾

政景の女に配す政景の子景勝又輝虎に養はれて春日山にあり而して輝虎の病沒後景勝景虎相爭ひ景虎利あらず乃ち援を北條氏政に乞ふ氏政怯懦遂に來らずして北條長國等來る天正七年長國敗田主馬のために殺さる景虎の兵萎縮す景勝乃ちこれに乘じ武田勝頼の援を得て北河館に攻む景虎窮して自殺す年二十八景虎生れて容貌美麗時人之を稱せざるなし

かげのぶ 長尾景信（ナガヲカゲノブ） 左衛門尉景仲の子剃髮して昌賢と號す執事上杉憲忠に代て山内家の總務を司り兩上杉氏を扶けて山東を鎮定す時に足利成氏父持氏の上杉憲實と戰ひて自殺せるを怨み憤恚堪へずして上杉氏を殲さむと欲す昌賢太田道眞と共に謀て之を襲ひ江島に走らす後幕府の命に依て和すと雖山東の諸族御所方管領方の兩派に分れて相敵視す享德三年十二月成氏結城里見千葉宇都宮と共に急に襲ひて上杉憲忠を獲將に昌賢等に及ばむとせり昌賢越後の守護上杉定昌及び憲忠の弟房顯を招き兵を關東八州に募り幕府に乞ひて成氏征討の敎書を得以て成氏に迫る時は康正元年なり昌賢戰て利あらず走て下野に赴き成氏の兵を防ぐ寛正四年八月卒す

かげはる 安西景春（アンザイカゲハル） 祖先は義朝の臣後安房に來りて居る景春丸信朝と山下定兼を攻めて之を殺し幾許ならずして丸氏と爭ひ東條常政の援を得て遂に同氏を滅す後里見義實に攻められて降るにいたれり

かげひさ 大庭景久（オホバカゲヒサ） 景親の弟股野五郎と稱す石橋山の戰佐那田義忠と搏鬪して之を獲頼朝敗走するに及びて甲斐に赴き武田の一族を擊たむとして富士の北麓に次す夜群鼠あり出でゝ兵士の弓弦を嚙み切るこゝを以て安田工藤の兵來れども射る能はず潰走して京に來り平維盛に從て源義仲を北國に伐つ安宅の軍敗る義仲追うて成合に至る景久奮鬪劍を蒙りて自刎す（アサクラカゲヒラ）

かげひら 朝倉景衡 新井白石の妻の弟なり名は孫右衛門字は君采南山と號す鎧着用次第、本朝軍器考圖式、遺老物語、愚得隨筆等の著あり

かげひら 香川景平（カガハカゲヒラ） 京都の歌人なり景親の子寛政元年四月歿す年六十八

かげまさ 鎌倉景政（カマクラカゲマサ） 源義家の臣權五郎と稱す寛治五年清原武衡を征するの日年十六敵將鳥海彌三郎のために右眼を射らる景政大に怒りその矢を拔かずして直に彌三郎を索め鬪て之を殺す歸て其矢を拔かむとす三浦爲嗣扶けて之を拔く拔けず乃ち足を以て其面を踏み双手之を拔く景政其不禮を責めて謝言せしむといふ

かげみつ 工藤景光（クドウカゲミツ） 莊司とよぶ頼朝の兵を石橋山に起すや景光子行光と共に往く時に大庭景親頼朝の軍を破り頼朝逃れて杉山に入る景光乃ち安田義定と共に俣野景久と志太山に戰ひて之を破る後頼朝天下を掌握するに當り景光射を以て諸將の間に鳴る富士野の獵に景光鹿を射ること三發中らず此に於て喫じて曰く我十一歲にして射に志し術は養由の譽に劣らず而して今每發中らず神氣憫然たりこれ山神の馭する所ならざらむや我命此に盡きぬと暮に及びて病作り竟に死す

かげもち 甘糟景持（アマカスカゲモチ） 上杉謙信の臣にして驍勇の名あり近江守又は備中守とよぶ川中島の戰に千五百人を率ゐて

殿し軍氣肅然敵をして謙信の令するものと誤らしむ而して亂戰に會し奮鬪數刻衆寡敵せず敗兵三百人を集めて全軍を收むるに進退尤もよろしきを得敵又以て謙信の令するものと信じ感動して賞讃措かずといふ天正十年織田氏の兵と戰ひ武勳極めて多し（トホヤマカゲモト）

かげもと 遠山景元 左衛門尉に任ぜらる初名金四郎德川幕府の町奉行なり老中水野越前守の施政時代鳥居甲斐守矢部左近將監等と前後比肩して江戸の市尹となり頗る令聞あり嘉永十一年致仕して髮を削り歸雲と號す安政二年二月歿す年五十餘景元會て放蕩に耽り狹斜の巷に入りて無頼の徒と交る故を以て頗る下情に精通し法を聽くに明斷快決狡徒遂に欺く能はず

かげもり 安達景盛（アダチカゲモリ） 盛長の子彌九郎とよぶ源頼家に仕へて當時に重用せらる盛長妾の艷姿ある者を京にもとめて寵愛す頼家之を奪はむとして厚事を構ふと雖も遂げず時に參河の賊室平重廣反す頼家乃ち景盛をして之を討たしめ其留守に乘じて妾を奪ふ景盛賊徒を獲ずして歸り謾口爲めに行はる頼家誅せむとす政子救護大に勗む依て免るゝを得たり建永年間右衛門尉に任じ建保六年出羽介となり秋田城に居る後實朝の害せらるゝに及んで入道し燒地といひ大蓮房とよび高野山に入る高野入道の稱あり承久の役出でゝ京師を犯して功あり寶治二年病みて卒す（ホンマカゲユザエモン）

かげゆざえもん 本間遊佐衛門 本間勘解由左衛門本間流槍術の祖なり塚原卜傳に就て神道流の槍法を修む（オホバカゲヨシ）

かげよし 大庭景能 鎌倉權五郎景政の後大庭景房の子なり平太又は懷島權守と稱し保元の亂に景能景親と共に義朝に屬して白河殿を攻め爲朝に射られて馬より墜つ景親之を肩にして山階に去り再び返戰す頼朝の兵を起すや景能は源氏に景親は平氏に屬して相共に救護せむことを約す文治五年頼朝藤原泰衡を伐たむとするに當り之を景能に問ふ景能遽かに伐つべきを陳じて頼朝之に從ふ景能極めて軍事に馴る曾て保元の亂に於て爲朝の射術を評していふ八郎の弓矢は規制量に過ぎたり而して此人鎭西にありて騎射に便ならず我は東國に長じて馳騁に慣る依て右に避けて矢を發に入らしめず矢低く來りて膝に中れり若し此時にして法に違へば脫るゝと能はざりきと承元四年歿す

かごさかおー 籠坂王（カゴサカワウ） 仲哀帝の皇子にして應神帝の庶兄なり仲哀帝八年神功皇后と筑紫を征して行宮に崩す皇后三韓を伐てかへり應神帝を生む籠坂王おのれの天位を殺む可からざるを恐り忍熊王と共に兵を起して應神帝を播磨湯に要擊せむとすたまたま餓野に狩し野猪のために傷けられて死す忍熊王の軍敗れて遺え遂に亡ぶ

かざげつわけのおしおのかみ 風水津別之忍男神（カザケツワケノオシヲノカミ） 大屋毗古神の弟或はいふ底筒男之神の別名なりと

かさのいらつめ 笠耶女（カサノイラツメ） 沙彌滿誓が女大伴家持の妾となる天平十二年歿す和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ

かさまろ 笠麻呂（カサマロ） 入道して沙彌滿誓といふ和歌に巧にして其詠萬葉集に見ゆ慶雲中從五位上に叙せられ美濃守となり令聞あり七年從四位下に進み吉蘇路を通ずるの命を奉ず靈龜二年尾張守を兼ぬ養老元年從四位上同三年按察

使四年右大辨となる五年太上天皇のために出家して滿誓といひ七年にいたりて筑紫に觀世音寺を建つ乃ち別當たり

かざん 渡邊崋山（ワタナベクワザン） 名は定靜字は子安一の字は伯登通稱を登といふ崋山、寓繪堂、金樂堂、昨非居士、金畝居、隨安居士と號す年少にして儒に志し又畫を學ぶ長じて田原侯に仕へ年寄格に進む常に海防の忽にすべからざるを憂ひ關學を修めて頻に西洋の事情を審にす後時事を嘆じて高野長英と共に小說を作り次て攘夷排斥の意を明にす幕府監察鳥井耀藏業より洋學の徒を惡み奸言を進めて水野忠邦に告ぐるに非攘夷黨の禍害を釀すを以てす忠邦大に驚き天保十年十二月長英を捕へて終身禁錮となし崋山を處するに死一等を減じて其國に幽す十二年十月崋山憂憤して遂に自殺す時に年四十九

かざんてんのー 華山天皇（クワザンテンナウ） 御名師貞冷泉帝の太子なり圓融帝の禪を受けて位に即く後帝寵姫藤原恒子を亡ひて悲嘆措く能はず時に藤原兼道兼家等これが乘じて遜位をすゝむ帝出家して花山寺に入り入覺と號す御年十九花山法皇と稱す後又廳司殿の四君を寵す寛弘五年崩ず御年四十一

かしこ 巖本嘉志子（イハモトカシコ） 岩代若松の士島田勝次郎の女にして巖本善治の妻となる横濱フェリス女學校を卒業して同校助教授となる頗る才學あり蹴譯を巧にす後若松藩士の名を以て女學雜誌に執筆し文名大に鳴る明治二十九年二月歿す年三十三著はす所蹴譯小說小公子あり

かじこ 梶子（カヂコ） 京都祇園南林茶店の女幼にして和歌に巧みなり戯春憶こひこひて又一年もくれにけり涙の氷あすや解けなむ又は夜霰雪ならば梢にとめてあすや見む夜の霰の音のみにしての如き秀吟甚多し家集梶の葉集を著せり

かしとねのかみ 愷根神（カシコネノカミ） 一に吾屋櫃城神といふ面足神の妃なり

かしゅー 柳原霞州（ヤナギハラカシウ） 紀州藩の儒臣なり名は延蕤字は高年笠州の子詩文に尤も巧みなり寛延元年九月歿す年五十八李王の學を忌みて大に之を罵る

かしゅー 土肥霞洲（トヒカシウ） 德川幕府の儒臣なり名は元成字は允仲霞洲と號す通稱源四郎江戸の人新井白石のために德川家宣に仕ふるを得時に年纔かに十一歳正德元年韓使接待員となり致仕して後白石の遺書を校定するを以て終身の業となす寶曆七年八月歿す年六十五著書に、霞洲雜纂、新川詩集、同文集、退省私記等あり

かしょー 伊庭可笑（イバカセウ） 江戸の小說家なり猪興八と云ひ堪亭と號す天明二年六月歿す年七十七

かしょー 松浦霞沼（マツウラカセウ） 對馬侯の儒臣なり播磨の人名は儀字は禎輔號は霞沼儀右衛門と稱す年少にして木下順庵に學び祇園南海と共に木門二妙の名を得對馬侯に仕へて通交大記五十卷を撰して上る享保十三年九月歿す年五十三著隣原始錄、霞沼寓筆、通志彙編の著あり

かじょー 小林歌城（コバヤシカジヤウ） 國學者なり名は元雄字は子駿通稱由兵衛一に髡岳堂又は雪衣と號す幕府に仕へて八百石を領し本居宣長に學びて國典に精通す文久二年二月歿す年八十五

かずうじ 中村一氏（ナカムラカズウヂ） 一政の子初名孫平次豐臣秀吉に仕へて軍功あり天正十八年小田原征伐の軍に從ひ堀尾吉晴山內一豐一柳直宗等と共に先登をなす

七月功を以て駿河十四萬石を得慶長三年七月中老職となり後奉行の一人に列す關が原の亂一氏病篤し依て弟一榮をして家康の軍にしたがはしむ榮で卒す

かすがのおーいらつめ 春日大娘（カスガノオホイラツメ） 仁賢帝の后なり一名高橋皇女雄略帝の女なり高橋大娘皇女、朝嬬皇女、手白香皇女、樟氷皇女、橘仲皇后、武烈帝、眞稚皇女を生む

かすがのつぼね 春日局（カスガノツボネ） 藤原公宗の妻が侍女和歌をよくす正應中公宗反を謀りて誅せらる時に其妻娠めり局之を扶けて仁和寺の側にかくれ歌を勅使に呈して生兒の死せしを言ひ以て異圖なきを誓ふといふ

かすがのつぼね 春日局（カスガノツボネ） 德川家光の乳母なり齋藤利三の女稻葉正成の妻初名をお福といふ初め家光の生まるゝや乳母を京にもとむ婦人關左に赴くを憚り敢て應ずるものなし局聞きて板倉勝重に抵りて請ふ勝重其門地を質し以て江府に白す乃ち召されて乳媼となる正成これに依て祿せらる正成其家人に據て衣食するを愧ち婚を絶ち祿を辭して三子に與ふ時に秀忠の夫人次子國千代を愛し附侍する者漸く勢を恃み人心動搖せり局大に憂ひ伊勢に詣ると稱して駿府に赴き家康に謁して具に狀を白す家康大に驚き餘事に托して東下し諸子兄弟を見竹千代を以て主とするの議を明にし國千代を臣となす上下初めて安んじ浮議止む寛永六年京に入て後水尾帝を拜し二位に叙せらる號を得て春日局といふ十八年老を以て退く膳略智謀家光を輔佐し三代の鴻業を成就せしめたる功は到底圍閤中の人の手腕にあらざるなり曾て家光二十五にして痘を病む局身を以て代らむことを祈り以て之を癒えしむるを得たり二十年九月局病むに及び醫藥を固守して醫藥を斥け怡然として死を待つ家光其枕邊に來り局の子稻葉正利の罪を宥さむことを請る局聲を勵して曰く正利は我が子にして殿下と乳汁を分つものなりといへども凶悍不忠殿下によろしからずいま殿下儻し其罪を赦さば妾泉下に瞑するを得じと遂に歿す年六十五麟祥院と謚せり

かずこ 藤原妍子（フヂハラノカズコ） 三條帝の中宮なり摂政道長の女寛弘元年正四位下に叙し尚侍となる七年三條帝東宮にありてこれを納る長和元年二月中宮となり陽明門院を生む寛仁二年十月皇太后となり萬壽四年九月薙髮して尼となるの日崩ず年纔かに三十四妍子容貌秀麗光彩身に生ずるに似たり故を以て入內するや宣耀殿女御の寵忽ちにして衰ふといふ

かずこ 源和子（ミナモトノカズコ） 後水尾帝の皇后なり德川秀忠の女元和六年六月入內して女御となり寛永元年十一月中宮となる明正帝は此御腹なり延寶六年六月崩ず年七十二

かずしげ 青木一重（アヲキカズシゲ） 美濃の人今川氏眞の臣なり初字を所左衛門といふ氏眞幽居の後德川家康に仕へ姉川の戰にのぞみ眞柄直隆と槍を交へて之を獲味方原の役に高天神を守る後丹羽長秀に屬し天正二年豐臣秀吉に仕ふ七隊の長となる十六年從五位下に叙す民部少輔と稱せり大阪の役起るや一方の將となり和成るの日右府秀頼の命を奉じて大藏局正榮尼と共に駿府に往く歸途京に入りて板倉勝重のために拘せらる大阪

陷ると聞きて薙髪し宗佐と號せり後召されて攝州麻田一萬十九石を食み寛永五年八月にいたりて卒す年七十八

かずとよ 山内一豐（ヤマノウチカズトヨ） 尾張の人盛豐の子なり織田信長につかへ羽柴秀吉に隸屬す元正六年妻のために金を得て良馬を購ひ京師の馬揃に出づ信長見て一豐の志を嘉みし擢んで〻若狭に封ず十三年近江長濱に徙り從五位下對馬守となる十八年遠州掛川に轉じ五萬石を食む慶長五年德川家康の先鋒となりて奥州を征し中途還て美濃に戰ふ事平ぎて土佐廿四萬石を得土佐守と稱す十年九月卒す年六十

かずなお 土屋數直（ツチヤカズナホ） 土浦の城主本名定直小字辰之助武田家の士土屋忠直の子なり元和二年將軍家光に仕へて食俸五百苞を得後登用せられて老中となり大和守又は但馬守とよぶ從四位下に叙せられ侍從職となりて土浦四萬五千石を食む延寶七年卒す年七十三

かずのり 青木一矩（アヲキカズノリ） 越前北莊の城主紀伊守と稱す初め德川家康に仕へ後石田三成に黨す前田利長四萬に將として大聖寺を攻めて拔き一矩に迫る一矩大谷吉隆に援を乞ひ漸く免かるゝを得たり時に三成の使人來り吉隆に關が原に會せしむ吉隆去る利長北莊を攻む一矩降り孽で卒す然れども家康のために國を除かるといふ

かずのり 石川數矩（イシカハカズノリ） 數正の次男肥後守と稱す父の封をうけて一萬石を食む後大阪兵を起すに當りて城方に屬し遂に戰死す

かずまさ 生駒一正（イコマカズマサ） 親正の子雅樂介と稱す文祿中從五位下に叙せられ讃岐守とよぶ秀吉に仕へて明を征するの時浮田秀家に屬す秀吉薨じ來行事を構ふるに當りて一正款を家康に送る後石田三成を伐つの時先鋒となり黑田長政加藤嘉明等と共に蒲生備中の兵を破る功を以て讃岐十七萬石を得又諸侯に先ちて其家を東府に移し秀忠の賞するところとなり賦役の半を除かる十五年三月卒す

かずまさ 石川數正（イシカハカズマサ） 庸正の子初字を與七郎内記又は伯耆守と稱す世々德川家に仕ふるの故を以て數正も家康の恩遇するところとなる曾て家康の妻子今川氏眞に質たり而して家康氏眞と隙を生ず數正大に憂ひ强ひて今川氏に赴き質人に侍す永祿五年三月家康の兵今川氏の寵臣鵜殿長照の二子を擒にして還る氏眞大に憂ふ數正之を機とし關口義廣に乞ひて質子を換へむとを望む氏眞欣んで諾するに及び數正急ぎ家康に報じ質人清地夫人及信康を來して かへる時人其精忠に感ぜり姉川長篠の役數正軍功あり長湫小牧の事起るの日數正秀吉の勢威を望んで心大に動き遂に大阪に奔る秀吉其變節を憎んで厚遇するとなし數正慚悔し家居して出でず天正十四年正月召されて和泉に封ぜられ出雲守と稱すこゝに於て家康に謁するを得たり十八年七月信濃深志城十萬石を賜はる

かずます 滝川一益（タキガハカズマス） 織田信長の臣通稱は彦右衛門伊豫守と稱し左近衛將監となる永祿十二年九月北勢五郡を以て封ぜられ天正二年一向の亂を鎮めて長島城主となり盤江城を保つ十年甲斐を攻めて武田勝頼を滅ぼし上野及び信州小縣佐久二郡を得信長弑せらるゝや長島にうつり又清洲に適き三法師丸を見る後羽柴秀吉柴田勝家と隙を結ぶに

當り勝家に黨して利あらず降を請ひて轍に近江の五千石を與へらる十二年三月秀吉一益をして舊封を攻取せしむ因て一益兵を集めて木造城に據り進んで盤江を復す尋で德川家康織田信雄のために攻められて降を乞ひ其邑を納る一益木造城に還る城將富田知信狐疑して納れず一益窮して京に奔り秀吉の激怒にあひて妙心寺に薙髪し遂に越前に赴きて漂死す

かずみつ 石河一光（イシカハカズミツ） 家光の子小字兵助美濃の人なり羽柴秀吉に仕へて賤が嶽の戰に從ひ刀を振ひて敵數人を斬る猶功となすに足らずとなし更に進んで安井四郎五郎を斬り又進んで拜郷久盈と戰ふ勝敗決せざるに越後兵十數人四圍して久盈を援く一光血戰して三人を傷け瞑眩して倒れ福島正則加藤清正等に扶けらる然れども身重傷を負ひて起つ能はず遂に死す世に之を石河の三振太刀と云ふ

かずます 渡邊數馬（ワタナベカズマ） 因幡の藩士渡邊靱負の子なり事に由て同藩の士河合又五郎のために殺さる數馬荒木又右衛門の援をうけて其復讐を果す時は寛永五年十二月なり郡山侯其義勇を賞し數馬及び又右衛門に三千石の祿を與ふ

かずよし 石橋和義（イシバシカズヨシ） 足利高經の從祖兄弟なり初名氏義尾張三郎と稱す尊氏の筑紫に走れるの日止りて備前にあり桑を築きて船坂峠の隘を守る脇屋義助と戰ひ利あらず船坂爲めに潰ゆ時に尊氏還りて義助退く和義尊氏に從ひて京に入り高師直の足利直義を除かむとするに當て直義に從ふ後直義の和するに及び卿を尊氏に得む事を恨れ髪を削て心勝と改む正平十六年若狭守護職たり又丹波の守護仁木義尹を扶け小林重長と戰て克たず

かずよし 太田一吉（オホタカズヨシ） 豐臣秀吉に仕へて白杵城主たり初字を小源五といふ從五位下に叙し飛驒守と稱す慶長二年三月小早川秀秋に從て征韓の師を出し釜山浦に奮戰して韓船百七十四艘を奪ふ功を以て七萬五千石を食む秀吉薨ずるの後諸將監軍の私姦を怨ふるに當り一吉罪を得て國を除かれ九州に漂泊す後佐賀島に據りて復邑の兵を起し〻が黑田如水の諭告に從て自殺するに至れり

かせき 相原可碩（アヒハラカセキ） 有名の碁手なり寶永七年年十三にして師井上因碩と島津家に赴き琉球の使臣屋良と碁を爭ひ二目の勝を得たりといふ

かたと 藤原賢子（フヂハラノカタコ） 藤原宣孝の女母は紫式部なり高階成章に嫁し後一條帝の乳母となる太宰三位又は辨局といふ文才あり狭衣物語を著はす

かたと 藤原賢子（フヂハラノカタコ） 白河帝の中宮なり右大臣源顯房の女延久三年東宮の御息所となり其位に即くに及びて女御となり承保元年六月中宮となる敦文親王堀河帝郁芳門院令子内親王禎子内親王を生む應德元年九月崩ず年二十八堀河帝の朝皇太后を贈る

かたしひめ 堅鹽媛（カタシヒメ） 欽明天皇の妃蘇我稻目の女なり用明推古の二帝と大宅大伴の諸皇女石上部山背の諸皇子を生む後皇太夫人となりて薨ず

かたね 石上堅魚（イソノカミノカタナ） 養老二年從五位下となる神龜元年内物部を率ゐて神楯を齊宮の南北二門に立つ三年從五位上天平六年正五位下八年正五位上にいたる和歌を詠じて萬葉集に揭げらる

かたね 上毛野形名（カミツケノカタナ） 舒明帝の九年將軍に拜して蝦夷を伐つ利あらず形名壘に入りて賊の圍む所となり僅の出づるところを知らず昏に乘じて逃走せむと欲す形名の妻之を慨し酒をすゝめて形名を眠らしめ自ら劍を佩び婢姿數人と弦を鳴らして賊を脅かす形名醒めて起き奮然劍を取りて進む賊おもへらく兵勢甚旺なりと圍を解きて去る形名乃ち兵を收め更らに蝦夷を討ちて之を破る

かたの 交野（カタノ） 嵯峨帝の宮人にして有智内親王を生む弘仁十四年從五位上を授けらる

かたひて 蒲生賢秀（ガマフカタヒデ） 近江の人右兵衛大尉と稱す世々日野城に住す永祿の末年六角承禎のために信長の兵と戰ひ和成る元亀元年信長を嚮導して千草嶺を通ぜしむ天正十年信長の弑せらるゝや賢秀安土に據て死守を主張し光秀の招くを斥けて其兵を激ふ事平ぎて後功に依て田五千石を得後秀吉賢秀の女を納れて側室となせり天正十二年歿す年五十一

かたまろ 紀堅麻呂（キノカタマロ） 壬申の亂に軍功あり大錦上を贈らる天武帝の元年造高市大寺司となり七年卒す

かたゆー 宇治嘉太夫（ウジカイフ） 三絃家なり紀州の人樂を伊勢島宮内に受け井上播磨掾と指抗す延寶五年加賀掾となり好澄と稱す寶永八年正月京に歿す傳へいふ今日の大字八行稽古本は嘉太夫の創めしものなりと

かちこ 橘嘉智子（タチバナノカチコ） 嵯峨帝の后にして内舍人清友の女容姿寛雅手を垂るれば膝を過ぎ髮長くして地に委す嵯峨帝親王たりし時之を納れて妃となし登祚の後夫人となす弘仁の初め從三位に進み尊で皇后となり仁明帝淳和皇后秀良親王秀子内親王繁子内親王淳和帝立つに及び皇芳子内親王を生む淳和帝の朝太皇太后太后とあがめられ仁明帝の朝太皇太后と尊ばる承和三年二百三十町の地を朱雀院に充て明年近江の田六十四町を後院に充つ九年冷泉院に遷る嘉祥三年仁明帝不豫后之を憂へ剃髮して尼となり以て佛に祈る三月帝崩じ五月后崩ず御年六十五后佛に歸依して檀林寺を建て又學館院を興して諸子弟を教ふ世稱して檀林皇后といふ

かつあき 板倉勝明（イタクラカツアキ） 安中城主なり字は子赫甘雨又は節山人と號す幼字鶴五郎又百助といふ文政三年五月從五位下に叙し伊豫守を襲ぐ天保十四年十一月奏者番に拜し明年病を以て職を辭す勝明學を好み林櫟宇古賀侗菴に經史を聞き篠崎弼後藤機を召して文を談ず著はすところ西征紀行、東遷日記、中禪寺紀遊及文集若干卷あり又慶元以來の諸儒の著述を輯めて甘雨亭叢書と名づく又藩風の一新を期し幕府の士下曾根某を招き西洋砲歩操練を藩士に學ばしむ程ならずして洋艦來り海防の議日に喧しく西洋兵式大に行はるこゝに於て時人勝明の明敏を賞せざるなし安政四年四月卒す年四十九

かついえ 柴田勝家（シバタカツイヘ） 尾張の人世々織田氏に仕ふ勝家一に推六といひ修理亮といふ驍勇にして膽略あり天文の末信長に從て海津に戰ひ功多し弘治中林通勝の信長を廢して弟信行を立てむとするに黨し事覺れて削髮罪を謝す永祿元年正月信長遂に信行を攻めて殺す是

より勝家信長に從て美濃を徇へ近江を略す元亀元年江州長光城寺を守る佐々木承禎子義弼をして之を攻めしむ勝家力戰固く防ぐ承禎來りて兵を增し城中の水乏しきを察知して其水路を斷つ而して試に平井某を遣して和を議せしむ勝家悟りて平井を見水を銅盤に盛りて盥漱せしめ其餘る所を翻覆して毫も吝色なきを示す平井驚て歸り報ず勝家乃ち士卒をあつめて醪を設け水を酌んで酒に代へ自ら槍を取て水甕を破り以て必死を示す士卒奮起して城を出でゝ戰ひ遂に敵首七百餘級を得信長褒賞して指かす時人稱して甕破柴田といふ姉川長島の二役亦功あり天正元年京師を徇へ三年越前に朝倉氏の殘黨を平げ四年に至りて加越全く治まる信長加州を佐久間盛政に與ふ八年勝家越前の民に令して兵器を出さしめ之を收めて農具に換へ瓦治を敷きて北莊に居る十年能登を徇へ進んで上杉景勝の兵を破り魚津を拔く時に信長弑せらる勝家退き柳瀬に至る光秀滅ぶと聞きて清洲に赴き豐臣秀吉丹羽長秀池田勝入等と議し信長の後を立て自ら近江長濱を得而して意氣漸く驕傲諸將を輕視して憚らず且つ兵を路に伏せて秀吉を殺さむとせり秀吉路を更へて美濃長松を經て長濱に抵る勝家將に國に就かむとするに當りて長濱を過ぎ變を懼れて垂井に止る秀吉乃ち秀勝を送りて質となす幾許ならず信雄信孝の隙を生ずるに迨び秀吉幼主を輔佐して密に勢威を蓄ふるを見勝家心平かならず遂に信孝と通じ滝川一益と謀り佐々成政と共に兵をあげて秀吉を伐たむと圖る秀吉兵を率ゐて直ちに信孝を岐阜に攻む越前時に雪高うして援軍を出す能はず滝川一益勝家に勸めて樅りに和を講ぜしむ秀吉之を聽す勝家喜んで曰く秀吉我術中に陷れりとこれより大に守備を懈るこゝに於て秀吉約を破りて兵を出し勝家の義子勝豐を長濱に降し以て越前の街道を杜ぐ天正十一年勝家佐久間盛政前田利家不破氏次金森長近原元治をして兵二萬を率ゐて進發せしめ木本より柳瀬に逢し火を放て侵略せしむ秀吉時に伊勢にあり急を聞きて師を大垣に進め信孝を岐阜に攻めむとせり四月勝家盛政をして賤が嶽の麓なる中川清秀の寨を拔かしめ命じて速に師を班さしむ盛政奉ぜず秀吉急行して來り黎明銃擊を施して盛政の隊を崩し皷譟して激しく前み遂に盛政を擒にす勝家大に駭き援はむとして及ばず敗亡して國に退き北莊に入る秀吉來りて城を圍むに至り勝家敵する能はずして火を天主閣に縱ち夫人織田氏と共に自殺す時に年五十四

かつしげ 板倉勝重（イタクラカツシゲ） 德川幕府諸代の臣なり參河の人好重の次子初め僧となりしが兄の戰沒後家康に召されて出づ字は甚平又四郎左衛門と稱す天正十四年九月駿府々下來行となる初め家康のこれを命ずるや勝重容易に拜せず遂に妻に諮る妻曰く公事は偏に君の欲するところなりと勝重曰く然らず昔より此職を來する者苞苴に依るの害多く婦女子に發すこれ吾の職を拜するに當て豫め汝に諮る所以なりと妻其言に服し專心惟々命是れ從はむと誓ふ勝重曰くよしと乃ち服を改めて出づるに及び其裳を逆にす妻遽に之を言て改めしめむとす勝重色を作して曰く前の誓は何ぞやと妻悔歎して罪を謝すこゝに於て勝重來行となり苞苴を斥け正理を明示す

遂に小田原及び關東の代官を兼ね武州の田一萬石を賜はる慶長六年五月京都所司代となり裁決流るゝが如く威信大に行はれ翕然として衆心之にむかふ九月三河の田六千六百十石を得八年二月從五位下に叙し伊賀守と稱す十四年九月山城の田九千八百六十石を加へられ十五年從四位侍從に叙任す十六年職を辭し子重宗を推して代らしめ寛永四年四月に至りて卒す年八十三勝重幼にして浮屠に歸し還俗して吏となり未だ一たびも甲冑を帶びて陣頭に立つことなし然れども其功績多大得るところの封土又武職に居て千軍萬馬の間を馳驅せし者に優る蓋し家康の信するところ深ければなり

かつしげ　鍋島勝茂　肥前佐賀の藩主直茂の長子本名清茂初字伊平太文祿四年從五位下に叙せられ信濃守と稱す慶長征韓の役父に從て戰ふ關が原の役石田三成に黨し中頃悔いて家康に降る大阪冬の役出で〻戰ひ夏の役國を戍る寛永三年八月從四位下侍從職となる十四年島原の亂あり勝茂伐て之を平ぐ明暦三年二月卒す年七十八

かつしげ　水野勝成　忠重の子小字國松後藤十郎といふ年少にして德川家康に仕へ武田氏の兵と戰ひ嘗に武功あり天正十五年豐臣氏に從ひ佐々成政に屬して西海を定む十六年小西行長に仕へて一千石を食み幾許ならず去て黑田長政に仕ふ慶長五年再び家康に仕へ關が原の役に從ふ事平ぎて從五位下日向守となり又大阪の役に出づ元和三年九月大和郡山十萬石を領し寛永四年從四位に進む正保三年削髮して宗休といひ慶安四年三月卒す年八十八

かつしょ　那波活所　紀州侯の儒官名は道圓活所と號す後姓を祐名を觚と改む播磨の人初名信吉通稱平八郎活所年少にして京に上り藤原惺窩に就て學を修む元和元年德川家康に召され後肥後侯に仕ふ寛永七年致仕して京に還り十一年紀伊侯に聘せらる十九年幕府の召聘に當らむとして病の爲めに起く能はず正保五年正月歿す年五十四活所遺稿、活所備忘錄、帝王曆數圖等の著あり活所性剛直慢門を怖れず面を冒して能く紀州侯を諫むといふ

かつたけ　島勝猛　對馬の人左近と稱す父友保は筒井氏の臣なり勝猛年少にして兵法に通じ英邁にして機智に富む天正の初年大阪に來り秀吉に仕へむとして石田三成の爲に厚遇せらる秀吉其賢を聞き自ら之を召さむとす三成吝惜し强請して遂に己の家人たらしむ慶長三年秀吉の薨ずるや三成異圖あり上杉景勝と謀して載書を黨徒に傳へ血を刺して盟はしめ己れ職を解きて領地に赴かむとせり勝猛其不可を說き急に家康を襲ひて一擧に殲さむと請ふ三成決せず勝猛漸く其怯懦を知りて嘆息措く能はず五年七月家康上杉氏を伐つや勝猛乞ひて其石部の營を襲はむとす三成又聽かず勝猛頻に說きて許され兵を率ゐて赴けば家康既に發せり勝猛憮然として歸る後三成兵を擧ぐるに當り勝猛蒲生郷舍舞兵庫中島總左衞門等と兵二千に將として進發し垂井に屯す三成部下を率ゐて大垣に入る勝猛千義勝と騎兵七百を率ゐて株瀨川に軍し敵將中村一榮と對抗して奇兵を用ゐ大に之を破る敵將有馬豐氏來り援ふ勝猛兵を收めて退く乃ち西軍の先鋒となりて關が原に向ひ黑田長政の兵と戰ふ軍利あらざ

るに及び奮鬪して逃る藤堂高虎京極高知關が原の南に軍して追尾すると尤急なり勝猛父子將に戰死せむとす一士ありこれに代て死す義勝藤堂高治を斬りて從者のために殺され勝猛圍を衝いて走り終に其往く所を知らず

かつなが　織田勝長　信長の第五子小字御坊丸元龜三年岩村城主遠山景任の養子となり城中に發はる武田氏の將秋山晴近來り攻む堅固くして陷らず晴近苦計を講じ成を行ひて城に入り寡婦に懲して御坊丸を甲斐に質たらしむ九年十一月勝賴御坊を安土に送還するを以て信長之を元服せしめ勝長と改む尋て犬山城主となす後本能寺の變父に從ひて奮鬪し遂に死す

かつなが　紀勝長　初名梶長右大臣船守の子なり延曆四年從五位下に叙せられ明年近江守となる時に帝蝦夷を征せむと欲し勝長を東山道に遣して兵士戰器を簡閱せしむ二十二年從三位に進み大同元年中納言に轉ず尋で卒す年五十三

かつひさ　尼子勝久　誠久の第四子小字を助四郎とよぶ義久の毛利元就に亡ぼさるゝや山中幸盛勝久を京都東福寺に得乃ち之を立て〻主となす勝久は實に義久の叔父なり爰に於て幸盛元就の老衰せるを機とし永祿十一年を以て群臣を糾合し雲州に入りて檄を四方に發し四千騎を得て多賀重綱の新山の衆を拔きて之に據る又援を宇喜多直家に求め勢漸く熾なり元龜二年正月毛利輝元及び元春小早川隆景を率ゐて來攻し勝久幸盛敗走して諸衆みな陷る而して勝久等新山に入るといへども又支ふる能はず依て香賀桂島に逃れ尋いで隱岐に赴く天正元年十二月幸盛但馬に入り山名豐國に據て再び雲州を復せむと企つ二年正月勝久但州より因州に入りて諸城を拔き幾許ならずして豐國の反くにあひ敗走して但馬に走り京に入りて羽柴秀吉に因り以て雲州に入らむとを謀る依て好を信長に通じ上月城を死守して毛利氏に對す信長荒木村重滝川一益等をして救はしむと雖皆利あらず毛利氏の獲るところとなり勝久自殺し上原久綱江州に奔り幸盛降て城陷る

かつまさ　池田勝政　攝津の人初名八郎三郎筑後守又は民部大輔といふ永祿十一年池田城を孤守して信長と戰ひしが明智光秀の勸めに依て降る足利義昭食邑二萬石を與ふ十二年三好の亂黨義昭を襲ふに當り伊丹荒木の兩將と賊を桂川に擊ちて克たず遂に去る

かつもと　片桐且元　近江の人姓は源小字助作初名直盛早くより羽柴秀吉に仕ふ天正十一年賤が嶽の戰に從ひ七本槍の勇名を負ふ功を以て五千石を得十三年從五位下に叙し東市正に任ぜられ尋で豐臣の姓を賜はる十八年小田原の役に往き又功あり文祿元年征明の軍に加はり還て後小出秀政と秀賴の傅となる四年八月勳功に依て攝州茨木五千石を加賜し一萬二千石を併有す慶長六年正月大和の田一萬八千石を加賜せられ德川家康のために更らに一萬石を加へらる十九年四月方廣寺の大佛殿成るを以て洪鐘を鑄造し僧清韓をして其銘文を作らしむ文詞に國家安康の句ありこれに依て家康を呪詛するものとなし訛言百出大坂駿府の間漸く反目するに至る且元及び淀君の姆大藏尼、正榮局各駿府に往きて謝す大藏正榮家康に謁

するに家康溫言他事なきをいふのみ二人心を安んじて歸る且元後るゝ事二日にして駿府を發し兼行して途に二人に遂し曰く家康辭氣太だ激烈事態極めて難澁なり吾今之を計るに三策あり一は大坂城を避くる事一は我君の姻好に托して東下する事一は姉弟の親を名とし懶りに母君をして東國に居らしむる事これなり而して最後の策尤も可吾亦これに應ずるの策略なからむやと二人愕然歸て家康の溫潤を說き且元の言の疑ふべきを謂ふ淀君大に怒り大野治長と謀りて之を殺さむとす且元三策を上疏して急ぎ茨木にかへる既にして東西和議破れ亂起る家康且元及び其弟貞隆を召す且元辭していふ臣其事を圖らむとして反て大釁を啓く今や公を拜するの顏無しと家康本多正純をして謂はしめて曰く孤已に兵を以てするも心は尙無事を圖らむとす若し來りて從事せば固より輔穆を議すべしと且元乃ち族を率ゐて謁す依て數〻謀議して後兵を備前島に出す元和四年命ありて邸を駿府におき將に之に徙らむとして病に罹る五月强て駿府に往く時に大坂陷り秀頼死す且元深く心に疑ひ自盡して死す年正に六十

かつもと 細川勝元（ホソカハカツモト） 持之の子小字聰明六郎といふ長じて武藏守となり管領を襲ぐ享德の初め山名持豐の女を娶る時に畠山持國の子政長義就互に相閱らず兵を京に構ふ康正中勝元持豐とよかに依て持豐を恃み義鄕をこれに托す持豐これを得て權を專にせむと欲し遂に義就を延きて黨援とす斯波義廉亦同苗義敏と爭ひ持豐に投じて援を請ふこゝに於て政長義敏皆勝元の黨與となる應仁元年管領を罷めて兵をあつめ攝津丹波以下二十一州の兵十六萬餘を得持豐も但馬播磨以下十八州の師十一萬を得五月勝元義視を奉じて幕府に入り將軍の牙旗を樹つ持豐の兵來り攻むこれより兩軍相爭ひ京中の殿舍悉く兵燹にかゝりて殺風街衢に漲り喊聲風に和して兵鼓雨を喚ぶ二年勝元義視を持豐の陣に送り以て義政の心を安んじ再び管領となる文明五年三月持豐病みて卒す勝元喪に乘じて之を擊たむと欲し疾に罹る五月卒す年四十四

かつや 勝山（カツヤマ） 初め神田雉子町越前侯邸前津國風呂市郎兵衛の妾妓たりしが風呂屋遊女廢せられて江戸芳原巴屋三郎左衛門の抱となる性俠氣に富み好みて華奢異風をなす人稱して丹前勝山といふ丹前は丹後邸の前にありし故に起るか曾て髻の新風を出し時人爭うて倣ふ勝山髻これなり又和歌に工みに書を能くせり

かつよし 渥美勝吉（アツミカツヨシ） 源五郎と稱す德川家康の臣なり天正三年長篠に戰て功あり後武田勢と戰ひ常に首級を得てかへる倣に頭取源五郎の異名あり歿年月詳ならず

かつより 武田勝頼（タケダカツヨリ） 信玄の第三子小字四郎庶子を以て家を嗣ぐ初め永祿中父の命に依て諏訪氏を嗣ぎ伊奈と稱して高遠城に居る八年十一月織田信長の姪を納れて妻となす天正五年勝頼國事を執る七月兵を發して以て東美濃を侵掠せむと欲す馬場信春山縣昌景高坂昌信等皆之を諫止す勝頼聽かずして長坂釣閑跡部勝資の言に從ひしばしば德川氏の兵と爭ふ信玄の喪泄るゝに及び內外の士多く望を失ひ衆心乖離して軍

氣爲に沮喪す天正二年勝頼益侵略をつとめ美濃に入りて諸寨を陷いれ參河に入りて高天神城を降す意頗る驕慢七月甲府に還て宴を設け歡飲す高坂昌信諫めて保守を主張し織田德川と和して時機を俟ち北條氏を伐ちて山東を併呑せむ事を說く言悉く忠節の大義に本づくと雖も勝頼憚ばず長坂跡部の奸言に心醉し遂に其議を斥けて國事を二奸に托す二奸進取を勸めて已まず天正三年四月勝頼復兵を發して參河に入り五月更に進みて長篠を圍む拔く能はず德川織田精銳を盡くして來る勝頼大敗機かに身を以て免がるゝに於て國に還りて款を北條氏に送り氏政の妹女を娶りて妻とし以て援を請ふ五年十一月信長勝頼に諭して和を行はしめ互に力を協せて上杉氏を伐たむとす勝頼從はず六年十二月北條氏政上杉景虎のために師を勝頼に請ふ上杉景勝二奸に賂ひして師を收めしむ氏政聞て大に怒り遂に勝頼と相絕つ七年正月勝頼兵を出して景勝を援け遠江を伐つ七月上野に入り沼田城を拔き進みて森下以下七寨を陷れ轉じて駿河を侵し德川北條二氏と戰て利あらず八年三月沼津城を築き高坂昌貞をして之を守らしむ九年正月家康高天神城を攻めて拔き其勢熾なり武田氏の名聲日に衰ふ穴山梅雪勝頼に勸めて國境に城寨を築かしめ以て國を固うせしむ十一月勝頼兵威の洗落するを嘆じ織田氏の實子を返して親を通じ和を求む信長これに依て惝然たり十年正月木曾義昌叛して款を信長に送る二月勝頼兵二萬を率ゐて諏訪に次し義昌を攻む義昌急を信長に告ぐ信長子信忠をして先登せしめ自ら家康と前後して左右より夾擊せむとす總勢凡そ十五萬なり勝頼恐懼退きて城寨を守る信忠諏訪に入り家康駿府に來る敗報甲府に達すること櫛の齒をひくが如し勝頼の嫡子信勝年十六舊て曰く今や天祿我家に盡くたゞ潔死して祖廟に殉すべきのみと二奸及び小山田信茂眞田昌幸等類に逃避を說く勝頼之に從ふ乃ち木曾義昌の質子を磔殺して都留郡に避く信忠家康進んで府に入るに及び勝頼窮して天目山に逃れ臣族近親四十餘人と共に自殺す〻に於て武田氏滅ぶ信長勝頼の首を得て之を京に梟す勝頼年三十七法名頼山勝公號德恕と號す

かつらいしんのー 葛井親王（カツラヰシンナウ） 桓武天皇の子承和八年三品に叙し嘉祥三年四月太宰帥となつて薨ず年五十一親王幼にして穎悟射をよくせり

かつらぎのおーじ 葛城皇子（カツラギノワウジ） 欽明の皇子にして母は皇妃堅鹽媛なり

かつらと 桂兒（カツラゴ） 和歌をよくす而して其容貌美麗なり三士之を得むと欲す桂兒其各の心を傷ましむるを嘆じ無耳池に投じて死す三士嘆息し歌を作る其詠萬葉集に見ゆ桂兒一に髮兒に作る

かつらばらしんのー 葛原親王（カツラハラシンナウ） 桓武帝の皇子延曆二十二年四品となり大同三年三品にのぼり弘仁七年二品たり天長七年一品に進む常陸太守たり後式部卿に任ず又嘉承三年を以て太宰帥となり仁壽三年六月薨ず年六十八親王博學にして多聞ひろく史傳に通曉せり

かつろ 天野葛廬（アマノカツロ） 江戸の和學者名は政德字は其所圖書と稱す

かてー 瀧和亭（タキクワテイ） 南宗黴家なり名は謙字は子直和亭又關田と號す東京の人年少にして業を大岡雲峰にうけ後長崎

に赴きて沙門鐵翁に學ぶ止る事二年去て京に往き諸州を遊歷して江戸に還る時は安政元年なり乃ち幕府に仕へて歲餘を過し致仕し再び諸國を遊歷す明治維新の後東京に居を占めて其名忽ち四方に布く六年墺國博覽會に巨幅を作りて出し又内國勸業博覽會に出品してしばしば重賞を受く同世四年九月病歿す年六十九

かて｜ 内山賀邸（ウチヤマガテイ） 儒者なり名は淳時通稱傳藏賀邸又は椿軒と號す儒を學び國學を修め唐衣攝州太田獨山の徒に師たり天明八年十一月歿す

かてん 三熊花顛（ミクマクワテン） 藩家なり加賀の人名は思孝字は海棠通稱主計長崎に往きて月湖に學び後京に來りて伴蕭蹊と交はり近世畸人傳をつくる寛政六年八月歿す年六十五

かと｜ 十寸見河東（トスミカトウ） 河東節の祖なり江戸品川天滿屋藤左衛門の子なり江戸半太夫の門に入りて淨瑠璃をよくし河東節をよくせり享保十年七月歿す年四十二

かど｜ 片岡我童（カタヲカガドウ） 初め父我童四十二の厄年に此我童を生みしかば忌みて親類風璃寛の門に捨つ璃寛拾ひて一箇年養育し土之助と名づく後改めて片岡家へ養子となす六歲にして江戸に乘り込み中村座に出づ翌年仁左衛門と改名し文久三年大阪にかへる父の亡後先代我當に從て諸々の座に出で若手の腕利として評判甚高し明治八年東京に來る後二十二年四月大阪に赴き辨天座の座頭となりて人氣大なり廿八年四月歿す年四十五

かどこ 藤原廉子（フヂハラノカドコ） 後醍醐帝の后なり公廉の女建武二年四月准三宮となり興國年中皇后宮となる延文四年四月崩ず後村上及び成良親王を生む新待賢門院と號す

かどのおーじ 葛野皇子（カドノワウジ） 弘文天皇の皇子なり治部卿に拜す高市皇子薨じて儲貳定らず持統帝之を群臣に議す皇子追諡して曰ふよろしく子孫相繼ぐの制によるべし兄弟に及ぼす可らず帝嘉納す依て特に正四位下式部卿を授けら る慶雲二年十二月薨ぜり年四十五、

かどのまろ 藤原葛野麻呂（フヂハラノカドノマロ） 小黑麻呂の子なり延曆初年從六位下陸奥介より進み諸官に歷仕して正三位中納言民部卿となる嘗て唐に赴き德宗に謁して還る尙侍藥子の亂を作すに當り葛野麻呂上皇を諫めて納れられず却て罪を得むとして纔かに免かる弘仁九年薨ず年六十四

かとり 朝野鹿取（アサノカトリ） 正六位忍海連憲取の子にして朝野宿禰道長の養子となる天資英敏文才あり少にして大學に入り頗る漢史に通ず出で〜音生に試みられ文章生となり遣唐錄事となり式部少錄左大史左近衛少將藏人等の諸官を經たるも一たび喪に遭ひて解官し更らに右近衛少將より頭の左中辨となる天長中太宰大貳に任ぜられ任に赴くの日天皇群臣と宴を紫宸殿に設けてこれを餞す後參議左大辨民部卿を經て從三位越中守となり承和十年七十を以て薨ず其子十九人あり

かなおか 巨勢金岡（コセノカナヲカ） 有名の畫家なり中納言野足の子清和陽成光孝宇多醍醐の五朝に仕へ官大納言に至る嘗て勅を奉じて弘仁以後の鴻儒の風景を詠ぜしものを圖し又皇居南の廂東西の障子に歷代の鴻儒を畫く世に聖賢障子といふ金岡好んで佛像を畫き藥師地藏毘沙門天の像遺蹟として尤も世にあらはる金岡晩年に及びて薙髮し幾許ならず醍醐帝の勅に依り髮を蓄へて紫宸殿に聖賢障子を畫くといふ

かなまる 堀部金丸（ホリベカナマル） 赤穗四十七士の一人なり彌兵衛と稱す淺野長直に事へて三百石を領し長矩の時に至りて江戸留守居となる元祿中國難起るに及び養子武庸と義盟に加はり復讐の當夜老者を以て勇壯者か凌ぐ死を賜はる時年七十七

かなむら 大伴金村（オホトモノカナムラ） 室屋の孫にして談の子なり仁賢天皇崩じて皇太子未だ位に即かず大臣平群眞鳥陰に不軌を圖る其子鮪又罪を太子に得金村命を奉じて鮪を伐ち併せて眞鳥を誅す乃ち太子を奉じて位に即かしむ武烈帝之なり帝崩じて又繼體帝を立て手白香皇女を迎へて皇后となす欽明帝の元年帝難波に幸し新羅を伐たむとす物部尾輿曰く新羅の怨を蓄ふは任那四縣を以て百濟に與ふるに由ると依て斥くるに金村計を失するを以てす金村恐ちて住吉に歸り病と稱して朝せず帝使を遣して之を慰撫すること懇なり金村實に仁賢より以下欽明に至るの六朝に歷事し大連となる蓋し患長の臣といふべし

かなめ 櫻田の刺客なり鯉淵要人（コヒブチカナメ） 有村等の諸士と井伊大老を要擊し其首を獲て辰口に走る然れども身重傷を蒙りて斃る時は萬延元年三月なり

かなやまびこのかみ 金山毘古神（カナヤマヒコノカミ） 伊非諸伊非册尊の子記にいはく母尊柯遇實智神を生み病んで苦惱の時嘔吐の中より生ると

かなやまびめのかみ 金山毘賣神（カナヤマヒメノカミ） 金山毘古神より生れし女神なり

かねあき 東儀兼秋（トウギカネアキ） 天王寺の樂人なり本姓秦氏元龜中召されて樂官となり因幡守に任ぜらる寛元二年四月卒す年八十五

かねあき 豐原兼秋（トヨハラノカネアキ） 伶人なり清秋の子後醍醐帝に事へて笙師たり從五位上右近衛將監に至る元弘三年三月卒す年四十七

かねいえ 藤原兼家（フヂハラノカネイヘ） 右大臣師輔の子兄伊尹の後を承けて關白となれり初め兼家の女超子冷泉上皇の宮にありて三條帝を生む兄兼通之を忌む兼家又女詮子を宮中にすゝめむとす兼通大に怒り疾を忍んで朝し關白を左大臣頼忠に讓る尋で兼通薨ず兼家漸く右大臣に至る詮子圓融帝の宮に入て女御となり懷仁を生む頼忠の女遵子中宮となるに及びて兼家不平禁ずる能はず家居して朝せず帝大に憂へ兼家を召して懷仁を皇太子となすの意を告ぐ兼家始めて喜ぶこゝに於て花山帝立ち懷仁儲君たり然れども頼忠尙關白に位し帝の舅中納言義懷威權あり兼家志を得ずして又家居す兼家の子道兼花山帝を勸めて遜位せしむるに當り懷仁位に即き兼家遂に攝す時は寛和二年なり永祚元年太政大臣となり薙髮して如寶とよぶ尋で薨ず年六十二法興院大臣又は東三條殿といふ

かねと 藤原懷子（フヂハラノカネコ） 冷泉帝の皇后なり太政大臣伊尹の女安和元年入内し康保四年女御天延三年薨ず年三十一華山帝及び宗子内親王尊子内親王を生む

かねさだ 一條兼定（イチデウカネサダ） 右近衛中將藤原房基の子母は大友義鑑の女なり父の後を嗣ぎて土佐の國司となり天文二十年從五位下左近衛少將に任ぜらる尋で

從三位中將に陞り權中納言に進む兼定兇暴國人を苦しむるの故を以て天正元年權臣長曾我部元親のために逐はる兼定乃逃れて豐後に往き大友義統に據らむとせしも納れられず依て伊豫に止り再舉を企てゝ克たず吉良親貞の臣大江某の爲に殺さる

かねざね 藤原兼實（フヂハラノカネザネ） 關白藤原忠道の子仁安中右大臣となり承安中從一位に叙す壽永二年平氏安德帝を奉じて西海に奔る兼實法皇に勸めて後鳥羽帝を立つ兼實賢明にして率直故を以て法皇のために懼ばれずたゞ源頼朝の重んずる所となる文治中頼朝京に來て兼實を攝政にすゝめ且つ上書して自ら訴ふこれ法皇の義經に宣旨を下すが故なり五年兼實太政大臣となり建久二年關白となる時に權大納言源通親兼實を惡みて帝及び頼朝に譖すこゝに於て兼實職を退き髮を削て圓證とよぶ承元元年薨ず年六十世に月輪關白といふ嘗て錄するところの書に玉海あり

かねさだ 吉田兼貞（ヨシダカネサダ） 赤穗四十七士の一人澤右衞門といふ國難起るに及び江戸に來りて田口左平太とよび復仇の策を講ず死を賜はる時年廿九

かねすえ 藤原兼季（フヂハラノカネスヱ） 實兼の三子元亨二年八月右大臣となる菊亭右大臣又は今出川殿とよぶ

かねすけ 藤原兼輔（フヂハラノカネスケ） 利基の子從三位中納言に叙任せらる承平三年二月薨ず年五十七世に堤中納言といふ嘗て堤中納言物語を著はせり

かねすけ 吉田兼亮（ヨシダカネスケ） 赤穗四十七士の一人なり忠左衞門と稱す淺野長矩に仕へて足輕頭となり二百石を食む國難作るに及び深く大石良雄の信ずる處となりて其同盟を江戸に統監し自ら姓を變じて田口一眞或は篠崎太郎兵衞とよぶ洗殺寬裕にして衆を率ゐるの器量あり復仇の事終るの後死を賜はる時に年六十三

かねたか 關兼隆（セキカネタカ） 信兼の季子にして檢非違使となる和泉判官といへり後伊豆目代となり源頼朝のために襲はれて戰死す

かねたか 藤原兼隆（フヂハラノカネタカ） 豐岐守護代に出て崎古襲來の時勇戰して死す

かねたか 藤原兼孝（フヂハラノカネタカ） 植通の子天正中關白となる法名圓性寛永十四年正月薨ず年八十四後月輪關白と號す

かねただ 藤原兼忠（フヂハラノカネタダ） 基忠の子なりと然れども實は兼平の子なり永仁四年七月關白となる正安元年七月攝政となり三年八月薨ず猿熊殿又は歡喜園攝政とよぶ

かねたね 千葉兼胤（チバカネタネ） 陸奥守貞胤の曾孫にして滿胤の子なり千葉介なつぎ下總千葉城に居りて修理大夫に任ぜらる應永十七年新田貞方足利滿兼の死を聞きて兵を擧げむと欲し事漏る兼胤貞方を捕へて之を鎌倉に送り七里が濱に斬る二十三年勇上杉禪秀に應じて兵を起し二十四年足利持氏に降る

かねたね 平田鐵胤（ヒラタカネタネ） 國學者なり篤胤の養子通稱內藏介後大角明治初年大學大博士後大教正となり後今上天皇の侍講にあげらる明治十三年十月歿す年八十二

かねつぐ 直江兼續（ナホエカネツグ） 樋口兼光の後にして越後の人なり父は上杉氏の小夫兼續美貌を以て輝虎の爲登用せられ直江山城守とよぶ性多才膽略あり遂に擢

でられて老臣に進み輝虎の子景勝を輔く石田三成の異圖を語るや兼續又主を戒して代らむとするの心あり依て勸むるに蒲生氏を滅して上杉の封土を移し事を東奥にあげて前後より夾擊するの策を以てす三成大に欣び文祿四年終に蒲生氏郷を毒殺し慶長三年氏郷の子秀行を宇都宮に貶し景勝をして會津に徙らしめ兼續を米澤に封じて廿二萬石を食ましむ秀吉薨ずるの後三成兼續と謀て列侯の印章を僞造し盟書を裁す而して兼續景勝に勸めて難を作さしむ德川家康風聞を耳にして大に驚き使を發して景勝を誨諭すれども應ぜず使再三にして事全く破裂し家康親征に決す兼續兵三萬を率ゐて會津山內より出で佐竹義宣の兵と合して家康の後より夾擊せむとす家康上野に到る時上國の變あり乃ち方向を轉じて之に赴く兼續景勝に勸めて進擊せむとす景勝心に叛臣となるの不義を懼ばず固く其議を却けて會津に止まる兼續嗟嘆して措かず家康關が原に勝つに及びて景勝の武勇を名とし深く之を罪せずして封を米澤に徙し兼續の全領を沒して六萬石の割與を受けしむ時は慶長六年なり兼續五萬石を同僚に分ち五千石を小祿の士庶に與へ五千石を厨房の料に供し又晦日の觀氣なし大阪の役起るや出でゝ軍に從ひ事平ぎて後文學に耽る元和五年十二月卒す年六十

かねつぐ 藤原兼經（フヂハラノカネツネ） 家實の子嘉順三年三月攝政仁治元年十月太政大臣同二年職を辭し寶治元年正月再任す岡屋關白といふ其記錄に岡屋關白記あり

かねつね 三村包常（ミムラカネツネ） 赤穗四十七士の一人なり次郎左衞門といふ淺野長矩に仕へて厨下の小吏となる國難作りて衆結盟するに當り包常卑賤を以て斥けらる包常懇請誠意面に溢る大石良雄其志を知て遂に之を許す復讐の時後門の隙に加ぼり大槌を振て門を排して入る死を賜はる時年三十七

かねと 船曳鐵門（フナビキカネト） 儒者なり筑後の人幼名鐵之助大季又は大武と稱し若草舍或は蓬壺といふ世々大石御祖神社の祠官たり鐵門年少にして儒を池尻葛覃に學び國典を中島廣足橘守部に學ぶ明治六年厩島の宮司となりしより香椎高

良等に轉任し權少教正となる國史研究に熱心に和歌をよくし著書頗る多し明治二十八年二月歿す年七十三

かねと 大河兼任（オホカハカネタフ） 藤原泰衡の將士なり泰衡の滅後源義經又は義仲の子朝日冠者と稱して出羽近傍を略取す頼朝足別義兼常胤をして赴き伐たしむ兼任連戰敗走遂に村民のために殺さる

かねと 中原兼遠（ナカハラカネトホ） 信濃の木曾義仲を養ひて遂に一方の親將たらしむ其子に樋口次郎兼光今井四郎兼平あり

かねながしんの 懐良親王（カネナガシンノウ） 後醍醐天皇の皇子母は藤原氏なり式部卿となる延元元年足利尊氏の闕を犯すに當り懐良從ひて延曆寺に奉ず而して帝尊氏と和するに當り奔りて吉野に匿る三年征西大將軍となり筑紫を鎭撫す菊池武光力めて輔佐の任に當る興國三年島津貞久を伐ち之を破る正平二年一色範氏を走らし筑前に入る大友少貳皆來り降る功を以て一品に叙せらる十三年尊氏一色直氏を筑紫の探題となす武光擊て之を走らす少貳頼尙反して義詮に應ず武光懐良を奉じて大原に職ひ苦戰し

て克つ懷良遂に其終る所を知らずと世に鎭西宮九州宮阿蘇宮肥後宮と稱せり

かねひで 岡野包秀（カノカネヒデ） 赤穗四十七士の一人なり金右衛門と稱す國難作るに及びて復讐黨に加盟し遂に本志を遂ぐ死を賜はる時年廿四

かねひら 今井兼平（イマヰノカネヒラ） 木曾義仲の臣なり本姓は中原信濃權守兼遠の子樋口次郎兼光の弟今井四郎と稱す驍勇絶倫木曾四天王の一人なり壽永二年四月燧山の城陷る兼平兵六千に將として越前に入り平盛俊と般若野に戰ひ大に之を敗り二千餘人を斬る義仲法住寺殿を犯すや兼平兵三百を率ゐて瓦阪より進み火を宮殿に放ち射て主水正清原近業を殺せり而して義仲敵となりて賴朝の軍之を討つや兼平源義弘と兵五百に將とし勢多に拒ぎ稻毛重成榛谷重朝と戰ふ破れて敵京師に入るに至り義仲と粟津野原に逢ひ散兵を集めて再び戰ふ兵四五百悉く靡く義仲單騎逃れて深田に陷り敵の殺すところとなるに及び兼平奮然八矢を射て八騎を殺し刀を銜みて馬より逆に墜ちて死す（フザハラノカネヒラ）

かねひら 藤原兼平（フザハラノカネヒラ） 家實の子鷹司家の祖なり建長四年十月攝政十一月太政大臣六年十二月關白弘長元年四月辭職す建治元年十月再び攝政二年再び太政大臣又辭して關白となる永仁二年八月薨ず年六十七稱念院と號す

かねふさ 粟田兼房（アハダカネフサ） 夢に人麿に逢ひ寤めて之を畫像となし壁間にかけて崇敬す爲に和歌をよむに佳句日を衝いて出づといふ後畫像を白河帝に奉る

かねふさ 藤原兼房（フザハラノカネフサ） 兼實の弟なり建久二年三月太政大臣となる建保五年三月薨ず禪林寺と號す

かねふゆ 藤原兼冬（フザハラノカネフユ） 關白房道の子天文二十二年正月關白となり尋で左大臣となる二十三年二月薨ず年二十六尤も藝に工みなり

かねみお！ 兼覽王（カネミヲウ） 仁明帝の孫國康親王の子なり宮內卿正四位下に至る和歌に工みなり其詠古今集中に見ゆ

かねみち 藤原兼通（フザハラノカネミチ） 右大臣師輔の子弟兼家と權を爭ひ常に其己れを凌ぐを忌む嘗て妹安子に依て攝關は兄弟序を以て相及ぶべきの制を書せしめ後之を圓融帝に上て遂に內覽を許さる蓋し帝兼通を厭ふと雖母后の意に忤ふ事能はざればなり天延二年正二位太政大臣となり萬機を關白す三年從一位にすゝむ貞元二年病あり乃ち職を辭す許されず時に兼家女詮子を帝にすゝめむと欲す兼通憤て曰く我女既に中宮にあり彼何を以て又女をすゝめむとする乎と幾許ならずして兼家の女超子三條帝を生む兼通益〻心平かならずこゝに於て右大臣賴忠を左大臣にすゝめ密かに以て己に代らしめむと欲す冬兼通病篤し兼家聞て以爲らく既に亡ぶと直ちに入朝して帝に奏請す途兼家の門を過ざる兼通以てわが病を訪ふものとし座を拂て峽つ入らずして宮廷に赴く兼通怫然として怒り病をつとめて朝し急に除目を行ひて賴忠を關白に濟時を左近衛大將に任じ兼家の職を褫ひて治部卿に左遷す尋で薨ず年五十臨して遠江公或は忠義公といふ世に又堀河殿とよべり（ヒグチノカネミツ）

かねみつ 樋口兼光 信濃權守兼遠の子二郎と稱す弟兼平根井幸親楯親忠と併せて源義仲の四天王とよばる礪波の戰篠原の戰共に先鋒となりて勇戰し武勳甚多し既にして義仲敗るゝに及び

兼光兒玉黨に依て降る兒玉黨範頼義經に哀訴して死を宥めむことを請ふ然れども兼光遂に法住寺殿を攻めて宮人を殺戮す故に公卿固く其死を唱ふこゝに於て斬らる

かねもと 兼元（カネモト） 美濃の刀匠兼宗の子孫六といふ赤阪關の一派にして名手なり文安年中の人

かねもと 藤原兼基（フザハラノカネモト） 關白藤原師忠の子といへども實は關白良實の子なり永仁六年攝政尋で左大臣となる正安二年十二月關白嘉元三年四月辭職す德治三年七月出家して圓空とよぶ光明院と號す

かねもり 平兼盛（タヒラノカネモリ） 篤行の子なり和歌をよくす年少大學に入りて及第し天曆に至て越前權守より從五位上駿河守にいたる天德歌會の日壬生忠見の歌と對比せらるゝ而して衆判兼盛の詠を勝れりとなす兼盛欣抃其餘の勝負を聞かずして倉皇拜辭して退けりといふ正曆元年卒す

かねやす 瀨尾兼康（セノヲカネヤス） 太郎といふ平維盛の臣備中瀨尾莊を領す壽永中源義仲と戰ひて捕へられ宥されて倉光成澄の弟成氏に屬す兼康成氏を伴ひて瀨尾に赴き弟宗康と共に成氏を殺す義仲聞て大に怒り今井兼平をして伐たしむ兼康大敗備中板倉河を保つ追兵至る兼康成澄と相搏ちて之を殺し弟宗康を救はむとして追兵に圍まる兼康宗康を刄し自らも又死す

かねより 東儀兼賴（トウギカネヨリ） 天王寺の樂人なり本姓秦氏安倍季兼の孫にして兼延の子元祿中辻高秀等と並稱せられて一方の泰斗と仰がる從四位下越前守を以て正德二年四月卒す年八十一

かねら 一條兼良（イチデウカネラ） 左大臣從一位關白經嗣の第二子なり姓は藤原氏父の後を嗣ぎて從一位左大臣にのぼり永享四年攝政と爲る文安三年正月太政大臣四年六月關白氏長者となる初め三條持基の關白となるや兼良及び近衛房嗣之を得むと望む而して持基の薨後房嗣拜せらる兼良怒て將軍足利義勝の母勝智藤夫人に愬訴し終に房嗣を辭せしめて之に代る享德二年職を解きて三宮に准じ食邑三千戶隨身兵仗年官年爵を賜はる應仁元年關白に補し二年八月細川山名の亂を九條の邸に避く兼良初め連歌を編し菟玖波集に續ぎ新玉集と名じて勅撰に擬せむとし兵火に遭ひて之を失ふ文明二年七月關白を辭し四年美濃に游びて藤河の記を作る五年六月薙髮して法名を覺惠と號し同十三年四月薨ず年八十謚して後成恩寺と號せり兼良博學多識和歌に妙に神佛兩道に通じ朝儀公事に熟達す彼の新玉集燒失の顚末を叙して筆占と名付けしがなほ外に公事根源、文明一統記、東齋隨筆、桃華蘂葉、樵談治要、花鳥餘情、歌林良材、小夜寢覺等の數書を著せり又桃華坊に居りて桃華老人桃華野人三關老人と稱せり

かばふのいらつめ 蒲生娘子（カバフノイラツメ） 遊行せる女なり天平寶龜中の人和歌に工みなり其詠萬葉集に見ゆ

かへ！ 高田屋嘉兵衛（タカタヤカヘヒヱ） 尾張の人彌吉の長男寛政十一年幕命に應じて擇捉島に航し艱難を嘗むること數旬遂に漁場十七ヶ處を作り衣食の道を講じて此島を拓く享和三年功を以て公廩を受け官船を領し盛に漁業に從ふ乃ち別廈を松前箱館に開く文化九年魯人力骨兒禿鷲きに我商船を劫奪して捕はれたる羅

引以下をかへさざるを恨み嘉兵衛等を脅かしてカムサツカに到らしむ嘉兵衛赴きて魯語に通じ力骨兒禿と議して再び擇捉にかへり松前に往き幕府に乞ひて羅引以下を釋し掠奪する處の財物を償還せしめ事始めて解く十一年三月嘉兵衛故職に復して官の賞與を得家富み業榮え盛名四方に聞ゆ文政十年病を以て逝けり年五十九

かぼちゃのうちなり 加保茶浦成（カボチャノウラナリ） 狂歌師なり又後の元成といふ初代元成の養子金山永順の實子なり吉原大文字樓三世の主人となりて藷を抱一上人に學び中の町兩側の灯籠に藷を又江戸節を善くし狂歌を淺草庵春村に學ぶ又十返舍一九の門に入り三亭春馬、九返舍一八、二世十返舍一九、二世八文字屋自笑と號し多氣競、霞帶春空解等を著はす弘化三年九月歿す

かぼちゃのもとなり 加保茶元成（カボチャノモトナリ） 狂歌師なり吉原大文字屋文樓の養子にして俳名を宗園と號す通稱市兵衛妻を秋風女房といひ又狂歌をよくす文政十一年六月歿す元成曾て千束の別莊に茶を煮頓阿作の人丸像を安置し其忌日には雅人をあつめて樂めりといふ

かまたり 藤原鎌足（フジハラノカマタリ） 本姓は中臣氏御食子の子なり皇極天皇の朝神祇伯となる孝德帝及び天智帝の皇子たるの日皆親近を得蘇我入鹿朝權を恣にするに當て鎌足大に之を憂ひ天智帝と謀て蘇を結び三韓入朝の時に於て遂に誅戮を加へ其父蝦夷を併せて其家を滅す皇極帝位を天智帝に傳へむとす鎌足泐めて孝德帝に讓らしむ帝立つ鎌足乃ち內臣となり大錦冠を授けらる天智帝立つに及び益〻重用せらる二年十月病む帝之に大織冠を授け大臣に列し姓藤原を賜ふ因て藤原內大臣と稱す尋で薨ず

かみながひめ 髮長媛（カミナガヒメ） 日向國諸縣主牛諸井の女にして美人なり其父之を應神天皇に献ず皇子大鷦鷯之を總ふるの色あり天皇乃ち之を皇子に賜ふ媛嘆じて曰く皇子に仕ふるは父の意に背くなりと遂に死す

かむぐしのおーじ 神櫛皇子（カムクシノワウシ） 景行天皇の皇子にして母は五十河媛なり

かむやいみみのみこと 神八井耳命（カムヤヰミミノミコト） 神武天皇の皇子にして綏靖天皇の同母兄なり手研耳命の不軌を謀るや綏靖天皇と共に之を誅す同天皇の四年四月薨ぜり

かめ 安藤龜（アンドウカメ） 丹波の人なり安藤朴翁の妻にして和歌に巧みなり明正帝呼ぶに今式部の稱を以てせらる寛文八年卅九を以て歿す遺集を今式部集といふ

かめぎく 龜菊（カメギク） 後鳥羽院の寵妃なり元は京の白拍子にして容色あり上皇地を攝津に賜ふ地頭命を奉ぜずして暴狀極なし龜菊憂ひて之を訴ふ上皇鎌倉に命じて裁斷せしむ北條義時命を奉ぜず事結んで公武隙を生じ大亂生ず上皇隱岐遷幸の日に當り龜菊乃ち之に從ふ

かめさぶろーー 中川龜三郎（ナカガハカメサブラウ） 圓菲の名人にして方圓社の八段なり十二世本因坊文和の三男幼名長三郎後將軍の名を諱みて龜三郎と改む尋で中川の姓を冒す義兄秀策と共に本因坊秀和を師とし慶應二年六段となる明治十二年村瀨秀甫を招きて方圓社を興し秀甫を推して社長となす十四年七段に進み十九年秀甫の後を承けて社長となる卅一年隱居して巖崎健造を推し自ら八段にのぼる卅六年の春病を得同年十月歿す年六十七

かめやまてんのー 龜山天皇（カメヤマテンノウ） 諱は恒仁後嵯峨帝の第三子位に即くや後嵯峨上皇院中にありて政を聽く在位十五年改元三位を太子世仁に讓る薨去して佛に歸し金剛源と稱す嘉元三年崩ず齡五十七

かよーしんのー 賀陽親王（カヤウシンノウ） 桓武天皇の子にして母は多治比眞宗なり弘仁中四品に叙せられ刑部卿となる天長中三品に進み齊衡中二品となる貞觀十三年治部卿を以て薨ぜり年七十八親王性意匠に富む一年夏旱して寺田枯れむとす王乃ち木童を作る高四尺許双手に器を捧ぐ機巧を備へ之を田中に置く器中に水を盛れば水忽ち沸騰して童子の面を射る此を見て衆人欣び爭うて水を注ぐ爲めに寺田枯れざることを得たり

からく 可樂（カラク） 落語家なり三笑亭といふ通稱京屋又五郎櫛工を業とす好んで稗史小說を讀み之を翻案して人に語るに妙極りなし寛政十年六月大阪の人岡本萬作始めて神田豐島町藥店に來り頓作輕口噺を演ずこれ東都落語寄席の嚆矢なり可樂之に倣ひて自ら山生亭花樂と號し講筵を下谷柳の稻荷境內に設けしが其伎萬作に及ばざるを以て聽者尠し乃ち武州川越に去て研き十月を以て再び聽者をあつむこゝに於て名聲四方に聞ゆ後名を改めて可樂となし寛政十二年を以て落語會を柳橋に開く文化十一年謎坊主春雪に倣ひて謎を始め好評あり曾て德川家齊の爲めに召されて林家庄藏初代圓生と共に其伎を演ず可樂將棊の殿樣といふを演じて褒賞せらるこれより後屢〻召されて落語の噂將軍家に高かりしが初代柳橋卑猥の話を演じたるより遂に召すことなきに至れり可樂天保四年八月を以て歿す

からくに 壹岐韓國（イキノカラクニ） 大友帝の臣なり壬申の亂天武帝の將坂本財を衛我川に擊て利あり進んで蒼池に戰ひ大伴吹負の敗る所となる但し其終りを知らず

からどろもきつしゅー 唐衣橘州（カラゴロモキツシウ） 狂歌師なり田安侯の臣にして小島源之助といふ名は泰從字は溫之後謹之と改む醉竹庵無碍館の別號あり內山椿軒に詩を學び又歌をよむ後四方赤良と共に狂歌を中興すといふ享和二年七月歿せり年六十

からたち 江南亭唐立（カウナンテイカラタチ） 小說家なり十返舍一九の門に入りて愚舍一得といふ通稱中田慶治江戸の人なり

かりたまろ 坂上苅田麻呂（サカノウヘノカリタマロ） 阿智使主の後坂上犬養の子なり惠美仲麻呂の反に當りて其子訓儒麻呂を射殺するの功を以て從四位下に叙せられ姓大忌寸を賜はり中衛少將兼甲斐守となる神護中勳二等を授けられ功田二十町を賜ひ其子に傳へしむ寶龜中道鏡の奸計を告げ從四位上に叙せられ陸奧鎭守府將軍に拜し中衛中將に補し丹波守を兼れ天應元年右近衛士督となる延曆中氷上川機の事に坐し職を褫はる數月にして右衛士督に復せり四年從三位下總守にうつり五年薨ず年五十九

かる 輕（カル） 一文字屋次郎左衛門の女容色あり大石良雄納れて妾となす初め良雄仇家の注意を避けむと欲して殊に女色に耽り花柳の巷に遊ぶ進藤小山相謀り輕をすゝめて枕席に侍らしめ以て遊蕩の心を抑へむとせり輕義烈の志あり良雄の決意を聞て他に漏らすの嫌を避け刀を引て自盡すといふ

かわかつ 秦河勝（ハタカハカツ） 秦始皇帝の後と

いふ河勝は大和の人聖德太子に仕ふ推古帝の十一年佛像を奉じて峰岡寺を創む皇極帝の三年大生部多といふ者妖敎を說て民を惑はす河勝恚て之を捕へ笞刑に處す後太子の守屋と戰ふに當り其黨の馭者となつて生駒山を馳驅すといふ

かわしまのおーじ 川島皇子 天智天皇の皇子天武帝の九年詔を奉じ忍壁親王並に諸臣と帝紀及び上古の事を撰す大津皇子と親交ありしといへども其叛に黨せず而して之を朝廷に告ぐ持統帝の五年九月薨ず

かわつぐ 氷上川繼 驃騎の第二子なり從四位下因幡守となる延曆中不軌を圖りて因へられ遂に遠流に處せらる後赦にあひ大同二年典藥頭に任ぜらる

かわなり 百濟河成 本姓餘其先は百濟人なり大同中左近衛府に仕へ宮中に召さる弘仁十四年奚作權少目に轉じ外從五位下に叙し承和中備中掾介を歷て從五位下安芸介となる仁壽三年八月卒す河成强弓をひき衞事に精し山川草木の類描くものみな生氣あり

かんいんほーしんのー 寛胤法親王 後伏見帝の第七皇子二品に叙せらる後勸修寺に入り永和二年薨ず

かんえもん 藤間勘右衛門 濱町藤間の祖なり初世勘十郎の門人振付を以て業となせり

かんえもん 宮居眼右衛門 强力無雙の士なり元龜元年眼右衛門出で、衆に勝ち重藤の弓を賜はる

かんかい 松崎觀海 篠山侯の儒臣にして名は惟時字は君修又子默才藏と稱す觀瀾の子なり初め太宰春臺に從ひて學び後父及び高闌亭に修む居常擊劍に志して文武兩道の備を忘れず盍し熊澤蕃山の所論を奉ずるなり安永四年十二月歿す年五十一

かんとー 朱樂菅江 姓は山崎名は景貫通稱を鄕助とよぶ幕府御手先與力にして牛込二十騎町に住す初め內山椿軒の門に遊び和漢の學を修め和歌を善くす後蜀山人等と共に狂歌をつくり名聲天下に聞ゆ菅江曾て憚ありて漢江と改稱せしが日光宮公遵親王の言に依て舊稱に復せり一に淮南堂芬陀利華庵とよぶ元文三年十月生れて寛政十年十二月歿す墓所は青山青原寺著書には大抵御覽狂歌大體等數種あり

かんとー 芝甘交 江戸の小說家にして一拂齋といふ通稱は大伴寛十郎芝全交の門人なり文化元年二月歿す

かんどろー 杵屋勘五郎 初代 狂言師なり俳名道廣初め大藏流の狂言を學び後三絃に志す寛永二十年九月歿す年七十

かんどろー 杵屋勘五郎 三代 三絃の名手なり初名喜三郎初め狂言の脇師をつとむ貞享元年初めて役者を止めて三味線彈となり七段獅子の秘曲をつくる又所作を工夫して歌舞伎所作事のもとゐを開けり後隱居して勘五郎と改め元祿十二年十月歿す年八十一

かんさい 市河寛齋 富山藩の儒者なり名は世寧字は子靜一の字は嘉祥、牛江又は江湖詩老等の別號あり通稱小左衛門上野の人少うして業を林大學頭に受け昌平黌の學員長となる寛政三年富山侯に仕へ職に居る二十餘年老を以て閑居し文政三年七月に至りて歿す年七十二著はすところ日本詩記、宋百花

西野漣筆、北里歌、三家妙絕、金石私誌、牛江暇筆、隨園詩鈔、上毛志等あり

かんさい 貝原寛齋 福岡藩の醫員名は利貞篤信の父寛文五年十二月歿す

かんざえもん 中島勘左衛門 初代 大阪の俳優なり俳名是少又は芝樂閣といふ和實の上手を以て其名を唱へらる享保元年四月歿す年五十五

かんざえもん 中島勘左衛門 二代 大阪の俳優にして初代の子初名勘六俳名是少寶曆十二年八月歿す年五十六

かんざぶろー 中村勘三郎 初代 江戸劇場の祖なり中村一氏の弟右近の孫にて父を勘兵衛といふ初名彦作道順と號す大藏流の狂言を學び之より一種の猿樂をあみ出せり名付けて猿若といふ寛永元年二月始めて今樣歌舞伎狂言を興行す萬治元年歿す

かんざぶろー 明石勘三郎 江戸の俳優二代目猿若勘三郎の事なり幕府より明石の姓を得て太夫元をつとむ父を中村勘三郎とよぶ

かんざん 池田冠山 因幡藩の支家なり名は定常字は君倫松平縫殿頭と稱す寛政中幕府柳間詰となり毛利高標市橋長昭と並んで諸侯中の三文學者と稱せらる天明五年從五位下に叙す冠山好學百科の書を涉獵し都下の鴻儒と交る文政十二年七月卒す

かんざん 岡島冠山 儒者なり名は璞字は援之後玉成と改む冠山は其號なり始め萩藩に仕へ後家居して性理の學を研究す足利侯之を聘して江戸に迎へ又京都に伴ふ冠山華音をよくし稗史小說に精通せり享保十三年正月歿す年五十五通俗水滸傳、通俗元明軍記、通俗明清軍談、華音唐詩選等の著あり

かんじ 丸岡莞爾 高知の人吉村長俊と稱し後舊姓丸岡に復す夙に勤王の志あり坂本龍馬等と交り密に藩を脫して長崎に居る維新の業定まるに當り京に上りて官に仕ふ明治九年式部助となり一等警典を兼れ十二年從五位を授けらる後內務大書記官社寺局長等を經て沖繩縣知事となり從四位勳四等に進み廿五年高知縣知事に轉ず時に縣下政蘊の軋轢甚極に達し騷擾止む時なし莞爾則ち快刀亂麻を斷つ底の處置をなし却て事敗る幾許もなくして職を辭し翌年正四位に進む後居を京都の勝地に構へ文事に托して徐に形勢を窺ふ未再び出づるに及ばずして三十一年六十三歲を以て歿す莞爾詩歌に巧にして亦畵を弄す曾て巡幸に供奉して木曾に至る棧道の風光善く詩歌の及ぶ所にあらず梨堂相國戲に呼んで建山筆捨の橋といふ建山、掬月、蒼雨は其號なり又戲號を似兒爺といふ

かんじゅじがけーそーじょー 勸修寺雅慶僧正 敦實親王の子醍醐帝の皇姪大僧正東寺長者勸修寺別當東大寺別當となる長和元年十二月卒す年八十七

かんじゅーろー 藤間勘十郎 初代 植木店藤間の祖にして三代目勘兵衛の子振付を以て名高し天保十一年十二月事に依て自殺す 年四十五

かんじろー 萬古館次郎 陶工なり姓は柿沼名は文則伊勢の人天明中江戸小梅村にありて樂燒を製し萬古不易の義に取りて萬古燒とよぶ

かんしん 寺西閑心 初名彌助土井大炊頭に仕へて七百石を食む致仕して後江戸西久保にありて劍法を敎授す

またま誤て幕吏を殺すの罪により爲めに獄に下さると雖赦にあひて出で髪を削て古歴と改む幾許ならず深見重左衛門の言に從ひて俠客となり六法組の壯士十五人と戰ひて十三人を殺し難を下野に避けて其國に終る

かんせーしんのー　寛清親王　鑁元帝の子一宮と稱す天和二年八月勅修寺に入り十月親王となる尋で削髪して寛清といひ又濟深とよぶ元祿元年三月三品に叙し東大寺別當に補す十四年十二月薨ず年卅二即身院と號す

かんせん・岡田寒泉　昌平黌の教官名は恕字は子强清介と稱す寒泉は其號なり江戸の人業を村上淡齋に受け後柴野栗山等と共に昌平黌教官となる文化四年八月歿す年七十一

かんそー　鍋島閑叟　佐賀の藩主なり齊直の子初字貞丸名は直正文政八年將軍德川家齊の女を娶る十年十二月從四位下信濃守に任じ尋で侍從職となる天保六年十二月左近衛權少將となり安政六年十二月左近衛權中將にのぼる文久元年十一月閑叟と稱す時に攘夷鎖港の說と通商開港の說と衝突し朝野喧々囂々たり閑叟公武一致の勅旨を奉じて調停に盡くし又大政奉還の議に與かる明治元年議定となり從二位權中納言に叙任せらる二年七月開拓使長官となり八月大納言に進む三年八月病を得四年正月薨ず年五十八閑叟封を襲ぐの日内政頗る紊る閑叟銳意之を整理し忽ちにして國力を增殖せり明治卅二年三月朝廷從一位を贈る

かんそんぼー　大覺寺の門主なり龜山帝の皇子初名を寛融といふ後僧正に任じ西院と號せり

かんどー　河田貫堂　名は熙字は伯紱貫之助と稱す德川氏の儒臣たり文久三年目付と爲り從五位下相摸守に任じ開港延期の談判に副使と爲りて歐洲に赴く歸りて後開成所の頭取と爲る明治元年目付を經て大目付に拜す又德川家達公に從ひ靜岡藩少參事と爲りて學務を督す卅三年三月六十六歳を以て歿す

かんとく　澤簡德　舊幕臣にして外國奉行たり外交に關して罪を得久しく獄中に呻吟せしも赦にあひて再び用ひらる明治三年刑部大丞となり從五位に叙す後若松縣令となり判事に任ず廿二年東京府神田區長となり廿四年十二月貴族院議員にあげられて正五位に進み勳六等に叙す卅六年七月卒す年七十四

かんべー　野呂松勘兵衛　人形遣なり江戸にあり初めて野呂摩人形を操る

かんべー　藤間勘兵衛　初代　藤間流の踊の祖なり武藏の人寶永中江戸に來りて芝居の振付役となる明和六年十一月歿す

かんべー　藤間勘兵衛　三代　江戸の人踊の師匠なり二代の養子となりて振付を業とす文政四年十二月歿す

かんぼー　伊藤冠峰　儒者なり名は一元字は吉甫冠峰と號す其家巨商たれども之を厭ひて學に志し名護屋に出で業を秋本淡淵に受く詩歌を以て名あり後隱退して美濃の笠松に閑居し猶書を捨てず紀平洲之を尾州侯にすゝめむとするも冠峰肯ぜず南宮爵卿江戸に招けども從はず遂に天明中歿す年七十餘著書に冠峰文集、綠竹園詩、自放編等あり

かんむてんのー　桓武天皇　名は山部光仁帝の太子たり光仁帝の禪を受けて立ち都を山城長岡に定む後宇多に移し之を平安宮といふ爾後一千餘年不易の帝都たり在位廿四年崩ずる時齡七十

柏原天皇ともいふ

かんや　森田勘彌　初代　江戸の俳優にして劇場の持主なり京都の人通稱太郎兵衛萬治三年始めて江戸木挽町に劇場を建つ

かんや　守田勘彌　十代　江戸の俳優なり守田座の座元たり中村伊四松の次子にして初名を治三郎とよぶ勘彌才智あり守田座の格式中村市村兩座の下にあるを慨き名優等と結んで遂に其格を上騰せしむ明治五年新富町に移り八年新富座といふ三十年八月歿す年五十二劇道改革に盡くせるの故を以て賞賜頗る多く家道當に磐めりといふ

かんらん　大塚觀瀾　高鍋藩の儒臣なり名は靜氏字は子險通稱太一郎梅樓拙齋冬駒子考槃窩等の號あり年十七にして京に游び宇井默齋に學ぶ天明六年御牧直齋山口剛齋に業を受け歸て儲君の師傅となる寛政五年九月明倫堂の教授となり文政八年九月歿す年六十五著書錄、本藩系圖、國學私議、教學大意、朱子論、性說解義、頁笈紀聞、觀瀾集、同手錄、藩官考、觀瀾七說等の著あり

かんらん　松崎觀瀾　名は蘆臣又は白圭字は子允左吉と號す篠山侯の儒臣なり年少にして中野撝謙に宋學を修め後伊藤東涯に就き又三輪執齋に陽明學を聞く寶曆三年五月江戸に歿す年七十二著書愈能須佐美、愈下草、白圭集、岐岨紀行等あり

かんらん　三宅觀瀾　德川幕府の儒臣なり名は紺明字は川暉觀瀾又は端山と號す並稱九十郎京都の人なり初め淺見絅齋に學び後水下順菴に修む水戸に聘せられて史館に入り祿二百石を食む後累遷して總裁となり日本史の編修を專にす正德二年新井白石の薦に依て幕府に仕へ博士となる享保三年八月病歿す年四十五著はす所觀瀾文集、同談餘、列士報聲錄等あり

がんりゅー　佐々木岸柳　劍客なり幼名久三郎諸國に修業して技を磨き增田長盛に仕へむとして果さず復播磨に赴き吉岡無二齋と爭ひ其殺すところとなる或はいふ宮本武藏に擊たるとも

かんりゅーほーしんのー　寛隆法親王　靈元帝第二皇子なり仁和寺を相續す天和三年入寺得度して覺寛又は覺助又覺隆と改む寶永四年九月薨ず年卅六

かんろく　勘六　勘亭流書風の祖なり中村座の手代にして岡崎屋と稱す劇場看板等の書風を改めて今日の如くせしは勘六の創めたるなり文化二年二月歿す年六十

きあん　江村殺庵　宮津藩山侯の儒官なり剛齋の甥訥齋の二子なり名は簡字は易從背甸と號す享保十九年六月歿す年六十九

きいつ　鈴木其一　畫人なり近江の人名は元長通稱爲三郎江戸に出で、紫染を創む酒井家の臣蠣澤の養子となり酒井抱一に從て學ぶ嗜々又は菁々と號せり運筆巧妙筆力勁健師に劣らず安政五年九月歿す年六十三

きえもん　幾乃宇屋喜右衛門　小田原の人江戸に來りて料理店をひらき初めて妓樓に入る〻座の物をつくる乃ち廓内仕出し屋の創めなり

きえん　皆川淇園　儒者なり名は愿字は伯恭淇園又は有斐齋節齋と號す通稱久藏京都の人年少にして詩をよくし學を好む業成りて後教を布くに弟子門

に集る者三千餘人なり淇園又書畫に巧みにして殊に畫は圓山應擧について學び尤も其妙を極む文化二年學堂を建て、弘道館と名づく同四年五月歿す年七十四

きえん 柳澤淇園（ヤナギサハキエン） 大和郡山藩士なり名は里恭字は公美また竹溪、玉溪、淇園と號す初め下野と稱し後權大夫と改む淇園素と卓落不羈而も博學多識にして佛典醫藥書畫に精通せり大に客を好み敢て其賢愚貴賤を分つことなく池大雅とは最も深く交はる亦詩發句に巧なり隨筆に比止里年あり寶暦八年九月歿す時に年五十三

ぎえん 義圓（ギエン） 源義朝の子なり初名圓成小字乙若圓懸法親王の坊官たり卿公と稱す賴朝に從て兵をあげ兄全成と叔父行家に屬す洲股河の戰に先を爭ひて單騎河を渡り敵のために殺さる

ぎえん 義演（ギエン） 關白二條晴良の子將軍義昭の猶子なり准三宮に叙せらる醍醐寺の座主にして東寺の長者たり

ぎお！ 祇王（ギワウ） 祇女と共に京都の白拍子なり平清盛に召されて祇女と共に寵をうく後佛御前の寵生ずるに及び宮を出で、嵯峨にのがる佛病篤き日祇王又召されて舞を演ず時の諧に佛も元は凡夫なり凡夫も終には佛なり共に佛性具せる身の隔つるのみこそ悲しけれと聽く者流涕す時に祇王廿一祇女十九二人の母刀自四十五なりと

きおまろ 紀幾男麿（キノキヲマロ） 紀多鬼麿の孫なり父祖の志をつぎて鍼術を究め皇極帝の元年鍼博士となる これ鍼術の開祖なりといふ

ぎおんのにょーご 祇園女御（ギオンノニョウゴ） 白河帝の宮人なり待賢門院を鞠養して祇園に居る故に宣旨を蒙らずと雖世に稱して祇園女御とよぶ又白河殿東御方ともいへり後娠むに及びて平忠盛に賜はる一說にいふ女御は藏人源仲宗の妻なりと

きかく 榎本其角（エノモトキカク） 本姓竹下近江堅田の人父は醫を以て業となせり其角初名順哲父の業を嗣ぎて立ちしも後俳に志して芭蕉翁に從ひ寶晋齋、寶井晋子、狂雪堂等の號を用ゐて世にあらはる乃ち蕉門十哲の一人なり會て嵐雪破笠と同居し貧交洒々落々而も名聲大にあがる又茅場町に住し湯儒物徂徠と隣せり其角詠じていふ梅が香や隣は荻生總右衞門と意蓋し湯儒も眼中に無きを示したるものなり其角赤穗の義士大高忠雄と交り親む忠雄の讐を報ずるや其夜隣家にあり屋上に上りて義士の奮鬪するを見欣喜措く能はず而して忠雄來りて主の讐を報ずるを告げ以て隣家に對するの禮を執るや其角屋上より轉落して起き叫んでいふ其角此にありと因て手を執りて慰勞す慷慨の氣充ちて相共に涙下る又嘗て門弟數人と墨堤に遊び衆人のために雨乞の句をよむ雲油然として起り雨沛然として下る衆驚かざるなし而して其角其何の故なるを知らずといふ寶永四年二月歿す年四十七

きかん 義鑑（ギカン） 瓜生保の弟なり延元元年新田義貞金碕城にありて保を援く保足利尊氏に屬せむとするに及び義鑑脇屋義助に據て曰く保愚昧にして賊の計中に陷る事已に急なり願くば臣の爲に一公子を駐めよ臣力を竭して推戴せむと保此赤誠に動かされて悔悟し再び官軍に致さむとせり義助感じて子義治を之に屬せしむ高師泰兵六千を率ゐて來り攻む義鑑力戰して大に敗り明年兵

五千を以て金碕を援ふ敵道擊して我軍利あらず里見時成獨り返戰して勇鬪し敵の圍む所となる義鑑弟源琳重照の三人をして脫れしめ保及び姪七郎と共に馬をすゝめて時成を援ひ遂に戰死す

ききらきんけ！ 奇々羅金鷄（キ、ラキンケイ） 小說家なり本名畑秀龍字は道雲別號を燕石樓といふ觀奕道人又奇々羅金鷄は狂歌の名なり醫業を以て七日市侯に仕ふ三十六歲にして致仕し江戸に來りて橋場に閑居し風流に遊ぶ文化六年正月歿す年四十三著書十餘種あり

きぎん 北村季吟（キタムラキギン） 國學者なり近江の人通稱久助湖心亭又は拾穗軒と號す初め應庵と號して醫を業とせしが後京都新玉津島の祝を來じ國學を究む安原貞室松永貞德に從て歌俳を學び烏丸光廣の推擧に依て幕府に仕ふ始めて歌學所に補せられ再昌院法印の號を賜はり祿五百石を領せり寶永二年六月歿す年八十二著はす所八代集抄、萬葉拾穗抄、伊勢物語拾穗抄、百人一首拾穗抄、源氏物語湖月抄、枕草子春曙抄、徒然草文段抄、山の井集、俳諧埋木、續山の井、新大筑波等あり

ぎく！ 稻津祇空（イナヅギクウ） 俳人なり初め青流と號し石霜巷竹尊者阿桑門等の別號を用ふ芭蕉に學びて俳をよくし又詩文に長す諸國を遍歷して相州箱根にいたり宗祇の墓前に削髮して祇空とよぶ後京にありて紫野の散雨又は敬雨といひ去て江戸に向ふの途次箱根に死す年七十一時は享保十八年四月なり

きくどろ！ 尾上菊五郎（オノヘキクゴラウ） 初代 俳優なり京都宮川町音羽屋牛兵衞の子尾上左門の弟子となり家名を音羽屋といひ梅幸と稱す享保十五年京さかき山座に出づ後江戸に下る寶暦二年元服して立役となり大阪江戸を往來せり天明三年十二月歿す年六十七

きくどろ！ 尾上菊五郎（オノヘキクゴラウ） 二代 俳優なり家名音羽屋初の名は丑之助と稱す天明七年二代目を相續す後防州に下る途中舟中にて病死す時に年十九

きくどろ！ 尾上菊五郎（オノヘキクゴラウ） 三代 俳優なり怪談狂言の祖家名音羽屋俳名梅幸と稱す建具屋の子なり初名辰五郎松錄の養子となりて新三郎と改む已にして尾上菊五郎となり天明八年初めて市村座に出づ享和三年三代目を相續して菊五郎と改む文政天保の間幽靈早替の工風よく人目を驚かせり弘化四年大阪に上り大川橋藏と改名し家名を玉屋俳名を梅壽と改む後江戸に下る歸途遠州掛川に病歿す年六十六時は嘉永二年四月なり

きくどろ！ 尾上菊五郎（オノヘキクゴラウ） 四代 俳優なり元中村歌六の門人家名を音羽屋梅幸と云ふ幼名を中村辰藏と稱す後歌藏と改む京大阪宮芝居に修行し天保二年師の聟となりて榮三郎と改む安政二年四代目を相續して菊五郎と改む萬延元年六月歿す年五十三

きくじろ！ 尾上菊次郎（オノヘキクジラウ） 家名を音羽屋俳名を梅花と稱す幼名は市川市松と云ふ二代目愛子の門に入りて中村歌柳と改む天保七年江戸三代目梅幸の門に入りて尾上菊次郎と改名す後梅花と改む京都芝居に彦山のおその役大當なり翌安政五年名古屋に下る

きくじろ！ 瀨川菊次郎（セガハキクジラウ） 俳優なり初代路考の弟子俳名仙魚寶暦六年十月歿す

266595

きくのじょー 瀬川菊之丞（セガハキクノジョウ） 初代 大阪の俳優なり初名吉次女形なり瀬川帽子といふは此優の初めしものとぞ延寶二年九月歿す

きくのじょー 瀬川菊之丞（セガハキクノジョウ） 二代 俳優なり初代菊之丞の養子俳名路考幼名德次後吉次武州王子の人時人よんで王子路考といふ安永二年三月歿す

きくのじょー 瀬川菊之丞（セガハキクノジョウ） 三代 俳優なり父は大阪にて振付の名人といはる初名市山富三郎安永元年瀬川と改め三年菊之丞となる俳名仙女文化七年十二月歿す年六十

きくのじょー 瀬川菊之丞（セガハキクノジョウ） 四代 俳優なり三代菊之丞の養子初名中村千之助後瀬川菊之助又路之助ともいへり幾許ならず菊之丞を嗣ぎ路考と號す文化九年十一月歿す

きくのじょー 瀬川菊之丞（セガハキクノジョウ） 五代 四代菊之丞の養子初名多門俳名芬政又は路考菊之丞の名をつぎて名人の譽尤も高し天保三年正月歿す

きくまろ 菊麿（キクマロ） 浮世繪師なり俗稱六三郎歌麿の門人といふ後月麿と改名し草双子錦繪の畫をよくす晩年浮世畫を廢して名を觀雪と改め一新機軸を出す

きこー 松岡歸厚（マツオカキカウ） 國學者なり通稱左内和歌をよくす嘉永三年歿す

きさい 安積希齋（アサカキサイ） 水戸の人名は貞吉介之丞と稱す詩に巧なり寛永七年に生れて寛文六年に歿す年三十七世に希齋詩集あり

きさい 木村毅齋（キムラキサイ） 德川幕府麾下の士名高敦字は世美毅齋と號す本姓根岸氏木村義久の嗣となる寛保中殿内給事となり六位に拜す父の業をつぎて武德安民記をつくり又武家談を著し又武德編年集成、四戰紀聞を著述して獻ず幕府大に其功を褒賞す寛保二年十一月歿す年六十三なり

きさい 三宅寄齋（ミヤケキサイ） 儒者なり名は島字は亡羊寄齋又は江南野水翁と號す通稱玄藩泉州の人業を藤原肅にうけ漢唐の註疏と程朱の說義とを參考して別に一新見地あり後陽成後水尾兩帝の侍講となりしばしば物を賜はる慶安二年六月歿す年七十

きさぶろー 岡安喜三郎（チカヤスキサブラウ） 初代 長唄の名人なり幼名松下鐵次郎寛政文政中の人三代目岡安南甫に學び後家元の門に移り中村座都座の立唄をつとむ文政十一年四月歿す

きさぶろー 岡安喜三郎（チカヤスキサブラウ） 三代 常陸の人農藤田興介の子初名久助初代の門人となりて喜代八とよぶ後三代目となり明治元年隱居して喜翁とよぶ明治三年十一月歿す年七十九

きさぶろー 杵屋喜三郎（キネヤキサブラウ） 五代 三絃の彈手なり始めて長唄の名を唱ふ兄六左衛門の養子となる貞享元年父兄と俱に蕩狂言をつとめ正德五年五月に至て歿す

きさぶろー 杵屋喜三郎（キネヤキサブラウ） 八代 三絃の名人なり初名三郎助老年まで子なきを以て門弟萬吉を養ひて嗣とせしが後男子胴吉生れたるより萬吉をして六左衛門の後をつがしむ天明七年九月歿す

きさぶろー 杵屋喜三郎（キネヤキサブラウ） 九代 杵屋喜三郎八代の實子なり養兄別家の後本家を嗣ぐ依て杵屋二派に分る文化元年以後蕩狂言を諸兄と俱につとむ天保十三年四月歿す

きさぶろー 松本喜三郎（マツモトキサブラウ） 人形師なり熊本の人明治初年江戸に來りて生人形をつくり淺草奥山に興行物を創む

きざん 箕山（キザン） 京都の俳人なり姓は藤木又畠山名を成庸といふ通稱七郎左衛門常次呑舟軒幻々齋如幻齋遮莫堂了因居士等の別號あり貞德に學び俳をよくし又戲作をもなす色道大鏡は其著作するところなり寶永元年六月歿す年七十七

きざん 熊谷箕山（クマガヤキザン） 儒者なり江戸の人名は尙之字は履善通稱平一郎箕山と號す井上金峨に學びて京に講說し名聲あり東海漫遊稿、南海漫遊稿、通史摭覽、通志摭覽、箕山文集の著あり

きざん 五車亭龜山（ゴシャテイキザン） 幕府の臣にして御徒士なり狂歌を以て名あり俗稱津田新九郎又石美眞志といふ天保十五年二月歿す年七十一

きざん 種村箕山（タネムラキザン） 儒者なり名は濟字は元民通稱新治箕山と號す近江の人澤學所に學びて一家を成す寛政十二年六月歿す年七十九修辭指南、國語補生集解、白雪堂集等の著あり

きさんだ 鬼三太（キサンダ） 源義經に仕へて厩の事を司る依て一に御馬屋の鬼三太といふ勇力あり堀河御所夜討の時土佐坊と戰て功名をあらはす

きし 藤原嬉子（フジハラノキシ） 龜山帝の皇后にして大相國公相の女なり

きしょー 其笑（キセウ） 小說家なり京都の人八文字舍といふ或は謂ふ自笑の子なりと

ぎしょー 足利義照（アシカガヨシテル） 將軍義滿の第六子なり大覺寺宇智院に入りて仁和寺に移り大僧正となる將軍義繼の暴戾人心の乖くを見て機となし小倉王子に說きて將に天下に令せむとす事悉く漏る嘉吉元年三月義照逃れて薩摩に走り遂に死す

きすみみのみこと 岐須美々命（キスミ、ノコト） 神武天皇の皇子にして母は吾平津媛なり

きせざ 江島屋其磧（エジマヤキセキ） 小說家なり京都の人通稱市郎右衛門初め方廣寺のほとりに住みて大佛餅を鬻ぎ家極めて富む戲れに小說を艸して出版せむと企て八文字舍自笑にはかる自笑乃ちおのれが名を署して出すに每卷の評假頗る高し所謂八文字屋本これなり後自笑と爭ひて分れ別に江島屋を以て出版に從ふ幾許ならずして和解し又八文字屋に筆を取るこれより其磧其作物に署名なしたりといふ蓋し其文才絶妙にして痛快なる寫實的筆力の非凡なるは殆ど前後に類なきに似たり元文元年六月歿す年七十其作には傾城禁短氣、同色三味線、曲三味線、其磧土產等あり

きせん 大村喜前（オホムラキセン） 肥前の人中世忠澄の時内國の二郡を領し久原城に居る忠純に至りて秀吉に屬す喜前は乃ち其子なり小字を新八郎と云ひ天正十五年秀吉の島津氏を伐つに當りて兵を出して從ひ功に依て薩領を賜はる慶長四年從五位下丹波守に任ぜらる後石田三成の兵を擁ぐるや秀頼の名に依て出兵し赤間關に到るたまたま三成の奸策たること明なるに及び喜前有馬五島松浦等と共に還りて家康に藉し城を守りて加藤黑田の配下に屬す元和元年八月卒す年四十八

きせんほーし 喜撰法師（キセンホフシ） 桓武天皇の後裔なりといふ宇治山に籠居して密法を修む和歌に工みなれども其詠多く傳はらず而も紀貫之は選んで六歌仙の一人となせり又喜撰勅を奉じて和歌式を撰んで上る後雲に乘りて去り其終るところを知らずといふ

きそー 高安龜吏（タカヤスキソウ） 能樂金春流大皷の名人なり元高安流太皷の家元高安三太郎の子本名金春桑三太皷に於ての技藝は他に比類なき獨特の聞え高かりき明治三十六年十一月歿す年六十四

きそー 渡邊競（ワタナベキソフ） 白河帝の北面の武士なり源三と稱す治承四年源頼政に屬してこれに仕ふ後佯りて平宗盛に降り其名馬煖延を得て功を建てむことを約し走て頼政に投ず而して煖延の蠶尾を截り宗盛の字を印して放還す尋で宇治川の戰に死す

きぞー 上野喜藏（アガノキザウ） 元は朝鮮人なり細川忠興の豐前を領するの時招かれて同國上野村に居る依て上野の姓を冒し陶器を製す後細川家の肥後に移るに及びて亦從ひて同國八代郡八代村に住せりといふ

きそん 祐乘坊義存（イウジヨウバウギゾン） 鎌倉將軍惟康親王の子親王京にかへるの後鎌倉に生る僧疎石の弟子となる後寶藥を業としり磨積丸をつくる

きたゆー 森本儀太夫（モリモトギダイフ） 加藤清正の家士名は秀虎征韓の役晉州の戰に先登して勇名を顯はす

きちえもん 江見屋吉右衛門（エミヤキチエモン） 擂工なり延享元年彩色擂を工夫して世に行はる

きちざえもん 吉左衛門（キチザエモン） 水戸の勤王家なり名は廣邦京師の留守役たり幕政の因循として攘夷の勅を得むと計る安政五り密に藩主齊昭の命を領して縉紳公卿等により攘夷決行の旨を賜ふ吉年八月公武合體攘夷決行の旨を賜ふ吉左欣んで之を藩主に傳へ幕府のために囚へられ陪臣を以て勅書を要請するの罪により六年八月小塚原に斬らる

きちざぶろー 嵐吉三郎（アラシキチサブラウ） 初代嵐勘右衛門の弟子にして大阪の俳優なり岡島屋といふ初めは大阪濱芝居の大立者たりしも寶暦八年より桐の谷座に移り十年京都澤村座に赴き明和二年大阪三升座同七年富士松座に出で安永四年角の座翌年中の座役々皆好評を博す男振り立派なれば男達武士役何れも恰好せりと安永九年四十四にて歿す

きちざぶろー 嵐吉三郎（アラシキチサブラウ） 二代目嵐勘右衛門の三男岡崎屋といふ後年璃寛と改めしが其の伎妙域に入るの故を以て時人大璃寛とよべり美男にして美音上品にして細かなり色事師の役々殊に上手なりしが文化五年梅玉と競合ひ文政年間にいたりて和解す又江戸の役者幸四郎半四郎等と一座して好評を得文政四年九月五十三にて歿せり

きちざぶろー 嵐吉三郎（アラシキチサブラウ） 三代目二代目吉三郎の兄の子幼名を大三郎といふ家名岡崎屋鱗昇と稱す文政五年大阪中の座に初舞臺をつとめ後伊丹屋璃寛について學ぶ天保十年江戸に下り市村座に出づ安政二年大阪にかへり何れも寶惡を以て賞せらる元治元年九月五十五にて歿す

きちじ 金寶吉次（カネヤウリキチジ） 京都の兩替商なり名を末春といふ奥州に往く途次初め

て義經に謁し後召されて士となり堀彌太郎光泉と改む

きちじゅーろー 池邊吉十郎（イケベキチジフラウ） 肥後侯の臣なり名は重泉悰左衛門と稱す二百石を領して歩士頭となり慶應四年京都留守居明治二年熊本藩少參事となる廢藩置縣の時農となりて仕をもとめず明治十年西郷隆盛の薩摩に兵を起すや吉十郎奸臣を除き國是をすゝめ國權を内外に揚ぐるの目的を比うして友人櫻田惣四郎等と共に起き熊本有志隊と號して各所に轉戰す軍利あらずして城山に滅ぶの時逃匿して捕へられ長崎臨時裁判所に送らる同年十月途に斬に處せらる年四十

きちべー 道具屋吉兵衛（ダウグヤキチベエ） 大阪の人淨瑠璃節をよくす井上播磨の流を酌み道具屋節を謠ひ出せり

きちべー 二朱判吉兵衛（ニシユバンキチベエ） 俳優なり本名中村吉兵衛正德四年より森田座に出で〻道化方をつとむ名人の聞えあり俳名一其二朱判其渾名なり明和二年八月歿す時に年八十二

きちや 上村吉彌（カミムラキチヤ） 京師の俳優なり延寶の頃江戸に來り女形を以て名聲大に揚る當時の婦女子其帶の結方を學び名づけて吉彌結びといふ

きつお 平野橘翁（ヒラノキツチウ） 心學者なり櫂園と號す江戸の人慶應中其名高し百席道話を著はす

きっし 藤原佶子（フヂハラノキツシ） 左大臣實雄の女弘長元年二月龜山帝の中宮となる八月皇后宮となり文永九年八月歿す年二十八京極院と號す

きっしょー 津守吉祥（ツモリキツシヨウ） 齊明帝の五年遣唐副使となり海中風に逢ひて餘姚に漂着す唐に在て罪を得四京に幽せらる其子孫世々住吉神社神主となるといふ

きっそー 橋本橘窓（ハシモトキツソウ） 國學者なり京都梅宮の祠官にして肥後守に任ぜらる名は經亮橘窓又は梅窓又は香園と號す高橋園南の門に入りて有職故實を學び小澤蘆庵伴蕃蹊と交りて和歌をよくす文化三年四月歿す時に其年四十七著書に橘窓叢語、梅窓筆記、校正年山紀聞等あり橘窓人となり豪放不羈辯舌流るゝが如くにして坐談の妙人をして喜ばしむ

きつど 案山吉道（アンザンキツダウ） 藤本氏甲州の人薙髮して建州禪師に從ひ深く悟道に入る晩年富士の巖窟に入りて入定す

きとく 自在菴祇德（シザイアンギトク） 初代 江戸の俳人遲日園又は竹隱士實健齋と號す通稱來藏稻津祇空の門人にして俳名高し寶暦四年十一月歿す竹隱集、一言庭訓、富士筑波の著あり

きない 飯泉喜内（イヒヅミキナイ） 勤王家なり名は友輔嘉永年間朝廷幕府との間互によからざるを嘆じ京に赴きて三條家其他公卿の門に出入し有志の士と交りて祈の一言を著し以て幕府を罵る後橘本綱紀梅田定明等と一橋刑部卿を將軍に推さむとして成らず却て幕府の惡むところとなる又下田來行の部下大沼又三郎に據て縊に下田の陣營を窺ひ事あらはれて縛せられ死刑に處せらる時に年五十

きない 久留島喜内（クルシマキナイ） 數學家なり初め水谷出羽守に仕へ後延岡侯に聘せらる時に名を改めて沾數とよべり寶暦七年歿す蓋し久留島流數學の開祖なり

きのないし 紀内侍（キノナイシ） 貫之の女なり

和歌をよくす村上帝の時清涼殿の梅樹枯る帝人をして梅樹を洛中に求めしむ紀内侍の家に之を得たり依て内侍歌を献す勅なればいともかしこし鶯の宿はととはゞ如何こたへむ と帝此歌を得て其梅樹を移せるを悔ゆ内侍著はすところ古今六帖あり

きばく　老鶯巣宜歩　俳人なり通稱川路彌三郎幕府の士にして雪中庵蕉太の門人なり文政十一年十二月歿す年七十八

きびつうねめ　吉備津采女　天平中の人和歌に巧なるを以て名あり其詠萬葉集に見ゆ

きぶん　北村季文　歌人なり季春の子通稱平吉再昌院と號す江戸の人博學にして季吟以後の一人と稱せらる天保九年法印に叙せらる嘉永三年二月歿す年七十三

きへー　愛甲季平　室鳩巣の門人にして儒者なり薩摩の人

きへー　坂田喜兵衛　江戸傳馬町の髪結なり性滑稽を好み役者の巧拙を論評すこれ江戸役者評判の初なり

きへーじ　八町蝶喜平次　源爲朝の家士石を取りて之を飛ばせば敵町の遠きに達するを得常に爲朝に從て武勳あり

きほー　鶴澤蝠鳳　音曲家なり大阪の人通稱大阪小三郎後竹本播磨太夫と改む安政元年十月歿す年八十四

きみお　風早公雄　本名公金參議實積の子姉小路の庶流なり官參議を經て權中納言に至り位正二位に及ぶ天明七年薨ぜり年六十七

きみと　石川君子　和銅六年從五位下靈龜元年播磨守に任じ養老元年從五位上兵部大輔侍從となり神龜元年正五位下三年從四位下に叙せらる而して和歌に巧みなり其詠萬葉集にあり

きみと　藤原公子　後深草帝の中宮なり太政大臣實氏の女初め關白實經と婚を約す後嵯峨帝命じて宮中に入らしむこゝに於て後深草帝の女御と爲り正嘉元年正月中宮となる遊義門院又東二條院といへり永仁元年六月尼となりて圓鏡智といひ嘉元二年正月崩ず年七十三

きみさと　豐原公里　伶人なり時光の子初め音律に遲鈍にして父の憂ふるところとなる後精勵して奥旨を得四天王の一人となる寛治中の人

きみひとしんのー　君仁親王　家仁親王の子小字胡佐宮寛保三年櫻町帝の猶子となる延享二年二月親王となり上總太守に任ぜらる明和七年六月牛車を聽され尋で薨ず年三十八清淨觀院と號す

きみまろ　國中公麻呂　其先は百濟の人天智の朝に來朝し大和葛下郡國中村に居る初め聖武帝盧舍那像の銅像を造るにあたり公麻呂事にあづかりて巧思竟に之を成す景雲の初め從四位下を授けられ造東大寺次官となる寶龜五年卒す

きみより　三條公賴　太政大臣實香の子内大臣兼左近衛大將に至る天文中罪ありて筑せられ幾許ならず赦されて内大臣に復す十三年又筑せられ尋で京にかへり十九年從一位左大臣に進む二十年大内氏に據り陶氏の亂にあひて殺さる時に年五十七後龍翔院といふ

きめー　百濟貴命　嵯峨帝の女御にして鎮守府將軍後哲の女なり從四位下に叙せらる基長忠良の二親王と基子内親王とを生む仁壽元年卒す

きめんざん　鬼面山　谷五郎・美濃の人十四歳にして京の力士となり後江戸力士武隈に從ひて濱碇又は彌高山と改む入幕してより鬼面山とよび阿州侯の抱となる慶應元年東方大關となり明治元年四方に廻りて横綱を張る四年七月歿す年四十六

きもん　義門　一向宗の僧にして若狹小濱妙玄寺の住職なり和歌を好み國學を修む嘗て本居大平の門に入て活語の法を研究し後一家を爲す山口栄、奈萬之奈、差手磯、磯之洲崎、なお輕重義、活語雜話、玉緒繰分、活語指南等の著書あり

きゅー　龜遊　横濱岩龜樓の妓なり本名うた江戸の醫者太田正庵の女なり父母のために身を吉原の甲子屋に賣て子の日と稱す後岩龜樓に移り龜遊と改む来人某之を見て頻に聘せむとす當時人心外人を厭ふこと甚し龜遊又之を喜ばず主人の敷く強ふるに及び自刄して死す歌あり露をだにいとふ大和の女郎花ふるあめりかに袖はぬらさじと時人大に悼惜す

きゅー　上田休　肥後熊本の人池邊吉十郎と共に西郷隆盛の黨となり川尻に赴きて壯士三千を募り自ら鎮撫隊と稱し大に暴威を逞くす薩軍敗るゝの日遁れて鄕里に入り直ちに總督府に赴きて罪をまつ審理を得ずして釋され又捕へられて遂に斬に處せらる

きゅーお　柴田鳩翁　心學者なり名は亨字は陽方通稱謙藏剃髮して鳩翁といふ京都の人中年にして盲目となる後諸國を遍歷して心學を講説す天保七年五月歿す年五十七其講話を記せるの書を鳩翁道話といふ

きゅーけー　淺加久敬　通稱を九之丞といひ山井と稱す蓋し淺香山の古歌に採れるなり加州金澤藩の國學者にして歌文に巧なり又國史に精通す其著はすところの徒然草諸抄大成は同抄物中の尤も博洽なる良典と稱せらる

きゅーど　古谷久語　國學者なり伊勢の人嘗て南朝略史を著はす

きゅーざん　岳亭丘山　江戸の小説家なり本姓八島名は春信丸屋斧吉と稱す堀川多樓又陽齋定岡の別號あり狂歌を窓廼蔭竹に學び畫を堤秋榮葛飾北齋等に修む又小說に筆を執りて作物多し其他の著書には狂歌奇人傳、百家畸行傳あり

きゅーしろー　近江屋久四郎　狂言作者なり近松門左衛門等と相對して鹽屋九郎左衛門座にありきといふ

きゅーそー　室鳩巣　德川幕府の儒官なり小字孫太郎通稱新助名は直清字は師禮一の字は汝玉、順祥と稱す鳩巣或は滄浪と號す江戸の人性聰明にして溫厚人と諍はず年十四にして加賀侯の前に大學章句を講じ神童を以て稱せらる後木下順庵の門に遊び又羽黑成實に從て修む貞享三年加賀にあり元祿中義人錄を著はす正德元年三月幕府に仕へて儒官となり新井白石に嫉きて重用せらるゝ三年邸を駿河臺に賜はる世乃ち稱して駿臺先生といふ享保九年將軍の前に眞觀政要を説く鳩巣德望あり當時謙

園の徒と雖も亦之を重んず享保十九年八月歿す年七十七著はす所の書駿臺雜話、鳩巣小説、献可錄、六諭衍義大意等あり

ぎゅーなん 雨森牛南（アメノモリギウナン） 名は宗眞字は牙卿牛南又は松隆と號す越前の人山本北山に學びて經史に通じ又詩をよくす越前侯の醫官となり傍ら儒を以て仕ふ文化十二年年六十を以て歿す著書に牛南子、同詩鈔、松隆春秋、萬日紀行等あり

ぎょーあん 堀杏菴（ホリギヤウアン） 儒者にして醫に通ず近江の人名は正章字は敬夫杏菴又は杏隱と號す儒を藤原惺に學で篤學博識の名あり初め廣島侯に仕へ後尾州侯に仕ふ法橋より法眼に進み遂に幕府に召されて弘文院に入り系圖を編修す寛水十九年十一月卒す年五十八

ぎょーいほーしんのー 興意法親王（オキイホフシンナウ） 陽光院の第五子なり天正十一年二品に叙し圓城寺の長吏となる慶長三年七月大峯に入り六年九月方廣寺別當に補す時に大佛殿の上梁銘及び鐘銘に不祥の語あり爲めに供養を止め幽せらる後赦されて白川に昭光院を建つ元和六年十月薨ず年四十二

ぎょーいんほーしんのー 堯胤法親王（ゲウインホフシンナウ） 直常親王の子後花園帝に養はる文明二年親王となり剃髪す十年九月二品に叙し明應二年四月天台座主となる永正十五年四月延暦寺中堂を慶す堯胤等師たり享祿三年三月薨ず後壽量院といふ

ぎょーう 大口曉雨（オホグチゲウウ） 享保寶暦年間の俠客なり江戸淺草藏前にありて札差しを業とし大口屋治兵衛と稱せり時に三谷穢多町に久米八といへる者ありて花街を横行し衆人のために忌まる曉雨之を疾み一夕其花街に來れるを見て罵倒し懲らして後宥し歸らしむ久米八恨み骨髓に徹し日本堤に隱れて要擊せむとせしも能はず曉雨の俠名天下に轟く曉雨常に謂ふ世人の俠を目するに裾將なあらはし袖袒を脫するを以て勇なりとすこれ余の取らざるところなりと蓋し曉雨の如きは俠の尤も上流に位する者なり寶暦七年六十にして隱居し名を曉翁とよぶ

ぎょよりじ 細川清氏（ホソカハキヨウザ） 和氏の子初名元氏通稱彌八從四位下相摸守となる正平三年楠正行と四條畷に戰ひ六年尊氏に從て桃井直常を京に攻め七年義詮に從て男山を攻む明年山名時氏と戰て利あらず清氏親ら後光殿院を劫ひて美濃に走る十四年清氏義詮の執事となり俱に兵を率ゐて金剛山を攻む十六年佐々木高氏讒を義詮に構ふ清氏解く能はずして若狹にかへり小濱城に據る斯波氏頼仁木義住來り攻む城將頼宮藤氏歎を敵に送るに至て清氏走て攝津に赴き石塔頼房に據りて南朝に歸す清氏奏請して楠和田の援を促し急に京を衝いて義詮を走らす義詮近江に退き勢を轉回して大舉京を復するに當り清氏走て讃岐に去り白峰城に據る細川頼之來り圍む頼之の家士新開眞行夜密かに城に潛り戰を挑む清氏勇を恃みて突出し數人を殺して遂に殺さる

ぎょーりん 慶運（キヤウウン） 僧淨辨の子なり歌を善くして頓阿兼行等と名を齊しうす曾て庵むすぶ山の裾野の夕ひばり揚るを落つる聲かとぞ聞くと人異名して裾野の慶運と稱す正平中新千載集中に

作歌四首を採らる慶運大に喜ぶ後頓阿の作十餘首を採ると聞き心平かならず遂に我歌を刪去したりといふ

ぎょよか 今尾清香（イマヲキヨカ） 國學者なり下野の人通稱逸平醫麥園と號す文化二年江戸の商家に仕へしも後病を以て辭して家に歸り三十歳にして橘守部の門に入る乃ち鄕に還て教授するに弟子八百餘人に及べりといふ明治六年四月歿す年六十九著書には源氏物語澤中の月、道行ぶり、日本紀弱蜜、草津紀行、忍山紀行、晩緒環歌集、足利職人盡歌合、四時そぐろあるき等あり

ぎょーか 伊藤鏡河（イトウキヤウカ） 豐後藩の儒者名は幸字は寛叔鏡河は其號原姓田原氏九歳の時伊藤氏に養子となる物徂徠の學統を喜び側ら刀槍の術を學ぶ天明四年江都邸に來りて二世子の傅となり近侍長となり學館司業に遷る又豐後志を撰し功を以て時服二領を得遂に大尉從役より近習物頭に歷進し文政十二年歿す年七十八

ぎょよかせ 光清風（サキミツキヨカゼ） 歌人なり鈴木重胤及び富樫廣隆に就きて修め業成りて子弟に教ふ明治三十二年九月歿す

ぎょよかわ 藤原清河（フヂハラノキヨカハ） 房前の子勝寶二年遣唐使となり唐に赴きて玄宗に見ゆ歸途阿倍仲麿從がふ風に逢ひて安南に漂泊し驥州に着きて再び長安に往く遂に止りて唐に仕へ名を河清と改め秘書監となる時に安祿山の亂あり清河歸朝するの期を得ず後唐に歿す年七十三唐潞州大都督を贈り朝廷之を悼みて從二位を贈る

ぎょーぎほーし 行基法師（ギヤウキホフシ） 高僧なり姓は高志氏泉州の人十五の時出家して薬師寺に入り瑜珈唯識の論を新羅の慧基法師に學ぶ又義淵法師につき德光法師に修む名四方に聞ゆ遂に聖武帝に重用せられ天平二十一年正月帝のために菩薩戒を授く因て行基大菩薩の號を賜はる二月寂す年八十二

ぎょよきみ 菅原清公（スガハラノキヨキミ） 遠江介古人の子夙に文章生となり美濃少掾となり遣唐判官近江權掾となり尋いで唐に往き德宗に見ゆ大同年中尾張介に任じ累進して式部少輔阿波守を兼ぬ弘仁九年勅を奉じて天下の儀式男女の衣服皆唐制に依るの規範を定む天長中播磨權守となりて任に赴く公卿奏して曰く清公は國の元老遠離すべからずと乃ち召されて又文章博士となり彈正大弼信濃守左京大夫等の諸官に拜す承和六年從三位に叙し牛車に乘りて宮に入るを聽さる九年薨ず年七十三 凌雲集、文華秀麗集の二卷を撰す

ぎょくざん 秋山玉山（アキヤマギヨクサン） 肥後侯の臣中山定勝の子叔父醫師秋山儒庵の養子となつて本姓を改む故に初めは醫學を修めしも儒學に志すこと厚きを以て藩主儒庵に命じて他子を養はしめ玉山をして其の欲する所に從はしむ玉山名は儀又は定政字は子羽一に儀右衛門といふ初め舅水足屏山に從ひて學び後都に至りて林鳳岡の門に入る鳳岡玉山の學才を愛し遂に代講を命ずるに及べり留學十年國に歸り藩主の侍讀となつて祿百石を食む恩寵極めて深し寶暦四年建議して學校を熊本に興し名づけて時習館といふ時に進んで祿二百石となり藩の待遇尤も渥きを加ふ玉山門戸を張ちずといへども其名天下に布敷するを以てその江都に上るや高松公宇土侯樂山

公等爭うて之を延き醍園の學徒また競うて交を通ず玉山人となり體軀豐大眉目秀麗頗る聖者の風采あり而して其富嶽に登るの記の如きは文勢暢達一代の名文と稱せらる且つ詩才非凡の名高くして一字一句をも忽にせざること當時此人に過ぎたるはあらざりき寶曆十三年六十二を以て歿す著書には玉山詩集同遺稿あり

ぎょくさん 石田玉山（イシダギヨクサン） 有名の畫工名は尙友大阪の人蒲關月に學びて一派を成す繪本大閣記、玉藻談、琉球軍記、國姓爺合戰等の板刻畫を描けり

きょくすい 曲翠（キヨクスヰ） 膳所の俳人なり俗稱菅沼外記といふ藩侯に仕へて百石を食めり後芭蕉翁に從て學び馬指堂といふ其妻破鏡又和歌を善くせり享保五年藩に奸臣ありて施政を紊るを憂ひ之を殺して自刄す

ぎょくせん 鵜飼玉川（ウカヒギヨクセン） 府中藩の士通稱幾之助後三二と改む都下にありて谷文晁市川米庵渡邊崋山椿々山等と交り常に尊重せらる玉川晉て橫濱に赴き米人フレーマンより寫眞法を習ひ江戸に來りて業をひらき彩眞堂と稱せり寶溫雅にして豪志山水を跋涉するを好み古器物を鑑定するに長けたり明治四年博物局長町田久成と奈良正倉院に赴き十二年印刷局長得能良介に從ひて古物探見の旅行を企つ後印刷局の官吏となり二十年歿す年八十一

きょくそー 廣瀨旭莊（ヒロセキヨクサウ） 豐後の人名は謙字は吉甫旭莊と號す淡窓の弟にして漢詩に長ず文久三年八月歿す年五十七梅墩詩鈔、旭莊小稿等の著あり

きょくたん 芹川玉潭（アクタガハギヨクタン） 丹丘の子に して越前鯖江藩の儒臣なり文化十一年藩主の進德館を興すに當り與つて力あり玉潭經史にひろく文調頗る妙趣著はすところの詩文集數十卷世に行はる天保十三年二月五十六を以て歿す

ぎょくらん 玉蘭（ギヨクラン） 畫家池野大雅の妻名は町玉蘭又は葛翠居と號す姓は德山氏京都の人なり母百合子大雅の奇才を見て玉蘭を之に配はす玉蘭妍麗にして英敏畫を其夫及び柳墨水に學び和歌を冷泉家に修む天明四年九月歿す年七十八

ぎょーげつ 曉月（ゲウゲツ） 連歌の名家なり本名冷泉爲守爲相の弟なり初め和歌に巧みに狂歌に秀づ遠くなり近くなるみの濱千鳥なくれに潮のみちひをぞしると嘉曆三年卒す

ぎょーげん 吉見恭軒（ヨシミキヨウケン） 國學者なり名は幸和號は恭軒風水軒と稱す尾張名古屋東照宮の祠官正四位下左京大夫に任ず有職故實に精しく和歌に妙なり明和中卒す年八十餘著はす處國字辨、溫泉紀行、伊勢紀行、風水集あり

きょとないしんのー 清子內親王（キヨコナイシンナウ） 後陽成帝の女にして聖興女王の同母妹なり女二宮と稱す慶長六年十一月內親王宣下九年右近衛中將中納言藤原信尙に嫁ぐ寛永二年十月薨三后延寶二年十二月薨す年八十三

ぎょーさい 河鍋曉齋（カハナベゲウサイ） 有名の畫家なり名は陳之通稱周三郎後洞都惺々狂齋といふ又改めて曉齋に作る周麿畫鬼畑狂者酒亂齋雷醉惺々菴寶畫狂者外史寶畫道人惺々狂者如空入道等の別號を有す下總の人初穀商の家に生れしが土

井氏の士河鍋正信の養子となる八歲歌川國芳に學び又狩野派の畫家前村洞和に就く嘉永二年業成り剃髮して洞都陳之といひ坪山洞山の養子となる此頃より放縱遊蕩を旨とせしかば養家をも出で、四方に流浪し羽子板繪馬に筆を取りて糊口す安政二年蒔繪の下畫をつけ貧居に苦學せしが五年に至りて獨立し一種の狂畫を創めて惺々狂齋とよぶ六年芝增上寺黑本尊殿宇の古畫補修を命ぜらる文久三年菊池容齋に就て應擧の故實を聞き以て鷹鑑三卷をあらはし元治元年に及びて歌川豐國の浮世畫談を閲く明治三年十月其角堂雨雀が催せし書畫會に臨み諷刺畫を描きて罪を得答五十の刑に當てられ赦されて伊豆に赴く此時より曉齋と改め佛道に志す十四年第二回勸業博覽會に枯木寒鴉の圖を出し名聲海外に轟き一世の光榮こゝに生ず人爭うて此畫を見むと欲せり曉齋この時より日課として觀世音及び菅公の像を畫き各所の神社佛閣に奉納せり十六年佛國巴理府日本美術縱覽會に龍頭觀音を出品し賞を得時に英人昆德爾曉齋の名を慕ひて其門に入り敎を受く十七年師家狩野洞春歿す曉齋遺命に依て駿河臺派の畫風を發揮せむと欲し狩野家の筆法を研究して永恵立信の敎を仰ぐ二十二年一月胃病を發し五月歿す年六十二曉齋性撲實倫理を重んずと雖酒癖ありて往々人を罵り醒めて爲めに悔ゆることありしといふ

きょさぶろー 嵐喜代三郎（アラシキヨサブラウ） 江戸の役者八百屋お七を演ずる時衣裳に紋封じ文を用ゐしより後世みな此の型を襲ふ正德三年五月歿す

きょーざん 京山（キヤウザン） 小說家にして狂歌をよくす通稱利一郎山東京傳の弟なり名は百樹字は鐵梅鐵筆堂又は方半居士號山と號す初め篠山侯に仕へ後辭して鐵筆を業とす又髮を削るに至て涼仙とよべり安政五年九月歿す著書に蜘蛛の糸卷の外戲作類多し

きよしげ 葛西清重（カツサイキヨシシゲ） 武藏の人秩父氏の一族なり葛西三郎といふ源頼朝の敗れて安房に至るや使を遣して清重を招く江戸重長大庭氏に屬するを以つて清重憚りて赴かず頼朝再び使を遣して重長を誘殺せしむ然れども江戸葛西は同族なるを以て遂にこれに應ぜず既にして頼朝勝に乘じて進み武藏に入る清重父と共に來屬し重長も亦降る頼朝清重に丸子の莊を與ふ壽永三年清重源範頼に從ひて平氏を西海に擊ち文治中頼朝に從ひて藤原泰衡を奥州に征す皆功あり而して伊澤景家と共に陸奥の事を奉行し又近衛尉となりて頼朝の寢室に宿直し弓馬達人二十一人の選中に入る和田合戰起るや清重力戰して之を破り事平ぎて髮を削る壹岐守又は壹岐入道といふ承久の亂砦宿を以て軍に從はず大江廣元と共に專ら軍謀に參與し兵士調發の任に當る又伊賀光定の亂を平げて功績多し

きょーしにょお 爲子女王（ケウシニヨウ） 有栖川織仁親王の女享和元年大將軍源家慶に嫁く文政五年從三位に叙し天保十一年正月薨す淨觀院と謚す弘化二年從一位を贈らる

きょーじょほーしんのー 行助法親王（ギヤウジヨホフシンナウ） 後光嚴天皇の第三子後等悟法親王の弟子となる

きょーすい 京水（キヤウスヰ） 小說家なり俗稱

磐瀬梅作京山の子なり時綸を業とす慶應三年三月歿す年五十二

きよすけ 藤原清輔（フヂハラノキヨスケ） 顯輔の子正四位に叙し皇太后宮大進兼長門守に至る清輔和歌に巧みに學和漢を兼ぬ而して官位澁滯常に之を憂ふ承安二年和歌尙歯會を寶莊嚴院に設け以て當時の耆老を會す又嘗て續詞花集の撰を蒙りて奏覽を歷す爲めに勅撰に列する能はずして止む時人大に之を惜めり治承元年卒す著はす所奥儀抄、初學抄、發草子、和歌題林等あり

きよそん 海保漁村（カイホギヨソン） 上總の人幼名純卿後元備字は鄕老別名紀之字は春農二十四歳江戸に出で、太田錦城に學び業大にす、む天保三年京に遊びて日野中納言のために賓禮せらる四年佐倉侯に召かれて赴き嘉永中水戸公に招かれむとして果さず後幕府醫學直舍の儒官となす慶應二年八月病を發し九月を以て歿す年六十九

きよーそんほーしんのー 尭尊法親王（ゲウソンホフシンナウ） 貞敦親王の子後奈良帝の猶子となり妙法院に入る剃髮して法親王となり一身阿闍梨となる天文十九年十月天台座主に補せり

きよたか 黑田清隆（クロダキヨタカ） 鹿兒島藩士清行の子初名了介島津三郎に從て京薩の間に出入し軍賦役見習より軍監に進み遂に參政となる明治元年奥羽征討函館征討の時共に參謀となる三年開拓次官となりて樺太に出張し露國と交渉す後歐洲及び支那に赴き六年歸朝十七年陸軍中將となり八年榊原勅使に副ひて朝鮮に行く十年榊原勅使に副ひて後勳一等を授けらる十七年伯爵に叙し二十年農商務大臣となる翌年總理大臣となり二十五年遞信大臣となる二十八年樞密院議長に轉じしばしば内閣に出入して大臣に列る三十三年九月疾を發して薨ず年六十一生前特に從一位を授けらる

きよたね 藤原清忠（フヂハラノキヨタダ） 後輔の子從二位に叙し參議に拜せらる建武二年足利尊氏及び新田義貞の抗表を損して曰く尊氏の罪は明かなり護良親王を殺すの事若し實ならば直に之を伐つべしと朝議一決す延元三年薨ず世に坊門殿といへり

きよたろー 岩井代太郎（イハヰキヨタラウ） 江戸の俳優始め甚之介といふ半四郎の弟子にして娘形に妙を得たり寛延元年の頃まで森田座に出づ

きよつぐ 大伴清繼（オホトモノキヨツグ） 天平寶龜中の人和歌に巧みにして其の詠萬葉集に見ゆ

きよつぐ 觀世清次（クワンゼキヨツグ） 觀世流猿樂の祖なり春日神社の禰宜にして姓を服部とよぶ後觀阿彌と改め猿樂を業とせり應永十三年五月歿す年五十二

きよつね 平清經（タヒラノキヨツネ） 内大臣重盛の第三子なり正四位下左近衛中將に叙任す壽永二年宗盛等と太宰府を出で海路豐前柳浦に至る時に平氏の勢日々衰亡し復濟ふ可らざるものあり清經憂憤禁ぜず一夜月明に笛を吹て朗詠し遂に海に投じて死す

きよつら 三善清行（ミヨシノキヨツラ） 淡路守氏吉の子字を耀といふ巨勢文雄に學で才學の聞え尤も多し貞觀中文章得業生となり越前權司にあげらる元慶七年對策して及第し大學少允となる仁和中少内記に

轉じ從五位下大内記にのぼる寛平中從五位上備前介となり昌泰三年刑部大輔文章博士となる時に右大臣菅原道眞信任あり然れども讒者其寵を忌む清行之を謀め又書を以て告ぐ延喜中大學頭を兼れ從四位下式部少輔となる而して意見十二條を上り以て時弊を濟ふ十七年參議となり宮内卿を兼ぬ十八年但馬權守となり十二月卒す

きよーてん 山東京傳（サントウキヤウデン） 小說家なり俗稱岩瀨田藏後醒幼字甚太郎後傳藏又政演字は酉星京傳と號し山東庵とよぶ又一に醒々老人の號を用ふ後薙髮して椿壽齋といへり性放縱にして小節に拘らず奇才ありて讀書を好まず少壯にして遊里に遊び流連して家に還らざること十數日然れども父母其の才を奇として之を譴むることなし天明中坊間赤本の流行あり京傳乃ち筆を執て其一册を著はす趣向嶄新人喜で之を讀む故を以て其の名漸く江湖に高し寛政二年二月吉原の妓菊園を聘して婦となす菊園婉美にして溫良能く家憲を遵守して惡き妓風無し人稱して泥中の蓮花となすたまたま京傳禁を破りて花柳の情史を綴り名づけて敎訓讀本といふ忽ち罪を得て五位上備前介となり昌泰三年刑部大輔文章博士となる時に右大臣菅原道眞信任あり然れども讒者其寵を忌む清行之を謀め又書を以て告ぐ延喜中大學頭を兼れ從四位下式部少輔となる而して意見十二條を上り以て時弊を濟ふ十七年參議となり宮内卿を兼ぬ十八年但馬權守となり十二月卒す

きよーてん 山東京傳（サントウキヤウデン） 小說家なり俗稱岩瀨田藏後醒幼字甚太郎後傳藏又政演字は酉星京傳と號し山東庵とよぶ又一に醒々老人の號を用ふ後薙髮して椿壽齋といへり性放縱にして小節に拘らず奇才ありて讀書を好まず少壯にして遊里に遊び流連して家に還らざること十數日然れども父母其の才を奇として之を譴むることなし天明中坊間赤本の流行あり京傳乃ち筆を執て其一册を著はす趣向嶄新人喜で之を讀む故を以て其の名漸く江湖に高し寛政二年二月吉原の妓菊園を聘して婦となす菊園婉美にして溫良能く家憲を遵守して惡き妓風無し人稱して泥中の蓮花となすたまたま京傳禁を破りて花柳の情史を綴り幽閉せられ連座して刑せらるゝ者甚多し京傳赦さるゝに及びて大悟しこれより又戲文を作らず而して名聲籍甚四方の書肆爭うて其稿本を請ふ寛政三年京傳銀座に店を開き烟草具を賣り又藥を鬻ぐ人文名の盛なるに依て其容を見むと欲し店頭に集る者十數人日々萬錢を博取せり時に妻菊園歿す再び吉原玉屋の一妓玉非を聘して後妻となす名を百合とよぶ性至醇菊園の賢に劣らずこゝに於て京傳書を讀み想を蓄へ以て稗史野乘を著はすに傑作續出聲價極めて騰る其中に於て稻妻表紙尤もあらはる不破名古屋を演劇に於て爲る者皆此表紙の風姿に倣はざるなし京傳又骨董集及び近世奇跡考を著はす考證該博識見卓絶せり寛政十三年九月京傳其友北川眞顏北靜廬と弟京山の宅に集り置酒して談笑し夜に及んで歸る道上病を得靜廬に扶けられて家に還り其の夜歿す年五十六

きよとも 橘清友（タチバナノキヨトモ） 奈良麿の第二子博學多識の名あり從五位下内舍人を以つて延曆八年卒す年三十二清友田口氏を娶りて檀林皇后を生み子孫爲めに貴し弘仁中從三位を贈られ承和中正一位太政大臣を贈らる

きよなが 高力清長（カウリキヨナガ） 德川氏の臣初字新三後與左衛門といふ永祿三年大高の戰に從ひ又一向の賊を伐つ此の時清長賊徒が紛散せる佛像經卷を收拾し亂平ぎて後皆佛徒にかへす故人呼んで佛高力といふ八年本多重次天野康景と共に奉行職となり頗る令聞あり十一年遠州を徇へ味方原の戰に出で、創を蒙る天正十年信長の弑せらるゝや家康に從て堺浦に在り輜重の事を司り殿軍して土寇の銃に傷く清長屈する色無し十二年家康秀吉和議の事に預り十四年秀吉の奏請に依て從五位下河内守となる十六年聚樂を經營し功を以て國光の刀を得十八年武州岩槻一萬石を食む文祿元年に至り家康の命に從ひ兵船を造り黃金二十枚を賜はる慶長十三年正月卒す時に年七十九

きよなが 鳥居清長（トリヰキヨナガ） 鳥居派第四世の畫人俗稱關市兵衛父は白木屋市兵衛とよぶ書肆なり清長三世清滿に學びて

技成り元祿寶永以來の名手とよばれ風俗美人畫武者繪俳優畫等に工みにして鳥居六世中の巨擘と唱へらる文化十年八月歿す

きよなわ 大伴清繩（オホトモノキヨナハ） 天平寶龜年中の人和歌に巧みなり其の詠萬葉集に見ゆ

きよぬし 千家清主（センゲキヨヌシ） 國學者なり出雲國造俊秀の男名は俊信本居宣長の門に入りて國學を修む

きょーねんほーしんのー 堯然法親王（ゲウネンホフシンナウ） 妙法院の宮なり俗名常嘉後陽成帝の第六皇子二品に叙し天台座主となる慈恩院と號す片桐貞昌に學んで石州流の茶法を嗜み又畫をよくす寛文元年八月薨ず年六十一

きよの 坂上淨野（サカノウヘノキヨノ） 田村麿の子武勇の譽あり平城帝の時騎射の名手を以て選せられ歩射士佐味香飾麻呂飯高常比麻呂等と技を角す弘仁中陸奥鎮守府將軍となり陸奥介を兼ぬ尋で右兵衛少將となり天長の初め薩摩守に貶せらる又土佐權介に遷り正五位下に叙せられ陸奥出羽の按察使となる奏上して東北鎮撫の策を献ず後入りて右馬頭となり右兵衛督に轉じ兼因幡相摸守を歴て正四位下にすゝむ嘉祥三年卒す年六十二

きよのかた 喜與方（キヨノカタ） 左京方ともいふ名は輝子加賀の人佐藤次郎左衛門の子なり將軍家宣に仕へて寵幸あり家繼を生む正德二年薙髮して月光院といひ從三位に叙す寶暦二年九月薨ず和歌に巧みにして車玉集を著す

きよのぶ 鳥居清信（トリヰキヨノブ） 鳥居派畫人の開祖通稱庄兵衛初め菱川を學び後一變して一家を成す常に江戸歌舞伎の看板を畫く人稱して鳥居風といふ享保十四年七月歿す年六十六

きよのり 小中村清矩（コナカムラキヨノリ） 國學者なり幼名榮之助後金四郎又金右衛門と改め將曹といふ號は陽春廬なり三河の人三歳にして父母を亡ひ從母小中村氏に養はれ長じて漢籍を西島蘭溪に學ぶ又意を制度法律に用ひ國史を研究するを樂む龜田鵬谷伊能穎則本居内遠の諸先輩に就き業成りて紀州侯に聘せらる尋で幕府の和學所に講師となり王政維新後太政官に召さるこれより古法制を調査して朝廷の式禮を定め大學中助教にあげらる明治四年神祇大史に陞り諸官を經て大學教授となる時は同十五年なり尋で東京學士會員に列し文學博士の號を賜はる二十三年貴族院議員となり從五位勲六等に叙し二十八年十月歿す特旨を以て正五位を贈らる著書には令義解疏證、類聚國史續貂、國史學の楽等あり

きよはる 近藤清春（コンドウキヨハル） 浮世繪師なり通稱助五郎といふ江戸の人鳥居清信の門人にして能く美人遊女或は臭草子の板下を描く又始めて泥畫を畫く正德享保中の人なり

きよひとしんのー 清彦親王（キヨヒコシンナウ） 後柏原帝の第四子なり永正九年二月青蓮院に入り十一年三月親王となる十五年四月僧となつて名を尊獻と改む大永元年三月天王寺別當に補し天文十年五月に至て天台座主となる十九年九月薨ず年四十七世に桂蓮院とよぶ

きよひで 高木清秀（タカギキヨヒデ） 參河の人初名善二郎主水と稱す初め水野信元に從ひ

後織田信秀に事ふ武略あり刈屋長島の戰皆功あり信長立つに及びて清秀左右に侍し策を献ずる尤も多し小牧の戰軍監となりて從ひ長湫の役先鋒となる天正十八年小田原征伐に出軍して武者來行となり功に依て五千石を得文祿二年秀吉に那古屋に謁見し關が原の役小山より宇都宮に赴く慶長十五年七月卒す年八十五

きよひで 中川清秀（ナカガハキヨヒデ） 秩父清國の子にして中川左衛門の女婿なり常陸の人字を瀬兵衛といふ天正元年荒木村重に屬し和田惟政を殺して織田信長の感賞を蒙る六年十月村重信長に叛く清秀諫めて納れられず依て降る信長これに茨木城を賜ふ後十二萬石を食み千秀政信長の女を得て妻となす十年五月羽柴秀吉を中國に援け歸て光秀と山崎に戰ふ天正十一年正月賤が嶽大岩山の寨を守る四月佐久間盛政之を襲ふ盛政の將拜郷久盈急に火を寨後に放つ清秀苦戰數騎を殺して死す年四十二

きよひで 平手清秀（ヒラテキヨヒデ） 尾張の人一名政秀中務大輔と稱す織田信秀の臣にして信長の傅たり信秀宗族信友と爭ふ清秀親族相爭ふの不利を説て和せしむ清秀性剛殺正直義を信ずれば知て謂はざるなし時に信長放縱不拘奇態をなして愼まず清秀諫書五條を呈して用ゐられず乃ち憂憤して自殺す信長始めて慚悟して行を改むといふ

きよひと 蜷犬養淨人（カタイヌカヒノキヨヒト） 弘仁十五年從五位下に叙せらる萬葉集和歌作者の一人なり其詠むところは同集第二十卷にあり

きよひと 紀清人（キノキヨヒト） 和銅中國史を選するに與かる養老の初年文章博士となり山上憶良等と東宮に侍して師範となる清人和歌に巧みにして其の作多く萬葉集に見ゆ勝寶五年從四位下武藏守を以て卒す

きよひら 清原清衡（キヨハラノキヨヒラ） 經清の子にして貞衡の養子なり貞衡の子眞衡の立つに及びて同族家衡と共に眞衡に抗し軍利あらず後其終るところを知らずといふ

きよひら 藤原清衡（フヂハラノキヨヒラ） 亘理權大夫經清の子小字權太郎永保三年源義家に從ひて族家衡武衡を滅し陸奥押領使となりて六郡を併有す

きょーへー 糧杏坪（ライキヤウヘイ） 儒者なり名は惟柔字は千祺杏坪と號す通稱萬四郎春水の弟にして山陽の叔父なり安藝侯の儒官となり學政を治む天保元年致仕す五年五月歿す年七十九

きよまさ 加藤清正（カトウキヨマサ） 小字夜叉若後虎之助其先は中納言藤原忠家なりといふ父は尾張の人清忠愛智郡中村にありて清正を生む母は秀吉の母と從父姉妹なり幼にして秀吉に長濱に仕へ長じて百七十石を食むに至る天正九年六月島取城に赴き軍功あり祿百石を加へらるこれより備中攝津丹波の軍皆從ひて勇名かくれなし十年賤が嶽の戰に及びて七本槍の功名を遂げ遂に五千石を賜り隊長となる十三年從五位下主計頭に任じ十六年に至りて肥後半國二十五萬石を領す但し半國は小西行長の領土たり而して土豪志岐天草等行長に從はず行長又之を制すること能はず援を清正に請ふ清正一擊して平定し捷を秀吉に報ず天正十九年八月秀吉征明の意あり乃ち諸將を召して令を傳ふ清正進で曰く

殿下明を征して武を海外に輝す壯事これより大なるはなし臣乞ふ先鋒となつて先づ朝鮮八道より蹂躙せむと秀吉大に悅ぶ文祿元年正月清正章旗を得て先鋒となり行長と共に肥前那古耶を發せむとす而して風のために發することを能はず行長之を冒して進み已に釜山より上りて東萊忠州を拔く清正後れて達し憤激して曰く豎子のために先ぜられたりと直に猛進して慶州を攻め忠州に入り行長と王城に會す清正業より行長とよからず此に於て東西二道を爭ひ劍を持して詬罵す諸將和解して之を止む清正乃ち西路より進み五月王城に到り諸將と共に臨津に會し議を定めて咸鏡道より往く向ふところ敵なし遂に二王子を擒にし之を護衛して兀良哈を衝く虜兵支ふるものなしいよいよ進んで女直に入り宛鴨城に薄りて敵首七百餘級を獲北ぐるを追ひて更らに三百餘級を取る乃ち軍を回して鏡城に居る時に宋應昌馮仲纓を遣して伴りていふ明四十萬を發して平壤に克ち元帥浮田秀家等皆擔に就く公獨り孤軍を以て深く敵境にあり今にして退き歸らずんば粉齏せられむと清正示すに必死を以てせり仲纓恐れて去り清正を稱して鬼上官とよぶ

故に其軍益〻振ひ武威八道を壓す石田三成浮田秀家之を猜疑し秀吉の命と稱して師を釜山に回さしむ小西行長此間にありて沈惟敬と結び二王子を放還せば朝鮮四道を献じ且明主の女を以て秀吉の正妃とせむと秀吉報を得て喜び清正に命じて諸囚を秀家等に託せしむこゝに於て和成る然れども清正行長等の私に和議を講じて我功を奪はむとするを惡み晉州を屠りて講和を破らむと欲し進んで其城を拔く行長等秀吉を欺きて王子を放還し更らに彼を伴りて日本永く貢稅を明に納れむと約す而して三成に依て清正を陷れしむ慶長元年清正召されて朝鮮より歸るや秀吉相見ず清正已むを得ずして命を私邸に俟つ七月地大に震ふ壓死する者數百人伏見城の殿宇樓壁又傾壞す清正二百人を率ゐて馳せ赴き秀吉の安否を問ひ寇を宰藏主に訴ふ而して中門の守備に任ずたまたま三成到る清正罵ていふ足下何を以て來ることの遲きと三成長縮して入り列侯群士尋ざて來り入る秀吉清正の誠忠なるを見て心全く解け明日之を召見して軍事を諮問するに應答意の如く滯滯することなしこゝに至て秀吉感動して淚下る秀吉明使を引見し古哲二長老をして其書を讀ましむ悉くみな其聞くところと相違せり秀吉大に怒り明冠を砂上に拋ち將に行長を斬らむとす三成百方陳謝して已むと雖和議全く敗れ征明の師再起る清正行長と共に先鋒たり慶長二年正月清正西生浦に入り各所に轉戰して遂に蔚山に入り虜兵の圍むところとなりて苦戰甚し而も勇氣凜々虜軍心を奪うして皆其武威に服せざるなし時に秀吉薨ず清正遺命に依て歸り國に就きて懲ふ三成等姦謀を恣にして未だ功を論じ賞を行はず諸將大に怒り相謀りて將に三成を誅せむとす清正親しく德川家康と交り其媒に依て水野忠重の女を娶る慶長三年三成亂を謀り上杉景勝之に黨す清正家康の親征するを止め自ら進んで伐たむと請ふ家康辭して四海鎭撫を托す六年八月肥後全州を得て熊本城を築き十年四月從五位上侍從兼肥後守に叙せらる十六年三月秀頼京師に往く清正幸長從ふ清正銳兵五百を出

し三百を分て伏見に置き其餘を京に派して警衛す歸路伏見より船に乘りて邸に還るの後七首を懷中より出し推戴して涕を濺ぎて曰く太閤の洪恩今日にして報ずるを得たりと尋で國に歸り熱を病みて卒す年五十一清正居常好みて論語を讀み節約を旨とし武道を勵み箴むるに文事に耽るを以てせり

きよまろ　大中臣清麿（オホナカトミノキヨマロ）　本姓は中臣國足意美麻呂の子なり天平中神祇大佑兼式部大丞となり從五位下に叙せられ神祇大副にうつり尾張守となる勝寶中從五位上に進み左中辨文部大輔に補せらる寶字中參議となり尋で左大辨攝津大夫となる八年神祇伯に改められ正四位下となる慶雲二年中納言に拜し明年六月大中臣の姓を賜はる寶龜元年正三位大納言にすゝみ左大臣藤原永手の薨するに及びて正二位右大臣となる桓武帝の即位の時骸骨を乞ひ許さる延曆七年八十七を以て薨ず蓋し國家の耆老たり

きよまろ　和氣清麻呂（ワケノキヨマロ）　備前の人神護中勳六等を授けられ從五位下に叙す孝謙帝の道鏡を寵するや宇佐の神詫と稱して之に天位を讓らむとす清麻呂をして勅を奉じて更に神慮を覘はしむ道鏡清麻呂を見て謂げて曰く汝我をして欲する所を得せしめば汝を以て太政大臣となさむと清麻呂宇佐に抵り還て神の託語を告げて曰く我國は開闢以來君臣の分定まれり臣を以て君となす未之あらざるなり天日嗣は必ず皇胤を立てよ敢て無道を行はむとする者は速かに誅戮を加ふべしと道鏡大に憤り清麻呂の本官を解きて因幡員外介となし姓名を改めて別部穢麿となし大隅に流す道鏡人をして之を途に殺さしむ果さず幾許ならず光仁帝立つに及び清麻呂赦されて本位本姓に復し豐前守となる天應元年從四位下に雖み延曆中攝津大夫となり十五年從三位に進み十八年薨ず年六十七正三位を贈らる明治三十一年三月朝廷更に正一位を贈る

きよみ　文室淨三（フンヤノキヨミ）　長親王の子智努王といふ勝寶四年姓文室眞人を賜はり攝津大夫となる後正三位中納言にのぼり尋で從二位に進み神祇伯を兼ぬ寶字中致仕す孝謙帝崩御の後儲貳定まらず吉備眞備等淨三を立てむとす淨三固辭して免る尋で薨ず

きよむね　平清宗（タヒラノキヨムネ）　內大臣宗盛の長子從五位下侍從より累遷して正三位右衞門督に至る父死するに及びて近江篠原に斬らる時に年十七

きよもり　平清盛（タヒラノキヨモリ）　忠盛の子母は白河帝の宮人なり大治四年從五位下に叙せられ左兵衞佐となる保延中中務大輔より肥後守に轉じ從四位上にすゝむ久安二年正四位下安藝守に任ぜらる將に熊野社に詣らむとして海路伊勢安濃津を過ぐ鰐あり跳躍して其の船に入る人以て嘉瑞となす保元元年崇德上皇兵を白河殿に集む平忠正源爲義召に應ず時に清盛の妻重仁親王に奉仕するを以て清盛は當に上皇に黨すべきを知らる然るに奚福門院遺詔と稱して之を宮廷に召す清盛直に詔を奉じて兵を出し源義朝と共に白河殿を攻む事平ぎて播磨守に任ぜられ尋で太宰大貳となる平治元年藤原信頼亂を作し源義朝之に與みす清盛たまたま熊野詣の途にあり切部の驛より急行して阿倍野に至り伊藤加藤の一族と合して京に入る乃ち信頼を欺くに他意なきの誓を以てし藤原惟方同

尹明と謀て帝を禁中より逃れしめ之を六波羅に迎ふ是に於て重盛頼盛をして信頼等を擊たしむ義朝之に應じて戰ひ別に兵を回らして六波羅を衝く清盛善く拒き遂に進んで宮門に薄り義朝の兵を敗る功に依て子弟一族皆官位を加へらる永暦元年正三位に叙せられ參議となる應保長寛中檢非違使別當より從二位權中納言にのぼり皇太皇宮權大夫兵部卿を兼ぬ永萬元年權大納言となり威勢漸く衆を壓す流言あり上皇密かに清盛を圖ると清盛急に兵を聚めて守る上皇大に驚き六波羅に幸して自ら開諭す清盛病と稱して出でず天下爲めに騷然たり高倉帝立つ時に清盛の妻時子は皇太后の姉なるを以て平氏の威令益〻宮廷のうちに行はれ遂に上皇の忌むところとなる仁安元年正二位内大臣となり二年從一位太政大臣に進む幾許ならずして之を辭し許されて更に大功田を賜はる三年病を得て薙髪し清蓮又は淨海と號す世に太政入道とよぶこれより清盛驕奢を極め別邸を西八條及び攝津福原に建つ而して童子三百人を選みて京中を彷徨せしめ以て己を非議する者を告げしむ上下これに依て震慴せり承安元年清盛女德子を進めて女御となす已にして皇后となる建禮門院これなり此の時に當りて平族一門皆顯官にのぼり莊園六十餘州にわたりて權威富豪天下に比なし權大納言藤原成親深く之を惡み西光等と謀り平氏を滅さむとす黨人源行綱變節して急を福原に報ず清盛大に驚き直に西光を捕へて拷問し其實を得而して法皇の議に與れるを憤り之を幽せむとして重盛のために遮らる依て成親及び其連累の徒を殺して罷む三年重盛薨ず法皇其所領を收め關白基房の請を容れて其子師家を中納言に拜す清盛の女婿基通亦清盛に圖て之を謂ふ清盛爲めに懇請して得ず是冬兵を率ゐて福原より京に入り帝に告ぐるに故らに隱退の心を以てす帝大に驚き使を遣はして之を慰撫す法皇又安ずる能はず人をして諭解の旨を傳へしむこゝに於て公卿以下北面の法皇に近親する者廿九人の官職を褫ひ基房を太宰權帥となし前太政大臣師長を尾張に流し權大納言源師賢を洛外に褫ひ而して後遂に法皇を鳥羽殿に幽す治承四年四月安德帝立つ此時源頼政以仁王を勸めて平氏を滅さむとし源行家をして令旨を東國に傳へしむ行家伊豆に赴き義朝の遺子頼朝を起す熊野別當湛增變を清盛に告ぐ清盛兵を發して以仁王を襲はしむ頼政王を奉じて奈良に赴く清盛追擊太急なり頼政支ふる能はず遂に宇治平等院に入りて自殺す六月清盛都を福原に遷す上下騷擾愁慘の聲四方に起る九月頼朝兵を伊豆に起し頻に侵略を企つ清盛宣旨を請ひて之を伐つ源義仲又信濃に起りて頼朝に應じ源氏の勢漸く熾なり十月追討使維盛等富士川に敗れて還る十二月清盛清房をして園城寺を攻め重衡をして東大興福二寺を焚かしむ養和元年清盛頼朝の兵京に進むと聞き宗盛をして院宣を奉ぜしめ以て東國に赴かしめむとせり其發せざるに先ちて熱病に罹り七月に至りて薨ず年六十四

きよやす　德川清康　信忠の子初名清孝小字竹千代二郎三郎と稱す享祿中尾州參州を平定して將士多く歸服す文久二年甲將武田信虎使を發して好を通ずこゝに於て清康の武威四方に達す四年濃江二州を侵し更に又織田氏を伐ち

て先づ京畿に起くの途を開かむと欲せり十二月侍臣安部定吉の爲めに弑せらる時に年二十五

きよやす　山田清安　和學者なり薩摩の藩士にして江戸邸の留守居たり通稱は市郎左衛門作樂園と號す桂園に學びて最も歌を善くせり又本居翁平田翁の學を嘉ひ能く古書を渉獵す嘉永元年十一月死す

きよやすしんのう　清保親王　貞敬親王の子文化十四年八月勅修寺家を嗣ぐ文政元年二月光格帝の養子となり六年十月親王となる七年四月剃髪して濟範と改め戒を海寶僧正に受く十二年十一月東大寺別當に補し天保八年十一月二品に叙せられ九年十月一身阿闍梨に補したるが十三年七月に至りて罪を得皇統を除かれ諸職務を罷め位を停めらる

きょらい　去來　俳人なり俗稱向井平次郎大夫といふ名は兼時又義焉落柿舍と號す肥前の人なり兄と共に京に出て武を以て飛鳥井家に仕ふ鴨河の東聖護院後に住し別莊を嵯峨に營む俳は芭蕉門下の十哲に位してその格調清逸非凡なり寶永元年九月歿す年五十四著書には去來抄あり

きょりゅう　濱漁柳　狂言作者にして通稱鹽野村助白頭丸柳漁庵惠陽又驛亭駒人等の別號を有す

きょろく　森川許六　俳人なり名は百仲字は羽官五老井又は菊阿佛と號す井伊侯の給人にして俳を芭蕉に學ぶ齋を狩野安信に修めて其技尤も秀づ晚年癩を病みて人に面するを厭ふ正德五年八月歿す年六十其著風俗文選尤も世に行はる

きらん　鬼卵　小說家なり栗枝亭といふ本姓大須賀又は中山知白と號す家は煙草を賣るを業とせり狂歌にも巧みにして白河樂翁公の褒賞を蒙りしことありしといふ文政六年二月歿す年八十三

きんえだ　三條公條　長享二年從五位下侍從に任じ後累進して右大臣にいたる天文十二年七月辭任し翌年二尊院に入りて削髪し仍覺と號すこれより名勝を遍遊して詩歌を作りて樂む性正廉にして高潔當時の公卿間に重んぜらる永祿六年十二月薨ず年七十七

きんか　平野金華　儒者なり名は玄中字は子和通稱源右衛門金華と號す陸奥の人物徂徠に就て古文辭を修め放談高論洒々落々酒に耽りて痛罵縱橫す而して又貧居敢て意とせず人以て奇人といふ守山侯に聘せられて儒臣となる享保十七年七月歿す年四十五

きんが　井上金峨　儒者なり名は立元字は純卿通稱文平江戸の人父觀齋醫を以て信州笠間侯に仕ふ金峨の時に至り致仕して江戸に來り儒を修めて帷を垂れ以て子弟に教ふ學は初め伊藤氏の說を聞き中頃物氏の說を聞ひ後一新機軸を出して折衷學を初む天明四年六月歿す年五十二病間長語、金峨文集、同吟草、考槃堂漫錄等の著あり

きんが　梅亭金鶴　小說家なり吾妻雄兎子又は鶯溪隱士白山人と號す通稱瓜生熊三郎劍客吉田勝之丞の第二子交を松亭金水に通じ七偏人の小說を作る後國々珍聞に入り狂文狂歌をよむ明治二十六年六月歿す年七十三

きんかず 洞院公數（ドウキンノキンカズ） 從一位左大臣實熙の子權大納言左近衛大將に累進す文明二年官を辭し八年二月薙髮す時に年三十八

きんかた 惟宗公方（コレムネノキンカタ） 公方の祖は歸化人なり秦始皇の後といふ應神の朝衆を率ゐて歸化し秦を以て姓とす公方の祖父及び父の時に至りて姓惟宗に改む明法博士を授けられ正五位檢非違使となる天應二年大藏權大輔に左遷す安和中左大臣源高明の事に座して太宰權帥に貶せらるゝや薙髮して京に駐まらむと請ふ公方議を進めていふ凡そ僧尼の罪を犯す者猶且つ還俗して罪に處す今事に臨で薙髮す豈宜しく其罪を宥す可けむやと朝廷之に從ふ

きんかた 藤原公賢（フヂハラノキンカタ） 左大臣實泰の子元德二年内大臣となる後北朝に仕へて左大臣となり尋で太政大臣となる而して又南朝に復し幾許ならず北朝に事ふ薙髮して空元といひ正平十五年薨ず年七十其著に園太曆、皇代曆、歷代最要鈔等あり

きんぎょ 櫟亭琴魚（レキテイキンギヨ） 小說家なり伊勢の人曲亭馬琴の門人天保二年十一月歿す年四十四

きんとく 横井金谷（ヨコヰキンコク） 畫人なり近江の人與謝蕪村に學んで畫を能くし名古屋に住して其名四方に聞ゆ

きんさく 山下金作（ヤマシタキンサク） 初代 大阪の俳優なり初名は文五郎李江と號す山下又四郎の門に出づ因て二世又四郎と號す女形なり寛延三年七月歿す

きんさく 山下金作（ヤマシタキンサク） 二代 初代金作の養子なり大阪の人初め中村半太夫と云ひ里紅と號す女形なり寛政十一年九月歿す時に六十七歳

きんさく 山下金作（ヤマシタキンサク） 三代 明和中の俳優なり名は芳澤太郎二代目金作を嗣ぐ

きんさく 山下金作（ヤマシタキンサク） 四代 初名嵐三藏又三勝と稱す三代目の養子となる安政中大阪に歿す

きんさだ 洞院公定（ドウキンノキンサダ） 内大臣實夏の子官位終に左大臣從一位に至る應永六年薙髮して元貞といひ尋で薨ず時に年六十餘して後中園と號す曾て尊卑分脈十四卷を編纂して諸家の系圖を明かにせり

きんしょ 澤村琴所（サハムラキンショ） 儒者なり名は維顯字は伯陽九内と稱す琴所は其號なり世々彦根侯に仕ふ心疾を患ひて致仕し閑居して書を讀む疾癒ゆ京都に赴きて力學し業を伊藤東涯に受く後復古學に歸し彦根にかへりて南松寺村に居り松雨亭を建つ又城中にうつり子弟を教ゆ遠に來るもの甚多し中江藤樹三宅尚齋の學徒も琴所のために壓倒せられて遂に振はずといふ天文四年四月歿す年五十四閑窓集、軍士要覽、古今集序解、軍國要覽、彦陽和歌集等の著書あり

きんじょう 太田錦城（オホタキンジヤウ） 加賀侯の儒臣にして有名なる學者なり名は元貞字は公幹才佐と稱す加賀大聖寺の人初め皆川淇園に學び後山本北山に從ふ共に其意に適はず殊に北山の人となりを惡み大島無害山中恕之と俱に書を與へて交を絶つ茲に於て師を古人にもとめ讀書多年折衷學の唱導をなし其名天下に聞ゆ幕府の醫官多紀桂山錦城の才學を愛し子弟をして業を享けしむ桂山博治

名聲天下に振ふ而して此擧あり故に世人金、錦城を重しとせり後老中吉田侯幣を厚うして之を聘し世子の爲に講說せしむ加賀侯請ひて祿三百石を與へ藩の儒官となし班士の上に列す文政八年四月歿す年六十一著書には周易詳說、論語大疏、九經談、中庸原解、孟子精義、荀子考、亂賊傳、海寇事略考、梧窓漫筆、同後篇、群雄割據錄等其數極めて多し

きんすい 松亭金水（シヨウテイキンスヰ） 小說家なり蔡翠道人といふ俗稱中村保定通稱源八とよべり書をよくするを以て春水の筆耕となりしが後遂に小說を作るにいたれり文久二年十二月歿す年六十六

きんすえ 藤原公季（フヂハラノキンスエ） 右大臣師輔の子閑院家の祖なり幼にして宮中に發ばる康保四年正五位下に叙し寛和中權中納言となる寛仁元年右大臣に進み治安元年從一位太政大臣にのぼる長元二年薨ず年七十三謚して仁義といふ

きんすけ 下毛野公助（シモツケノキンスケ） 武則の子攝政兼家の隨身なり嘗て父に從て右近馬場に賭射す勝たず父怒て之を撻つ公助伏して其撻つに任せり人怪みて問うて曰く汝何ぞ逃れざると公助曰く父老いて足弱し我を追ひて走らば或は顚倒するの憂あらむと聞く者歎服す

きんだい 東條琴臺（トウデウキンダイ） 儒者なり江戸の人幼名袈藏名は耕字は子藏琴臺と號す年少龜田文左衛門の人と爲りを慕ひ自ら文左衛門と稱して著述業に從ふ後高田藩主榊原氏に聘せられ明治維新後龜戸神社の祠官となる十一年九月歿す年八十四先哲叢談、續篇、同年表、儒林小史、經籍通志、談藝折衷、閑散餘筆の著世に行はる

きんだい 諸葛琴臺（モロクズキンダイ） 儒者なり下野の人名は鑑字は君測髮山人と號し次耶太夫と稱す上野輪王寺宮に侍讀し後姫路侯に仕ふ文化七年十一月歿す年六十三著はす所平氏春秋、大學考、潮月樓雜記、髮髮山人集等あり

きんたか 藤原公孝（フヂハラノキンタカ） 太政大臣實基の子乾元中太政大臣となる同三年七月薨ず後德大寺といふ

きんたね 藤原公胤（フヂハラノキンタネ） 實淳の子左大臣となる大永六年十月出家法名藤繼尋で薨ず年四十後野宮と稱す

きんつぐ 藤原公繼（フヂハラノキンツグ） 左大臣實定の子建曆元年十月右大臣となる元仁元年十二月左大臣となり尋で從一位に進み安貞元年に至りて薨ず年五十三野宮といふ嘗て後鳥羽上皇北條氏を伐たむと欲し先づ近衛大將藤原公經の鎌倉に姻戚あるを忌みて殺さむとす公繼苦諫して關東を敵とするの不可を說き公經の急を救ふ上皇納れず然れども公經を殺すの議を止む

きんつね 宇都宮公綱（ウツノミヤキンツナ） 藤原道兼四世の孫僧宗圓宇都宮座主となり初めて之を姓とす公綱は其後なり初名高綱彌三郎といふ父貞綱の後を承けて備前權守兵部少輔より治部大輔となる元弘二年北條高時の命により六波羅を扶け守る而して隅田通治北條仲時楠正成の兵と戰ひて利あらず公綱乃ち出で〻戰ふ正成其鋭を避けて退き機を窺ひて遂に發せず翌年大佛高直の正成を千劍破城に攻むる時公綱力戰尤も功あり而して王師來りて仲時時益誅に伏するに及び公綱高直と奈良に走り正成の兵を拒

ぐといへども官軍の招くこと頻なるを以て降る幾許ならずして尊氏の叛するあり公綱新田義貞に屬し之を鷲坂に破り又脇屋義助に從ひて手越河原に戰ひ功あり時に公綱の族宇都宮より來る公綱爲に勢を增して前進し函根に戰ひて又功あり而して官軍の逆擊せられて敗るゝや公綱大友泰氏と共に尊氏に降り官軍を逐ひて京に入る乃ち神樂岡に戰ひ克たず遂に尊氏と共に西奔し道より還て官軍に降り尊氏を豐島河原に追擊す新田義貞の西征する時公綱從ひて白旗城を攻め脇屋義助大井田氏經と船坂山を拔き退て尊氏を淺川に拒ぐ利あらずして京に還り義貞と高師直を叡山に攻む後尊氏の伴りて款を納るゝに當り公綱其駕を護て京に來り尊氏のために囚へらる公綱髮を削り服を易へて宇都宮に道る延元年中南帝吉野に幸す公綱兵五百を率ゐて行在に到り髮を落へて仕へ正四位左近衛少將に任ぜらる源顯家の足利義詮と利根川に戰ふや公綱兵二千餘人を率ゐて之に會し長驅して鎌倉を破り西上して上杉憲顯を青野原に破る幾許ならずして顯家の敗走するに及び公綱又髮を削て名を理蓮と改め正眼庵とよび宇都宮に退く正平七年兒島高德と東西相應じ新田義貞の子弟を促して東國を定めむと企てしが南軍男山に敗るゝと聞きて果さず同十一年五十五を以て卒す

きんつね 藤原公經（フジハラノキンツネ） 從二位重尹の子なり從四位上主殿頭兼河內守となる康和元年七月卒す和歌に巧みにして書をよくす

きんつね 藤原公經（フジハラノキンツネ） 內大臣實宗の子西園寺又は閑院と號す世人よんで鞠給大將といへり公經の妻は源頼朝の妹の尖藤原能保の女にして又公經の女は頼經の母なり故を以て鎌倉の姻戚を恃み意頗る傲る建保中近衛大將を得ざるを怨み朝せず後鳥羽上皇怒て其朝參を停む源實朝之を解きて遂に事無きを得たり承久の變起るや北條泰時に據て其家を護衛せらる事平ぎて後內大臣となり尋で從一位太政大臣となる寛喜三年病に依て薙髮し名を覺勝と改む寛元二年薨ず年七十四

きんつら 洞院公連（トウヰンノキンツラ） 西園寺實遠の子文明八年洞院公數の家を捨てゝ佛に歸するや實遠朝廷に請ひて其子公連をして洞院を嗣がしむ公連文明十四年を以て從五位下に叙し侍從に叙せらるる尋で左近衛中將となり正三位にすゝむ文龜元年四月出家して系遂に絕ゆ

きんと一 藤原公任（フジハラノキンタフ） 關白頼忠の子幼より學藝に秀づ長德長保年間正三位中納言となる寛弘の初め藤原齊信位其上に出づ公任懼はず病と稱して朝を缺くこゝに於て帝從二位を授け尋で大納言となす後正二位に進み按察使を兼ぬ萬壽元年女を失ふ公任悲悼已まず乃ち髮を削て僧となり北山長谷の莊に入る長久二年薨ず年七十六世に四條大納言又は按察使大納言といふ公任文才非凡多能多藝にして殊に和歌に秀づ嘗て撰政道長大井川に遊び詩歌管絃の三船を浮べて各〻才を選みて乘らしむ公任素より才三船に道ず道長其何れに乘るかを問ふ公任乃ち和歌の船に入りて詠じて曰く朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人そなきと衆喚賞す公任其著はす所に九品論議、新撰髓腦、北山鈔、和漢朗詠集等あり

きんとき 池田金時（イケダキントキ） 京都の町奉行なり寛政元年任滿ちて江戸に還る時に天災後の米價漸く低落するも奸商相謀て價を減ぜず金時怒り微服して其首謀者の店に赴き之を斬る諸商驚き米價大に落つ

きんとき 今出川公言（イマデガハキントキ） 姓は藤原氏從一位權大納言誠季の子父に嗣ぎて權大納言に任じ寶曆十年薙髮して松皐といふ時に年二十三

きんとき 坂田公時（サカタキントキ） 坂田主馬佐と稱す相州足柄山の產源頼光に從て驍勇の名あり四天王の一人に列せらる

きんとも 姉小路公知（アネノコウジキントモ） 維新前の勤王家にして官右少將たり幕府の勅命を奉ぜざるを憤り有志と共に攘夷を企てゝ果さず文久三年五月賊のために要擊せらる時に吉村右京從ふ直ちに刀を拔いて賊を逐ふ然れども公知既に創を蒙り頗る危態なり右京扶けて歸る幾許ならずして薨ずといふ

きんのぶ 德大寺公信（トクダイジキンノブ） 實久の子母は信長の女なり從一位左大臣となりて落飾し淨覺とよぶ天和元年七月薨ず年七十七誣して正桂院といふ公信性剛直清廉嘗て後光明帝の飲酒を諫めて之を停む

きんひら 藤原公衡（フジハラノキンヒラ） 公經の孫にして實兼の子延應二年三月左大臣となりて慶長四年九月薨ず竹林院といへり

きんひろ 西園寺公廣（サイオンジキンヒロ） 太政大臣實氏の後裔なり實氏以來伊豫を領するを以て公廣も同國を領し左衛門太郎とよぶ河野宇都宮兩氏相爭ふに及び公廣毛利氏に據り中途盟約に背きて宇都宮豐綱に加擔し以て河野道直を攻む一條長實我部等各〻起りて戰鬪虛日なし天正中毛利氏遂に諸郡を尙へ伊豫を併せ西園寺氏を滅す

きんふさ 藤原公房（フジハラノキンフサ） 左大臣經宗の子なり建保六年七月太政大臣となる建長元年八月薨ず淨土寺殿と號す

きんむね 藤原公宗（フジハラノキンムネ） 內大臣實衡の子元德二年正二位權大納言となる公宗北條氏と親姻あるを以て之を恢復せしめむと欲し家士三善文衡と謀て北條泰家を嗾し以て亂を京に作さしむ建武二年帝を弑せむとして成らず事皆あらはれて遂に殺さる

きんむら 德大寺公城（トクダイジキンムラ） 實藍の庶子從二位權大納言たり家人竹內式部に就て儒を修む時に流言あり縉紳皆式部の講武を聽くとこゝに於て式部獄に下され公城座して官職を褫はる寶曆十年落飾し巒溪と號し安永七年赦にあひ天明二年薨ず年五十三

きんめーてんのー 欽明天皇（キンメイテンナウ） 天國排開廣庭天皇といふ宣化帝の御弟なり位に即きて都を大和の磯城島にうつし金刺宮に居る在位三十三年崩ずる時御年六十二

きんよし 藤原公能（フジハラノキンヨシ） 左大臣實能の子二代后藤原多子の父なり左大臣を以て應保元年八月薨ず大炊御門とよべり

きんよし 藥師寺公義（ヤクシジキンヨシ） 正平中高師直に從ひ松岡城を守る城陷らむとするや師直曰く四國に走らむか僧となりて降らむかと公義其非を諫めて快戰以て死生を決せむとす師直尙死を免れむと欲す乃ち泣歎して薙髮し元可と號して高野山に入る公義又和歌に長ず月は見む月には見えじとぞ思ふ浮世に環る影

も耻かし

きんら 夜雪庵金羅（ヤセツアンキンラ） 二世 金原眞山の門人後に谷口樓川に從ふ江戸露月町に居る曲沙、櫻風、芳草林、峨眉山人と號す寛政六年正月歿す

きんらち 馬場金埒（ババキンラチ） 狂歌師なり家號錢屋別號滄州樓俗に大坂屋甚兵衛といふ四方側四天王の一人なり文化四年十二月歿す

きんりょー 芳野金陵（ヨシノキンリヨウ） 儒者なり名は世育字は叔果金陵又は匏宇と號す通稱愚三郎後立藏下總の人父南山に就て儒を修め文政中龜田鵬齋並に其子綾瀬に學ぶ弘化四年本多侯に仕へて儒官となり嘉永中しばしば對外の策を案じて幕府に上る安政五年井伊直弼大老を以て天下の權を專にす金陵同志と謀て爲すところあらむとせしも遂に果さず志士多く捕はれて却て刑に逢ふ萬延元年金陵藩の司計となり鋭意以て財政の改革につとむこゝに於て施政大に整ひ上下翕然として治に向ふ文久二年建議して山陵を修し供御を增すの數策を上る後昌平黌の書生寮を監し又教授となる明治二年少博士となり尋で中博士に進み從六位に叙せらる明治十一年八月歿す年七十七

きんれー 瀧澤琴嶺（タキザハキンレイ） 通稱宗伯馬琴の子なり松前侯の侍醫となりて天保六年五月歿す年三十八

きんろ 岡島琴麓（オカジマキンロク） 小說家なり名は長盈字は哲甫竹の家又は丹前舍と號す通稱芳右衛門曲亭馬琴に學びて節亭と いふ後三馬に從て三島とよび馬琴と絕つ文政十一年歿す

くい 大伴咋（オホトモノクヒ） 金村の孫なり物部守屋蘇我馬子と事を構ふるや咋馬子に黨し平群神手等と共に進みて守屋を澁河の家に攻む崇峻帝の四年任那を復せむとの議生ずるや咋紀男麿巨勢比良夫等と兵二萬を率ゐて筑紫に居り人をして新羅任那の國狀を偵察せしむ推古帝の九年詔を奉じて高麗に赴き任那を救ふ十八年新羅任那の朝貢闕にいたる咋蘇我蝦夷等と出で、庭に接し其使命をうけて之を大臣馬子に啓す

くーかい 空海（クウカイ） 高僧なり姓は佐伯氏讃岐の人弱冠にして石淵寺の勤操大師に從ふ德宗の貞元二十年入唐して諸寺に學び懸果阿闍梨に就て灌頂を受くこゝに於て阿闍梨の位を得これより磐若三藏に付するに華嚴六波羅密經等を以てし一派を開く大同元年歸國して嵯峨帝に見え宮中に諸宗の碩師と論ず空海の辯論精敏與に抗する者あるなし十三年平城上皇其道を悅び灌頂の法を受く天長元年旱魃に當て祈禱し奇瑞忽焉として現はれ大に雨ふること三日なり弘仁七年紀州高野山に登り金剛峰寺を創め天台の教門をひらく承和二年三月寂然として定に入る年六十二空海佛體を刻む甚多く其數勝て計ふ可らず又いろは歌を作り諸國に傳唱す延喜二十一年朝廷諡を賜ひて弘法大師といふ

くぎょー 公曉（クギヨウ） 源頼家の第二子幼名善哉といふ頼家の害に逢ふ時年僅に四歲政子實朝をして子とし養はしむ長じて定曉に從ひ公曉と改む園城寺に入りて學ぶ公曉常に父の死を悲しみ實朝及び義時を殺して幽愁をひらかむとす たまたま鶴岡別當に補せらる依て一千日の宿願を立て髮を蓄へ肯て坊舍に歸らず時に實朝右大臣に拜し拜賀の禮を

鶴岡に行ふ禮畢りて將に石階を下らむとするに當り公曉銀杏樹の蔭より突出して急に之を殺し併せて從者中原仲業を殺す而して叫んで曰く別當公曉父の讐を報ずとこゝに於て衆公曉が雪下の坊舍を圍む公曉實朝の首を提げて直に備中阿闍梨の舍に赴く而して僧らく三浦義村は我乳母の夫にて子駒若丸は我弟子なり彼必ず我を扶けむと乃ち使を遣して意を通じ以て將軍職に居らむとの望を告ぐ義村給て承諾し急を義時に報ず義時政子の命を受け義村をして之を殺さしむ義村旅人長尾定景に壯士五人を屬して備中の邸に赴かしむ公曉義村の家に走らむとして途に之に逢ふ定景搏鬪して其首を獲以て義村に送る公曉時に年十九

くくのちのかみ 久々能智神（ククノチノカミ） 志那都比古神の弟にして木を司れる神なり或はいふ菊理媛と同一なりと

くさかべのおーじ 草壁皇子（クサカベノワウジ） 天武帝の皇子なり壬申の亂帝に從ひて東國に赴く九年立て皇太子となり十三年淨廣壹を授けらる持統帝の三年四月薨ず年二十八日並知皇子尊と稱す又岡宮御宇天皇といふ

くしあかるたまのみこと 櫛明玉命（クシアカルタマノミコト） 天太玉命の臣にして出雲の玉作が祖なり素盞嗚尊根國に至らむとして日神に謁するの時命出で、迎へ八坂瓊曲玉を獻ずと

くしつぬわけおー 櫛角別王（クシツヌワケワウ） 景行天皇の皇子にして母は播磨稻日大郎女皇后なり

くじら 庵井鯨（イホヰクヂラ） 壬申の亂弘文帝の將となり天武天皇の將大伴吹負の營を擊ち利あらずして敗走す

くすり 境部藥（サカヒベノクスリ） 壬申の亂に兵に將として村國男依と戰ひ敗走して死す

くすりこ 藤原藥子（フヂハラノクスリコ） 平城帝の尙侍にして中納言種繼の女能く媚を呈して寵せらる帝位を嵯峨帝に讓るの後藥子兄仲成と謀て自ら后位に上らむと欲し異圖を企つ嵯峨帝兵を發して仲成を捕へ藥子を宮外に幽す平城帝大に怒り藥子と共に東國に赴きて事を擧げむとせり官軍其要路を塞ぐこゝに於て帝薙髮し藥子毒を仰ぎて死す

くない 伊勢島宮內（イセツマグナイ） 淨瑠璃を以て名を成す江戸の人虎屋源太夫の門人後伊勢島節を唱ふ其門弟松本佐太夫嘗て京都北野に芝居を興行し宮內等の節をうたふといふ宮內剃髮して節齋と號せり

くないきょー 宮內卿（クナイキヤウ） 後鳥羽天皇の宮女にして右京大夫師光の女和歌に巧みに又笛を能くす然れども病を得て早世せり

くに 國（クニ） 初代 京都の女優なり元出雲大社の巫女依て出雲の阿國といふ室町家の臣名古屋山三と通じ舞て女優となる文祿中秀吉其伎を見て感賞し珊瑚の珠數を與ふ正保の初め歿せり

くに 國（クニ） 二代 京都の女優なり知古屋山三の女洛東祇園南林にて芝居を興行す

くにいえ 國家（クニイヘ） 山城粟田口刀匠の始祖彌九郎と稱す後鳥羽帝番鍛冶の衆行たり

くにお 林國雄（ハヤシクニヲ） 國學者なり名は眞

相常磐舍といひ主税とよぶ江戸の人にして本居宣長の門下なり其著二神三名考等あり

くにおしとみのかみ 國忍富神（クニオシトミノカミ） 島鳴海神の子母は伊許知邇神なり

くにおみ 平野國臣（ヒラノクニオミ） 福岡藩士大中臣吉三の子幼字巳之吉後又吉通稱次郎月廻舍又は友月庵又は柏舍又は獨醒軒と號す憂國の情抑へがたく外夷攘蕩の念禁じがたし故を以て常に悲憤慷慨頼三樹梅田雲濱等の志士と交りて事を京に圖る安政中幕府志士を捕へて刑す國臣逃れて途に僧月照とあひ共弟子に扮して雲外と號し俱に薩摩に奔る西郷隆盛之を扶護する尤懇切なり隆盛月照と俱に海に入りて後蘇し罪を得て縛に就くや國臣逃れて京に入り宮崎司と稱して再び事を謀らむとす幕吏猶志士を索む國臣脱して長門筑後の間を往來し安政八年を以て復薩摩に歸る島津久光時に尊王攘夷の壯志あり國臣之に依て說を呈し京に赴きて其入朝を俟つ而して書を朝廷に献じて討幕の議を勸め王政の振興を促す文久三年島威少しく伸び志士の禁錮多く解かるゝに當り國臣猶京にあり識見高きを以て學習院の學督にあげらる國臣乃ち國體辨を作りて上る時に中山忠光兵を大和に擧ぐこゝに於て國臣去て但馬に往き姓名を佐々木將監と改め澤宣嘉を奉じて生野銀山に據りて遙に之に應ず幾許ならず忠光敗れ國臣捕はる元治元年七月遂に斬に處せらる年四十三明治二十四年四月朝廷其勤王の志を嘉みし正四位を贈る

くにさよ 島山國清（シマヤマクニキヨ） 家國の子にして足利尊氏の閥下なり左近衛將監阿波守左京大夫修理大夫等の諸官に歷任す建武二年足利直義と共に新田義貞を矢矧驛坂に敗る正平中尊氏直義隙あり國清直義に黨し石塔頼房を援けて尊氏と播磨に戰ひ之に克つこゝに於て權臣高師直兄弟を戮して和成り後又破れて戰ふ國清直義に勸めて和せしむ桃井直常之を沮む國清怒て尊氏に黨し直義と東國に戰ひて克ち伊豆に追窮して成ぎを行ひ後伴りて鎌倉に幽し遂に毒殺す尊氏の子基氏鎌倉管領となるに及びて國清執事となり薙髮して道誓と號す正平十二年國清奇計を以て新田義興を誘殺す時に尊氏薨じて義詮立ち東四の親和完からず國清機に乘じて兵をあつめ權威を專らにせむと欲し基氏に乞ひて京に赴き自ら和を圖らむと唱へ兵二十萬を率ゐて發す而して曾て敵視する所の仁木義長を殺さむとし諸將と共に謀て事遂けず驚に乘じて官軍勢を挽回し兵威爲めに振ふ人以て國清の私闘に耽るの罪となす玆に於て國清窮して鎌倉に還り罪を得て伊豆に逐はる關東の將士一も之を援くるなし國清嘆息して義興を誘殺するの禍となす基氏密に兵を遣りて國清を殺さむとするに及び奔りて藤澤に赴き急行して京に入り七條佛寺に匿れ楠正儀に頼て歸順を乞ふ正儀奏せず國清遂に大和山城の間を放浪して死す

くにこ 藤原邦子（フジワラノクニコ） 後水尾帝の宮人にして左大臣基音の女なり新中納言典侍といふ後龍幸を得て靈元帝を生む延寶五年七月准三宮尊で薨ず新廣義門院とよぶ

くにこないしんの一 邦子内親王（クニコナイシンノウ） 後高倉院の第二女後堀河帝の准母なり

承久三年十一月内親王宣下同十二月皇后宮となる貞應三年八月院號を許されて安嘉門院とよぶ文暦二年五月御出家法名正如覺弘安六年九月薨ず年七十五

くにさだ 國貞（クニサダ） 山城粟田口の刀匠一名吉宗備前二郎と稱す天福年間の人なり

くにさだ 歌川國貞（ウタガハクニサダ） 二代 初代豐國の門人にして一雄齋といふ初め一雄齋國政といひしが安政二年師の女を娶りて國貞を嗣ぐ後三代豐國をつぎ明治十三年七月歿す年五十八

くにしげ 歌川國重（ウタガハクニシゲ） 浮世繪師なり一龍齋と號す初代豐國の門人通稱源藏二代豐國の未亡人と通じ其號を更めて二代豐國といふ同門の人遂に之を背ぜず依て又國重に復せり天保六年十一月歿す年五十九

くにすけしんの一 邦輔親王（クニスケシンノウ）・貞敦 親王の子にして後奈良天皇の養子となる天文元年七月親王となる永祿元年二品に叙し五年十二月式部卿に任ず六年三月薨ず年六十一後安養院と號せり

くにぞー 荒川邦藏（アラカハクニザウ） 薩山口藩士なり明治十六年十一月參事院議官補となり太政官權少書記官を兼ぬ二十五年一月内務省衛生局長となり同十一月福井縣知事に任ぜらる三十年四月非職を命ぜられ卅六年十月歿す年五十二其病篤き日特旨を以て正四位に叙せらる

くにたか 土佐邦隆（トサクニタカ） 土佐宗家の藩人にして經隆の子なり從五位下豐前守藩所預となる文永中其名尤も著はる

くにたかしんの一 邦高親王（クニタカシンノウ） 貞常親王の子文明六年四月癸酉して後土御門帝の猶子となる六月親王となり七年九月式部卿に任ず八年正月二品に叙し永正十三年六月薙髮して嘉空といふ享祿五年三月薨ず年七十七

くにたかしんの一 邦忠親王（クニタダシンノウ） 貞延親王の子寛保二年三月櫻町帝の猶子となる三年十月親王となり上野大守に任ぜらる延享二年二月三品に叙し寛延二年九月二品にのぼり帶劍を聽され隨身兵仗を賜はる寶暦五年三月兵部卿に遷る九年五月一品に進み牛車を聽さる六月薨ず年廿九圓受光院と號す

くにたね 千葉邦胤（チバクニタネ） 胤富の子下總千葉の城主なり千葉介と稱す天正十六年七月侍臣鍬田萬五郎のために刺されて死す

くにだゆー 吾妻國太夫（アヅマクニダイフ） 二代 常磐津文字太夫の門弟初め大和太夫といひ後兼太夫と改め次で今の名に改む師と絶ちて常磐津別派の一家を成すといふ

くにたり 高橋國足（タカハシノクニタリ） 從五位下越後守たり天平寶字中の人和歌をよくす其詠萬葉集にあり

くにたろー 河原崎國太郎（カハラサキクニタラウ） 初代 江戸の俳優七代目權之助の子なり早世す

くにたろー 河原崎國太郎（カハラサキクニタラウ） 二代 江戸の俳優四代目尾上菊五郎の男梅幸といふ後河原崎家に養はれ國太郎とよぶ幾許ならず離緣となり喜瀨川露江とよぶ

くにたろー 河原崎國太郎（カハラサキクニタラウ） 三代 江戸の俳優前名市川一德後河原崎の養子となる

くにたろー 澤村國太郎（サハムラクニタラウ） 初代 江

戸の俳優初代高助の門人にして澤村長四郎の子なり幼名長吉其答と號す家號三笠家女形の名人と傳へらる後神路館海老蔵と改め文政元年七月を以て歿す年八十

くにちか 長曾我部國親 秦始皇帝の後裔洞王の裔なりといふ姓秦氏土佐の人なり小字千王父亡後國司一條房家に賴りて長じ舊領三千貫の地を復す元服して國親といひ宮内少輔と改む天文二十年山田城を拔き弘治二年本山梅慶が長濱の支城を攻めて陷る梅慶變を聞きて朝倉城より至る國親の子元親兵三百を以て之に克ち吉良親貞梅慶の子式部を走らす六月事未だ決せざるに先ちて國親卒す年五十四

くにちか 豐原國周 浮世繪師なり通稱荒川八十八一篤齋と號す豐原周信及び豐國に學ぶ俳優の肖顔に尤も巧なり明治三十四年九月歿す

くにつぐ 國次 姓は源氏通稱長谷部三右衛門といふ山城の刀匠來國俊の門人となり後正宗の門に入る世稱して鎌倉の來といふ

くにつね 粟田口國綱 有名の刀鍛冶にして藤六と稱し左近將監とよぶ後鳥羽上皇の番鍛冶となり後北條時頼のために鬼丸を作る建長七年九十三を以て歿す

くにつね 宇都宮國綱 廣綱の子小字彌三郎三郎左衛門下野守と稱す天正十五年七月秀吉の島津氏を討伐して鎭定するや國綱岡本正親を遣はして捷を兵庫に賀す十七年國綱國老肥薩の爪牙益子睡虎を誅し其采色を收む又宗家宇都宮鎭房の邑を收めて秀吉に通じ那須資晴等と多氣城を襲ふ是より先國綱孱弱なるを以て部下從はず密に款を北條氏に送るものありこゝに至りて北條氏直大舉して來り攻むと告ぐ國綱質を小田原に送り成を行ふ後國綱の功臣岡本正親秀吉の旨を來じて國綱に北條氏と斷たしめ十八年に至て秀吉の小田原攻に加入す慶長元年秀吉國綱の鎭房が采邑を横領せるを聞き横斷して三萬石を得罪を訊して國綱を流す二年十月秀吉國綱に命じて征韓の師に加はらしめ以て昔日の罪を贖はしめむとす國綱乃ち兵を率ゐて出征し功あり然れども秀吉

薨ずるを以て遂に志を果さゞりしといふ慶長十二年十二月卒す

くにとこたちのかみ 國常立神 天地開闢の時始めて地上に生ぜる神なり

くになお 歌川國直 浮世繪師なり浮世庵烟柳樓と稱す通稱鍋藏信州の人豐國の門に入りて學び文化九年初めて式亭三馬作昔語丹前風呂の繪を筆にすこれより草艸子讀本錦繪の類を描き國貞と名を齊しうせり然れども師風を墨守する能はずして一機軸を出さむと企て明齋を學び北齋風を慕ひ再び草双子類を筆にするも遂に行はれずして止む後其姓名を四郎兵衛寫樂齋と改めたり

くになおしんのー 邦尚親王 貞清親王の子寛永三年十月親王となり承應二年十一月薨ず年四十一乾德院と號せり

くになが 歌川國長 浮世繪師なり一雲齋と稱す通稱梅千之助豐國の門に學びて師名國字を讓られ國長といふ似顔畫錦畫の類は尤も巧みにして一機軸を出すひろく幣間と交り遊藝をよくし酒間に周旋して舞踏歌踊するを得意と

せり文政中歿す年四十

くにながしんのー 邦長親王 後二條帝の子木寺宮と稱す文保二年三月立太子正中二年三月薨ず年二十

くにながしんのー 邦永親王 貞致親王の子天和三年三月靈元帝の猶子となり元禄八年十二月親王となり中務卿に任ぜらる寶永六年五月二品に叙し享保十一年十月一品にのぼり尊で薨ず年五十一得解脫院と號す

くになつ 津守國夏 大山下吉祥の後裔といふ攝津の人從五位下に叙せられて住吉社神主をつぐ嘉曆中攝津守に任ぜられ勅を奉じて北條氏滅亡の祈を籠め事平ぎて從三位にすゝむ正平七年龍駕住吉を過ぎりて國夏の家に駐まるために又進んで正三位に叙せらる幾許ならず薨ず年六十五和歌に巧みにして其詠勅撰集に多し

くにのくひざもちのかみ 國之久比奢母智神 速秋津毘古神の子なり

くにのくらどのかみ 國之闇戸神 大山津見神の第六子天之闇戸神の弟なり

くにのさぎりのかみ 國之狭霧神 大山津見神の第四子にして天之狭霧神の弟なり

くにのさずちのかみ 國之狭土神 大山津見神の第二子にして天之狭土神の弟なり

くにのみくまりのかみ 國之水分神 速秋津毘古神の子にして水脈を司れる神なり

くにばしら 白尾國柱 國學者なり薩摩の人鈴屋の門に入りて國典を修め神代三陵考及び鹿兒島名勝考を著す

くにひと 貴島國彦 幼名卯太郎後清と改む薩摩の人なり陸軍に來職して少佐にすゝみ幾許ならず辭して還る桐野利秋と交深きを以て十年の役薩軍に投じ熊本城下に戰ふ嘗勇にして一騎當千の稱を得後隆盛を護りて鹿兒島に入り松原に陣す夜襲して官軍と戰ひ數人と搭鬪して遂に死せり利秋聞て大に惜す

くにひさ 尼子國久 經久の第二子紀伊守と稱す天文九年同苗晴久に屬して吉田に戰ふ功あり後武田常信等の兵と戰ひて克ち武威大に揚り心漸く驕る晴久憚ばずして遂に之を殺せり時は乃ち天文廿三年十一月なり

くにひと 武生國人 王仁の孫なり神護元年同族益人等と共に武生姓を得國人和歌に巧みにして其詠萬葉集にのせられたり

くにひと 多治比國人 天平八年從五位下に叙し十年民部卿となる和歌に巧みなり其詠萬葉集に出づ

くにふさしんのー 邦房親王 邦輔親王の子本名邦良正親町帝の猶子となりて後伏見家を承く天正三年二月親王となり六年十月式部卿となる十二年正月三品に叙し中務卿にうつる元和七年十一月薨ず桂昌院と號せり

くにふゆ 津守國冬 國助の長子住吉神社の神主をつぎて左近衛將監に任ぜられ從三位に叙す極めて和歌に巧みなり

くにまさ 歌川國政 浮世繪師なり一雪齋と號す通稱甚助會津の人幼にして江戸に來り紺屋の職工となりしも似

顔畫に妙を得たるより豐國に知られ弟子となりて研く業成りて似顔畫專門となりしが殊に當時の俳優中村富三郎を描くに巧みなりしとぞ文化七年十一月歿す年三十八

くにまる 歌川國丸（ウタガハクニマル） 浮世畫師なり一圓齋と號す通稱文治五彩樓又は翻蝶庵と號せり豐國の門人俳優似顔繪草紙の類を畫くに妙を得又俳に遊びて龍尾といふ文政年間歿す年三十餘

くにみしんの丶 邦省親王（クニミシンナウ） 後二條院第二の皇子三品に叙せられ彈正尹兵部卿に任ぜられ花町宮といふ天授元年九月薨ぜり

くにみち 邦道（クニミチ） 畫人なり京師の人畔て源頼朝のために伊豆目代平兼隆が館及び其道路を圖し終に其目的を遂げしめたり

くにみつ 歌川國滿（ウタガハクニミツ） 浮世畫師なり一翁齋と號す初代豐國の門人繪双子錦畫類の筆を取る

くにみつ 藤原邦光（フヂハラノクニミツ） 權中納言資朝の子小字阿新丸元享三年父佐渡に流されて本間入道のために殺されむとす邦光時に十三悲憤禁ずる能はず乃ち商船に乗じて赴き調を請ふ遂げず資朝の害に逢ひて其白骨邦光の許に到る邦光大に悲り夜に紛れて本間を刺し走て臣竹を攀ぢ一躍して垣を越え逃れて京に還る後村上帝の朝左兵衛督となり後中納言となるしばしば賊兵と戰ひて武勳あり

くにみつしんの丶 邦光親王（クニミツシンナウ） 邦永親王の子正德五年七月實相院を嗣ぐ享保十年十月靈元帝の猶子となり十一月親王となる翌年院に入て剃髮し名を義周と改む十三年三井長吏となり元文五年六月薨ず年二十九得不退院といふ

くにもと 篠原國幹（シノハラクニモト） 鹿兒島の人明治維新の際伏見に戰ひ東叡山に戰ひ頗る贈略を以て稱せらる功を以て正五位に叙し陸軍少將に任じ近衛兵の長官となる征韓論起るや西郷隆盛の議に贊して諸卿と協はず乃ち辭して鹿兒島にかへる私學校設立に關しては尤も力を盛くし日に隆盛と親みて其機要に預るたまたま赤龍丸來りて火藥を大阪に轉漕するに及び遂に隆盛と共に叛して熊本城を圍む明治十年三月吉次越の戰に死す

くにもと 津守國基（ツモリノクニモト） 大山下吉祥の後にして住吉神社の神主なり藤井戸と號す和歌に巧みにして秀逸多く後拾遺集に見ゆうすゞみにかへる雁がれの詠に依て薄墨の神主とよばる康和五年七月卒す年八十

くにやす 歌川國安（ウタガハクニヤス） 浮世畫師なり一鳳齋と號す通稱安五郎江戸の人豐國に學びて畫法に達し文化の頃より錦繪を出し大に行はる後四川安信と改名せしも幾許ならずして本の名に復し天保七年歿す年三十五

くにやすしんの丶 國康親王（クニヤスシンナウ） 仁明天皇の皇子齊衡元年四品に叙せられたるも虚弱の故を以て僧となる昌泰元年三月薨ぜり

くによし 歌川國芳（ウタガハクニヨシ） 有名なる浮世繪師なり幼名芳三郎後孫三郎一に太郎右衛門といひ一勇齋と號す姓は井草氏江戸の人六七歳にして既に繪事に長じ又武者繪等を見るを好む長じて紺屋の

職人となりしが豐國の知るところとなりて其門に入り專ら其筆法を學び且つ土佐狩野四條圓山の諸家を窺ひ北齋一蝶等の筆を摹び元明諸名士の跡をたづね又洋風の畫を究む文政年間紫草紙に初筆し續いて三枚續きの錦畫を出し後十年の頃水滸傳の人物畫を畫くに百貌の同一に陷らむことを恐れ日々本所の五百羅漢寺に到り其像を寫し來て下圖をつけしといふ故に同畫の世に出づるや名聲喧々人其妙技におどろく曾て國芳技未進まざりし時一日馬喰町の地本問屋に赴き畫料を得るに意の如くならず大に不平を抱き兩國邊を徘徊して悶を消すたまたま柳橋下に同門國貞の豪遊するを見るこゝに於て國芳奮然憤を發し彼の有福にして豪奢斯くの如きは技の我に優れる故なりよし我腕を練りて彼を凌駕せむにはと乃ち苦學多年業全く進み大名初めて成るといふ國芳性快活小節に區々たるを厭ひ好みて消防夫等と交り俠を以て任じ義を以て唱ふ又狂歌を習ひ英雄集に其詠をとゞむ文久元年三月歿す年六十五蓋し武者繪の筆者としては前後無比の大家なりといふべし

くによりしんの丶 邦頼親王（クニヨリシンナウ） 本名德明邦忠親王の同母弟なり延享二年十二月櫻町帝の猶子となり三年五月親王となり勅修寺に入りて僧となる名寛寶といへり五年六月東大寺別當に補し安永三年十一月還俗して伏見家をつぐ十二月更に親王となり四年二月兵部卿に任ぜらる五年二月三品七年十二月二品享和三年九月一品に叙し壽で薨ず年七十窮竟院とよべり

くによりひめ 國依媛（クニヨリヒメ） 口持臣の妹なり口持臣仁德帝の勅使となりて皇后磐之媛が山城筒城宮に往く皇后帝の閨帷治らざるを以て怒て命を來ぜず口持臣階下に伏し雨露其身を霑すも竟に動かず國依媛皇后に侍せり之を見て歌を誦じ以て哀訴す然れども后許さず口持臣空しく歸る

くまどり 太伴熊凝（ホホトモノクマゴリ） 肥後の人和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ天平中相摸に使し途にして病死す

くまわかまる 阿新丸（クマワカマル） 日野中納言藤原資朝の子なり資朝北條氏を謀り事成らずして佐渡に渡さる阿新丸時に年十三父に見えむことを欲し京を出でゝ佐渡に至る守護本間山城入道既に父を殺すを知り夜に乘じて山城入道を殺し遁れて港に至る本間の兵來り追ふ修驗の僧之を憐み共に舟に乘じて港を發し漸くにして遁るゝを得

くまわかまる 阿若丸（クマワカマル）一作麿 赤松光範の臣宇野六郎の子なり攝州住吉の戰光範楠正儀と戰ふ而して光範及び宇野六郎之に死す阿若時に年十二正儀を目して君父の讐となし志を決して赤阪に赴き郭中に入りて徘徊す正儀の臣兵庫之介忠元是を見て誰何す阿若泣いて告ぐるに赤松の臣宇野六郎の遺孤なるを以てす正儀聞て大に憫み召して仕へしめ寵愛甚し會〻阿若亡父の七回忌に當りて正儀のために元服を命ぜられ鎧一領並に領地若干を得名を改めて和田小次郎正覚とよぶに至る阿若恩義に感じて竟に正儀を刺すこと能はざるを嘆じ天を仰いで號泣す傍人怪しみて問ふ阿若包むこと能はず乃ち實を告げて去り往生院に入りて僧となる正覚法師とよべり

くみと 組兒 天平寶龜年間の人なり豐前に生る性和歌を好み頗る巧思あり其詠萬葉集に見ゆ

くめたろー 中村乘太郎 俳優なり京都の產家名丹波屋俳名鯉長といふ嵐門十郎の子嵐三右衛門の門人なり初め宮川町の娼家の色子にして吉十郎といひしが後其名を用ゐて俳優となり中村吉十郎と名乘り所作事の名人となれり安永六年七月歿す

くめのおーじ 來目皇子 用明天皇の皇子なり推古帝の十年征新羅將軍となり筑紫に到り船艦を整ふ會〻疾に罹り明年二月薨ず

くめのかた 久免方 德川氏の外戚なり稻葉定清の女享保七年九月正雲公女を生む寛延四年六月出家安永六年十一月卒す

くめのせん 久米仙 大和の人仙法を得て深山に入り松葉を食ひ薜荔を服す一日雲に乘て故里を過ざるに當り婦人の脛の白きを見て忽ち染心し即時墮落して塵寰に入る後高市郡に一刹を造り丈六の藥師を鑄る其寺は即ち久米寺なり

くめのせんじ 久米禪師 武内宿禰の孫稻目宿禰の後なり和歌に巧みなるを以て其詠萬葉集に揭げらる

くーや 空也 高僧なり本名光勝常に遊歷するを好み途次道路を修め架橋を繕ひ無主の遺骸を葬り市に入ては彌陀を唱ふ人稱して市上人といへり天曆二年天台山に登り座主延昌に從ひて得度す五年天下惡疫流行し死する者算無し空也之を憂ひ十一面大悲の像を刻み禱願して救ふ遂に洛東に就て四衆を募り寺を建て〻安置し號して六波羅蜜寺といふ後奥州に唱導し還て西光寺に寂す年七十時は天祿三年九月なり

くらおい 春日藏老 左京の人太田諸和の後和銅七年從五位下常陸介に任ぜらる其和歌は萬葉集に見ゆ

くらじまろ 藤原藏下麻呂 右大臣百川の弟惡美押勝を伐ちて功あり依て從三位右兵衛督となる神護元年勳二等を授けられ近衛大將兼大夫となる景雲元年伊豫土佐の按察使となり兵部卿東宮大夫太宰帥參議に累遷し寶龜六年に至て卒す年四十一

くらべめ 藏部女 中臣宅守の妻なり和歌をよくするを以て世に知らる其詠萬葉集にあり

くらめちのいらつめ 倉持娘女 和歌に巧みなり其本夫を戀ひてよめるもの揭げて萬葉集に見ゆ

くらんどだゆー 丸女藏人太夫 神貫流劍法の祖にして上泉伊勢守に從ひて學び秘術を得たり

くりくまおー 栗隈王 難波皇子の子なり天智の朝筑紫帥に拜す壬申の亂に當り大友帝佐伯男を遣して筑紫の兵を發せしめ栗隈王の吉野に關せむを慮り其向背に依て圖るところあらしむ男筑紫に到る王符を得て兵を發せず男乃ち刺さむとして果さず事平ぎて兵政官長を拜す四年薨ず後從二位を贈らる

くるまる 錦久留丸 江戸の小說家なり文化文政時代の人一亭或は長亭五闌と號す

くろとびしきぶ 黑鳶式部 小說家なり山東京傳の妹にして狂歌をよくせり天明中夭折す

くろぬし 大伴黑主 歌人なり近江の人滋賀大友郷に居るを以て滋賀黑主ともいふ郡の大領となりて從八位上に叙せらる貞觀中園城寺を以て延曆寺の別院となすに當り黑主を以て神社別當となす延喜中宇多法皇の打出濱行幸に侍し歌を詠じて來る法皇大に悅び物を賜ひてかへす盞し黑主歌に巧みにして其風逸興あり然れども體鄙しきを以て田夫の花前に愁ふが如しと評せらる其詠古今後撰拾遺集にあり

くろひと 高市黑人 天平寶龜中の人和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ

くろひめ 黑媛 殷中帝の元年七月皇妃にあげられ市邊押羽皇子御馬皇子清海皇女を生む五年九月薨ず帝悼惜して措かざりしといふ

くろべー 音羽屋九郎兵衛 陶工なり寶曆年中京都清水に窯をひらきて清水燒の始めとなる

くろべー 大野九郎兵衛 赤穗藩の家老なり國除かるゝの時大石良雄等城中に會議す九郎兵衛怯懦貪慾巧みに事に托して遊く後公金を諸臣に頒つの期に至り出で〻良雄等と論爭し祿秩の高を以て分配せむと良雄之を許す衆大に其強慾不義を惡み其肉を食はむとす岡島某其門に至りて罵る九郎兵衛慌れて逃走し京に赴く後貯ふるところの財を以て商估をなすといふ世人擯斥して路上これにあへば面に唾するに至れりと

くろまさ 高向玄理 初名漢人後又黑麿とよぶ武内宿禰の後裔なり推古帝の十六年小野妹子と共に隋國に使し留學すること廿三年舒明帝の十三年に及んで唐より還る大化元年國博士に任じ小德冠に叙せらる五年僧旻同と共に八省百官を議定し功を以て大錦上となる白雉五年遣唐押使となり唐に赴き高宗の永徽五年同地に卒す

くろまろ 大伴黑麻呂 勝寶延曆年中の人官右京少進に至る和歌に巧みなり其詠萬葉集に見ゆ

くろまろ 忌部黑麻呂 天太玉命の後なり寶字二年正六位に叙せられ翌年從五位下に進み內史局助となる和歌に巧みにして其詠萬葉集にあり

くろめ 宇治黑女 武藏豐島郡上下椋椅荒虫の妻天平寶龜中の人和歌を能くす其詠萬葉集其他にあり

ぐんとーさいがんりゅー 石川軍刀齋富流 江戸の劍士なり名は勝秋通稱紋彌小石川白山下に道場を開き子弟に教授す寛永九年吹上に武術上覽の際幕臣松前帶刀と闘ふ帶刀苦心するも勝つこと能はず富流謂へらく彼敗れなば職に闕せむと遂に敵を惱ませて後故意に打たる富流諸流の奥儀に通じて膂力亦十五人を兼ねたりといふ

くんぺー 蒲生君平 名は秀實一名炎君平は其字又君藏修靜庵と號す通稱伊三郎下野の人なり江都に出で〻山本北山に學び業成る慨然として經世の志あり乃ち天下を遊說して慷慨の論を恣にす嘗て帝王の陵の廢頽せるを見嘆息措かず山陵志を作りて幕府に告げ以て其修復を圖らむとす會〻巻艦來寇し人心恟々たり君平不恤緯五篇を著して闇老に上り邊防の事を議す有司其布衣にして事を議するを咎め將に嚴法に處

せむとせり林大學頭君平の人と爲りを知る故に百方辯疏して免るゝことを得たり君平又これに依て大に悟り閑居して職官志を撰し順次神祇姓族の諸誌に及ぼさむと欲す而して功成らず文化十七年七月を以て歿す年四十六君平奇行多し京に遊んで小澤芦庵と親む將に東國に赴かむとするに當りて芦庵君平のために別離の宴を張りて待つ其來る甚遲し日暮れて漸く到る芦庵其故を問ふ君平曰く途等持院を過ぎり足利尊氏の像を見て怒禁ぜず之に鞭を加ふること一百爲に後れたりと君平又高山彦九郎の偉人なるを聞て面會せむと欲し追ひて奥州石巻に到る及ばず依て轉じて仙臺に入り林子平を訪ふ子平君平の風姿敵愾なるを見て罵る君平沸然として其尊大を嘲り遂に一話の眞情を吐かずして去る君平江戸にあるや赤貧洗ふが如し依て夜間笛を吹て按摩を業とせしといふ維新の後朝廷其忠良を嘉みし從四位を追贈す

ぐんべー 伊庭軍兵衛（イバグンベエ） 劍客なり名は秀業常同子と號す世々江戸に住し幕府に仕ふ而して弟子を養ふこと千餘人能く又軍兵衛の命を奉ず文政天保の間幕府の士漸く惰弱に流れ邊服を修めて意氣得々たり然るに短衣長劍を横へて市街を往來するものは獨り軍兵衛の門弟のみ大老水野忠邦軍兵衛の人と爲りを奇とし某職に擢んで、重用す幾許ならずして忠邦退き軍兵衛も罷む子八郎又劍を以てあらはる

けーえき 香川啓益（カウヅキケイエキ） 醫者なり名は則眞牛山或は眞菴と號し又被髪翁といふ儒學を貝原益軒にうけ方技を鶴原玄益に學ぶ曾て大覺寺法主舌瘖を病む半年にして療治其効無し啓益藥を奉ずるに及びて忽ち癒ゆ小倉侯に召されて子則貫と共に往き厚遇せらる元文五年三月歿せり年八十五婦人藤草、牛山方考、同活委、老人養草、小兒必用、盤雪餘話、國學醫叢、延氣算法等の著あり

けーおん 住吉環恩（スミヨシケイオン） 有名の畜家なり春日隆親の第二子幼名聖藏攝州住吉の檜所となり後法眼に叙せらる不動利益緣起、當麻曼荼羅緣起、天王寺聖德太子繪傳、小國平治物語、天王寺聖德太子眞向御影等遺蹟の品多し

げき 薩摩外記（サツマゲキ） 淨瑠璃家なり二代目薩摩次郎右衛門の門人幼名小太夫後外記に改む一派の歌謡を創めて江戸堺町に操座を興行す

げき 柴田外記（シバタゲキ） 仙臺侯の家老なり名朝意幼名中務又内藏介といふ佐竹親榮の子にして柴田宗朝の養子となる伊達氏に仕へて祿三千石を食む國老の一人富塚重信辭するに及びて原田甲斐古内志摩これに代る外記甲斐と事を議して協はず蓋し甲斐は奸譎の士常に不良を圖りて大望を抱くのち伊達宗勝と結托し專政越權猥りに人を黜陟すたまたま伊達宗重伊達式部と郡境を爭ひ書を三老に致して訴ふ外記志摩宗重の旨を可とす甲斐獨り之を斥く宗重のち之を幕府の執政に上告せり執政外記志摩兩人を江戸邸に召して審理す其言一致皆正義に本く外記一人乖馳して合はず茲に至て其罪全く定まる甲斐窘窮して宗重を執政の邸に殺し外記を傷く蜂屋可廣走り來て甲斐を殺し外記稍かに免るると雖傷重くして起つ能はず遂に輿中に遷ばれて死す時は寛文十一年三月にして外記年正に六十三なり

けーこーてんのー 孝行天皇（ケイカウテンノウ） 御名大足彦忍代別尊垂仁帝の第三子なり纒向の日代の宮に即位し後近江高穴穗宮に移る在位六十年崩ず齢六十

けーさい 淺見絅齋（アサミケイサイ） 近江の人重次郎又は安正とよぶ望楠軒又絅齋は其號なり初め高島順良といひて醫を業とせしが後淺見を姓として天下の豪傑を友とし家産を蕩盡す夙に山崎闇齋を慕ひこれに從ひて苦學數年肺血略に罹れども而も撓まず槇元眞及び佐藤直方その病勢を壯にするを患ひしばしば忠告せしも終に其言に從はずして劭む殊に繼母に仕へて至孝なり世人比しく賞贊して其德を唱ふ時に太上天皇も其爲人を聞て之を聞見せむとするも絅齋固辭して出でず後闇齋の說を論駁し神道に注心するを諫爭して師門を脱し直方の親喪を除かざるに仕ふるを難じて絶ち門人三宅緝明の水府に仕ふるを斥く凡べて嚴正淑眞を旨として清貧に甘ずる幾年なるを知らず正德元年十月六十を以て歿す

けーさい 綾部絅齋（アヤベケイサイ） 名は安正字は伯章又は惟木絅齋は其號豐後杵築藩の儒官なり京に游びて北村篤所伊藤東涯に學び又室鳩巢服部南郭に受く絅齋人となり剛直藩侯を輔翼して件遇甚渥し後機饉救治策を講じて却て有司の旨に忤ひ閉門に處せらる遂に食邑を褫はれて閑居し悠々自適すこの時家庭指南一卷をあらはせり寛延三年歿す年七十五

けさごぜん 袈裟御前（ケサゴゼン） 貞婦なり小宇阿都麿源渡の妻となる容貌秀麗妍端見る者恍惚たらざるなし初め上西門院の雜仕となり未だ笄するに及ばずして左衛門尉源渡の妻となる閨門雍睦琴瑟相和す時に遠藤武者盛遠途に袈裟を見て心氣蕩然其渡の妻たるを知るに至て而も猶抑制すること能はず遂に袈裟の母衣川の家に赴き之を刼して以て謂ふ衣川悚れて諾し袈裟を招きて曰く汝丞に我を刺せと與ふるに小刀を以てす袈裟驚きて其故を問ふ衣川告げて謂ふ盛遠汝を見て不倫を我に媒せしむ諾せざれば彼我と渡とを刺さむと袈裟愴然として悲み涙滂沱たり而して心既に定まる乃ち衣川を慰めて曰く兒能くこれを處せむと日夕盛遠來る袈裟紿て其意を迎ふる爲れし密かに告ぐるに渡を殺さむことを以てせり盛遠大に喜ぶ袈裟約して曰く我渡をして髮を沐し醉臥せしめむ君潛に來りて新に沐する者を刺せと袈裟退きて家に還り渡をして快飲せしめ扶けて寢室に入らしめ自ら髮を濡し僞り服して男子の裝を爲し席を隔て、臥す盛遠來て沐せる者を刺して去り月明に照らして其首を見れば袈裟なり盛遠大に驚き邪慾忽ち散じ悲悼斷腸直に渡の家に復り實を告げて罪を竢つ渡曰く事既に此に至る汝を罪するも益なしと自ら髮を削て僧となる盛遠も又僧となるこれ即ち文覺上人なり而して文覺袈裟の屍を收めて墳を起す世人稱して鳥羽戀塚といふ

けーざん 多紀桂山（タキケイザン） 德川幕府の醫官なり名元簡字は廉夫安長と稱す桂山又は櫟窓は其號なり寛政二年白川侯のために幕府の侍醫に擢でられ法眼に叙せらる尊で醫學教諭を兼ぬ享和中醫官を詮選するに當て議論旨に忤ひ侍醫を罷めらる依て後進誘導につくし巷に門を開くに及び來る者陸續市を爲す桂山醫術に於て當時海内第一の稱あるのか

たはら儒に深くして識見甚高し盍し井上金娥に受くる處なりといふ文化七年歿す年五十六醫窓類抄、病名纂、脉學輯要、本朝經驗方、傷寒輯義、病名纂、脉學輯要、疑脚氣論、奇方彙編、其外文集の著あり

げーし 慶子（ケイシ） 後三條帝の皇后なり後一條帝の女長元四年内親王となり二品に叙す賀茂齋宮と爲りて三宮に准じ封千戸を得母后崩ずる後上東門院に從る永承六年皇太子の妃となる延久元年七月中宮五年薙髪尼となる承保元年改めて皇后といふ寛治七年九月崩す御年六十五世に兩院皇后といへり（ケイスケ）

げーすけ 谷村計介（タニムラケイスケ） 日向國諸縣郡倉岡の士族坂本右衛門の子にして同郷谷村平兵衛の養子なり明治五年熊本鎮臺に入營し歩兵となる七年佐賀の亂に當て大尉和田勇馬に屬し海路佐賀に入る後大尉奥保鞏に從ひて繩原村に進み死を睹して衆のために嚮導を爲す事平さて伍長となり八月を以て臺灣の役に往く而して神風連の暴動起るに當り聯隊長少佐乃木希典の拔擢するところとなりて參謀大迫尚敏に隨行し小倉に赴きて偵察の任務をつとむ十年西南戰爭起るや歩兵十三聯隊長少佐川上操六の部下として熊本城にあり賊來りて之を圍み内外阻絶して城將に陷らむとす川上少佐計介を以て苦狀を征討本軍に報ぜしめむと欲し之を少將谷干城に請ふ干城乃ち敎令を授く計介奮然として命を奉じ野人の裝をなして城を出で百方難を忍び賊の縛に逢ふ二回なるを脱して遂に第一旅團の陣地に達し旅團長少將野津鎮雄に告ぐるに城中の狀を以てす鎮雄大に計介の勇敢壯志を感じ營中に止めて厚く遇すこゝに於て部署を定めて進發し賊を田原阪に攻め一舉して熊本城との聯絡を通ぜしとせり三月計介請ひて停令隊中にあり官兵の利を失ふて退却するに際し怒氣勃々奮躍して賊壘中に闖入し彈に中りて死す時に年二十五官軍擧げて之を惜まざるものなし明治十六年同志相謀りて其碑を靖國神社所賜牛が淵邊に建つ有栖川宮親しく題して軍人龜鑑の碑と名付け谷干城其文を撰むといふ（タイタイテンノウ）

げーたいてんのー 懷體天皇 御名男大迹應神帝の五世の孫なり父を彦主人王といふ武烈帝崩じて嗣なし群臣議を定めて帝を越前に迎へ之を立つ都を山城筒城に遷し後乙訓に遷し遂に磐余玉穗宮に居る在位廿五年崩ずる時齡八十二

げーちゅー 契冲（ケイチュウ） 國學者なり大阪高津圓珠院の住僧法名空心俗姓下河氏父元宣は加藤肥州に仕ふ契冲幼にして穎悟神童と稱せらる年十一今里妙法寺手定法師の弟子となり十三にして高野山に上り東寶院快賢に從ふ學行共に進みて兩部大阿闍梨に列し寛文二年出て摂津國生玉曼陀羅院に往く幾許ならず地の噴嘆を厭ひ飄然として去て諸國を遍歴し大和長谷寺に念誦する事一七日寶生山に上り吉野葛城の勝を探ぬ此時又高野に上りて薩戒を國通寺の快圓にうけ轉じて和泉に入り止ること一年悉曇を究む延寶八年師手定の寂するを以て母氏のために其寺に住し孝養懈らず此時水戸西山公萬葉集の註解を撰す依て契冲を招きてこれに當らしめむとす契冲固辭して赴かず然れども公の志に感じ遂に萬葉代匠記二十卷惣釋二卷を作りて上る公大に喜び書を賜ひて一見せむと欲す契冲辭して退き難波東高

津に卜居し圓珠庵と號して俗客を斥く西山公常に物を賜ひ起居を問ふこと絶えず時に元祿十四年正月定卯（ジョウ）跌を結んで寂す年六十二古事記抄、源注拾遺、勢語憶斷、萬葉代匠記、古今餘材抄、百人一首改觀抄、後撰考、厚顔抄、勝地吐懐編、河社、類字名所集、名所補觀抄、和字正濫抄、漫吟集等の著あり

げーてんしんのー 敬典親王（ケーテンシンノウ） 職仁親王の子延享四年十月仁和寺を繼ぎ櫻町帝の養子となり十二月親王となる剃髪して名を覺仁と改め戒を受く寶曆四年二月一品に叙し翌年歿す年五十三

げーふく 百濟敬福（クダラノケイフク） 百濟義慈王の支孫なり敬福聖武帝のために寵せられ從五位上陸奥守となる時に東大寺の盧舎那佛成りて塗金足らず帝大に歎惜す敬福小田郡より黄金を得て獻ずるに及び帝悅ぶこと甚し乃ち敬福に從三位を授け元を改め天平感寶となす勝寶中敬福宮内卿に任じ諸官を歷て外衛大將となる寶字八年孝謙上皇の勅を奉じて中宮院を圍みて大友帝に逼り其宮を出でしむ天平神護元年刑部卿となり後騎兵將軍となり二年薨ず年六十九敬福人と爲り磊落酒色を好み貧者を惠むを以て常に餘財なしといふ（サイトウゲッシン）

げっしん 齊藤月岑 縣麿の子名は幸成通稱市左衛門松濤軒雅巢又白雲堂等の號あり江戸の人世々神田雉子町の名主なり兼ねて幕府の野菜納屋を勤る好學にして多識嘗て江戸名所圖繪を著はし又東都歲時記を撰し武江年表を作り聲曲類纂を軸む明治十一年三月歿す年七十五

げっしょー 月照（ゲッショウ） 名は忍向洛東清水寺成就院の住僧なり初名宗久又久丸と稱ふ嘉永七年職を弟信海に讓り諸國を遍遊す安政四年洋艦浦賀に來り互市を請ふ物議騒然たり而して幕政朝旨と相背くに及び月照慷慨の氣抑ふる能はず攘夷倒幕論を唱へて王事につとめ勅を奉じて天下泰平の祈禱を爲す又近衛忠熙の密書を受けて水戸侯齊昭に使せむとするに當り之を西郷隆盛に謀る而して月照隆盛をして赴かしむ後月照幕吏の追跡するところとなりて居住に安んぜず乃ち隆盛に扶けられて赤間關に至り北條右門海江田武次と共に鹿兒島に入らむとす然れども北條は國禁を犯せるを以て行く能はず適〻福岡の志士平野國臣來る依て國臣と共に行く時に幕吏益〻月照の後を追ひ探偵太急なり月照名を靜溪院鍠水と改め海に航して薩に入り阿久根より上る隆盛又翠で到り相見て慾なきを賀す安政五年十月幕府福岡藩に命じて月照及び國臣二人を捕へしむこゝに於て捕吏薩に入る薩の參政隆盛をして月照等を日向に避けしむ隆盛月照を見て此意を通じ天下の事日に非なるを慨して遂に投海の約を結ぶ十一月に至り隆盛一夜月照を訪ひ伴り謂ぐるに幕吏至るを以てし倉皇として難を海邊に避けしめ遂に國臣外一人と御船崎に艤す時正に晩秋天澄み月明かに銀波樣々として壯快の氣溢るゝに似たり四人舟中に小宴し杯を回らして相樂む少時して月照船表に立ち月を仰いで涙下る即ち墨斗を把り紙を展べて歌を記し隆盛に示す隆盛又船表に出で月照に說くに近在諸島の風致を以てせり國臣等怪まず忽ち潸然たる水聲の起るを聞く國臣等駭き見れば月照隆盛と共に海中に投ぜり國臣急に舟子に命じて之を救はしめ火に暖め藥を與ふ隆盛蘇

し月照終に絶す時に年四十六

げっしょ！ 月性（ゲッシャウ） 安政の奇僧なり周防の人字は知圓清狂と號す初め生國遠崎村妙圓寺に住し後出て〻京畿諸州に遊び天下の名士と交る替て西藩紀傳を讀み衞人耶蘇教を布き瓜哇を奪ひし事蹟を知り浩歎して攘夷の急なるを思ひ佛を以て匪教を斥くるの途を施す人稱して海防僧といふ長藩益田福原浦の三老尤も之を愛し采邑を與へて講説せしむ安政三年本願寺法主月性を京に徴す月性赴きて書數千言を作り之を呈す法主奇とし條銀を與へ東山の別莊に寓せしめ大に用ふる所あらむとせり會〻志士梅田雲濱來り訪ひ紀州の海備を談じ遂に紀に往き和歌山藩老久野丹波に説く此時幕府蝦夷を經理し本願座主に命じ其徒を遣はして土人を教導せしむ而して月性其選に當り將に赴かむとして病に罹り果さず安政五年病篤く五月に至て暝す年四十月性性豪放容貌魁偉能く飲み能く談じ酔へば俗曲を唄ひて歡呼狂舞す而も此間に國事を論じ議論風發一座其壯志に動かざるなしといふ

けぬ 小野毛野（チノ、ケヌ） 妹子の孫にして毛人の子なり持統帝の九年遣新羅使となる文武の朝太宰大貳となり正四位上中務卿にいたる和銅元年中納言に進み二年從三位にのぼる七年薨ず

けぬ 近江毛野（アフミノケヌ） 欽明帝の時の人同帝の廿一年兵六萬に將として任那に赴く筑紫國造磐井火豐二ヶ國に據て海路を扼せり毛野鬪ひて之に克ち任那に入る後病を得て歸途中に歿すといふ

けはや 當麻蹶速（タギマノケハヤ） 垂仁朝の相撲者力衆に超ゆるを以て驕慢憚らず遂に野見宿禰のために殺さる

げん 鮫島元（サメジマゲン） 日向の人西南の役西郷隆盛に薦し輜重方をつとめ佐土原に軍用金を募り後桐野利秋の命を奉して宮崎に兵食を募る尋で阪田諸潔と日向國參軍となり縣官を使用して金穀を紊め肆人を督して土工兵となす隆盛の軍利を失ふに及び米良山に奔らむとして病を發し官兵のために獲られて斬に處せらる

げんいんほ！しんの！ 彦胤法親王（ゲンインホフシンナウ） 後柏原天皇第五の皇子なり俗名寛恒梶井に入りて僧となる

げんえ 玄惠（ゲンエ） 健軒又は獨清軒と號す字は健叟洗心子權大僧都に任ぜらる性學を好むを以て常に資治通鑑を讀み朱熹の學を學ぶ後醍醐帝其名を聞き乃ち召して侍讀となす後帝の北條氏を滅すの密議に參與し偉功多し足利尊氏及び直義之を尊重し其議を容れて行はざるなしといふ玄惠曾て法勝寺の僧惠珍が記せる太平記を讀み直義の言に依て改竄を施す又是圓尊と共に建武式目新加制式二十一條に依り庭訓往來を著はす正平五年六月沒せり年八十一

げんえもん 大藏源右衛門（オホクラゲンエモン） 大藏流太鼓師の祖なり南都の樂人にして金春及蓮の弟なり

げんえんほ！しんの！ 玄圓法親王（ゲンエンホフシンナウ） 醍醐帝第十三の皇子南都一乘院二十二世の門主となる後興福寺別當に補し尋で薨ず其年月詳ならず

げんお！ 玄翁（ゲンオウ） 高僧越後の人年十九總持寺に學び業大にすゝみ德甚高し曾て野州那須野を過ぎり毒石を見て其人畜に禍するを責め杖を以て打つ三度毒全く斷ゆるに至れり毒石稱して那須

野の殺生石といふ應永三年正月寂す年七十一

けんかど！ 木村蒹葭堂（キムラケンカダウ） 大阪の著述家なり彌四郎と稱す名は明啓狂名鹿の舍眞秋又曉の鐘成といふ鶴鳴舍曉晴翁漫戯堂等の別號あり父は醬油釀造家なりしも彌四郎之を營まずして戯作を旨とす嘗て丹波福知山に遊び藩主の失政あるを見て人民のために訴狀を草し訴へて聽されず又檄文を草して藩をあつむ事平ぐの日主謀者を以て刑せられ萬延元年十二月獄中に歿す蒹葭堂雜錄猪著聞集、滑稽漫筆の作あり

けんきち 片岡健吉（カタヲカケンキチ） 土佐の人文久三年二月土佐吾川長岡三郡の來行となり明治元年東征の際藩兵大監察として東山道より進み各地に轉戰す同年十一月藩の軍政局參謀となり四年海外に航す六年海軍中佐に任じ本部課長心得の命を受く七年征韓論破裂の時冠を挂けて野に退き高知立志社を起して社長となる十二年高知縣會議員及び議長に推さる十四年自由黨を組織す廿三年衆議院議員となり爾來其位置を保ち第六議會に副議長第十二議會に議長に推さる

明治卅六年十月歿す年五十九

けんきち 榊原健吉（サカキバラケンキチ） 德川氏累世の臣なり年少にして劍術を谷信友に受け直心影流の奥義を得たり維新後靜岡に移り明治三年東京に來る乃ち劍術道場を下谷車坂に設け子弟に教ふ六年撃劍會を開きて劍道を奬勵し十一年技術を天覽に供す英國領事館書記トーマス、マクラチー及び獨人ベルツ佛人ヴイラレー並にキール等何れも健吉の門に入りて學ぶところありしといふ廿七年八月病歿せり年六十五

けんきょ！ 安永檢校（ヤスナガケンゲウ） 京都の瞽師三絃を能くす池大雅もと三絃を好み遂に其隣に寓す池大雅と交りて大に其畫道を奬めたりといふ

けんきょ！ 八橋檢校（ヤツハシケンゲウ） 音曲家なり岩城の產名は城談江戸に至りて三絃を學び筑後善導寺の僧某に就て究む後更に肥前に至りて玄恕に學ぶ是れ筑紫琴なり又東歸して伊勢源氏を採り組を立て〻十三曲となす後京都に至りて子女に其業を授くといふ歿する時七十二歳

けんきょ！ 山田檢校（ヤマダケンゲウ） 音樂家なり名は斗養一幽樵と號す父は丁任母は山田氏寶曆七年四月生る甚音律を愛し箏を山田松黑に學ぶ少にして瞽なり後ち累遷して檢校に至る箏を學んで其妙を究め遂に新曲數十を作り弘く坊間に行はる門徒數十當に貴紳の莚に聘せられ名大に布く資性聰敏溫雅親に仕へて又至孝なり文化四年四月歿す年六十一高弟其曲を傳へ名けて山田流と稱す

げんく！ 源空（ゲンクウ） 高僧なり姓漆氏九歳にして父賊のために害せらる源空之を偵ひ小弓を發して賊の眉間を射る賊惧れて遁走せり時人呼びて小矢兒といふ長じて菩提寺の僧に學び後功德院の皇圓に受戒をうけ黑谷の睿空阿闍梨に從ひて密乘を究む晩年源信法師の往生要集を見て大に喜び專ら淨土專念を唱へ洛東吉水に戒法を説く高倉帝其高德を聞きてしばしば大内に召さる建永中讃岐に流され居ること五年建曆二年都に還る二年正月大谷寺にありて疾を得遂に寂す年八十

げんげ！ 左文字源慶（サモンジゲンケイ） 長門の鍛刀匠なり左衞門尉太夫と稱す岡崎正宗の門に入りて業成る文和五年八十歳を以

て殁す

げんけん 源賢（ゲンケン） 鎮守府將軍源滿仲の子美女丸といふ延暦寺に學ぶ初めは性狡惡後改悟して法味を得多田法眼といへり和歌を好みて樹下集二十卷を著はす

げんこー 吉田兼好（ヨシダケンコウ） 兼顯の子なり後宇多院に仕へて左兵衛尉となり寵用せらる院崩御の後髮を剃りて修學院に入る幾許ならず木曾に遊び霧原山に居る一日國守山狩して騷擾甚し兼好之を厭ひ和歌を詠じて去る乃ち鄉里吉田にかくれ書を讀んで古人を友とす兼好素より南朝を思ふ故を以て北朝の士來て說を問ふも能く過せず曆應三年伊賀に赴き國見山の麓に菴して風月を樂しむ觀應元年二月殁す年五十七兼好和歌に巧みにして文を能くす其著徒然草世に行はる

げんとべー 薩摩源五兵衛（サツマゲンゴベエ） 幡隨院長兵衛の徒にして俠名高し後罪を幕府に得て捕へられ死に處せらる

けんざん 片山兼山（カタヤマケンザン） 江戸の儒者なり名は世瑠字は叔憲通稱東藏上野の人農家に生る十七歲江戸に來り鵜士雲に從ひて學び後服部南郭の門に入るを得て秋山玉山と交を結ぶ玉山兼山の貧を憫み伴ひて肥後熊本に赴き時習館の生員となす止ること六年江戸にかへり士寧の家に居る宇瀟水兼山を奇才とし乞ひて養ひ出雲侯に仕へしむ後徂徠の學說を疑ひ屢〻之を排するに及び瀟水と共に斯學の先唱者なり天明二年三月殁す年五十三著書に古文孝經參疏、同標註、同管見、國語一適、仁字解、聖字解、聖學弟子問、辯名園學、古文連珠、老子類說、左氏獨得、尚書類考、孟子說、論語管見、中庸解廢疾等あり

けんざん 菅野兼山（スゲノケンザン） 名は彰字は直養通稱彥兵衛武州埼玉郡小槻邑に居る漿を伊藤仁齋に受け後三宅尚齋に就く故を以て後年來するところは程朱の學なり享保の初め塾を開きて諸生に敎へむことを官に請ひ許さる事成らずして死す年六十八

けんざん 野中兼山（ノナカケンザン） 播磨の人名は止字は良繼幼字左八郎後傳右衛門又主計伯耆と稱す寛永十三年族直機の後をうけて土佐に仕へ其家を襲ぐ儒を谷時中にうけて研學多年大に朱說を唱導す而して國中の喰蝗を逐じ荒野を拓き殖產工業を興して切に富國の道を講ず累功に依て遂に執政となり一萬石を食むために俗吏の妬むところとなりて致仕し明夷軒と號して閑居書を讀む寛文三年十二月殁す年四十九

げんし 藤原彥子（フヂハラノゲンシ） 攝政敎實の女四條帝の皇后となる寛元元年宣仁門院の號あり四年出家法名清淨阿弘長二年五月崩ず年三十六

けんしゅー 和田賢秀（ワダケンシウ） 正平中楠正行に從ひ細川山名の徒と戰ふ後四條畷の役敵に混じて師直を狙ひ湯淺太郎左衛門のために殺さる賢秀死するも其首誤せず湯淺ために惧れを抱き疾を發して死す

けんしょー 顯昭（ケンセウ） 歌學者なり太皇大后宮大進藤原清輔の弟にして僧となる和歌に巧にして能く論評す寂蓮和尚と交りて善し常に會すれば目を怒らし肱を張りて論難甚だむ顯昭獨鉛を持ち

寂蓮頭を延して對す人稱して獨鉛顯昭蟠頭寂蓮の評あり日本紀歌註を上りて法橋に叙せらる又古今和歌紗、袖中抄の著あり

げんしょー 里村元紹（サトムラゲンセウ） 歌人なり紹巴の義子連歌に巧みにして名聲四方に聞ゆ

げんじょー 里村玄仍（サトムラゲンジョウ） 歌人なり心前と號す連歌に巧みにして一家をなす慶長十二年四月殁す年三十七

げんしょーてんのー 元正天皇（ゲンシヤウテンナウ） 御名阿高後に氷高と更む天武帝の孫文武帝の同母姉なり在位九年崩ずる時御年六十八

げんしろー 山彥源四郎（ヤマヒコゲンシラウ） 初代三絃家なり泉櫨左衛門の名器山彥を請ひ得て之を愛彈す依て以て姓とす寶曆六年五月殁す

げんじろー 梅田源次郎（ウメダゲンジラウ） 京都の儒者名は定明一名義質雲濱或は湖南と號す若狹小濱の藩士矢部岩十郎の子なり出でゝ同藩士梅田萬兵衛の養子となる少壯にして山崎闇齋の學を崇び和歌詩文並びに書をよくす後江戸に遊び交を藤田東湖佐久間象山藤森弘庵等の諸名家に通ず而して又長州に赴き高杉晉作久阪義助妙圓寺清狂等の志士と親しみ海防の策を主張し安政元年九月に至て京攝の間に奔走せり時に晉國の軍艦來る大和十津川の豪民源次郎を推して謀主となし以て之を伐たむとす幾許ならずして晉艦去り事發せずして止む而して源次郎幕府の朝議に悖りて外夷と親まむとするを慨嘆し山科出雲守豐島太宰少武藥川星嚴頼三樹等と密議し水戸中納言に據て皇威伸張の策を畫せむと決し青蓮宮及び左大臣近衛忠熙右大臣鷹司輔熙内大臣三條實萬大納言久我建通大納言一條實良大納言中山忠能諸卿に就て攘夷の詔を水戸に下さむと請ふ詔下るこれより先幕府大老井伊直弼其臣長野主膳を京に遣し幕旨を關白九條忠尙に通じ甘言を以て攘夷の叡旨を變更せしめむとす主膳京に來りて忽ち源次郎等の密議を知り驚きて事を直弼に報ず直弼乃ち令して源次郎の黨を捕へしむ源次郎之を知らず而して奔走尤も勵め刑部卿一橋慶喜を西城に納れて愈〻攘夷說の實行を計らむと欲し橋本左内日下部伊三次と共に小林民部大輔を說く小林其旨を納れ盡力して朝廷に請ひ内旨を水戸前中納言に賜ひ一橋慶喜を西城に納れむとす直弼早くも察知して紀伊侯德川家茂を迎へて世子となし益〻外交說を固持するに及べり源次郎憤怒骨髓に徹す安政五年三月閣老間部詮勝京に來り天機伺候と稱して金帛を朝廷及び諸公卿に獻じ盛に外國通商の利を說き朝旨の變更を企て遂に源次郎頼三樹等を縛し奏請して青蓮院宮及近衛左大臣以下源次郎等の密議に與れる諸卿を幽せしむ源次郎因はれて江戸に送られ拷問甚し然れども壯志遂に屈せず口を開けば尊王攘夷の說を吐くのみ幕吏又如何ともすること能はずたまたま源次郎病を得て獄裡に療治す藥石功なし安政六年九月四十四を以て殁す明治にいたりて朝廷其忠節を嘉みし特に正四位を贈るといふ

けんしん 上杉謙信（ウヘスギケンシン） 初名景虎幼名猿松丸又は虎千代本名輝虎といふ長尾爲景の第三子七歲にして僧となりしも天文七年十一歲を以て城に入る後兄晴景の柔懦なるを以て自ら代て國を主宰

せむと決し假りに髪を削て宗心房と改め諸國を遍歴して比叡山に上り宇佐美定行に逢ひ伴ひて國に還るこゝに於て定行の計を用ひ獨立して兵を用ふ謙信この時元服して景虎といひ通稱を平藏とよぶ姉の夫長尾政景來り攻む謙信奮擊勇鬪して之を降し勢に乘じて越後を徇へ加賀能登を平ぐ兵卒大に振ひ曉名天下に高し乃ち越中に入りて父の爲に弔合戦をなし進んで佐渡を取る時に村上義清武田信玄の滅すところとなりて來り投じ哀訴して義誼を請ふ謙信許して客となし天文十六年二月兵を出して信濃に入り信玄と抗衡す十八年四月使を遣はして戦を挑む信玄乃ち應戦し累年にして勝敗決せず二十年八月上杉憲政北條氏康の爲に逐はれて來り投じ管領職を謙信に授け錦幢系圖を呈し復讐の事を托す謙信又之に從ふ二十一年三月薙髪して不識庵謙信と號す二十二年正月將軍義輝一色藤長杉原孝盛をして北條氏康の暴狀を告げ惡政を扶けて鎮東の策を講ずる を賞す謙信大に欣び兩使を饗し物品を幕府に獻ず故に謙信兵を東國に出して北條氏と戦ふ永祿元年信玄僧實了をして謙信と和せむことを告ぐ謙信諾して筑摩川に會見す信玄の態度無禮謙信大に怒り和破る後謙信武威益〻振ひ定行政景等と議して會津地方を下し更らに東國に往きて管領たらむとす而して公子を擁せむことを請ふ將軍義輝之を許さず因て關白藤原前久父子を請ひて迎ふ永祿四年謙信前久を護りて京に赴き將軍に謁し朝廷を拜す將軍輝の一字を賜はり相伴衆に加へ關東管領に補し又奏請して從四位下彈正大弼に叙任す而して深く義輝と結んで還るこゝに於て又甲軍と武を爭ひ大に河中島に戦ひ親ら信玄の營を斫りて之を傷く蓋し戦國第一の激戦なりしなり十一年北條氏康和議を定め謙信に贄を送る謙信欣びて之を發ひ名づけて景虎とよぶ十二年薙髪神保長衡を殺して父の仇を復し加賀能登を徇ふ元亀元年謙信又信玄と河中島に對し馬を陣頭に立てゝ信玄の不德を責む信玄怒りて狙撃せしめ鼓噪して進む謙信奇兵を用ゐて爭ひ勝敗決せず日没に至りて交〻綏く天正五年是より先信玄卒して織田氏漸く振ふ然れども表に服し裏に敵念を挾みて越將の内應せむことを勸む謙信之を聞きて精探し内應者を殺し越中に入り十里を隔てゝ信長に對す信長戦はずして走り去る謙信笑て曰く信長は走るに巧なるものなりと進て金澤を陷れ越前に入り悉く織田氏の黨衆を降す時に天寒くして雪ふること甚し謙信乃ち書を信長に與へていふ足下數〻畿内の敵と樂戦して未だ北人の技倆を知らず請ふ明年三月十五日を以て足下と相見むと信長大に懼れ援を勝頼に請ふ勝頼答へず而して六年三月に至り謙信の兵備日に整ひ將士雲集して將に發せむとすたまたま謙信病作りて卒す四十九信玄に後るゝ五年なり謙信人となり廉潔時に稍嚴酷に過ぐるの失ありと雖其兵を用ふるの妙と人を率ゐるの義あるに於ては天下又比なしといふ

げんしん 宇田川玄眞（ウダガハゲンシン） 關醫なり津山侯に仕ふ本姓安岡名は璃樣齋と號す宇田川玄隨に就て學び又大槻玄澤の教を受く後杉田玄白の養子となりしも放縱の故を以て斥けられ極めて困苦に陷れり而して玄眞行狀を改めて研學し爲に信ぜられて宇田川玄隨の後をつぐ時

に寛政九年なり文化十年幕府の命を蒙りて蘭書を翻譯し尋で拜謁を許さる天保五年十二月歿す六十六著書に和蘭藥鏡、遠西名物考、醫範隆綱等あり

げんしん 平賀源心（ヒラガゲンシン） 信濃海野口の城主なり天文五年十一月武田信虎の兵來り伐つ源心克く戦ひて之を却く信虎の子晴信年十六返戦其虚に乘じ鼓譟して攻む源心支ふる能はず終に晴信の家士に殺さる

げんしん 山脇玄心（ヤマワキゲンシン） 朝廷の醫官なり字は道作醫を曲直瀬正紹に學び美濃德永氏に仕へて五百石を食む元和中皇后宮を診し來るの故を以て宮中に召され寛永中法印に叙せらる尋で養壽院の號を賜はり延寶六年に至て歿す年八十五

げんずい 宇田川玄隨（ウダガハゲンズイ） 津山侯の侍醫名は晋字は明卿槐園と號す江戸の人玄隨十三にして一句を誦するの學無かりしも一度修めてより忽ちに發達し十五にして詩文を好くせり初め西洋の醫學を信ぜざりしが關醫桂川甫周の説を聞くに至りて啓發し業を大槻玄澤に受く又蘭學を習ひ甫周の授けし一書を譯す乃ち内科選十八卷なり蓋し和蘭内科譯書の濫觴なりとす寛政五年致仕し九年十二月歿す年四十三著書に西文炬、遠西名物考、蘭畝假戦、蘭譯辯髪、東西病考、西洋醫言等あり

げんすい 中山殿水（ナカヤマゲンスイ） 土佐の人通稱十平國典を谷眞潮に學び本居宣長伊勢眞丈塙保己一等と交はる後高知藩の納戸役となる天保三年歿す年六十九

げんせー 元政（ゲンセイ） 高僧なり俗稱石井吉兵衛名は日政又日峯妙子と號し不可思議空子幻子の別號を有す平安の人なり年十三井伊侯に仕へ十九佛を泉涌寺に學ぶ年二十藩侯と共に江戸に來り吉原に遊び三浦屋の名妓二世高尾を見て兩情相投じ遂に偕老の契を結ぶ後高尾自殺すと聞きて世を厭離し致仕して僧となるこれより學につとめて和歌を作り茶法を修む著書甚多し草山和歌集、元〻唱和集、扶桑隱逸傳、釋氏廿四孝、身延紀行等世に行はる寛文八年二月寂す年四十六

げんぞー 河野顯三（カハノゲンゾウ） 初名越智通弘名は通植字は壬威下野の人なり醫を捨て〻儒に入り業を大橋訥庵に受く江戸に來りて外國來行堀利熙の食客となり攘夷説を主張して慷慨淋漓遂に三島三郎と改名して同志細谷淺野内田吉野相田豊原等と謀り幕府の專權者安藤信正を坂下門に要撃す信正の士能く戦ひ信正逃る顯三追ひて之を斫り將に殺さむとす守衛大監察山内彦八槍を以て顯三を刺し信正を擁して走る時は文久二年正月にして顯三年正に廿五歳なり

げんぞー 高橋健三（タカハシケンゾウ） 父を石齋と云ふ江戸の人なり大學の業を終へて文部省に入り後歐洲に往く歸て官報局長に任じ辭職して大阪朝日新聞主筆となる明治廿二年七月病歿す年四十四

げんそーてんのー 顯宗天皇（ケンソウテンノウ） 御名は弘計履仲帝の孫市邊押羽皇子の子父雄略帝のために殺さる帝兄億計王と共に播磨に逃る清寧帝嗣なきを以て迎へられて宮に入り兄弟位を讓ること多年飯豐皇女已むを得ずして皇位にのぼる飯豐天皇といふ天皇崩ず帝遂に立ちて大統をつぐ在位三年德政大に行はる崩

する時齢四十八

げんたく 野間玄琢（ノマゲンタク） 德川幕府の醫官なり玉琢又は白雲老人と號す曲直瀨正紹に學び慶長十五年法橋に叙せらる功に依て法印となり號を壽昌院と賜はる後東福后の病を療して賞せらる正保三年十月歿す

げんだゆー 虎屋源太夫（トラヤゲンダイフ） 淨瑠璃家なり薩摩淨雲の門人丹後太夫丹波太夫長門太夫と併稱して淨雲門下の四天王といふ江戸及び大阪にありて操芝居に出づ

げんたん 谷口元淡（タニグチゲンタン） 國學者なり大和の人字は大雅和歌をよくす百人一首拾穗抄、補註徂徠學問答あり

げんちゅー 里村玄中（サトムラゲンチュウ） 歌人なり家業をつぎて名四方に達す寛永十五年二月歿す年六十一

げんちょー 餘元澄（アマリゲンチョウ） 東庵と號し松岳とよぶ京都の人深艸元政に從ひて學び雜書小說佛家の書一として讀まざるものなし又和歌を好み蟬丸を慕ひ逢阪山に關する和歌を輯む又書を善くし法橋の位を得元祿十三年五十一を以て歿せり

げんちん 里村玄陳（サトムラゲンチン） 歌人なり紹巴の孫玄仍の子法眼に叙せらる

げんてき 里村元的（サトムラゲンテキ） 歌人なり元紹の義子連歌に巧みにして其名高し

げんどー 矢野玄道（ヤノゲンダウ） 國學者なり愛媛縣の人通稱を茂太郎といふ平田篤胤の門に入り後昌平黌に學ぶ又伴信友に從ひて古書を涉獵す明治元年神祇官に仕へ大學中博士となり從六位に叙せらる十七年圖書寮御用掛に補せられ十九年非職となる玄道常に尪弱を憂ひ終身妻を迎へず明治二十年歿す時に六十五歳著す所神典翼、皇典翼、國史私記、神功皇后御傳記、しひがたり、しざのくさだち、大道のしるべ、神仙傳、玉矛物語、天璽畏言、天放雜集、拂妖纂語、古文彙、正保野史、麻生のした草等あり

げんとく 印東玄得（インドウゲントク） 醫學士なり紀州の人明治十二年帝國大學を卒業し病院を建つ又阿部泰造と謀りて明治生命保險會社を創むこれ我邦保險業の初めなりと二十八年十一月歿す年四十六

げんない 平賀源内（ヒラガゲンナイ） 讃岐の人名は國倫字は士彝鳩溪又は天竺浪人松籟子風來散人森羅萬象無根翁福内鬼外等の數號を有す高松侯の茶坊主となり辭て小吏となり後去て長崎に赴き本草の學識に依て唐物の檢閲を司る是に於て蘭語を學び諸國を周遊して豪商と交り說を進めて用ゐらる寶曆中江戸に赴き物氏の學を修め朝鮮の使節に面して唱和し名初めて四方に聞ゆ再び上國に遊び歸て江戸湯島に寓して本草の專攻に從事す館林侯之を招けども應ぜず明和七年又長崎に赴き發電機械を見て奇とし數日苦心之を製し且石綿を以て防火布をつくる共に幕府に呈するも賞せられず源内憤ばずして酒色に耽り大言壯語して鬱悶を遣る而して筆を取て淨瑠璃を作るに才藻迸發時人其妙を喧傳す安永八年寄宿生某誤て人を殺し源内座して獄に下る十二月歿す年五十七或はいふ源内狂して人を殺し獄中に死すと孰れか是なるを知らず著日本物產譜、四季名物正名、戲作六部集、長枕褥合戰、神靈矢口渡等あり

げんにょ 顯如（ケンニヨ） 本願寺第十一世の祖なり名は光佐證如の子弘治中二品親王に叙し大僧正に任ず文祿元年十一月寂す年五十

げんぱく 杉田玄白（スギタゲンパク） 甫仙の子小濱藩の醫家なり名は翼字は子鳳蘭齋といふ後九幸翁と改む幕府の醫官西玄哲の門に入りて學び又經史を宮瀨龍門に受く同藩の醫小杉玄適の古方を唱ふるを見て發憤し外科專門の術を研き蘭語を修め內臟圖說を藩主より得て日に檢すること幾十回遂に刑屍を小塚原に解剖し對照して大に啓發す乃ち中川淳庵、桂川甫周、嶺春泰、烏山松圓、桐山濟哲、前野良澤等と共に解剖新書を編述す而して日夜飜譯に從事し外部集成中の二大部を譯し進んで全部に及ばむとして中途に病に罹り文化十四年四月歿す年八十五門人大槻玄澤其遺業を嗣ぎ遂に醫新書を出せり

げんぴん 陳元贇（チンゲンピン） 明の歸化人字は義都既白山人と號す寛永中國亂を避けて來り尾張侯の客となる萬治二年名古屋にありて僧元政と交り平生唱和するところを輯めて元々唱和集と名づく元禄趙子昂を學びて書をよくし又拳法に精し浪士三浦與次右衛門磯貝次郎左衛門福野七郎右衛門之を學びて初めて柔術を工夫すといふ元禄寛文十一年六月に至て歿す年八十五

げんぴん 玄賓（ゲンピン） 高僧なり俗姓弓削氏河內の人興福寺の宣教に學び性淸廉僧侶の官職を貪るを惡び族人道鏡の稱德帝に媚ぶるを嫉み潛に逃れて伯州に入る會〻桓武帝疾あり玄賓を召す賓至尊の化導逃れ難きを思ひ鉢盂を負ひて宮に入る帝の疾乃ち癒ゆ辭して山に歸る後平城帝將に勅して僧官を授けむとす賓之を聞き脈ひて備中湯川寺に隱れて弘仁九年六月寂す年八十九賓曾て詠じて曰く山田守そぼつの身こそ哀なれ秋果てぬれば問ふ人もなしと

げんぷ 岡安原富（オカヤスゲンプ） 三絃家なり初名富五郎後武太夫とよぶ名盛和人稱して原富といへり嘗て市谷長流寺に奏して雨を降らす明和四年七十一歳傳明かなれども歿年詳ならず嘗て奈良柴を著はせり

げんべー 池田源兵衛（イケダゲンベエ） 津輕の藩士元祿十年藩主の命に依て江戸に來り塗技を背海勘七に受く歸りて漆塗及び青海波文を製す乃ち津輕塗の祖なり

げんぼー 玄昉（ゲンバウ） 南都興福寺の僧俗姓阿刀氏龍門寺の義淵に就て學び靈龜二年勅を奉じて入唐し智周大師に謁して相宗の深旨を享く天平七年大使多治廣成に伴て國に還り經論佛像を獻ず帝悅び勅して興福寺に藏め玄昉を以て僧正となす天正八年六月筑紫の觀音寺成るに及び玄昉迎へられて佛事を營み其殿に入るに至りて所在を失す幾許ならずして其頭興福寺に落つ世に傳ふ藤原廣嗣玄昉の讒にあひて罪を得爲めに憤死す依て其怨靈の祟る所なりと

げんめいてんのー 元明天皇（ゲンメイテンナウ） 御名阿閉天智帝の第四女草壁太子の妃にして文武元正の母后なり位に藤原宮に即き平城宮に遷る在位七年位を讓高皇女に讓り後七年にして崩ず齡六十一

げんもつ 齋藤監物（サイトウケンモツ） 櫻田門外の刺客なり名は一德水戸志津明神の祠官たり萬延元年二月藩を脫し佐野竹之助等

と心を協せ同年三月を以て非伊大老を刺す監物時に創を蒙るといへども老中脇阪安宅の邸に奔り封事を上り後死す

けんもつ 津田監物（ツダケンモツ） 津田流砲術の開祖なり名算長紀州の人砲術を種子島時堯に學び後一家を成す

けんもつ 三好監物（ミヨシケンモツ） 義明の子名は清房閑齋と號す字は顯民監物と稱す伊達家の士なり明治の初年天下騷然東奥の人心平かならず監物主慶邦のために參政に擢でられ勅命を奉じて會津を伐つ然れども讒口四方より發し監物の正義遂に貫くこと能はず監物乃ち病を以て職を退き慨して自殺す時は明治元年八月なり年五十四二十四年十二月朝廷これに正四位を贈る

けんりん 松下見林（マツシタケンリン） 名は慶撮字諸生見林又は西峯散人と號す大阪の人醫を古林見宜に學び儒學及び國典を研究して博覽强記の聞えあり常に書を藏する十萬餘卷人に供覽を許して益すること多し晩年高松侯に仕へ京町奉行戸田氏に重んぜらる元祿十六年十二月歿す年六十七異稱日本傳、公事根源集釋、職原抄參考等有名の著書多し

げんりん 山岡元隣（ヤマオカゲンリン） 俳人なり京都の人北村季吟に學んで業成る

げんろ 普雪堂玄蘆（フセツダウゲンロ） 初代 俳人なり名富昌通稱松本庄五郎福岡の人嘗雪庵三曜の門に遊び江戸にありて子弟に教ふ明治三十一年二月歿す年六十三

とーあん 天沼恒庵（アマヌマコウアン） 名は爾字は樂善恒庵は其號なり江戸の人儒を以て家をなし書家藤華岡の義子となる故に書に巧みなり年十八京に遊び終南禪師に見えて詩文を修め二十一出でゝ幕府に仕ふ後致仕して川越に去る墨池庵に居して弟子を教ゆ人となり快活寡欲ただ學に忠なるのみ寛政年間病で歿す年五十二著はす所恒庵文稿四卷あり

とーあん 緒方洪庵（オガタコウアン） 蘭醫なり名は章字は公裁通稱三平號を洪庵といふ足守藩士緒方惟因の子にして夙に西洋の醫法を修む天保中坪井信道及び宇田川玄眞の門に學び後長崎に赴きて研究す文久二年幕府に事へて侍醫となり三年六月歿す年五十四

とーあん 藤森弘庵（フヂモリコウアン） 儒者なり名大雅字淳風通稱恭助弘庵と號す江戸の人弘庵年少にして儒に志し又筆蹟をよくす後土浦侯に仕へ幾許ならず致仕して江戸に出づ嘉永中米艦來て人心動搖し幕政頗る苦しむ弘庵憤慨して海防備二卷を著はし且つ芻言二卷を記して水戸烈公に上る安政の大獄起るや弘庵囚はれて獄に下り後赦されて逐はる文久二年十月歿す年六十四

とーあんてんのー 孝安天皇（カウアンテンナウ） 大日本足彦國押人天皇といふ孝昭天皇の第二子母は世襲足媛といふ都を室地にうつして津島宮に居る在位百二年崩ず御年一百三十七

とーい 香以（カウイ） 俳人にして狂歌師なり姓細木名は鱗幼名は子之助香以山人と號す初め俳號を鯉角又は李蹊或は梅阿彌とよびしが後梅の本と改む豪商にして堀津國屋の家號ありしかば世人よんで津藤といひ山城河岸ともいふ江戸十八大通の一人にして常に豪遊をなし產業を力めざりしより遂に破產し下總葛川のほとりに赴き慶應二年東京に歸り明治三年九月歿す年四十九

とーい 狩野興以（カノコウイ） 有名の畫家名は定信彌左衛門といひ彌兵衛と改む興以は其號野州の人なり法橋に叙す光信に學びて業成り雪舟の風を加味して一家をなせり探幽尚信安信の三人皆幼なる時に於て此人の家に發はれ畫法を授けらる寛永十三年歿せり

とーいち 達磨屋五一（ダルマヤゴイチ） 書肆にして奇人なり世に珍書屋五一といふ又無物老人花の屋蛙麿の號を有す和歌俳諧をよくして風流の名あらはる慶應四年七月歿す年五十二

とーいち 中野梧一（ナカノゴイチ） 大阪の豪商なり本姓齋藤氏幼名達吉塵埃仙人と號す年少にして外國貿易の利を主張し業説を排して通商事業に從ふ文久二年六月幕府の兵と共に長州征伐に赴き奮戰して身數創を蒙る明治元年伏見の戰に出で轉じて彰義隊に加はる軍利を失ふに及び榎本大島の配下に屬して函館に赴き再び利を失ふに至て捕はれて獄に下さる幾許ならず赦されて實業を營み書を讀み風流に耽ず三年十一月徵されて山口縣令となり辭して大阪に商估を開く時に藤田傳三郎豪商大賀幾助の家業をうけて靴商を營む蓋し藤田は嘗て梧一の恩惠を蒙りたるものこゝに至て惟恩を記して來り相俱に提携して商界に雄飛す十年の役起るや梧一藤田と謀て官軍輜重御用を勸む爲めに日に益するところ一萬金に及び其產忽ちに巨額に達すたまたま虎列刺病流行す梧一石炭酸を買收して之を鬻ぎ益巨利を占む時に流言あり藤田梧一と密かに謀て贋札を使用すとこゝに於て因はれて東京に送られ審理數回にして漸く宥さる梧一五代友厚磨瀨宰平と謀て大阪商法會議所を設け硫酸製造所を設立し年々の收利殆ど幾十萬を以て計るに至る明治十三年梧一突然拳銃を以て咽喉を貫きて死す世其何の故たるを詳にせず

とーいち 海津幸一（カイヅカウイチ） 筑前藩の人父に繼ぎて勘定奉行助役となる常に尊王の大志を抱き天下を憂ふること極めて深し故を以て佐幕黨の爲に陷れられ罪を得て幽せらる文久三年赦に逢ひ元治元年原祿を賜はり又奉行助役となる征長の事起るに及びて志士再び幸一を推して主動者となし以て勤王論を唱ふるに至り幸一ために罪を得て死を賜はる時は慶應元年十月なり年六十三

とーいちじょーてんのー 後一條天皇（ゴイチデウテンナウ） 御名敦成一條帝の第二子なり在位二十年常に外戚藤原氏政權を專にして帝はたゞ虛位にあるのみ崩ずる時御年二十九

とーいちじょーのいん 小一條院（コイチデウノヰン） 御名敦明三條天皇の長子なり長和五年正月立太子寛仁元年八月辭退して院號を許され上皇に准ぜらる永承六年正月崩ず年五十八

とーいん 木戸孝允（キドカウヰン） 本姓和田小字小五郎孝允は其名幼にして桂氏に發はる後國政を執るに及びて木戸準一郎とよべり少壯にして學に志し劍を學び吉田寅次郎と交て其氣節を享く幾許ならず京都に赴き江戸に轉じ水藩諸名士と交はる又江川坪に勝の門に入りて西洋の事情を聞き日比谷に有美館を設けて深し故を以て佐幕黨の爲に陷れられ罪を得て幽せらる文久三年赦に逢ひ元治元年原祿を賜はり又奉行助役となる征長の事起るに及びて志士再び幸一を推

極めて長藩を忌み其動靜を窺ふもの〻如し依て長藩の士皆激昂し忽ち甲子の變を起す孝允此變に先つこと一日河原町の邸を逃れて夫人まつ子が三本木の家に匿れ丹波に走り藩主の國に還るに會し直に從て往く時に俗論黨の忌むところとなりて增田福原國司三老の死に尋ぐに清水寺戸以下十餘人孝允と志を同じうする者の死を以てす孝允逃れて外にあり依て纔に免るゝことを得たり俗論黨潰ゆるに及びて藩主孝允を召還し擧げて大監察となし政務の總裁を命ず孝允乃ち大村益二郎を擢でゝ關式兵政を行ひ山田宇右衛門と與に專ら內治の實をあぐ曩に吉田寅次郎罪を幕府に得て殺さるゝや其部下の士多く孝允に屬し濟々たる多士其門に充つ翌年幕府窘窮復長藩を伐つ長兵每戰利あり幕府窘窮して和を媾ぜりたまたま長藩薩州とよからず土人阪本龍馬此間を奔走し薩の西鄕大久保長の孝允に就て其連衡を說き調和漸く成る王政復古の後孝允徵されて總裁局顧問となる而して藩主に謁し版籍奉還の說を呈し許されて京に赴き密かに其機の到るを俟てり後駕に扈從して東京に至り大久保利通と語り告ぐるに版籍奉還の議を以てす利通直ちに贊同し尋で土肥二藩も此議に與みし四藩封土人民奉還の擧行はるゝに於て孝允參與に列し待詔院學士に補し祿千八百石を賜はる尋で從三位に叙せらる此時各藩各自大兵を擁す孝允大に之を憂ふ依て先づ山口に赴き藩の兵制を革め隊兵を解く隊兵散せず遂に藩廳を圍み孝允を索めて殺さむとす孝允外にあり此報を得て間道より馬關に出で別に兵を發して鎭定せり五月東歸して參議に拜し廢藩置縣の制を布くに關して功勞甚大なり時に又外人殺戮事件起る事態紛擾に陷りて急發せむとするに及び外にありては伊藤後藤中井五代の諸人東西に奔走し內にありては孝允大久保小松等と相謀りて俗論を排去し以て外國交誼の局を結び事遂に圓滑に歸した り九月外務卿岩倉右大臣特命全權大使となり孝允大久保伊藤山田皆副使となつて海外に赴く十一月東京を發し歐米諸國を巡視して歸朝すたまたま征韓論起り西鄕板垣後藤副島江藤これに贊同して議略〻決せり孝允岩倉大久保等と其非を唱へ廷議沸騰す天皇親ら其裁決をなし非征韓論に決す西鄕以下の諸卿みな罷め天下騷然たり八年一月孝允文部卿を兼ぬ此年佐賀の亂起る大久保利通征討使となり孝允內務を掌理す五月征臺の事に依て孝允辭職し山口に還る後大阪に赴き井上馨と會し板垣と相見え大久保伊藤と談ずるに及んで又憮然として國事に慨き挺身して功業を企てむと欲す三月再び參議に任じ六月地方官會議長となるこれより孝允朝廷にあり國事に執掌すといへども政府の施治往々其意と反するものあり殊に朝鮮事件の局容易に結了せず諸論紛々として內閣分裂の議生じ諸大臣彈劾の聲起る而して島津久光板垣退助共に退く孝允稽然として此間に周旋し朝鮮事件の結果を以て我任となす事略〻決せむとして病を得歩むことを得ず九年三月黑田井上兩使使命を完うして朝鮮より還る孝允これに依て辭職を請ふ朝廷許さず乃ち內閣顧問となる六月病癒えて聖駕に扈從し東北を巡視して還り民情を察して立憲政治の首唱者となれり十二月鹿兒島縣令大山綱良鹿兒島縣士族の

他縣士族と事情を異にするを陳じ併せて便宜の處分を乞ふ孝允事情に依て一般の施政を變更するは施政者の本意ならずとなし乃ち其議を難ぜり明治十年一月東駕上國に幸す孝允從ふたまたま警報あり鹿兒島兵亂を釀すと孝允切に奏して輦を京師に駐め征討の詔を發して自ら其任に當らむとす蓋し其衷心薩彈に當れば至快の往生なりと信ずればなり大久保利通東京より來る孝允共に出征を爭ふ天皇之を止め詔して內政の輔佐に當らしめ有栖川宮を征討總督に命じ遂に西征の兵を發す四五月の頃孝允復宿痾の冒すところとなり終に肝臟肥大症となる天皇之を聞き大に憂ひ侍醫をして診斷せしめ親ら病榻に臨み乃ち勅一等に叙し旭日大綬章を授く醫藥功無し尋で薨ず年四十四正二位を追贈せらる

とうだてんのー 後宇多天皇（ゴウダテンノウ） 御名世仁龜山帝の第二子なり八歲にして即位弘安四年元人我西國に寇す天皇憂慮北條氏をして討伐せしむ適々颶風起りて賊船覆り士卒皆斃く天皇在位十三年薙髮して金剛性と號す元亨四年崩ず年五十八

とーうんさい 武田耕雲齋（タケダカウンサイ） 水戸の藩士名は正生一に如雲といひ伊賀守と稱す初名彦九郎跡部氏を姓とせしも後武田と改む景山公に仕へて老臣となり千五百石を食む而して公と共に盛に攘夷論を唱へ書を幕府に上り或は又義徒數百人を發ひて頻に主義の斷行を謀る藩中正黨奸黨の二派を生じて反目せり景山公薨後正黨大に勢を失ふと雖其子一橋慶喜將軍家茂に從て京に赴き耕雲齋等を招くに及びて正黨再び起る耕雲齋京にあるや慶喜の後見として朝廷にいたり天子に謁して從五位下に叙せらる元治元年奸黨の領袖市川三左衛門朝比奈彌太郎共に謀りて幕府に通じ正黨の職を褫ひて之を幽す正黨の士三百餘人下總小金原にあつまり藤田信山田一郎を推して遂に兵を筑波山にあげ藤田外竹內府と號す田丸諒直軍師たり藤田外竹內延秀岩谷信成三總裁となり烈公の木偶を作り之を來じて筑波より日光に赴き日光來行小倉但馬守に迫りて日光寺院を借りて舖舍となさむとす但馬幕府の命を仰がむことを答ふ直諒等太平山に退きて陣す來屬する者太だ多し奸黨市川の一派幕兵の援を請ひて來り擊つ直諒直に之を却け耕雲齋と通じて攘夷の實をあげむとせり時に幕府水藩の支族松平大炊頭に命じ藩主に代て常野を鎭撫せしむ大炊頭先づ小金原に到りて耕雲齋を說き共に水戸城下に入る城中の奸黨耕雲齋等を拒みて入れず耕雲齋兵をすゝめて奸黨の家を襲ひ筑波の軍と應じて勢猛烈なり幕府田沼意尊等をして奸黨を援けしめ大炊頭を召して遂に自裁せしむ元治元年十月幕府の兵雲集して耕雲齋を圍む戰ふこと月餘克つ能はず乃ち榜示して降者を招く是に至て國中の兵幕府に抗するの強意無き者皆出でゝ降るために耕雲齋の軍氣沮喪せり耕雲齋意を決して一橋慶喜に據らむと欲し黨兵千二三百人を以て奸黨の兵を敗て奧州路より下毛に至り途を世良田に取りて上野に入る乃ち高崎の兵を擊ちて却け信濃に進み高島松本城兵を敗りて美濃路より大田川を渡り加納驛に至て西京都に入らむとす大垣戸田氏の兵之を拒ぐ耕雲齋轉じて北に赴き越前大野に達す城主土井利恒沿道の數村

を燒て敵の宿舍を失はしむ耕雲齋棚を築いて守る時に天大に雪あり兵士凍ゆる者相續ぐ而して一橋慶喜詔を奉じて桑名會津松江福岡阿波津小田原の兵を率ゐ加賀の兵を先鋒として來り攻む耕雲齋望を失ひ書を遁を認めて慶喜及び加賀藩並びに同藩の先鋒永原甚七郎に呈し以て柔順の意を表し兵仗を束れて加州藩の陣所に送る時は元治元年十二月なり幕府耕雲齋を忌むを以て翌年二月之を刑し田丸以下正黨の士を殺す耕雲齋年六十二明治廿四年十二月朝廷其忠烈を賞して特に正四位を贈る

とーうんほーしんのー 恒雲法親王（コウウンホフシンナウ） 無品親王なり龜山院の皇子小川宮といふ

とーえーろーきんどー 向榮樓欣堂（カウエイロウキンダウ） 江戸の小說家なり寶南を營み居たりしが破產して松井幸三郎の門に入り松川寶作といひ戲作に從事す本蝶山人又欣堂閑人と號し戲曲をものせり天保三年名を寶田辭助と改め同九年二月歿す年四十一

とーえつ 本阿彌光悅（ホンアミクワウエツ） 刀劍鑑定家なり太虛庵自德齋空中庵德友齋の數號を有す書を能くし平安三筆の名を得又陶造法に秀で漆工に長じ墨畫を巧みに寛永十四年二月歿す年八十一

どえもん 石川五右衛門（イシカハゴエモン） 大賊なり三好家の臣石川明石の子十六歲の時主家の寶藏を破り管者三人を斬て走るこれより諸國を流浪して盜を業とし財貨を掠む豐臣秀吉之を捕へて釜煎の刑に處すといふ五右衛門性剛膽體軀長大力三十人を兼ぬと

とーえもん 鴨幸右衛門（イカルゼカウエモン） 山城伏見の人元和年間始めて小兒の玩具を作る時人呼んで人形屋幸右衛門といふ

どーえもん 羽生鄉右衛門（ハニフガウエモン） 慶安中浪人の故を以て由井正雪の黨人と認められ糺彈せらる然れども辯疏に依て釋され弓馬槍刀の術を以て島取藩に召さる貞享二年歿す

とーえんほーしんのー 公延法親王（コウエンホフシンナウ） 典仁親王の子俗名方仁桃園帝の養子となる安永六年毘沙門堂に入り天明六年三月閑東に赴き閑居して安樂心院といふ享和三年四月寂す年四十一

とえん

とえんゆーてんのー 後圓融天皇（ゴエンユウデンナウ） 北朝の帝なり御名緒仁後光嚴帝の第二子在位十一年時に南朝の勢全く衰へ將軍義滿の兵威天下を壓服せり明德四年崩す壽卅六

とおじ 阿部小祖父（アベノコオヂ） 從五位下武藏守に任ず和歌に巧みにして其詠萬葉集にあり

とおーみ 古近江（コアフミ） 三絃師なり江戸の人俗稱を石村源左衛門といへり三絃の胴の橢圓形なるをあらためて今の型になせしものなりと

とーかくてんのー 光格天皇（クワウカクテンナウ） 御名兼仁東山帝の曾孫後桃園帝の再從弟典仁親王の第六子安永八年十一月禪を受け大統を繼ぐ時に年九歲初め後桃園疾病なるとき上皇准后內前と謀り崇光帝の裔貞敬親王を迎へむとせり而して故ありて果さず關白尙實謫詔を奉して遂に帝を迎ふ天正元年正月元服文化十四年位を皇太子に禪り即日櫻町殿に遷御す在位卅七年天保十一年十一月崩ず御年七十

とーかくほーしんのー 弘覺法親王（コウカクホフシンナウ）

大覺寺の門主なり邦良親王の子大金剛院とよぶ

とかしわばらてんのー 後柏原天皇（ゴカシハバラテンナウ） 御名勝仁後土御門天皇の子廿七にして即位此時天下擾亂諸侯各地に割據して專政制すること能はず應仁亂後京師頹廢朝廷幕府共に衰へて踐祚の大禮未だ行ふ能はず大永元年三月漸く大阪本願寺の僧光兼に依て其費を得大永六年四月崩ず齡六十三

とかめやまてんのー 後龜山天皇（ゴカメヤマテンナウ） 南朝の天皇なり御名熙成長慶天皇の弟在位廿年位を北朝後小松帝に讓るこゝに於て南北合一す

とーかん 司馬江漢（シバコウカン） 洋畫家なり名は峻字は君岳春波樓といふ又桃言無言西洋道人の別號を有す鈴木春信に學び て二世春信といひ又谷文晁に學ぶ後長崎に赴きて洋畫を研究し油畫及び銅板の畫をよくす蓋し洋畫の率先者なり文化の初錦帶橋の油畫を淺草觀音堂に掲ぐ人之を奇とし觀る者堵の如したまたま藩畫を以て清淨の伽藍を汚すの評起り遂に撤去せらる文政元年十月歿す年七十二春波樓畫譜、西洋畫談、長崎見聞志等の著あり

とーかんほーしんのー 公寬法親王（コウクワンホフシンナウ） 東山院第三の皇子初め圓滿院に入りて寬尊と稱す二品たり正德四年滋賀院に移り東武下向の後公寬と改む享保二年三月一品に叙し天台座主となる

とーき 渡邊洪基（ワタナベカウキ） 越中の人英學漢學を修むるの傍ら醫を修め慶應三年幕府の西洋醫學所に句讀師に擢んでらる明治二年大學少助教に任じ四年歐洲に行く歸朝の後外務大書記官となり十五年元老院議官となる十八年東京府知事にうつり十九年帝國大學總長となる二十三年五月特命全權公使となり尊で國會議員に選まる翌年貴族院議員に勅選せられ錦鷄間祗候となる又政友會創立委員となり三十四年五月薨ず年五十四

とーきおー 高貴王（カウキワウ） 後漢獻帝の遠孫孝德天皇の時播磨に來り遂に歸化して姓大藏君を賜はる原田秋月の元祖なりといふ

とーきょくてんのー 皇極天皇（クワウキヨクテンナウ） 名は寶皇極帝の曾孫にして押坂皇子の孫茅渟王の子なり舒明帝の皇后となり帝の崩後帝位に即く時に蘇我蝦夷子入鹿朝權を專らにして驕慢なり中臣鎌足中大兄皇子と謀りて入鹿を朝に誅し尊で其族を滅す天皇位を中大兄皇子に讓らむと欲す皇子固辭す仍て輕皇子に讓るこれ本朝讓位の始めなり

とくが 梅菴里谷我（ウメボリコクガ） 小說家なり久留米侯の臣にして大目付たり蘇亭と號す本名反町與左衛門幼名三郎助文政四年九月歿す年七十二著はすところ傾城買二筋道あり

とくとく 畠田克德（マスダコクトク） 佐渡の人鳳の子にして孝の弟なり幼名莊作萬延中英漢の學を修むのち海軍修業生となり榎本釜次郎に從ふ明治元年慶應義塾に入り卒業して高松藩に聘せらる五年司法省に出仕し山田顯義に從て歐米諸國に遊ぶ歸朝後嚶鳴社に入りて沼間守一等と自由民權說を唱ふ十二年東京海上保險會社を起し支配人より監査役となる廿五六年の頃より三十年に至るまでに王子製紙會社米穀取引所鉱ヶ淵紡績會社石川島造船所の重役に推され實業界

の信任尤も篤し三十六年四月歿す年五十二

とーけー 康慶（カウケイ） 佛師なり三世康助の次子肥前と稱し法眼に叙せらる建久八年東大寺釋迦四天南方天を造り其子運慶と共に同釋迦脇士虚空藏を造る

とーけー 板倉璜溪（イタクラクワウケイ） 江戸の儒者なり名は安世字は美仲安右衛門といひ璜溪帆丘等を號とす江戸の人なり早く物徂徠に學び太宰春臺と善からすこれ璜溪の放縱を衆人の前に面折したるによると都下に教授して名聲高し著はすところ帆丘集あり

とーけー 伴蒿蹊（バンカウケイ） 國學者なり近江の人名は貫芳閑田子と號す有賀長伯及び武者小路實岳に學ぶ當時蘆庵澄月慈延と併せて和歌の四天王といへり後京流に耽る文化三年七月歿す年七十四著書に國文世々の跡、正續近世畸人傳、閑田耕筆、勝文吐懷篇、閑田文草、閑田詠草、大和物語補翼抄、庭の訓抄、譯文童喩等あり

とけーぜんじ 古溪禪師（コケイゼンジ） 京都紫野大德寺十七世の法主なり名は宗陳越前の人蒲庵と號す天正十年豐臣秀吉の爲に大德寺境内摠見院を創し始祖となる正親町天皇勅して大慈廣照禪師の號を與ふ天正末年洛北市原野に常樂庵を結び又中納言秀長の爲に天光院を創して冥福を祈る慶長二年正月寂す時に年六十六

とげん 北村湖元（キタムラコゲン） 歌人なり湖春の子父祖につぎて幕府の和歌所に補し再び昌院と號し法印に叙せらる寛延二年五月歿す年七十四

とーけん 稲生恒軒（イナフコウケン） 醫師なり名は正治字は見蔑大阪の人古林見誼に學びて苦學し業成りて江戸に來る淀侯永井尚征に聘せられて侍醫となり恩遇せらる恒軒又經史に通じて白石鳩巣と知り藤洛の說を來す延寶三年致仕し學舍を建て〻人に教ふ六年病みて大阪にかへり八年歿す年七十一著書に蠡斯草あり

とーけー 那須高堅（ナスカウケン） 國學者なり越後の人古今集評註、百人一首撰次考、歌文治草考を著はす

とーけんてんのー 孝謙天皇（カウケンテンナウ） 御名阿倍聖武帝の皇女母は光明皇后なり在位十年位を淳仁帝に讓る世に高野天皇ともいふ

とーげんてんのー 孝元天皇（カウゲンテンナウ） 大日本彦國牽天皇といふ孝靈帝の太子にして母を細媛といふ都を輕に遷して境原宮に居る在位五十七年壽百十六

とこーどんてんのー 後光嚴天皇（ゴクワウゴンテンナウ） 北朝の帝なり御名彌仁光嚴帝の第三子足利尊氏のために立てられて位に在ること二十年崩ずる時壽三十七

とーとーてんのー 光孝天皇（クワウカウテンナウ） 御名時康仁明帝の第三子なり天皇初め文德清和陽成の三帝に歷事して一品式部卿に任ぜらる陽成位を遜るゝや藤原基經帝を迎へて之を立つ時に御年五十五在位三年にして崩ず壽五十八世に小松帝といふ

とごーのつぼね 小督局（ゴカウノツボネ） 高倉天皇の寵妃なり藤原成範の女容色絶美一笑百媚を生ず初め小督家にあるの日藤原隆房と通ず宮に入るに及びて隆房眷戀已まず隆房は清盛の女婿なり而して清盛の女建禮門院高倉天皇の寵小督のために衰ふ清盛大に懼ばず乃ち小督を殺さむとす小督逃れて嵯峨野に隱る帝北面の武士源仲國に命じて索めしめ宮に還して益寵を極め坊門院を生む清盛聞きて大に怒り小督を捕へて尼となす後小督身を大堰川に投じて死すといふ

とーとーほーしんのー 恒弘法親王（コウコウホフシンナウ） 常磐井直明王の子後崇光院の猶子たり勅修寺に入る永正六年薨ず

とごまつてんのー 後小松天皇（ゴコマツテンナウ） 御名幹仁後圓融帝の太子六歲にして立つ初め勤王の士多く滅び金剛山陷りて楠氏一族遠く逃匿す足利義滿使を遣して和を吉野に請ふ後龜山帝聽して車駕京に入る義滿來降の儀を取らむとす帝許さずして曰く父子の禮を以て相授くるにあらずば神器と共に斃れて已まむと義滿遂に服すこゝに於て後小松帝立つ義滿奏請して職を子義持に讓り自ら太政大臣たらむとす朝議許さず義滿怒ていふ天子は我家の立つる所なり我に聽かずむば天子を廢せむのみと朝廷懼れて遂に之を許す帝在位三十年永享十六年十月崩ず齡五十七

とごーみょーてんのー 後光明天皇（ゴクワウミヤウテンナウ） 後光嚴帝の太子なり深く幕府の專横を憤り朝政の振興をはかる在位十一年崩ずる時御年二十二

とーどんてんのー 光嚴天皇（クワウゴンテンナウ） 名は建仁後伏見帝の太子たり後醍醐帝南狩の日北條高時帝を立つ在位二年後醍醐帝京に還る天皇乃ち皇位を遜り太上天皇と號し薙髮して光智又は無範といひ丹波に入りて常勝寺を創む貞治三年崩ず御年五十一

とーさい 大鄕浩齋（オホザトカウサイ） 鯖江藩の儒者なり名は博本姓須子氏業を林大學頭に學び江戸にありて教授せしも後藩主に擯でられて儒官大鄕氏の後を襲ぐ安政二年七月歿せり

とーさい 菊池耕齋（キクチカウサイ） 京都の儒者名は東勻初名東尹幼にして嘗得庵に學び十六にして江戸に來り林羅山の門に入る業成り還て醫に志し再び江戸に來りて官醫野間玄琢に學ぶ後久留米侯に仕へ七年にして辭し京に教授す明暦元年命をうけて韓使に相國寺に面し學士李石湖と語る萬治三年江戸に來る列侯皆禮を厚うして延見す寛文二年薩州侯聘して賓師となし祿五百石を與ふ天和二年十二月歿す年六十五著書には百幅畫軸、本朝歷代名臣略傳、七書講義通考、耕齋文集、同詩集等あり

とさい 語齋（ゴサイ） 淨瑠璃家なり近江大掾と號す俗名岡島吉左衛門吉原京町に住し三絃をよくす後薙髮して語齋と改名し語齋節をうたひ出す

とーさい 江村剛齋（エムラガウサイ） 京都の儒者にして醫を業とす名は宗珉字は友石金華と號す業を那波活所に受け青山侯に仕へ幾許ならずして去る紀伊侯聘するに五百石を以てするも往かず慶安四年後光明天皇勅して禁中の侍醫となすも又辭して來ぜず萬治四年七月歿す年五十四著書に剛齋殘稿、同雜篇あり

とさいしょーのつぼね 小宰相局（コサイシヤウノツボネ） 刑部卿藤原憲賢の女上西門院の宮女なり平通盛に配し寵愛せらる寿永中通盛湊川に戰死するの日慟哭已まず遂に海に投じて死す

とさえもん 濱田小左衛門（ハマダコザエモン） 長崎の人寛永中兄彌兵衛と共に臺灣島に到り

紅毛人を睨かし其罪を責めて還る

ときがてんのー 後嵯峨天皇 御名邦仁士御門帝の第二子四條帝の崩後平泰時迎へて之を立つ在位四年位を久仁親王に讓り院にありて政を聽く二十餘年文永九年崩ず齢五十三

ときくらまちてんのー 後櫻町天皇 御名智子櫻町帝の第一女なり寛延三年内親王となり寶暦十二年七月即位明和七年十一月讓位在位八年文化十年十月崩ず齢七十四

ときぶろー 赤松小三郎 名は友裕宇宙堂と號す薩田より出で〜赤松家を繼ぐ信州上田の藩士なり天保二年の生れにして性豪放不羈文武の才に長け敏理弓術に尤も巧なり曾て佐久間象山に就て天文地理格物生理等の學を修め勝海舟の門に遊び闖入等の敎を蒙り兵學語學には尤も精通せり夙に洋式練兵の術を會得して藩人に敎へ人の憎むところとなりて京に去る後諸藩の招聘するに當りて薩藩の懇請を許し伊知地伊集院桐野村田の後才を薫陶しかたはら佐幕勤王の主義を以て薩幕の間を融和せしめむと企て西郷隆盛原仲寧梅澤孫太郎等の名士と往來して天下のために努む程なく會津藩の招に應ぜむとする時藩主歸國の命甚頻なれば遂に薩南の健兒と別れて去り京都東洞院五條通りに到れるに刺客二人急に突出してこれを壁す或はいふ小三郎幕府を輔佐して天下に立たば薩長の計闘大に苦しまむことを慮り密に人を派して刺さしめしものなりと時慶應三年九月三日なり年三十七墓は京都黒谷光明寺中にありといふ

ときぶろー 吉住小三郎 長唄の名家なり杵屋喜三郎に學びて享保中中村座に出づ寛保四年娘道成寺をうたひて名あり

ときみ 紀古佐美 大納言廉呂の孫正六位宿禰廉呂の子なり寶龜中兵部式部の少輔等の諸官を歴て從五位上に進む會〻蝦夷叛して紀麻純を殺す古佐美征夷副使となりて之を伐つ天應元年陸奥守となり從四位下に叙す延暦の初年諸官を歴て遂に參議に拜し七年征東大將軍兼大和守に任ず乃ち節刀を賜ひ御被綵帛數品を賜ふ古佐美東海東山坂東諸國の兵五萬餘を率ゐて進む副將軍入間廣成等と多賀城に會し衣川に陣す而して兵を按じて進まず朝廷命じて鋭意進發せしむ古佐美遂に敵地に入り勝に乘じて前む賊酋四百密に背後より出で〜官軍の中堅を衝くに及び官軍敗走副將軍戦殁せり七月古佐美上書して兵を解き糧を節せむと請ふ朝廷許さず乃ち僞り奏して大捷を告ぐ事露はる九月古佐美京に還り節刀を上る勅して曰く古佐美の大敗は當に法に據りて窮治すべしと雖苟功に依て措て問はずと後古佐美累進して大納言に至り皇太子の傅となり延暦十六年に於て薨ず年六十五從二位を追贈せらる

ときん 藪孤山 熊本藩の儒職なり名は鑒字は士厚通稱茂次郎朝陽山人また孤山と號す震菴の子なり幼にして刻苦詩文に勉む寶暦七年江戸に出で翌年又京都に至りて西依周行關鐸と交り六年にして歸る十一年時習館の訓導となりのち更に敎授に叙す能く藩侯に重ぜられ六百俵を賜はり五十砲長に任ず寛政元年風痺を患ひ職を辭す特に養老俸

を賜はる孤山素程朱を尊び世情に明なり樂泮集の著あり

ときん 菊池五山 高松侯の儒官なり名は桐孫字は無絃左太夫と稱し娛庵小釣舍等の別號を有す初め江戸に出で〜市川寛齋の門に入り業成り離を垂れて子弟に敎ふ文政中高松侯のために聘せられて菊池半隱の後をつぎ重用せらる安政六年六月殁す年八十四著はすところ詩話十六卷あり

とーざん 石川晃山 藪人なり名は晃字は士晃俗稱宗助經髮山人と號す年十九水戸の國老に仕へ同僚と合はずして去り江戸に來りて谷文晁の門に入る後備中倉敷に赴き弟子に敎ふ藪風清逸にして浮世繪の卑俗を惡む明治二年十二月殁す年四十九

とーざん 野々山緑山 藪家なり名は正禎字は子祥通稱彌兵衛狩野美信に學びて業成る緑山顔面に痘痕あり人呼んで蝦緑山といふ弘化四年十二月殁す年六十八

ときんじょーてんのー 後三條天皇 御名尊仁後朱雀帝の第二子なり大江匡房を師として學び又佛を崇ぶ天皇藤氏の專横を抑へ民を撫すること尤も慈仁天下靡然として其高德に化す在位四年崩ずる時齢四十

ときんぼ 式亭小三馬 小説家なり本名菊池虎之助三馬の子家業をつぎて藥を賣る傍ら小説に筆を染め三國妖狐殺生石等を著す嘉永六年殁す年四十二

としきぶ 岸澤古式部 當磐津三味線の名人なり式佐の子にして初名を仲助とよぶ後六世式佐となり又改めて古式部といふ萬延元年家元と不和を生じて別に一派を立つ慶應二年十二月殁す

としきぶのないし 小式部内侍 歌人なり和泉守橘時貞の子にして母は和泉式部なり上東門院に仕ふ常に歌を詠むに佳句口を衝いて出づ時人其母の密に敎ふる處となすたまたま母式部後の夫藤原保昌に從て丹後に赴く時に禁中に歌會あり小式部出づ中納言定頼小式部に謂て曰く丹後よりの使未だ還らざるかと小式部定頼の袖を控へて曰く大江山いく野の道の遠ければまだ文も見ず天の橋立とこれより才名一世に鳴る然れども幾許ならず母に先ちて殁せり

とーじじゅー 江侍從 歌人なり大江匡衡の女にして母は赤染衛門なり

とーしゅー 榊原篁洲 紀州侯の儒臣なり名は玄輔又は小太郎字は希樹篁洲と號す和泉の人年少京に游びて木下順庵に學び鄕に還て苦學多年業大にすいむのち江戸に出で〜子弟に敎へ幕府に仕ふ後順庵の薦に依て紀藩の儒臣となる學は渓魏の傳注より宋明の疏釋を兼用し訓詁は馬鄭の舊説に據り義理は程朱の性理に從ふ即ち折衷學の本源を開きしものなり篁洲博學多識星學武術射御醫卜に至るまで辨へざるものなし又制度律令に精通し明律譯解世六卷を撰す寶永三年正月殁す年五十一著書には談藝雜記、正續詩法授幼鈔、談苑學字訓解、山谷詩集鈔等あり

とじゅー 湖十 初世江戸の俳人木者庵謙堂露入堂鼠肝等の別號を有す其角に學ぶ享保十八年老鼠と改名し淺草に住す元文三年七月殁す行年六十三

どしゅじやくてんのー 後朱雀天皇 御名敦良一條帝の第三子なり帝英明聰

智といへども藤原氏の專權に依て遂に志を得る能はず在位九年にして太子親仁に讓り薨で崩ず齡三十七

ことしゅん 北村湖春（キタムラコレユン） 歌人なり季吟の子花果院の法眼と號し幕府の歌學所に補す元祿十年正月父に先ちて歿す年五十著書に源氏物語忍草あり

ことじゅん 武川幸順（タケカハカウジユン） 醫者なり字は建德南山と號す京都の人小兒科の名手を以て法眼に叙せらる本居宣長も曾て其門にありて學べりといふ安永九年歿す年五十六

ことじゅんほーしんのー 公遵法親王（コウジユンホフシンナウ） 俗名保長中御門院第二の皇子なり元文三年三月輪王寺第五世の門主となり五年三月一品に叙す延享二年五月天台座主となり寛延二年七月三宮に准ぜられ寶曆二年八月職を辭して隨自意院宮と號す明和九年九月就職安永九年三月職を公延親王に讓る隨宜樂院と號せり天明八年三月薨ず年六十七

ことしょー 大谷光勝（オホタニクワウショウ） 本願寺の住職なり殿如上人といふ文政十一年得度して近江長濱大通寺の住職となる十三年十月法眼に叙し尋で權少僧都に任ぜらる天保十二年十二月右大臣近衛忠熙の猶子となりて大僧正にのぼり弘化三年を以て本願寺住職となる明治元年五月法嗣光瑩と共に連署して王事に盡くさむことを請ひ米四千俵金五千兩を獻す又會計官の命を得て更に千兩を獻納し定從をして征討將軍仁和寺宮に隨行せしめたり二年北海道開拓の命を蒙り光瑩往く翌年に及びて成功し尋で又三千八百兩を獻ず五年華族に列せられ廿二年九月隱居を許され從二位に叙す十月大谷派管長本願寺住職を光瑩に讓り廿六年一月に至り正二位にのぼる廿七年一月病を得て寂ず年七十八

ことしょーてんのー 孝昭天皇（カウセウテンナウ） 觀松彦香殖稻天皇懿德帝の子にして母は天豐津姫なり都を披上にうつして池心宮といふ在位十三年齡百十五

ことしょーほーしんのー 恒性法親王（コウセイホフシンナウ） 大覺寺の門主にして後醍醐帝の皇子なり

ことしょーほーしんのー 公璋法親王（コウシヤウホフシンナウ） 輪王寺第七世の門主桃園天皇の猶子俗名保和一に方宮といふ寶曆十二年十二月曼珠院をつぎ安永二年十月毘沙門堂に入りて得度す同三年十二月二品に叙し四年六月關東に下り寛永寺に薨ず年十七清淨心院宮と號す

ことしらかわてんのー 後白河天皇（ゴシラカハテンナウ） 御名雅仁鳥羽帝の第四子なり在位三年にして位を太子守仁に讓り政を院中に聽く乃ち薙髮して行眞と號す後平治の亂に當りて藤原信頼のために幽せられ又平清盛のために鳥羽殿に幽せらる而して又義仲のために五條の館に幽せらる帝院にある事三十四年延久三年崩ず齡六十六

ことしろー 藤田小四郎（フヂタコシラウ） 水戸の藩士名は信東湖の子なり常に勤王攘夷の志を懷き慷慨悲憤措く能はず文久三年江戸に赴きて奔走し幕府を說きて納れられず元治元年三月遂に田丸直允等と日光山に據りて義を唱ふ後太平山に移り又筑波山に轉じ諸藩の兵と戰ひて之を敗る時に松平頼德榊原照貞と那珂港にありて水戸藩の姦臣を除かむと謀る小四郎直に赴きて援け事成らず去て越前

に往き其藩に降る慶應元年二月幕府罪を糺彈して之を斬る小四郎時に年廿四明治廿四年十二月朝廷從四位を贈る

ことじろー 岩崎小二郎（イハサキコジラウ） 肥前大村藩の士後に貴族院議員となる維新の時渡邊清同昇楠本正隆等と盡力して功あり尋で民部省出仕となる後黑田清隆に從て歐米を巡行し歸朝して銀行局長となり又秋田縣知事となる幾許ならずして又滋賀縣に轉じ明治廿五年又福岡縣に轉じ從四位勳四等に叙し廿八年六月卒す

ことしろー 松本幸四郎（マツモトカウシラウ） 初代 江戸の俳優なり久松多四郎の門に入りて學び女形より立役にうつる享保元年松本幸四郎を名とす十五年三月歿す年五十七

ことしろー 松本幸四郎（マツモトカウシラウ） 四代 綿江と稱す三代目幸四郎の養子なり大阪の人江戸に來りて瀨川仙魚の弟子となり後市川團十郎の門に入る寶曆十二年染玉郎といひ十三年高麗藏とよぶ享和元年團門と絶ちて男女川京十郎と改め享和二年六月歿す年六十六

ことしろー 松本幸四郎（マツモトカウシラウ） 五代 四代目幸四郎の子幼名高麗藏又錦升と號す濡事師より實惡にうつり天保九年五月歿す年七十五

ことしろー 松本幸四郎（マツモトカウシラウ） 六代 五代目幸四郎の子幼名市川高麗藏又錦升といふ弘化元年二月六代目をつぎ嘉永二年十一月歿す年三十七

ことすけ 野澤語助（ノザハゴスケ） 淨瑠璃三絃家なり幼名辰次郎語息齊と號す明治元年三月歿す年七十八

ことすけ 野晒悟助（ノザラシゴスケ） 大阪の俠客なり幼名彦丸幼にして一休禪師に從ひ僧となる後還俗して俠客を以て終る

ことといん 後鳥羽院（ゴトバヰン） 右栖川榮仁親王の子にして鳥羽院の孫なり御名は眞成年五十四にして親王となる後小松上皇稱光帝を諫めて納れられず稱光帝悲りて位を退かむとす上皇院をして薙髮せしめ以て其志を明かにす院法名は道欽僧大淵の戒を受く後稱光帝大漸に臨びて院の子後花園帝立つ文安四年十一月院を尊んで太上天皇といふ康正二年八月薨ず年八十五後鳥羽院と謚す院好學しばしば記錄舊記を帝に上り文を學ばむことを諷奏し和歌管絃の道を廢せざらしむ

ことそん 池田孤村（イケダコソン） 藩人なり名は三信舊松軒といふ越後の人弱冠にして江戸に來り抱一に學び其著光琳百圖に對して新撰光琳百圖を撰ぶ慶應二年二月歿す年六十六

ことそん 向山黃村（ムカフヤマクワウソン） 一色眞淨の子にして向山源太夫の養子となる通稱榮五郎初め儒を千坂蕊園に學び後昌平黌に入りて及第す詩に工みに文をよくせり嘗て養父の後を承けて幕府に仕へ外國奉行支配組頭となり累進して同目付となり慶應二年從五位下甲人正を以て若年寄格に准ぜらる尋で佛國に赴き奈破崙第三世に謁す歸て德川慶喜に從ひ靜岡に住し沼津にうつる明治廿年八月歿す年七十二

ことだいいん 高臺院（カウダイヰン） 豐臣秀吉の正室なり北政所と稱す尾張の人淺野又右衛門の姪にして淺野長政の從妹なり幼名彌々後朝日殿と稱せり秀吉薨ずるに及びて薙髮して高臺院湖月尼とよびしが寛永元年九月薨ず

ごだいごてんのー 後醍醐天皇（ゴダイゴテンナウ） 諱尊治後宇多帝の第二子なり花園帝の禪をうけて位に即くと雖上皇院中にありて政を聽く時に北條高時鎌倉にありて權を專にす帝近臣と謀り之を伐たむとして事洩る高時兵を發して宮闕を犯す帝逃れて笠置に入り賊の爲に獲らるこゝに於て乘輿隱岐に移り三年にして潛に伯州に逃るゝことを得たり而して船上山に駐まる山陰山陽の吏民多く集る遂に東上して京を復し帝位を正す新田義貞上野より起りて鎌倉に入り高時を滅して天下全く平定す之を建武中興といふ幾許ならず足利尊氏兵を起して叛き自ら征夷大將軍と號す而して王師連年克つ能はず兵威萎微して帝吉野に幸するに至るこゝに於て南北朝兩立し庶民二天子を戴くに及べり帝は北朝の曆應元年南朝の建武五年に崩ず

ごーたく 細井廣澤（ホソヰクワウタク） 名は智愼字は公謹廣澤と號す又思貽齋蕉林庵玉川奇勝堂等の別號を有す遠州の人なり年少江戸に出でゝ儒を坂井漸軒に學び書を北島雪山に受く業成りて柳澤吉保に仕へ聽にあひて致仕すこれより閑居獨學諸藝を修め一として究めざるなし後幕府の登用にあひて重んぜらる享保二十年十二月歿す年七十八

ごたつ ト部小龍（ウラベコタツ） 常陸の人和歌をよくす其詠あげて萬葉集にあり

ごたゆー 式守五太夫（シキモリゴダイフ） 角力行司なり名は義則伊豆の人初め伊勢海五太夫の弟子となりて三段目力士たりしが故實を究めて行司に轉じ三代木村正之助に就く十六世吉田追風の許を得て立行司となる乃ち式守家の祖なり

ごたろー 田宮小太郎（タミヤコタラウ） 讃岐の人一名に坊太郎といふ父源八人のために殺さるる小太郎江戸に來りて劍を學び國に歸りて遂に仇を復す後再び江戸に上り年壯にして死す

ごだんじ 市川小團次（イチカハコダンジ） 初代 江戸の俳優家名高島屋俳名米升本姓堀越實は日本橋區魚河岸の生れにて幼名を米藏といへり七代目白猿の門人年少にして上方に赴き好評を博し居たるが天保三年に於て大阪竹田芝居に出でゝ米十郎と改名し天保十四年角の座にて師匠と一座し翌春同座にて小團次と改名し凡べて早業上手にて法界坊の釣鐘ぬけ忠信の見壺ぬけ五右衛門の葛籠ぬけ皆當せらる業事にかけては當時此人の右に出づるものなしといへり慶應二年五月歿す年五十五

ごーちく 伴香竹（バンコウチク） 國學者なり名は暢字は叔雄號を香竹とよぶ和歌に巧みに書に妙に旅行を好む同藩の學者安藤爲章とは相嘲りて遂に和せざりしといふ嘗て萬葉集の注釋に參與し又歌林備考を著はす

ごーちゅー 香川黃中（カガハクワウチユウ） 歌人なり初名景柄德大寺家に仕へて從六位上陸奥介たり景樹を養ひて子とす文政四年十一月歿す年七十七

ごーちんほーしんのー 恒鎭法親王（コウチンホフシンナウ） 梶井宮第廿二世の門主なり龜山帝の皇孫恒明親王の子なり應安五年正月薨ず

どつちみかどてんのー 後土御門天皇（ゴツチミカドテンナウ） 御名成仁後花園帝の太子なり位にあるや應仁の亂起り京師騷擾宮殿廬舍灰燼たる故を以て官紀紊亂王政遂に行はれず朝廷の式微此時より過ぎたるはなし帝在位廿六年長享九年九月崩ず謚

五十九

ごーて 村瀨栲亭（ムラセカウテイ） 儒者なり名は之驥字は君綏嘉右衛門と稱す京都の人秋田侯に聘せられて其國に赴き後致仕して京に還る文政元年十二月歿す年七十二著はす所藝苑日抄、栲亭集等あり

ごてつ 會津小鐵（アヒヅコテツ） 江戸の俠客にして本名を上坂仙吉とよべり安政中罪を犯して會津藩に投じ義氣を以て稱せらる維新後京都に移り雇人夫の總頭をなし明治十八年三月を以て歿す

ごてつ 虎徹（コテツ） 有名の鍛工なり越前の人名は興里加賀金澤にありて名四方に聞ゆ時に今貞宗といふ者刀を作るに秀づ藩侯虎徹の冑を貞宗に斫らしむ貞宗刀を執て將に斫らむとするに及び虎徹急に止めて其氣勢を挫き纔かに不名聲をのがるこれより虎徹技の達せざるを愧ぢ江州長曾禰に赴き技を研き遂に無比の刀工となるといふ寛文延寶の頃の人と傳へらる

ごてのあま 小手尼（コテノアマ） 歸化人なり醫をよくす稱德帝前陰腫塞す醫術施し難し尼其手纖弱にして嬰兒の如くなるを以て上言して手術を試みむことを請ふ藤原百川之を不可として許さず

ごどー 豐田古童（トヨダコダウ） 尺八の名手なり道稱勝五郎といふ虛無僧となりて天下を周遊せり

ごーどー 松崎慊堂（マツザキカウダウ） 肥後の人初名密字退堂益城と號す初め昌平黌に入り後林述齋の家塾に修む才藻豐富述齋深く之を愛す享和二年掛川侯に仕へて二十二口俸をうけ天保中將軍に謁して更に二十二口俸を賜はる慊堂嘗て書生たる時一夜品川の青樓に宿し夜半書を燈下に讀む娼怪みて之を問ふ慊堂答ふるに二方金を遺り學資となさしむ後娼妓色衰ふ慊堂舊恩を記し直ちに落籍して家に迎へ厚く俸養すといふ弘化元年四月歿す年七十四

ごーとくてんのー 孝德天皇（カウトクテンナウ） 御名輕皇極帝の同母弟なり位に即くや都を長柄にうつし豐崎宮といふ初めて年號を立てゝ大化といひ又改元して白雉といふ在位十年崩ず

ごとしろぬしのかみ 事代主神（コトシロヌシノカミ） 一言主又は八重事代主ともいふ大國主神の子にして出雲國にあり父天孫に國土を獻ずるの後退て三輪に居る

ごーとーのないし 勾當內侍（コウタウノナイシ） 新田義貞の妻なり初め義貞王事に盡くして偉功多し後醍醐帝因て其鍾愛する處の勾當內侍を賜ふ後義貞の越前に戰歿するや內侍悲みに堪へず遂に近江琵琶湖に投じて死す或はいふ世を避れて嵯峨に尼となると

ごとばてんのー 後鳥羽天皇（ゴトバテンナウ） 御名尊成高倉帝の第四子なり安德帝平氏に擁せられて西狩す京師主なしこゝを以て天皇四歲にして立つ源義仲木曾より起り平氏の一族を討伐して驕恣日に募る乃ち法皇を五條第に幽す天皇密に賴朝に勅を下して之を伐たしむ賴朝弟義經範賴をして義仲を滅す文治二年賴朝總追捕使となるに及び朝政武門に歸し天皇虛器を擁するに過ぎざりき在位十五年位を爲仁に讓り院中にありて政を聽く承久中北條義時のために隱岐に遷され延應元年二月崩ず齡六十三天皇手工に長じ刀劍鑄て諸臣に賜ふ又繪をよ

くし蹴鞠に妙を得たり

とねか 大伴子牟（オホトモノコナカ）下總の人寶龜中其名あらはる和歌に巧みにして其詠萬葉集に見ゆ

とねしのかるのおーじ 木梨輕皇子（コナシノカルノワヤシ）允恭天皇の皇子なり容貌美麗婬蕩を事とす同腹の御妹輕大娘の美を愛して之と通ず然れども帝皇太子の故を以て敢て其罪を問はずして輕大娘を伊豫に流す帝崩じて後太子益〻暴虐を行ひ姦淫を行ひて憚らざるに至る群臣心を穴穂皇子に屬すこゝに於て太子走りて物部大前の家にかくれ穴穂皇子に攻められて自殺す又いふ因はれて伊豫に流さると

とねらてんのー 後奈良天皇（ゴナラテンナウ）御名知仁後柏原帝の太子なり天文五年位に即く在位三十一年崩ずる時齡六十三

とにじょーてんのー 後二條天皇（ゴニデウテンナウ）御名邦治後宇多帝の子後伏見帝の禪をうけて位に即く時に後深草龜山後宇多伏見後伏見の五上皇院中にあり而して龜山後宇多二上皇政を決す帝在位六年崩ずる時齡二十四

とーにんしんのー 好仁親王（カウニンシンナウ）後陽成帝の第七子母は中和門院なり慶長十七年十二月親王となる尋で彈正尹となり十五年六月薨ず年卅八永照院招月不白と號す又高松宮或は花町の宮ともいへり曾て德川秀忠の養女鍋子を納れて妃となし明子女王並びに一女を生む

とーにんてんのー 光仁天皇（クワウニンテンナウ）御名白壁天智帝の孫にして施基皇子の御子なり聖武稱德の二朝に仕へて大納言に至る稱德帝崩後藤原永手等を定めて帝を立つ仍て平城に都し位にあること十二年崩御の時御年七十三

とのえてんのー 近衛天皇（ゴノエテンナウ）御名體仁鳥羽帝の第八子なり三歲にして即位在位十四年久齡三年七月崩ず齡十七

とのはなさくやひめ 木之花佐久夜（ゴノハナサクヤ）毘賣（ヒメ）大山津見神の女一に吾田鹿葦津比賣といふ姉石長と姫共に天孫饒速日命に嫁く石長姫醜し天孫之を返して獨り媛を止む娘むことあり天孫其子にあらざるを疑ふ妃曰く吾娘む所天孫の子ならずば火も燒く能はじと乃ち產家に火を縱つ初め火照命を生み火の熾なる時火須勢理命を生み火を避けて火々出見命を生む

とのはなちるひめ 木之花智流比賣（ゴノハナチルヒメ）大山津見神の女なり八島士奴美神の妻となる

とーばいのにょーぼー 紅梅女房（コウバイノニヨウバウ）歌人なり右大辨時輔の妻後一條院の御宇其家に紅梅ありと聞きて之を召されたる時勅なれば撮もかしこし驚のやどはと問はゞいかゞ答へむ帝大に感じて其梅を移すことを停むと或はこれ貫之の女と混同したるものならむといふ

とはなぞのてんのー 後花園天皇（ゴハナゾノテンナウ）御名彥仁崇光帝の曾孫貞成親王の子正長元年位に即く此歲南朝の遺胤小倉殿反し伊勢に赴く嘉吉元年南朝の遺臣藤原有光楠次郎後龜山の皇子を奉じて夜禁中に入り神器を奪ふ追躡して鏡劍を收め尋で賊黨を平ぐ寛正五年七月帝位を皇太子に讓り薙髮して僧となる御名圓智滿智文明二年十二月帝崩ず後文德院といふ齡五十二帝和歌に巧みにして風雅集を撰す

とーひょー 秋山光彪（アキヤマクワウヘウ）荷田春滿の

門に入りて歌道を修め古學を究む豐前小倉の藩士名を韮兵衛とよぶ

とふかくさてんのー 後深草天皇（ゴフカクサテンナウ）御名久仁後嵯峨帝の第二子四歲にして立つ位を皇太弟恒仁に讓り院にありて遂に政を見ず在位十三年薙髮して素實と號せり嘉元二年崩ず年六十二

とふしみてんのー 後伏見天皇（ゴフシミテンナウ）御名胤仁伏見帝の皇子なり位にあること三年正慶中光嚴花園の二帝と共に亂を東國に避く後薙髮して御名を理覺といひ延元元年崩ず齡四十九

とーぶん 木下幸文（キノシタカウブン）歌人なり通稱民藏備中の人桂園に入りて學び同園の冠冕と稱せり著書あり世に行はる

とーぶんてんのー 弘文天皇（コウブンテンナウ）御名大友天智帝の長子なり聰明英智容貌魁偉眼光人を射る天智帝の十年太政大臣に拜し百揆を總ぶ天智帝疾あり蘇我安麻呂をして太弟大海人皇子を內殿に召す安麻呂太弟に告げて曰く上將に帝業を殿下に屬せむとす須らく之を辭退すべしと大海人これに依て辭し僧となりて吉野に入る大友立つて皇太子となり左大臣蘇我赤兄右大臣中臣金蘇我果安巨勢人紀大人輔佐の任に當る十二月大友位に即き萬機を聽く或人奏して曰ふ太弟を吉野に入らしむるが如し能く人を噬むな野に入らしむるは猛虎をしてからむやと帝之を信じ明年山陵を起すに託し尾濃二州の國司に詔して役徒を徵發し甲首帶兵せしむ朴井雄君吉野に赴きて急を太弟に告ぐ太弟大に驚き直に出でゝ兵を募り不破に入る帝乃ち群臣を召して會議し諸將を東西に發して兵を募らしむ京畿應じ西國從はず韋那磐鍬等帝のために東國の兵を率ゐて不破を超ゆるに及び太弟の將樂大麻呂高市皇子の捕ふる所となる大伴吹負又叛して太弟に應じ京高阪百足尋で降る帝の軍裴微如何ともする能はず太弟勢に乘じて瀨田に追り激戰數刻帝の將智尊戰死して全軍敗れ大臣諸官皆逃れ帝山前に至りて自ら縊れて崩ず

とへー 西鄕小兵衛（サイカウコヘエ）隆盛の弟なり隆盛の私學校を建つるや鹿兒島に赴きて謁す而して軍を起すに當り策を獻じて謂ふ我軍三道より進み一は乃ち熊本城の不意を襲ひ一は日向より豐後に出で一は海路長崎に赴くべしと桐野利秋之を斥けて用ゐず小兵衛軍に從ひて一大隊一番小隊長となり後中隊長となり木山路に戰死せり

とへー 坊主小兵衛（バウズコヘエ）俳優なり江戸の人延寶天和貞享の頃道化方を以てあらはる其頭糸髮にして坊主に似る故に其名あり

とへー 錢屋五兵衛（ゼニヤゴヘエ）加賀國石川郡宮腰浦の船商なり其祖は能美郡清水村の農五兵衛より七世の祖市兵衛金錢兩替を業として錢屋を通稱とす市兵衛より五世の後を五兵衛といひ其子其孫皆其名を嗣ぐ世に謂ふところの豪商五兵衛は乃ち五世五兵衛の孫なり初め粟谷村の豪商木谷藤右衛門に仕へ千金を私用して投機業を行ひ一敗して將に罪を得むとし主の義心に救はれて家に還るこゝに於て獨力巨萬の富を致さむと欲し松前產の干鰯を買收して肥料となし一獲巨利を占む乃ち木谷と共に藩の御用達となり天保內歲に當て藩のために一策を畫し加賀用船なるものを造て六十餘州の津々浦々に到り盛に國產を

賣り交商貿易の途を開く故を以て藩の財政整ひ錢屋の家産又增殖す五兵衛三男要藏の才幹を愛し官に賄して新田裁許と爲し家を長男喜太郎に讓る而して要藏をして更に十村役たらしめむと欲し其資格をつくらしむる爲に河北潟埋立工事を興せり蓋しこれ錢屋家の滅亡の禍根にして五兵衛が愛着の情に溺れし失點たりしや明なり初め河北潟を埋むるに當り河北の漁民多く五兵衛を恨む五兵衛意とせずこれをして農耕地たらしむるの利多きを信じ牢固拔く可からざるの決心を以て營々日夜を重ぬ江底深くして填むれば乃ち潰ゆ或人いふ石灰を土砂に混じて用ゐよと五兵衛要藏を督して石灰及びアイゴ油を土砂に混入し頻に使用す嘉永五年に至り春夏の交より流行病發生し金澤市中之に罹らざるものなし而して其病源は魚毒にして魚は河北江中のものに限れり官漁民を糾問するに漁民口を揃へて曰く錢屋吾等の營業を妨げ且つ江中に毒を投入せりと官驚きて五兵衛要藏等を捕へ該記錄帳簿を押收し大疑獄起る五兵衛十一月に及びて獄中に死す年八十二六年十二月裁判確定し五兵衛等の毒藥投入は事實に歸し要藏五兵衛は死體鞭潰の上梟刑手代市兵衛は梟首せらる或はいふ五兵衛は外國密交易を行ひ居たるものなりと但し其傳說詳ならず

とへー　並木五瓶（ナミキゴヘイ）　初代　狂言作者なり大阪の人通稱吾八並木正三の門人にして明和中江戸に來る文化五年二月歿す年六十三

とへー　並木五瓶（ナミキゴヘイ）　二代　狂言作者なり葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒の號を有す通稱篠田金六初め並木宗六とよべり文政二年七月歿す年五十二

とへー　並木五瓶（ナミキゴヘイ）　三代　狂言作者なり江戸の人二代の門人初め惣六又は篠田金次といへり通稱因幡屋小半次安政三年七月歿す

とへー　神田孝平（カンダカウヘイ）　蘭學者なり初め兵庫縣令をつとめ金開あり後元老院議官に轉ず同院廢せらるゝの日閑居して年を送るたまたま肺を病んで神戸諏訪山に轉地療養せしが快癒して歸り學士會員に列す三十一年七月男爵を授けられて華族となり同月病歿す

とへー

とべん　小辨（コベン）　天平寶龜年間の人和歌をよくす其詠載せて萬葉集にあり

とーべん　高辨（カウベン）　高僧なり號は明惠紀伊の人早く高雄山にのぼり文覺に就て學ぶ又辱印に從ひて悉曇章を修め印が未知の深義に達せり年十六剃髮して東大寺に具足戒を受け與然に兩部の密法を受く遂に高野に止れり寛喜四年正月逝く年六十

とーべんほーしんのー　公辨法親王（コウベンホフシンナウ）　輪王寺門跡第三世なり後西院第十六の皇子元祿三年輪王寺に入る六年四月一品尋で天台座主寛永四年十一月准后宣下正德六年四月寂す御年四十八

とーほほーしんのー　弘保法親王（コウホホフシンナウ）　孝仁親王の子妙法院を嗣ぎ光格帝の養子となる文政十三年八月親王宣下十月出家名を敎仁と改む天保八年十一月二品に叙し十二年四月天台座主となる十三年九月辭退嘉永二年十二月牛車に乘りて宮中に入るを許さる

とほりかわてんのー　後堀河天皇（ゴホリカハテンナウ）　御名は茂仁高倉院の孫守貞親王後高倉院の御子なり御年十歲にして即位在位

十一年文曆元年崩ず壽二十三

とまぞー　市川高麗藏（イチカハコマザウ）　大阪の俳優七世團十郎の三男なり幼名新之助六代目錦升の養子となりて高麗藏と改め後白猿と號す明治にいたりて父の名海老藏をつぎ尋で歿す

とまち　小野小町（オノノコマチ）　出羽の郡領小野良實の女にして仁明の朝五節の舞姫となり宮中の后町に居る容貌絕秀一たび笑めば百媚生ず又和歌に巧みにして悽婉艷曲女流第一の名手たり歿年詳ならず但し小町に關するの傳說悉く虛誕無稽なるを以て戲曲小說に資するの外一も採るべきものなし纔かに牛馬問等の說に依て其一端を窺知するのみ

とまろ　大伴古麻呂（オホトモノコマロ）　勝寶元年左少辨と爲り二年遣唐副使となりて唐に往く天寶十二載元會に唐主含元殿に居て賀を受くこの日古麻呂を新羅の下に列せしむ古麻呂辭色を激して論爭す其將軍吳博實乃ち新羅を吐蕃の下に列し古麻呂を大食國の上に列せり歸朝して左大辨に任じ正四位下に至る寶字の初め陸奥鎭守府將軍按察使を兼ぬ後橘奈良麻呂の廢立に與し謀問せられ杖死す

とまろ　紀古麻呂（キノコマロ）　大人の子天智の朝に御史大夫となり正三位に叙す文才ありよく詩を賦す卒する時年五十九

とまろ　鵜屋古麻呂（シヤコマロ）　葛城襲津彥の後裔養老中律令を撰定して明法博士となる天平中從五位下に叙し藤原廣嗣の事に座して配流せらる後赦に逢ひ大學頭に任ず

とまろ　下毛野古麻呂（シモツケヌノコマロ）　文武帝の朝詔を奉じて律令編制にあづかる大寶中從四位下右大辨となる是歲令成る古麻呂勅に依て之を講說す後粟田眞人大伴安麻呂と共に朝政に參與す慶雲二年從四位下兵部卿にすゝみ和銅元年式部卿に拜し正四位下にいたり大將軍となる同年十二月卒す

とまん　奴小萬（ヤツコマン）　劇場假作の名實は阿雪と稱す大阪豪商某の妾出なり賦性勇俠一たび聖を迎へしも之を去て復顧みず父母世を去りてより書畫を淇園に學び又擊劍柔道を修む其婢阿龜阿岩亦氣膽あり常に之を伴うて市を過ぐ行人皆其道を讓る後禁中に仕へ長局の右筆たること五年辭して尼となり正慶と改めて天王寺畔に居す後難波村に退きて餘命を送り遂に市に出でゝ其途に死す年七十二

とみずのおてんのー　御水尾天皇（ゴミヅノヲテンナウ）　御名政仁後陽成帝の太子なり年十六即位大阪亂後初めて天下泰平四民業に安んず帝在位十八年位を皇女興子に讓り院にある五十一年延寶八年崩ず壽八十五贈て落飾して圓淨とよぶ

とーみょーとーとー　光明皇后（クワウミヤウクワウゴウ）　御名光明子聖武帝の皇后にして藤原不比等の女なり慈愛艷麗庇恰も光明を發するが如し故に名づくと孝謙帝及び皇太子を生む夙に佛法を崇奉し橘氏をして興福寺に藏し西金堂を建て釋迦十弟子等の像を安ず莊嚴妙絕なり又帝に勸めて諸國に國分寺を建て東大寺を造る後又悲田院施藥院の二院を置き天下の餓患を恤む然れども僧侶を防を近づけ頗る內政を紊るといふ寶字四年六月崩ず御年六十

とーみょーてんのー　光明天皇（クワウミヤウテンナウ）　北朝の帝なり御名豐仁後伏見帝の第二子

光嚴院の同母弟後醍醐帝の南遷の後足利尊氏之を立つ在位十二年薙髮して僧となり康暦二年崩す壽六十

ごむらかみてんのー 後村上天皇 御名義良南朝の天皇にして後醍醐帝の第七子なり在位二十九年にして崩す

ごむらさき 小紫 明暦中吉原三浦屋の娼妓なり平井權八と親み其死後目黑冷法寺に赴きて自殺す人塚を築き名づけて比翼塚といふ

ごめー 五明 俳人なり本名吉川丁阿小夜菴又は虫二房一方庵披襟舍樟岡丁閑人半居士等の號あり晩に鶏頭叟とよぶ當時白石の乙二南部の素鄉酒田の長翠と共に俳諧四天王とよばる享和三年十月歿す年七十三みぼれ集、蟲の虫、小夜話の著あり

ごめーてんのー 孝明天皇 第百二十一代の天皇にして名は統仁仁孝帝の第四子母は新待賢門院なり天保十一年立ちて皇太子となり弘化三年正月踐祚御年十六時に天下外夷の來航に依て騷然たり而して朝政幕議と相乖くこと多く天皇爲に宸襟を惱すこと甚し然れども英武の資性能く風せず能く忠良の臣を得て維新革正の大業を開くの基を定む慶應二年十二月崩す壽三十六

ごめんおー 古面翁 狂歌師なり通稱藤本彦八面堂安久樂といひ後古面翁と改む狂歌に巧みにして其名聞ゆ明治十年十一月歿す年八十三

ごももぞのてんのー 後桃園天皇 御名英仁桃園帝の第一子明和五年立太子七年即位安永八年十一月崩御在位十年御年二十二

ごやす 新場小安 俠客なり通稱伊勢屋卯之助新肴場に住して義俠を旨とす慶應元年八月歿す年七十六

ごやなぎ 小柳 常吉 上總の人江戸の力士阿武松の弟子となり嘉永五年大關となる蟲頁多く評判尤も世に高かりし力士なり

ごやなぎ 小柳 平助 力士なり肥後熊本の人膂力非凡技術秀で能くこれに敵するものなし不知火大鳴門等の剛力士を倒し當時の新進陣幕と雌雄を決せむとするにあたり怨を弟子に得て殺さる時は文久元年四月なり年三十三

ごーゆーほーしんのー 公猷法親王 有栖川織仁親王の子俗名正道光格天皇の養子となる一に龜代宮といへり文化九年十月出家十年十月關東へ下向十三年十月上洛して一品となり五月天台座主となる十二月名を舜仁と改め天保十四年九月に至て寂す年五十四

ごーよー 尾崎紅葉 小說家なり名は德太郎十千萬堂と號す東京の人東京府立中學校卒業後三田英學校に入り傍ら石川鴻齋の門に學ぶ明治二十一年法科大學に入り一年修業後文科に轉じ二年にして退き遂に同志をあつめて硯友社を興すこれより文名世に蟲き其作物一として好評を得ざるなし二十三年讀賣新聞に入社し二十九年春陽堂の編輯局に入る三十五年七月二六新報社に轉すこの頃より年來の病覺勢を逞じうして健康すぐれず遂に卅六年十月歿す年三十七著はす所多情多恨、金色夜叉、三人妻、二人女、伽羅枕、心の闇、隣の女、不言不語、夏小袖、八重垣等あり殊に金色夜叉の作當年の文壇に珍重せられ讀者恍として其筆致に魅せらるゝの感あり と稱せらる寔に一代の文豪なり門下

泉鏡花小栗風葉等名著はる

ごよーぜーてんのー 後陽成天皇 御名周仁陽光太子の御子なり天正十四年十一月即位十六年四月豐臣秀吉の聚樂の邸に幸す上皇及び諸皇子並びに百官卿相皆從ひ四民途に縱觀するを許す太平の象あらはれて歡呼頻に起る天皇大に驩ぶ秀吉諸侯をして御前に盟はしめていふ一心協力して以て王事につとめむと元和三年八月崩御齡四十七天皇皇子たりし時海北友松に學びて畫をよくせり

ごーらん 紅蘭 梁川星巖の妻なり詩文をよくし畫法に秀づ近代閨秀の尤たるもの明治十二年三月歿す時に年正に七十六

ごーりつ 淺田剛立 綾部綱齋の子にして其名を安彰とよぶ性穎悟記臆力尤も強く見聞一たび過ぐれば終身之を忘るゝことなし深く天文曆術に志し獨學にして研學苦心を重ぬ明和年間杵築侯に招でられて侍醫となり江戸に赴きしも鄉に歸るや直に辭表を奉りて容れられず脫藩して大阪に出で醫を業とし て活路をもとめながら心を星曆の學に潛む而して諸侯の招聘を謝絶し拮据十年發明するところ極めて多し寛政九年幕府の召に應じて弟子高橋間の二人をすゝめ曆政の改革に當らしむ幕府大に剛立が學說の嶄新なるを嘆賞すと剛立又醫學に篤し其深理を究めて論著するところあらむとせしも果さず寛政十一年病を得て歿す年六十六

ごりふ 便々館湖鯉鮒 初代 狂歌師なり俗稱藤原正武幕府麾下の士なり初め朱樂菅江に學び後唐衣橘州に修む文化十五年四月歿す年七十

ごりょーけんなさい 吳龍軒那蔵 狂歌師なり三世繪馬屋額祐の兄通稱星野政吉後勝藏と改む狂歌を都月巷駒綱に學び玉川亭政好又愛住或は愛成といふ後小槌側の判者となり二世繪馬屋と交深し文久二年七月歿す年三十一

ごーりん 尾形光琳 畫家なり名は方祝又は道崇光琳或は寂明淵聲伊亮青々堂長江軒の數號を有す俗稱雁金屋藤重郎京都の產にして江戸に住す狩野常信に學びて業成り古土佐の畫法を慕ひ本阿彌派の體を喜ぶこゝに於て一新作意を出し光琳風を初む茶道及び漆器の描金に巧みなり享保元年六月歿す年五十六或は曰く六月歿す年六十二と 耕むる所の畫光琳百圖あり

これかた 藤原惟方 懷中納言顯頼の子從三位に叙し檢非違使別當となる藤原信頼の二條帝及び後白河上皇に幽するや惟方信頼と斷ちて經宗と謀り夜に乘じて帝と上皇とを奉じて出づ人稱して中媒といへりこれ中間にありて事を企てたるが爲めなり後龍か恃みて權を專らにし罪を得て阿波に流さる惟方剃髮して寂信と改む仁安元年赦されて還る世に小別當又は粟田別當とよぶ

これかど 筑紫惟門 筑前の人少貳氏と同族なり上野介左馬頭となり下野守と稱す永正五年將軍足利義植を奉じて京に入り大内氏に屬す弘治三年七月大友宗麟と戰て克たず海を渡りて毛利氏に據る

これきみ 藤原是公 武智麻呂の子一に黑麻呂とよぶ從二位右大臣となる性明快時務に當りて滯潛せず寶龜八年

薨す年六十三世に之を牛屋の大臣といふ

とれすえ 今出川伊季（イマデガハコレスエ） 姓は藤原氏右大臣晴季の支孫なり從二位に叙し内大臣右近衛大將に進む寶永六年二月薨す時に年五十伊季管絃を好みて尤も琵琶をよくす

とれずみ 阿蘇惟澄（アソコレズミ） 惟國の三子肥後の人なり神武天皇の七十六年二月健磐龍命初めて阿蘇に封ぜらるこれを同氏の祖となす其後齋惟人初めて阿蘇神社をつくり祭祀の事を司る以來連綿統を承けて惟澄に及べり建武三年二月惟澄の兄惟道惟成足利尊氏と多々良濱に戰て敗死す惟澄乃ち尸を來して矢部城に歸り大に王事に勤む而して一色入道と戰ひ南郷城を拔き仁木義長と爭ひ市下道惠を捕へ矢部城を陷れ田日向城を取り大小百戰の功あげて數ふ可からず

とれずみ 惠良惟澄（エラコレズミ） 肥後の人小次郎と稱す元弘延元年中宇治惟直と俱に菊池氏に從ひ少貳貞經と戰ひ後懷良親王を來して益〻王事につとむ興國十三年阿蘇大宮司となり數年を經て卒す

とれーぜーてんのー 後冷泉天皇（ゴレイゼイテンノウ） 後朱雀の太子なり即位後奥州亂る天皇源頼義其子義家をして之を鎮定せしむ在位廿三年崩御の時壽四十四

とれーかしんのー 惟喬親王（コレタカシンナウ） 文德帝の皇子なり天安元年未冠せざるに帶劍を許され四品に叙す貞觀十四年病を以て僧となり封六百戸を加へらる寛平九年二月薨ず小野宮といふ親王和歌を好み詩を賦す文德帝儲貳となさむとせしも藤氏の出ならざるを以て果さず

とれたけ 阿蘇惟武（アソコレタケ） 惟澄の子阿蘇神社の大宮司なり父の遺志をつぎて南朝に忠勤し天授二年八月遂に戰死す

とれたかしんのー 是忠親王（コレタダシンナウ） 光孝天皇の皇子なり中納言に任じ從三位に叙す寛平三年十二月一品に叙し式部卿又は南宮南院親王と號す延喜十八年出家二十二年十月薨ず

とれたる 吉川惟足（キツカハコレタル） 佐々木秀義の後裔玉耶左衛門と稱す江戸の人初の名は元成後ち惟足と改む更に又從時といへり小字は千代松丸玉耶左衛門と稱し視書堂又湘山隱士と號す幼時孤と爲りて家貧長じて京師に至り卜部侍從に就て國學を修む已にして會津侯松平正之其學を慕ひ聘して大に之を愛す後益〻諸藩の公侯に講說して名頗る振へり惟足素和歌を好み又日本學則の著あり元祿七年十一月七十九にて歿す

とれちか 菊池惟前（キクチコレナカ） 武經の子永正十年三月益城郡堅志田城を襲ひて阿蘇惟豐と戰ひ大に克ち追ふて鞍岡山に到り兵勢大に振ふ惟豐每戰利あらずといへども甲斐親宣等と謀を通じ肥後の諸城主と好を通ずるに至りて悉く勢を挽回し惟前爲に敗れて薩摩に走る

とれちか 藤原伊周（フヂハラノコレチカ） 關白道隆の子小字小千代正二位大納言より進んで内大臣となる道隆疾に罹るの後奏請して權りに朝政を執らしめむとす聽されず道隆薨ず道兼薨ぐ伊周大に之を忌む道兼薨ずるに及び伊周の胸中全く期する處に協ふを喜ぶ東三條太后强て道長を立つ伊周遂に望を失ふ時に伊周太政大臣爲光の長女に通ず華山法皇其妹を挑む伊周其姉に及ばむを憂へて弟隆家に告ぐ隆家輕俠弓を射て法皇を怖れしめ

むと欲し過ちて御衣に中つ物譏騷然たり而して伊周謹慎せず太元法を修して東三條太后を呪詛す事あらはれて伊周隆家共に流さる長德三年赦にあひ長保三年本官に復す寛弘中朝政に參與し正二位に進む儀同三司と稱す七年薨ず年三十七世に帥内大臣といふ

とれつね 姉小路自綱（アネノコウヂコレツナ） 嗣賴の子初名を光賴といふ永祿三年左衛門佐侍從となる天正三十年八月秀吉のために攻められて敗死す時に年四十八法名休安

とれつねしんのー 惟恒親王（コレツネシンナウ） 文德天皇の子貞觀十三年四品に叙し三品にすゝみ延喜四年四月薨ず

とれとき 大江維時（オホエノコレトキ） 音人の孫千古の子なり文章生より秀才にあげられ藏人に補す延喜延長の間文章博士に進み承平中式部少輔大學頭に任ぜらる天曆四年參議九年從三位に叙し天德中中納言に拜す曾て勅を來して朱雀以下四帝の諱字を撰進し又前園の花草の名を錄して來る應和三年薨す年七十六從二位を追贈せらる人稱して江相公といふ著書日觀集あり

とれとき 大江以言（オホエノコレトキ） 仲宣の子本姓弓削氏なり業を藤原篤茂に受け對策して登科す進んで文章博士となり式部權大輔を兼ね從三位下にいたる而して藤原道長の沮むところとなり官位爲に遲滯す以言詩を作り心を表すに雄麗莊重時人大に之を稱せり曾て大江匡房評していふ以言は源順の上に位すと寛弘七年五十六にて卒す

とれとし 櫻山茲俊（サクラヤマコレトシ） 備後の人四郎といふ元弘中楠正成の義兵を擧ぐるに應ず而して笠置陷落後正成死せりと聞き遂に事の成らざるを察して吉備津神祠に詣り妻子を殺し自らも又死す

とれとよ 阿蘇惟豐（アソコレトヨ） 惟憲の子肥後の人なり永正二年十二月兄惟長の菊池氏を嗣ぐに及びて惟豐大宮司となる然るに惟長の子惟前大宮司の食色を併せむとし急に兵を擧げて惟豐を攻む惟豐支ふる能はず遂に食邑を奪はる依て甲斐親宣に賴て回復を企て元職にかへる天正中從二位にのぼり食色三十餘萬石に及ぶといふ

とれとよ 山名是豐（ヤマナコレトヨ） 持豐の第二子なり彈正忠と爲る寛正三年四月備後の兵を率ゐて畠山義就を攻め大に捷つ義就又憤然として之を防ぐ應仁の亂に是豐父に背きて細川勝元に從ひ宗全を援くる兵を伐つ文明元年天王山に城きて義就に抗す

とれねお 宇治惟直（ウヂコレナホ） 肥後の人阿蘇大宮司惟時の子八郎といふ元弘元年楠正成の金剛山に據る時義兵を唱へ後菊池武敏に從ひて足利尊氏と多々良濱に戰ふ利あらず重創を蒙りて自殺せり

とれなり 大上是成（イヌガミコレナリ） 仁明帝の時の舞師なり新曲を作りて樂制を一新し又唐樂舞を改作す

とれなり 藤原惟成（フヂハラノコレナリ） 雅材の子藏人左中辨となる華山帝の朝中納言義懷と共に時弊を革め良治を圖る頗る令名あり永延元年卒す年三十七

とれのぶ 大内惟信（オホウチコレノブ） 信濃の人惟義の子左衛門尉檢非違使に任ず後鳥羽上皇の藤原光季を伐つや惟信官兵を率ゐて之を攻む北條泰時來る惟信糟谷久季等と大井戸を守り利あらず敗走して比叡山にかくれ名を成就と改む寛喜二年

捕はれて流さるといふ

とれのり 坂上是則（サカノヘノコレノリ） 大内記に任じ從五位下に叙す延長二年加賀介に轉ぜり和歌に巧みにして其詠古今集に見ゆ

とれひら 平維衡（タヒラノコレヒラ） 貞盛の孫又は第四子と傳へらる源頼信藤原保昌平致頼と共に四天王の稱あり一條帝の時下野守となり致頼と私闘して淡路に流さる

とれひら 藤原伊衡（フヂハラノコレヒラ） 敏行の子正四位下刑部卿に叙任す承平八年十二月卒す年六十一和歌に巧みなり

とれまさ 藤原伊尹（フヂハラノコレマサ） 右大臣師輔の子天祿二年攝政太政大臣となり正二位に叙す十一月薨ず年四十九和歌に巧みにして秀歌多し嘗て後撰集を撰ぶ世に一條攝政といふ

とれみち 藤原伊通（フヂハラノコレミチ） 右大臣俊家の子大治中源師頼等權中納言となる伊通興からず大に怨恨して官を辭し朝參せず後子爲通景德帝に用ゐらるゝに及び伊通漸く出でゝ權中納言となる永治元年正二位權大納言となり保元二年左大臣となる永暦元年太政大臣にのぼり綱紀振肅して治を圖る永萬元年薨ず年七十三大宮大相國又九條相國といふ無名鈔大槐秘鈔等の著あり

とれみつ 阿蘇惟光（アソコレミツ） 惟盟の長子初め母と共に佐々成政に據り後加藤清正に據る征韓の役起るに及びて人のために讒せられ遂に殺さる時に年十三慶長六年清正之を悔み自ら食邑を割き惟光の弟惟善を扶け阿蘇の祭祀を復せしむと

とれもち 平維茂（タヒラノコレモチ） 鎮守府將軍繁盛の孫上總介兼忠の子從祖父貞盛に養はる陸奥にありて豪族藤原師種と爭ひ遂に之を殺し其名關東に聞ゆ後出羽介となり鎮守府將軍に任ぜらる人稱して余五將軍とよぶ卒する時年正に八十

とれもり 平維盛（タヒラノコレモリ） 内大臣重盛の子仁安中美濃權守となり尋で右近衛權少將に任ぜらる承安中從四位下中宮權亮となる源頼朝の兵を起すや兵五千に將として追討使となり駿河國府に至る麾下の士齋藤實盛東國武士の强健を説いて曰く我二三十騎にして漸く彼の一騎に當るを得む乎而も躬を善くする者大節十四五束を下らず而して今彼二十萬能く地理を知るを以て前より來りて戰を挑み後より襲ひて途を斷たば我兵支ふる能はざるべし若かず武相の兵を招誘して後戰はむにはと聞く者恐懼して皆怯心を抱く既にして實盛京に去る維盛平忠清をして先鋒となし進發して富士川に陣す頼朝黄瀬川賀島に前み武田信義をして夜維盛が陣後に出でしむ偶水禽驚躁して其響人馬の突出するに似たり維盛の將士狼狽して兵器を棄てゝ奔る維盛勢多にかへり使をして具に狀を告げしむ清盛怒て其入京を許さず維盛後陰かに京に入り藤原忠綱の家に匿る清盛之を聞き維盛を逐ひ忠清を殺さむとして果さず發和元年重衡と源行家を洲股川に伐ち大に之を敗る詳永二年十月兵十萬を率ゐて北陸に赴き平盛俊をして義仲を越後の國府に伐たしむ盛俊利あらず義仲來て越中礪波山に陣す維盛猿島場に陣し嶺を恃みて懈る義仲軍を潛めて急に擊ち維盛の兵潰走多く南壑に陷りて死すこれより維盛且つ戰ひ且つ却き漸くにして京に還る既にして平氏京を失ふに及び宗盛等一族骨を來じて西海に幸す維盛深く妻子を思ひ

戀々として樂まず遂に之を見むと欲し舟行して紀伊に到る道梗塞して達する能はず乃ち高野山に登り粉川寺の僧源空に依て戒を受く幾許ならず髮を削て僧となり熊野に赴き那知海に浮び海に入ると佯りて牟漏郡内に匿る時に年二十五維盛體貌秀麗人稱して櫻梅少將といふ

とれやすしんのう 惟康親王（コレヤスシンヤウ） 宗尊親王の子文永三年七月北條時宗之を來じて父の職を襲がしむ從四位下征夷大將軍たり五年時宗執權となる七年從三位左近衛中將に進み尾張守を兼ぬ建治元年九月元使杜世忠等を斬る十一月北條實政を九州探題となす弘安四年元入寇す颶風起りて戰艦悉く破壞沈没せり七年時宗罷め貞時代る十年六月中納言兼右近衛大將に拜せられ二品親王となる正應二年貞時のために廢せられて京に還る時人いふ將軍京師に流さると同年十二月薙髮嘉暦元年十二月薨ず年六十三

とれよし 大内惟義（オホウチコレヨシ） 大内冠者と稱す平賀義信の子伊賀の守護たり謚永三年平家纘と近江に戰ひて之を平げ功を陳じて頼朝に疎まる後義經に從ひて平氏を西海に擊ち相摸守に任ぜられ駿河武藏の守を經て修理權大夫に除す正四位下たり

とれよし 菅原是善（スガハラノコレヨシ） 清公の子承和の初文章得業生となり從六位下に叙す明年大學少允となり大内記に轉じ從五位下文章博士兼東宮學士等にうつる仁壽三年大學頭となり齊衡中從四位下左京大夫となる貞觀五年彈正大弼となり刑部卿に拜し正四位參議となり元慶三年を以て從三位にすゝむ四年薨ず年六十九是善嘗て文章生の未だ出身せざる者及第の後は勘籍を經すして考例に預からむことを奏請し許さる又文德實錄の撰に與かり東宮切韻、銀傍輪律、集韻律詩、會分類聚等を著はす、

とれよし 平賀惟義（ヒラガコレヨシ） 義信の子大内冠者といふ謚永三年平氏の黨類を近江に伐ち之を鎌倉に請ふ惟義賞を鎌倉に請ふ頼朝其自負を惡みて與へず後源義經に從ひて平氏を西海に擊ち功あり依て相摸守に任ぜらる正四位下修理大夫に至る

ところー 安積五郎（アヅミゴラウ） 本姓は飯田名は武貞號を東海とよぶ江戸の人幼にして痘瘡を病み右眼を失ふ父忠藏初めは玉郎をして商賈に從はしめしも後わが修むるところの易學を授け且つ擊劍を學ばしむ玉郎太平記綱目を讀んで楠公の人となりを景慕してこれより大に天下を憂ひて慷慨淋漓人をして感動せしむるの氣風あり五郎嘗て東條一台に學び劍を千葉某に學ぶ後江畑玉郎と下谷徒士町の組屋敷にありて漢學を教授し塾を設けて人才をもとむたまたま天下騷然として尊王攘夷の說起るに會し玉郎挺然國事に盡くさむと欲し爲めに幕吏の蹤跡するところとなる文久三年八月遂に中山忠光の大和の義舉に投じ善く戰ひて創を蒙り捕へらる尋で幕吏の手に斬らる時は元治元年二月なり

ところー 那珂梧樓（ナカゴラウ） 儒者なり陸中の人名は通高初名江幡五郎後梧樓と號す博覽多識同輩の間に推さる年少にして安積艮齋に從ひ後森田節齋に學ぶ京にある日家貧にして炊烟をあぐること能

はず乃ち按摩を業として糊口し而も餘暇を以て書を讀むたまたま兄道誠無實の罪に處せられて獄に入る梧樓痛憤束に走り之を報ぜむとすること多年兄釋さるゝに及びて滝む幾許ならずして東京に來りて子弟を教へ又藩主の爲に藩學を司る明治八年奥羽諸藩連衡の謀に參與し利あらずして捕へらる明治十二年才學を以て赦されて大藏省に仕へ文部省に轉じ榊原孚洲等と共に古事類苑を修む五月歿す年五十二

ところざえもん 油屋五郎左衛門 大阪の人性殘忍無頼人を役すること獄卒よりも甚し世人之を山椒太夫とよぶ貞享中沒す淨瑠璃にある三庄太夫は此人より出づと

ところーざえもん 千々輪五郎左衛門 天草の亂の賊將なり元加藤侯の臣鎗馬の術に長ず寛永八年五月蔦塚忠左衛門と謀て叛を企て島原城に據る城陷るの日鍋島直澄と戰ふ五郎左直澄の驍勇を賞し敬らに讓て首を授け一千の救護を請ふ直澄之を肥後八代郡にもとめ仕へしめて祿千石を與ふといふ

ところべー 露之五郎兵衛 江戸の落語家にして京都の產なり剃髮して露休といひ辻講釋を業とす元祿十六年五月歿す年六十一

とーわ 關孝和 算數家なり通稱新助孝嚴又自由亭と號す上野の人內山永明の子關五郎左衛門の養子となる幕府に仕へて勘定吟味役となり又納戸組頭となる算數の術に精通して算聖とよばる乃ち關流の一派を立て點竄法を發明せり寶永五年十月歿す年六十六

とわし 井上殺 肥後の人幼名多久馬梧陰と號す明治三年東京に來りて大學少舍長となり後司法省に出仕す又大久保利通に從て清國に赴き歸て後法制局長となる廿五年文部大臣にあげられ正三位勳一等に叙せらる二十七年八月病を以て辭職す二十八年一月華族に列して子爵を授けらる同年三月逝去す年五十二殺官にあるや鋭意事を處理し吏の名極めて高し又文を善くし書を巧みにす

とんおーまる 澁谷金王丸 源義朝の侍童驍勇にして多力なり初め父重之子無きを憂ひて八幡に祈り以て得たるものなりといふ義朝の長田忠致に賴るや金王從ふ忠致の子景致義朝を浴室に誘ひ力士三人をして之を刺さしむ然れども金王侍するを以て力士發する能はずたまたま義朝浴衣を召す應じて來る者なし金王自ら出で之を取る力士間に乘じて起り遂に義朝を殺す金王かへり來て大に怒り三人を斬り奮戰して奔り去る終に其往く所を知らずといふ

とんさい 安積長齋 父は奥州安積郡郡山八幡社の祠官安藤親重なり長齋通稱を祐助とよぶ性謙讓快活容貌出類にして眇目風采頗あがらず故に十六歳の時近村の里正今泉氏の婿となりしも其妻に嫌はる長齋こゝに於て奮然故郷を去り苦行して江戸に到る初めて佐藤一齋の學僕となりて勉勵刻苦一日も倦める色なし廿一歳の時林門に入り二十四歳にして神田駿河臺に學徒をあつめ教授す見山樓と號す四十一歳文略三卷を著はして公行せしに文辭艶麗富膽人驚嘆せざるなしこゝに至りて海內第一の文章家を以て目せらる四十六丹羽侯に仕へ五十三二本松に赴き幾許ならず

して江戸にかへる六十最早憂の教授に任ぜられ萬延元年十一月七十六を以て官舍に歿す遺骸は谷中法華僧日明なる者拯はるゝの緣により本所番場の日宗妙源寺に葬る著書長齋文略、同詩略、同明話、史論、遊豆記錄、東省續錄、鰲朝名賢錄、烈婦傳、加藤清正傳、洋外記略、南柯餘編等數種あり

とんざえもん 小唄權左衛門 貞享年間の人三絃をよくし小唄に妙を得たり

とんざん 後藤長山 名醫なり名は逢字は有成左一郎といふ長山又は蓉庵と號す江戸の人初め林大學頭に學び傍ら醫學を修む後憤然志を定めて醫となり謁を名古屋玄醫に執る玄醫長山の贊薄きを以て遇すること甚疎なり長山怒て去り獨學研究途に古醫方の開祖と推さる長山當時の醫の薙髮して僧官を得るを非とし自ら髮を蓄へ左一郎の俗稱を唱ふ享保十二年九月歿す年七十五熊膽蓽撥灸說の著あり

とんしち 寶生權七 寶生流脇師の祖にして二世春藤六右衛門の次男なり

とんすい 池西言水 俳人紫藤軒又は風下堂といふ高島玄札又は北村季吟に學ぶ木枯の果はありけり海の音の句世に類ぶる享保四年九月歿す年七十二

とんのかた 古牟之方 德川家光に寵せられて公子を生む竹本政長の女なり享保八年二月卒す

とんのすけ 河原崎權之助 初代江戸の俳優元京都の人慶安中江戸に來り木挽町森田勘彌の狂言座を預かり座元となる

とんのすけ 河原崎權之助 七代江戸の俳優なり嘉永年間森田座を預かり興行す慶應年間賊のために傷けられて死す九代目團十郎の養父なり

とんべー 唐犬權兵衛 俠客なり幡隨院長兵衛の乾兒唐犬を撫殺せるを以て名を得慶安三年四月長兵衛水野十郎左衛門のために殺さる權兵衛犬に怒り放駒四郎兵衛と謀て仇を報ぜむとす十郎左衛門ために怖を抱く官十郎左衛門を捕へて將するに及び權兵衛も尋で捕へられ流刑に處せらる後赦に遇ひて江戸に還る權兵衛常に一異風を髮飾に施す時人稱して唐犬額といふ

とんよー 菅水昆陽 德川幕府の儒官なり名は敦書字は原甫通稱文藏昆陽は其號なり初め江戸の商人たりしが京に赴きて伊藤東涯に學び實學を貴ぶ後幕府に仕へ大岡忠相の知遇を蒙りて官庫の書を觀る延享年中紅葉山火番となり評定所の儒者に轉じ終に書物奉行となるたまたま遠島流罪の者の餓死するを憂ひ薩薯の種子を薩摩にもとめ之を官の藥園に蒔く續いて薩薯考一卷を著し其培養法を演ぶ爲に天下の庶民饑饉といへども餓ゆることなし故に昆陽の歿するや墓に題して甘薯先生といふ昆陽和蘭學に通じ多く說を彼に採る實に洋學中興の大家なり著す所長崎聞書、和蘭文字略考、和蘭語譯、同後集、昆陽漫錄、同續錄、經濟纂要前集、同後集、同續集、官職略記、國家金銀錢譜、對客夜話、毗原鈔註、和蘭貨幣考、草廬雜談、續草廬雜談、秋夜談、明官略記、郡名考等頗る多し

さいいんほーしんのー 最胤法親王 邦輔親王の子にして正親町帝の猶子と

なる天正三年二月親王宣下九年正月灌頂慶長十七年十二月天台座主となり寛永十六年正月薨ず法名圓明院

さいうんほーしんのー 最雲法親王 堀川帝の第二子梶井宮第十三世の門主なり法親王となり天台座主となる應保二年薨ず年五十九

さいかく 井原西鶴 小説家なり松蔭軒、二萬堂又は萬翁と號す西鶴小説を書くに行文洒落字句皆人世の情致を穿つ又俳をよくし格調一家を成す元祿六年八月歿す著す所好色一代男、同二代男、男色大鑑、西鶴織留、西鶴置土産、世間胸算用等あり

さいがん 桂山彩巖 江戸の儒者名は義樹字は君華彩巖と號し天水漁者とよぶ通稱三郎左衛門後三郎兵衛と改む東都の人なり業を林櫁宇にうけ詩文に達す德川幕府召して生員にあげ終に書物奉行とす寛延二年三月歿す年七十二

さいきく 條野採菊 新聞記者にして小説家なり通稱條平採菊散人或は贊々亭、山々亭、有人、羣月庵、臘月庵、東籬園と號す初め商業に從事せしが文才に長ずるを以て志を變じて身を文事に委ぬ明治維新後福地源一郎と共に日々新聞を興し後十九年大和新聞を創設して社長となり社務を見るの傍ら小説を作る三十五年一月歿す年七十二採菊嘗て推されて東京府會議員となり又神田區會議長となる其德望の高かりしも證するに足る

さいぎょー 西行 姓は佐藤名は義清藤原秀郷の後裔にして左衛門尉康清の子なり勇敢にして射術に長ず鳥羽上皇召して北面の士となし左兵衛尉に任ず和歌に巧にして上皇の寵用する所となり將に檢非違使に補せられむとす義清其職の卑人を糾彈するを忌み固辭して奉ぜず且つ年來出家の志深きを以て事に觸れ物に當り脈離の情抑へ難し時に族人憲清と鳥羽殿に朝して還り別るゝに臨んで明日を期す適〻憲清其夜に於て歿す義清愕然として塵界の迷夢より醒め初志貫行の曉を得たりとなし即夜妻子を捨て髮を削りて嵯峨に往く年正に廿三西行と稱し圓位と號す是より諸國を科擲して和歌を詠じて悠々自適す高雄神護寺の僧文覺上人常に西行を惡みて曰ふ彼は沙門の身にして法を修めず徒に吟詠に耽る實に釋門の賊子なり吾彼と逢はゞ必ず其頭を擊て懲らさずば已まじと會〻西行高雄に抵る文覺の徒相見て快談數刻懇にして別る文覺の徒弟怪しみて曰く師平生の言に背くは如何と文覺辨じて曰ふ彼は吾が打擊を受くべき者に非ず却て吾を打擊すべき者なりと西行鎌倉に赴くに當て途に賴朝に逢ふ賴朝人をして其名を問はしめ召見して和歌及び射御を問ふ西行固辭して答へず賴朝切に請ふ西行乃ち進書して弓馬の道を語る賴朝大に好び之を留めむと欲す西行聽かず賴朝贈るに銀の小猫を以てす西行門を出づるに及び兒童の嬉戲する者に與へて去る建久元年二月歿す年七十三其和歌を集めて山家集といふ又御裳濯川歌合並に撰集鈔の著あり

さいじ 鶴澤才治 音曲家なり糸遊と號す玉代竹本政太夫の子初名清治郎鶴澤寛治の門人なり安政五年八月歿す年四十三

さいしにょおー 齋子女王 小一條

院の第三女賀茂の齋院となり春日齋院と號す又瑠璃女御といふ

さいしん 濟信 大僧正にして仁和寺の門主なり後東大寺の別當を兼ね仁和寺大僧正又眞言院大僧正と號す長元三年六月薨ず

さいしんほーしんのー 濟深法親王 靈元帝の第一の皇子一宮と稱す俗名寛清勅修寺に入る天和二年二品東大寺別當に補す元祿十四年十二月薨ず年三十一即身院宮といふ

さいしんほーしんのー 濟信法親王 俗名修道有栖川職仁親王の子仙洞の養子となる文化五年六月親王宣下同年八月入室得度同七年十二月一品に叙せらる

さいぞー 可兒才藏 美濃の人名は吉良前田利家に仕へ天正十五年を以て初陣す後羽柴秀吉に仕へて軍功あり然れども又故ありて去て福島正則に仕へ關が原の役に從ふ敵首十七を背標の笹葉に附く家康之を壯とし稱して笹の才藏といふ髮を削りて才入又は竹葉軒といひ慶長十八年六月歿す年六十

さいにんほーしんのー 最仁法親王 土御門帝第七の皇子なり中山宮と稱す出家して梶井宮に入り第二十世の門主となる弘長三年八月天台座主となる永仁三年二月薨ず

さいのかみ 狭井神 大己貴神の荒魂にして大和城上郡に祀らる

さいば 樂亭西馬 江戸の小説家なり初め福亭祿馬、爽福山人又は爽福亭宮守と號す通稱西宮新六後久兵衛繪草紙を鬻ぎて江戸本材木町に住し小説を三馬の門に學ぶ安政五年八月歿す年六十

さいまろ 椎本才麿 俳人なり南都の人名は則武字は少文俊笠軒、甘泉庵、慈德翁と號す又西丸、八千丸等の號あり非原西鶴に學びて俳をよくす元文三年正月歿す年八十三

さいよー 堀越柴陽 俳優なり初名澤村二三次後堀越を姓とし柴陽を號とす延享中所作事を以て其名高し安永七年歿す年五十八

さえぎのあずまびとのつま 佐伯東人妻 和歌に巧みにして其作多く萬葉集に出づ

さえもんのかみのつぼね 左衛門督局 後醍醐帝の宮人遊義門院に侍す帝之に幸して皇女を生む局和歌に巧にして文藻あり萬里小路藤房之を愛し別に臨みて歌一首を贈る局見て大に泣く時に賊兵宮闕に入り局を捕へて姦せむとす局猶豫を乞ひ歌一首を詠じて藤房に贈り走て身を大井川に投じて死す

さおー 赤松沙鷗 名は舊邦字は新甫沙鷗は其號なり播磨の人元祿中江戸に來り儒を以て松山侯に事ふ明和四年四月壬大庚を要ひ悲哀の情迫りて疾を發し其年十一月一百歳にて歿す麻布善福寺に葬る

さおひめ 佐穂姫 垂仁帝の后一名佐波遲媛といふ彦坐王の女なり四年后の兄狹穂彦叛を謀り后を誘ひて帝を弑せしめむとす后驚き懼るゝ雖且く承けて其命に服す五年帝來目高宮に在り后の膝に枕して晝眠る后兄の言を思ひ曾て興ふる所の七首を出し淚潸然として下る帝寤めて后に告げて曰く朕夢に錦

色の小蛇頸を繞り大雨狹穗より起り朕が面を撲つと后悚恐して兄の反狀を告げて罪を謝す帝后の罪を宥し狹穗彦を誅せむとす狹穗彦俄に稻を積みて城となし守て降らず后兄を亡ふに忍びず皇子譽津別を抱いて其稻城に奔り入る帝城中に諭して皇子を出さしむ從ほず乃ち火を縱ちて攻む后遂に皇子を出し兄と共に焚死す

さかいがわ　境川　浪右衛門　伊勢の人なり大坂の力士三保ヶ關の弟子となる後去て江戸に來り先代境川に就て技を研き伊勢の戸、朝の戸、增位山、六ヶ浜、鬼面山の諸名をよぶ遂に師家を相續して浪川とよび文久元年西方大關となる

さかいがわ　境川　浪右衛門　下總の人初名平四郎初め江戸新川の酒商小西方の丁稚なり膂力衆に勝るを以て十五歲力士となり四方山とよびて土俵に上る後幕内に入りて增位山と改め姫路侯及び尾州侯の抱へとなる明治三年大關にのぼり十年横綱免許を得二十二年四十七歲を以て歿す

さかいくろひとのおーじ　境黑彦皇子　允恭天皇の子母は忍坂大中姫皇后なり大泊瀨皇子に逼られて遂に大臣葛城圓が家に焚死す

さかいまろ　巨勢界麻呂　從五位上邑治の子黑麻呂の孫なり聖武孝謙の二朝に事へ從三位參議となる天平寶字五年薨ず

さかき　羽田野榮木　國學者なり三河の人八幡宮の祠官なり初め通稱常陸後名を敬雄と更む平田篤胤の門に學びて藏書家を以て聞ゆ榮木遂に庭中に文庫を作りて花田文庫と名づく明治元年十二月皇學所御用係となり六年十月權大講義となる十四年十二月權少教正を授けられ十五年六月八十二歲を以て歿す

さがてんのー　嵯峨天皇　第五十二代の天皇諱は神野桓武天皇の第二子平城帝の同母弟なり書法に精しくして日本三筆の名を博す在位十四年承和九年崩ず齡五十八

さかのりえのいらつめ　大伴坂上郎女　佐保大納言安麿の二女なり初め安倍虫麻呂に嫁し後大伴宿奈麻呂に配す別れて大伴駿河麻呂に通じ神龜五年に至て兄旅人に從て筑紫に赴く天平十一年歿す和歌に巧にして其詠萬葉集に多し

さかのりえのおーいらつめ　坂上大娘　大伴宿奈麻呂の長女にして母は大伴坂上郎女なり大伴家持と約して之と婚す和歌に巧なり其詠萬葉集に見ゆ

さがみ　相摸　歌人なり初名を乙侍從といふ父を詳にせず或は源頼光なりといふ母は慶滋保章の女なり入道一品宮祐子内親王の侍女となりて相摸守大江公資に嫁ぐ後藤原定賴と通じ公資と別る和歌に巧にして當世女流作家の秀才たり

さがみだゆー　歌澤相摸太夫　端唄の名人本名は虎右衛門疊職なり大和大掾及土佐太夫と謀り小唄節を定む明治の初年歿す

さきと　藤原禧子　後醍醐帝の中宮なり太政大臣實兼の女元應元年八月中宮となる元弘二年禮成門院の號を上る

嘉暦二年北條高時を咒詛して遂げず後尼となりまた幾許もなくして還俗して中宮に復し建武三年十月崩ず後京極院といふ

さきと　藤原嬉子　關白太政大臣前久の女なり天正十四年十二月關白豐臣秀吉の養ふ所となり後陽成天皇の女御となる寵あり後水尾天皇を生む寛永七年七月年五十六を以て薨ず中和門院と稱す

さきとよ　廣幡前豐　權大納言長忠の子幼名輔忠近衛内前の猶子となる永安中實雲と號し樂園樹院と號す從一位に叙し内大臣に任ず天明三年十二月薨ず年四十二

さきひさ　近衛前久　從一位太政大臣植家の子本名晴嗣龍山と號す天文二十三年三月關白氏長者となり從一位左大臣に陞る永祿三年九月上杉輝虎の請に依て越後に赴く五年名を前久と改め京に還る十二年幕府の命に戾りて出奔し天正三年六月京に歸る九月織田信長の意に忤ひて薩摩に奔り五年二月京に歸る六年正月三宮に准ぜられ八年七月安土に往く十年二月太政大臣に拜せられ信長に甲斐に從ふ五月太政大臣を辭す六月信長明智光秀に弑せらる前久狼狽薙髮して龍山とよぶ十一年三月羽柴秀吉と隙を生じ德川家康に賴る慶長十七年五月薨ず年七十七東求院と謚す

さきみつ　柳原前光　賦性剛健夙に勤王を以て起つ戊辰の役に東海道總督となり江戸城請取の事に任ず維新の後公使に任ぜられ露清二國に赴き次で元老院議長樞密顧問官に歷任す又皇室典範の編制に從ふ明治二十七年九月薨ず時に年四十四

さきょー　仙石左京　仙石政美の臣にして千五百石を領す名族たるの故を以て主家を横領せむと欲し其子小太郎を嗣に薦むるの謀計を企つ而して藩主を淫蕩に誘ひ之を毒殺せむとす忠臣神谷轉諫して之を知り訴へて却て斥けらる藩主歿して嗣なし親族相議して弟道之助を襲ほむとす左京乃ち小太郎を薦む衆其權威を恐れて敢て抗する者なし こゝに於て左京先君の父久道に媚び臣を斥く其中に河野瀨兵衛といふ者あり江戸に來りて轉を仙石彌三郎の邸に訪ひ左京の隱謀を語り共に事を圖る瀨兵衛又其奸策數條を記し仙石長之助及び能登守に告ぐ兩人之を久道に紀す久道左京を疑はず左京怒て瀨兵衛を殺し轉を捕へむとす轉一月寺の虛無僧となりて幾に免る左京已むを得ずして町奉行筒井伊賀守に賂して轉を捕へしめ老中松平周防守に依て事を圖る一月寺の住職寺社奉行に訴へて轉を保護するに及び奉行脇阪中務大輔左京等を糾彈し遂に天保六年十一月を以てこれが梟首に處し關連者を罰す各差あり

さきょー　藤井左京　惡僧天一坊に黨し赤川大膳常樂院天忠等と共に策を運らして成らず享保十一年十一月遂に死刑に處せらる

さくげん　策彦　天文の頃の人京都嵯峨等持院天龍寺の僧なり後妙智院の住僧となる丹後の產井上氏一に周良といふ碩學にして詩文を能くす天文十六年足利義晴の命を承けて明に使し翌年歸る珍書を齎し來る入明の記あり策彦和尚初度集、同再度集是なり

さくでん　策傳　茶人なり京都誓願

寺中竹林院に住し安樂院を造る寛永十九年正月歿す年八十九

さくどー 堀索道（ホリサクダウ） 寛政の頃の人狩野派の畫家なり名は守保畫を鶴澤探山に學び業成て法眼に叙せらる享和二年六月歿す

さくべー 安田作兵衛（ヤスダサクベエ） 明智光秀の臣にして三羽烏の一人なり光秀に從ひて本能寺を襲ひ森蘭丸を殺し信長を刺す後姓名を天野源右衛門と改め文祿年中朝鮮の役に臨む一説にいふ明智氏亡びて舊同門寺澤志摩守に仕へ子孫安田作兵衛と稱すと

さくへーもんいん 朔平門院（サクヘイモンヰン） 伏見天皇第一の皇女後伏見天皇の同母妹なり名は瑞子内親王の宣下あり延慶三年年二十四を以て薨ず

さくら 丸山作樂（マルヤマサクラ） 肥前島原の藩士なり奇行を以て夙に名を天下に知らる嘗て今の世を大義名分明ならざるの暗世となし常に白晝提燈を持して行く明治三年神祇官權判事公議所副議長となり外務大丞に移る五年愛宕卿を來して神道惟一の説を戮さ以て明治政府の政見に背くこゝに於て愛宕卿斬られ作樂終身禁錮となる十三年一月特赦にあひて出獄し十六七年のころ帝政黨に入る十九年宮内省圖書頭に任ぜられ翌年歐洲に航す二十三年元老院議官となり貴族院議員に推さる三十二年八月正四位勳四等に叙せられ是月年六十を以て歿す

さくらいたんばのしょーじょー 櫻井丹波小掾（サクラヰタンバノセウジョウ） 歌謠家なり薩摩淨雲の門下初め和泉太夫後受領して今の名に改む膂力あり常に二尺許の鐵棍を取て舞柏子に代ふと故に其謠ふ所亦荒事の殺伐なるを好めり

さくらこ 櫻兒（サクラコ） 才女なり時に二壯士之を戀慕し櫻兒を挑みて相爭ふ櫻兒獻欷して曰く古より一女の二夫に見ゆるを聞かず如かず身を殺して其害を息めむにはと乃ち林中に入りて縊れて死す和歌をよくし其詠萬葉集に見ゆ

さくらまちてんのー 櫻町天皇（サクラマチテンノウ） 第百十五代の天皇諱は照仁中御門帝の御子なり若宮といふ享保十三年立太子二十年三月受禪藤原舍子を立て皇后となす寛延三年四月崩御在位十六年謚三十一

さけのうえのうまね 酒上熟雄（サケノウヘノウマヲ） 狂歌師なり通稱島田左内市が谷左内阪に住して莊官たり狂歌を以て名あり性甚酒を好み酒上熟雄と號す晩年禁酒して瓢の空酒とよぶ天保四年五月歿す年六十一

さけのきみ 百濟酒君（クダラノサケノキミ） 仁德の朝紀角百濟に使し酒君の禮無きを讓む百濟王之を囚へて葛城襲津彦に附す酒君我國に來るや逃れて石川錦織廉呂の家に寄食す天皇其罪を赦し鰥侮のことを命ず酒君命を奉じて之を馴養し以て帝に獻ず

さけのきみ 秦酒公（ハタノサケノキミ） 秦始皇の後晉洞王の子なり仲哀天皇の八年來朝す後雄略天皇に仕へて籠あり部屬一百八十種を支配し蠶桑を行ひて庸調絹絲を宮中に捧ぐこゝに於て禹豆麻佐の姓を賜はる遂に大藏の長官となり貢物のことを司る

さこん 左近（サコン） 狩野家の畫家なり名は種次宗仙と號す嘗て畫法を狩野光信に學ぶ

さこん 島田左近（シマダサコン） 名は龍章美濃の人烏丸家及び九條家に仕ふ井伊直弼の臣長野主膳と協力して公武一致の説を唱へ和宮降嫁の議に預て功あり然れども浪士のために憑まれ文久二年七月暗殺せらる

さこんたろー 恩池左近太郎（オンチサコンタラウ） 慶正成の臣赤阪千劍破の戰に死も勇名あり正成の沒後正行を助けて兵を舉ぐ其終を知らず楠公四天王の一人なり

さざん 菅茶山（クワンサヤン） 儒者なり名は晉卿字は禮卿太冲と稱す備後の人年少京に入り那波魯堂に學び佐々木良齋中山子幹中井竹山等と交る後鄉里に歸りて教授し家塾を開きて黃葉夕陽村舍といふ藩侯曾て江都に赴き林述齋と詩を語り初めて茶山の名を聞き晉采邑の人たるを知て大に喜び還て之を召す茶山辭す乃ち五口俸を與へて優遇せり享和元年藩の儒員に準じしば〳〵進講す晩年塾の隆盛なるを以て藩に乞ひて鄉校となし年金を得て塾用を賄ふ後東遊し柴野尾藤古賀の三儒と交り盛名一世に振へり又頼春水と親交し音信を絶つことなかりしといふ文政六年大目付となり三十口俸を得八月病歿す年八十著す所黃葉夕陽村舍詩篇、文稿、室町志、冬日影常遊記、遊藝日記、大和紀行日記、福山風俗錄のすさび等あり

さだあつしんのー 貞敦親王（サダアツシンナウ） 邦高親王の子文龜二年十一月加冠後柏原帝の猶子となる永正元年二月親王宣下となり十八年四月二品に叙せられ中務卿に拜せらる天文十三年薙髮して澄空といひ元龜元年七月薨ず年八十五妙莊嚴院と號す

さだいえ 藤原定家（フジハラノサダイヘ） 歌人なり後成の子文治中源雅行と殿上に忿爭し爲に鞭を削らる後成髮へて歌を後白河法皇に上て哀願す依て再び舊位に復し正五位下となる建仁中左近衛權中將となり後島羽上皇の親昵を蒙る建暦三年從三位に叙せられ建保中參議となり治部卿となる夢で正三位民部卿にのぼり安貞二年に至て正二位に進む貞永元年權中納言となり帶劍昇殿を聽さる天福元年髮を削て明靜と改め仁治元年薨ず年八十世に京極中納言といふ其和歌に非凡なるを前後に比なし人以て天才となす嘗て勅を奉じて新古今集並に新勅撰集を撰す又百人一首を作り拾遺愚草、詠歌大概、每月鈔、明月記等を綴す

さだお 瀨名貞雄（セナサダオ） 有職學者なり通稱源五郎狐阡翁と號す江戸の人德川幕府に仕ふ武家の故實を專攻して博識多才の名最も高し寛政中小普請より右筆組頭となり同八年十月歿す年八十一室町三藏記、關東補任記、武家職役分類、手留記、射術問答、十二月故實、瀨名氏十種記、狐阡翁雜記、關東行實錄、武家名目鈔の著あり

さだかげ 長尾定景（ナガヲサダカゲ） 新六と稱す大庭の一族なり石橋山の合戰侯野五郎の急を救ひて佐奈田義眞を殺す後頼朝に屬して舊罪を謝はれ義眞の父惡四郎の家に幽せらる惡四郎性仁慈之を憐み頼朝に依て赦を請うて許さる定景の兄爲景僧となりて義眞の冥福を祈るといふ

さだかた 藤原定方（フジハラノサダカタ） 高藤の子延長中從二位右大臣となる承平二年薨ず三條右大臣と稱す

さだかつ 池定勝（イケサダカツ） 土州の藩士初名藏太後姓名を變じて細川左馬之介又に細江德太郎といふ年少にして義氣慨慨

の志を抱き國勢の衰頽を憂ふ文久三年藩の命を奉じて江戸に往き還て大阪に赴き又長州に奔る長藩攘夷の遊擊隊參謀となる定勝佛艦を馬關に迎へ討つ功あり同年八月大和に兵を擧げ中山忠光を戴く定勝先鋒となりて力戰奮鬪衆寡敵し歸きに及んで忠光を脫せしめ國を潰して大阪に逃れ再擧を謀らむと欲す而して長州に到りたまへ海に航す船肥前五島を過ぐる時暴風起りて覆沒せむとす定勝免るゝ能はざるを知り遂に自刄して死す年二十六時は慶應二年の五月なり

さだかつ 上杉定勝 米澤の城主なり景勝の子幼字喜平次元和九年二月從四位下彈正大弼に叙任せられ寛永三年左近衛權少將となる正保二年九月卒す年四十三

さだかつ 奥平貞勝 貞昌の子監物と稱す三河の人世々德川氏の臣たり然れども貞勝中途にして今川氏に屈す後子貞能と共に家康に降り大高城津丸根に戰ひて功あり幾許ならずして又武田氏に從ひ再び降りて家康に從ひ長篠に戰ふ文祿四年十月卒す年八十四

さだかつ 松平定勝 德川家康の異父弟なり小字長福後三郎四郎といふ慶長五年定勝遠州掛川を守る六年同所に封ぜられて三萬石を食む翌年四月伏見城代となり八萬石を領す元和元年六月從四位下隱岐守と稱す十二年四月伏見城代となり八萬石を領す元和元年六月從四位下に叙せられ桑名城十一萬石に及ぶ九年八月左近衛權少將に至り寛永元年三月卒す年六十五

さだきよ 石谷貞清 清定の子德川氏に仕ふ貞清通稱は十藏慶長十四年秀忠に奉仕し元和元年大番組を務め大阪の戰に出づ功を以て上總の内采地三百石を賜はる四年二百石を加增す寛永九年歩卒長となり十年監察使に補せらる十三年寛永錢鑄造を監し十四年肥前の耶蘇教徒を伐つ大將板倉重昌戰死し全軍利あらず貞清奮戰重創を蒙れども風せず松平信綱等の來援を得て遂に城を陷れ凱旋す正保四年江戸の令尹となり由井正雪丸橋忠彌の反逆を鎭壓す又明暦三年の大火に當りては非常を戒め危急を救ひ奔常極めて勗む萬治二年病を得て致仕し髮を削て土入叟と稱す寛文十二年遂に七十九を以て歿す貞清性勇殺多能尤も射に逸すといふ

さだきよ 石河貞清 一光の一族なり備前守と稱す豐臣秀吉に仕へて尾張犬山一萬二千石を食む關が原の役石田三成に屬す福島正則人をして歸順を勸めしむ貞清諾して京に走り龍安寺に入り又出でゝ大阪に往き池田輝政に依りて哀を乞ひ死を宥さる乃ち髮を削て宗休と號す

さだくに 宗貞國 盛國の次子彦七後に刑部少輔といふ應仁二年封を嗣ぐ文明元年武藤頼忠を援け大内氏と戰ひて克づこゝに於て博多を守り臣宗家播磨國久をして對馬の留守たらしむ三年對馬亂れ賊黨蜂起す臣宗四郎奇計を設けて之を鎭定し貞國京で還る明應三年七月卒す年七十三

さだくに 藤原定國 高藤の子延喜中從三位兼右近衛大將大納言となり同六年薨ず年四十世に泉大將とよぶ

さだこ 藤原貞子 仁明帝の女御なり右 臣三寺の女淑德貞烈家臣其高德を仰慕す仁壽元年尼となり貞觀六年八月歿す

さだこ 藤原定子 一條帝の皇后なり關白道隆の女正暦元年十月中宮となる長德二年身めるとあり出でゝ二條の第に居る時に兄伊周罪を犯して流さる定子髮へて尼となる幾許ならず修子内親王を生む三年六月宮に入り長保元年又身むあり出でゝ敦康親王を生む帝之を見むと欲すと雖道長を憚りて果さず二年上東門院中宮となり定子皇后となる十二月又皇女を生み萩で崩ず年廿五皇后の妹御匣殿敦康親王を鞠育して宮に入る帝其容色を愛してこれに幸す

さだこ 藤原定子 後西院帝の宮人なり權大納言定矩の養女六條局といふ寵幸を得て皇子並皇女を生む

さだこないしんのー 貞子内親王 後陽成帝の女齋宮と稱す元和九年攝政藤原康道に適して光平を生む延享二年六月薨ず年七十貞丁院と號す

さだしげ 宗貞茂 刑部少輔又對馬守と稱し昌榮と號す應永九年十二月封を嗣ぎ萩で筑前守護代となる十五年八月直資これに代るに及び貞茂國に還る廿六年六月朝鮮の使李從茂兵一萬七千戰艦二百餘を以て興長の海を侵し來る貞茂奮鬪して遂に之を敗る

さだすみしんのー 貞純親王 桃園親王といふ清和帝の第六子四品に叙して常陸太守たり六孫王經基を生む延喜十六年薨ず年四十四

さだたか 岩城貞隆 岩城平の城主なり佐竹義重の三男幼字能化丸天正十八年立ちて嗣ぎ七月にいたりて豐臣秀吉に見ゆ慶長五年兄義宣と上杉景勝に黨し家康に科められ岩城十二萬石を沒收せられて出羽山利十二萬石に移さる元和六年十月三十八にて歿せり

さだたけしんのー 貞建親王 邦永親王の子東山帝の猶子となる寶永六年五月親王宣下正德五年十月兵部卿に任ぜらる享保十二年十一月三品に叙し寶暦四年七月一品にすゝむ萩で薨ず年五十五後乾德院と號す

さだたね 千葉貞胤 胤綱の玄孫にして千葉介と稱し修理大夫に任ぜらる元弘元年大佛貞直に從て楠正成を赤坂城に攻む二年後醍醐帝を衛りて隱岐に往き明年遂に新田氏に屬す建武中足利尊氏を伐ちて功多し後源頼家に屬し新田義貞と共に圍城寺を攻む萩で皇太子に從ひて北國に赴き雪に遇ひて困弊し已むを得ずして足利高經の軍に降る正平の初め高師直に隷屬して楠正行と四條畷に戰ふ六年京に死す年六十一

さだちか 伊勢貞親 足利氏の臣初字を七郎といふ年十六兵庫助に任じ文安中從五位下備中守となる享德中從五位上侍從を經て伊勢守に任ぜられ康正元年從四位下明年從四位上となる幕府に重用せられて内書右筆となる後斯波氏の家督に關して山名宗全と爭ひ京を逃れ應仁中還て細川勝元に據る再び幕府に候し文明三年老し五年三月卒す年五十七

さだつぐ 安藤定次 家重の第四子次右衛門と稱す初め德川家康に仕へ後岡崎信康に仕ふ信康死後石川數正内藤彌次右衛門に屬し戰功あり慶長五年伏見城を守り敵の攻むる所となつて戰死す年六十一

さだつぐ 蜂屋貞次 三河の人初字半之丞德川家康に仕ふ永祿六年一向宗

の亂起るや叛して之に屬し大久保水野等と戰ふ後降て赦を請ひ許さる六月吉田城を攻め勇戰して河井正德を殺すと雖亦銃に中りて死す

さだつね 佐々木定綱（サヽキサダツナ） 秀義の子太郎と稱す源頼朝の兵を伊豆に起すや定綱諸弟と共に赴き北條時政に從て目代平兼隆を襲ふ後佐竹秀義を擊ち金砂城を圍む功に依て左衛門少尉となり佐々木莊を賜はり草で近江守護となる時に延暦寺の僧佐々木莊の租を受く而して水澇に際して負多く逃れり僧徒怒りて神鏡を奉じ定綱の宅に迫りて狂暴揮らす定綱の子定重忿悲兵を出して之を禦ぎ宮仕二人を傷く僧徒誣奏して定重父子を陷る頼朝營護すれども及ばず定綱薩摩に廣綱隱岐に流され定重は斬られて辛崎に梟せらる後定綱赦されて再び近江守護となる

さだつね 松平定綱（マツダイラサダツナ） 定吉の子小字鍬松又三郎四郎といふ慶長十五年七月下總山川城一萬石を得大阪夏の役奮戰して首を獲る四十三級なり元和二年常陸下妻三萬石を領す二年遠州掛川に徙り寛永二年山城淀にうつる十一年又美濃大垣に十二萬石に至る慶安四年十二月卒す年六十

さだつね 藤原貞經（フヂハラノサダツネ） 盛經の子筑後守に任じ太宰少貳となり筑前太宰府に居る元弘中後醍醐帝の船上山に幸するや貞經大友菊池と共に王事に盡くして北條氏を伐つ幾許ならず官軍京に利あらずと聞き變節して北條英時に降り大友貞宗と共に菊池武時を殺す後官軍の利を聞き再び心を改めて貞宗と兵を合し遂に英時を滅す足利尊氏の叛するやこれに黨し其西海に來るを迎へ子義尚と協力して菊池武敏と戰ひ利あらず武敏長驅して宰府を犯し其戎器を燒く貞經歸して割腹す

さだつねしんのー 貞常親王（サダツネシンナウ） 後崇光院の子文安四年三月親王となり中務卿に任ず寛正五年七月二品に叙す文明六年七月薨ず年五十後大通院と號し伏見宮とよべり一品を追贈せらる

さだとー 阿倍貞任（アベノサダフ） 頼時の長子厨川二郎と稱す長け六尺餘腰圍七尺四寸勇猛にして能く兵を用ふ天喜五年十一月源頼義の兵と鳥海に戰ひて大に之を敗り武威四隣に震ふのち藤原經清に命じて諸郡に私符を發し以て官物を徴奪す康平五年頼義清原武則と兵を合して貞任の叔父衡貞照の柵を攻め之を敗る貞任憤激已まず漸く官軍の糧食竭くるを察知し之を襲ふ利あらず退いて衣川に據り防戰太だ力む利あらず退いて島海を保つ官軍長驅して來る貞任弟宗任戰はずして奔り厨川に入り柵を固くして守備を嚴にす地大澤に面して斷崖近づく可らず頼義兵を勵して之を攻め殺傷頗る多し偶暴風起りて柵悉く燒く貞任支ふる能はずして潰走し番戰して捕はれ頼義の面前に於て死す時に年四十七

さだとき 北條貞時（ホウジヤウサダトキ） 北條七代の執權なり名幸壽時宗の子弘安五年左馬權守となり十四年相摸守となる正應二年將軍惟康親王を廢して久明親王を立つ五年高麗臣金有成を遣はして元に通信すべきを促す貞時有成を拘へて遣らず元爲めに親睦の念を斷つ後年貞時後宇多上皇に貢められて後深草龜山兩統迭立の策を定め後伏見帝立つて三年なる

に位を後二條帝に讓らしむ元弘の亂ニに胚胎すといふ應長元年卒す年四十一

さだときしんのー 貞齊親王（サダトキシンナウ） 貞敦親王の子後奈良帝の猶子となる天文十年正月親王宣下草で剃髮して應胤と號す廿二年天台座主となり二品に叙す元亀元年四月座主を辭して名を尊悟と改め又瑞龍と號す應長三年五月薨ず後龍祥院といふ

さだとし 安藝貞後（アキサダトシ） 婦人科の醫師なり天正年間皇后宮の典藥となる

さだとししんのー 定敬親王（サダトシシンナウ） 後水尾帝の第八子照宮といふ慶安三年二月親王宣下八月剃髮して堯恕といふ寛文三年十月天台座主元祿六年八月退隱七年病を得八年四月薨ず年五十六

さだねお 大佛貞直（オサラギサダナホ） 民部少輔宗泰の子右馬助陸奥守となる後醍醐帝の笠置に幸するや北條仲時之を攻めて克たず北條高時貞直及び足利尊氏等に命じ往きて援けしむ笠置終に陷る貞直等轉じて赤城を攻め又之を拔く後義貞鎌倉を攻むるに及びて貞直大軍を率ゐて極樂寺坂に拒ぎ利あらず義貞の軍遂に稻村崎より入り貞直の軍支ふる能はず貞直奮然として叫んで曰く勇士死すべきに死せざれば死にまさる愧多しと奮鬪して脇屋義助の陣を冒して死す

さだぬし 滋野貞主（シゲノサダヌシ） 儒臣なり尾張守家譯の子大同年中文章生となり及第して外從五位下大內記に任ず圖書頭に進つり東宮學士となる天長中從五位下に叙せられ仁明帝の即位に當りて內藏頭宮內大輔に任ぜらる承和中兵部大輔彈正大弼を歷て從四位上大藏卿從議岐守となり式部大輔に轉じ參議に拜す勘解由使長官となるに及びて便宜十四事を陳ず嘉祥中尾張守を兼ね太宰府吏の不良を責む草で宮內卿に任じ相摸守を兼ね正四位下に至る仁壽二年病を病で卒す年六十八貞主多識にして博學嘗て秘府略一千卷經國集二十卷を撰進せり

さだのぶ 花山院定誠（クワザンインサダノブ） 左大臣定好の三郎なり慶安五年從五位下に叙し權大納言に任ず延寶二年正二位にのぼり三年武家傳奏となり權大納言を辭す貞享元年內大臣となり三年之を辭し髮を削て自寛と號す寶永元年十月薨ぜり年六十五文恭院といふ

さだのぶ 春原定信（ハルハラノサダノブ） 國學者なり守は子成桂麓と號す維新の時京都府權大屬となり大學中學の教官となる明治十九年十月歿す年七十五

さだのぶ 松平定信（マツダイラサダノブ） 田安宗武の子白川城主松平定邦の家統を承け天明三年封をつぎ從四位下に叙し越中守と改む七年老中となり侍從に任ぜらる節約己を持し銳意治を圖る幕政忽ち肅振して天下靡然として之に風化す寛政五年二月典仁親王に尊號を上るの議に依て中山正親町の二卿と論じ深く朝典に通ぜざるの失を蔽ず定信これより心を國史法制にとゞめ力學研磨大に悟る所あり尋で職を辭して左近衛權少將となり文化九年老して樂翁といひ文政十二年卒す年七十二定信和歌に巧にして家集に三草集あり又黃昏の宿の詠に依て黃昏少將の異名あり

さだのり 赤松貞範（アカマツサダノリ） 則村の子なり足利尊氏に從ひて北條時行を征し大に之を箱根に破り夜相摸川を渡りて進擊

す時行狼狽辛うして逃る後官軍を竹の下に禦き功を以て美作の守護となる

さなふさ 藤原定房（ワガハラノサダフサ） 權大納言經長の子元享二年權大納言となり後醍醐帝の傅となる帝西狩の後光嚴院に仕へて內大臣にのぼる足利氏の亂あるや宮中の寶器を携へて延曆寺に駕に從ひ又吉野に從ふ其日記に吉續記あり

さなふし 二階堂貞藤（ニカイダウサダフヂ） 北條高時の臣擯非違使となり出羽守に任ず薙髮して道蘊とよぶ高時廢立を行はむとするに當り面を冒して之を苦諫す後吉野を攻めて陷れ村上義光の首を得乃ち大佛高直と合し鼓噪して干劍破城に薄る拔く能はず幾許ならず高直と共に降り赦されて舊邑を食み叛を企てゝ誅せらる

さなふん 平貞文（タヒラノサダフミ） 歌人なり少納言好風の子從五位上佐兵衛佐に任ず其歌古今集に見ゆ延喜元年九月卒す

さなまさ 安藤定正（アンドウサダマサ） 家定の第三子にして今川氏眞に仕ふ職功あり後德川家康に謁し島居元忠に屬し岩槻城攻の際先登の譽を得而して戰死す年四十三

さなまさ 石河貞政（イシカハサダマサ） 美濃の人伊豆守と稱す豐臣秀吉及び秀賴に仕ふ慶長十九年九月秀賴貞政及び源田兼相をして片桐且元を討たしむ而して貞政心を變じて之を織田常眞に告ぐ常眞且元に告ぐ且元兵を備へて守る大野治長將に且元を襲はむとするに當り貞政高野山に奔り後出で、德川家康に仕ふ大阪の役藤田信吉と與に平野を取る晩年髮を削て佳春と號せり

さなまさ 上杉定正（ウヘスギサダマサ） 扇谷家第六代の主鎌倉の執事持朝の第四子なり修理大夫といふ文明九年長尾景春怨を定正の族山內家の主顯定に抱きて之を攻む定正顯定に從ひて景春を伐つ十年正月和を行ひ又破れて大に戰ふ定正の軍勝を得たり十八年定正又顯定とよからず こゝに於て兵を搆ふ兩上杉氏の爭鬪これより起る六月定正奬臣の言を信じ且つ敵顯定の僞言を信じて太田道灌を殺すこれより兵勢爲めに振はず而して顯定和を破りて急に進み將に定正の不意を衝かむとす定正聞きて大に驚き初て道灌を失ふの愚をさとり使を管領足利成氏に遣し理を說きて援を請ふ成氏乃ち子政氏をして赴かしむ此時長尾景春

顯定の太田資康を用ふるを見て心自ら安からず遂に其驕を率ゐて定正に屬す定正の軍爲めに振ふ長享二年二月兩軍實卷原に戰ひて定政克つ六月又戰ひて克ち十一月高見原に戰ひて又克つ定正毎戰利ありといへども死傷多く顯定毎戰破るといへども將士多く服屬せり然れども定正常に克つを以て驕り兵備を輕んじ管領を輕視す小田原城主大森實賴定正を諫めて激勵せしむ明應二年十月定正北條早雲と兵を併せて顯定と荒川を隔て、戰ふ戰酣にして定正落馬して卒す諸將驚愕兵卒散走早雲も已むを得ずして退き還る定正時に年五十二

さなまさ 金澤貞將（カナザハサダマサ） 北條の一族なり六波羅南方となり武藏守となる新田義貞と戰ひ利あらず又山內に戰ひて創を蒙る後相摸守長門筑前兩探題を命ぜらるゝに及び喜び極りて軍に赴き奮戰して死す

さなまさ 土岐定政（トキノサダマサ） 美濃の人定明の子兵部大輔といふ小字愛菊永祿七年十四歲にて德川家康に仕へ管沼薩藏とよぶ味方原の戰奮戰敵首を得て還る小牧の役池田勝入の兵と戰て之を却け更

に家康の命を以て偵察の任を完うす家康これに依て軍を小牧に徙せり天明秀吉來りて其迅速なるに驚き喚して去る事平ぎて定政興力世六騎を司り摩で關宿城を守り相馬の四一萬石を賜はる文祿二年土岐氏に復し從五位下に叙し田城守と稱す慶長二年三月卒す年四十七

さなまる 紀定丸（キノサダマル） 狂歌師なり名は義方通稱吉見儀助清水家に仕ふ後幕府の勘定頭となる太田蜀山の甥なるを以て狂歌を學ぶもの甚多し初め野原雲輔といひ後紀定丸と改む天保十一年夏早す定丸雨乞の歌を作て降るまいと思ふも雲の凡夫にて今日は夕立くべき宵なりと目ならずして雨大に降る同十二年正月歿す年八十餘

さなみち 稻葉貞通（イナバサダミチ） 一鐵齋の子初名以鈍、右京亮と稱す天正十一年秀吉の爲に美濃曾根城に封ぜらる十三年七月從五位下に叙し侍從に任じ摩で從四位にのぼり封を郡上に轉ぜらる乃ち八幡城之なり慶長關が原役起るや犬山城に據りて西軍に黨す郡上の士遠藤慶隆金森長近と牒して郡上を取らむと企て城に潛る留守の將通孝援を犬山に乞ひ遂に慶隆を敗る貞通素より東軍に歸順するの意あるを以て旨を慶隆等に告げ互に質を交へて別れ髮を削て福島正則に懇請し遂に事無きを得たり十二月臣宿城五萬六千石を食み慶長八年九月に卒す年五十六

さなみつ 雄井定光（ヲスヰサダミツ） 源頼光の臣にして四天王の一人なり叡負尉と稱す雄井峠の人頼光に從ひて剛賊を大江山に討ちて平ぐ

さなむ 源定（ミナモトノサダム） 嵯峨帝の皇子なり天長五年源姓を賜はる貞觀元年大納言となり右大將を兼ぬ五年正月薨ず年四十九世に四條大納言又楊梅大納言又賀陽院大納言とよぶ

さなむね 貞宗（サダムネ） 相摸鎌倉の刀匠初名弘光又助貞彥四郎といふ五郎正宗の養子となりて貞宗と改む正和貞和年間の人

さなむね 伊勢貞宗（イセノサダムネ） 貞親の子兵庫助と稱す足利將軍義政の奬臣なり父の斯波氏に關する時貞宗諫めて其公平ならむことを謂ふ用ゐられず却て幽居を命ぜらる而して山名宗全斯波義廉の訴に依て兵を徵するや將軍貞親を逐放して其封土を貞宗に與ふ

さなむね 小笠原貞宗（ヲガサハラサダムネ） 信濃の人幼名彥松通稱彥五郎信濃守宗長の子なり從五位下右馬助となり信濃の守護となる元弘の役北條高時に從ひて官軍と戰ひ後歸順す建武中足利尊氏の叛するや新田義貞に屬して之と戰ひ幾許ならず降て北朝に仕ふ義貞北陸經營の途に就くや貞宗尊氏の命を以て金崎城を攻め轉じて源顯家の軍を美濃に捉ぐ正平五年歿す年五十七貞宗初め後醍醐帝に事ふるや射藝を以て師範役たり後帝大道物を廢す貞宗騎射の忽にすべからざるを論じ光明帝に請ひて之を復す又今川伊勢兩氏と武家禮節を定め書を著して三儀一統といふ貞宗性佛を信じ尤も禪を喜ぶ其削髮するに及て名を泰山と改め開善寺を信濃に創す世呼んで開善寺入道といふ

さなむね 大友貞宗（オホトモノサダムネ） 豐後の人藤原秀郷の後といふ貞宗兄の後をうけて豐後守護となり薙髮して具簡と號せり元弘中菊池武時等と大義を唱へ中途にして變節し探題北條英時を援けて武時を

殺す而して六波羅陷るに及び罪を獲む事を懼れ少貳氏と兵を合せて英時を攻めて殺す延元正年足利尊氏を援け大内義弘と共に兵船三百隻を將て官軍に當る尊氏利あらず依て勸めて九州に赴かしめ菊池武俊を多々良濱に破る後尊氏に從て京に向ひ福山城を拔き進て湊川に戰ふ乃ち楠正成を破りて京に入り新田義貞の兵を東寺に拒ぎて却く

さだむねしんのー 貞致親王 邦尚親王の子後水尾帝の猶子となる萬治三年十月親王宣下彈正尹となる寛文五年二月二品に叙し兵部卿に任ぜらる元祿七年五月薨ず年六十三

さだむら 赤松貞村 圓心の二男なり嘉吉の亂に赤松滿祐を白旗城に攻む足利義教に愛せられて而も其弑逆に會し自ら抗するの力なく又殉死するの義なし時人大に之を嘲る貞村愧ぢて病を得遂に死す

さだもと 大江定基 齊光の子なり天元中藏人に補せられ尊で參河守となる媚力毒といふを愛して妻を追ひ之を迎ふ寵愛比無し後力毒病んで殺す定基大に無常を觀じ遂に永延二年僧となり如意輪寺の寂心を師とす寂心は大內記慶滋保胤なり定基乃ち寂昭と改め延曆寺の源信に就く長保四年宋に赴き南湖の僧智禮に台宗問目二十七條を質す宋王又寂照を厚遇し號を圓道大師と賜ふ遂に吳門寺に止り長元七年宋に卒すといふ

さだもり 宗定盛 讃岐守と稱す應永廿六年封を嗣ぐ朝鮮と交易して年毎に商船五十艘を出すを約し諸國の航行船を小船越港に寄らしめて文引を受け以て交易特許の驗となさしむ嘉吉より文安に至るの年間しば〳〵兵を大內氏と交へて克たず享德元年六月卒す年六十八

さだもり 平貞盛 常陸大掾國香の子常平太と稱す承平中父姪將門の爲めに殺さる後常陸大椽となるに及びて叔父下總守良兼と共に將門を伐つ利あらず依て勅命を得て之を滅さむと欲し天慶元年潛かに山道より之に赴く將門急に追擊して貞盛大敗績かに身を以て免かる而して勅命を蒙るに及び密かに下野に出でゝ押領使藤原秀郷に據り兵を合せて將門を襲ひ力戰して遂に之を殺す功を以て從五位上に叙し右馬助を授けられ鎭守府將軍となる天祿天延の頃丹波陸奥兩國の守に任ぜられ從四位下にいたる

さだやす 加藤貞泰 父遠江守光泰作內と稱す織田信長に仕へ後豐臣秀吉に仕ふ天正十一年近江高島城を賜はり遠江守に任ぜらる十八年甲斐金土を得寵愛深し石田三成之を讒す後朝鮮の役に從ひて彼の地に死す貞泰其後をつぎ美濃星野四萬石を領す關が原の役三成に強ひられて終に之に從ひ密かに使を遣して家康に屬す乃ち先鋒となりて浮田氏の兵を破り功を以て伯耆米子城主となる大阪冬の役軍に從ふ元和三年伊豫大洲城にうつり九年五月卒す年四十四

さだやすしんのー 貞保親王 清和帝の子二品式部卿に叙任せらる南宮と號す延長六年薨ず年五十五

さだやすしんのー 貞康親王 邦輔親王の子永祿六年十二月正親町帝の猶子となる尊で親王宣下二品に叙し式部

卿に任ず十一年四月薨ず後葉光院といふ

さだゆー 一宮左大夫 一宮流拔刀術の開祖なり武田家の臣土屋惣藏の家來なり名は照信天正中の人といふ

さだゆき 安倍貞行 大納言安仁の子なり官正五位下刑部大輔陸奥守より從四位上太宰大貳にいたる齊衡天安元慶年間の人

さだゆき 宇佐美定行 上杉氏の將なり一名良勝越中守謙忠の子大永中長尾爲景を佐けて兵をあげ功を以て駿河守となる天文中越中加賀を徇へ松任城を拔き擢用せられて城將に任ず爲景死す定行輝虎を補けて長子晴景を斥け遂に上杉氏の家名を興す輝虎能く定行の訊を容れ其兵法を聞き得るところ甚多し永祿三年小田原を圍みて退き四年足戶に戰ふ七年輝虎の長尾義景を殺さむとするを諫め聽かれず命を奉じて却て之を池尻川に殺す定行潔居娶らず輝虎の意を承けて妾を蓄へ子定勝勝行を生む

さだゆき 木村貞行 赤穗四十七士中の一人なり岡右衛門といふ淺野長矩に事へて馬廻となり百五十石を食む國難起るの日姓名を更めて石田左膳といふ仇を窺ひ死する時一篇を賦して兜整中に藏す死する時年四十六鳩巢其詩文を得雄深壯大の辭なりとせり

さだゆきしんのー 貞行親王 桃園帝の第二子二宮と稱す寶曆十年六月伏見宮を嗣ぎ十三年十月親王宣下明和九年六月二品に叙し尊で薨ず眞淨明院宮といふ

さだゆきしんのー 貞敬親王 邦穎親王の子後桃園帝の猶子となる寛政九年八月親王宣下尊で下野大守に任ず十年六月三品に叙し弘文元年正月兵部卿に轉ず二年九月二品天保十二年正月一品尊で薨ず年六十七勝光明院と號す

さだよ 今川貞世 範國の子左京亮伊豫守と爲り正四位下に叙せらる足利義詮に仕へて遠江守護となり正平十四年吉野を犯し又官軍と東寺に戰て克つ後貞世細川清氏と論功の事を以て不和を生し清氏南朝に屬し貞世兵を帥ゐて之を討つ清氏在々木高秀の軍を破て忍

常寺に進み貞世爲めに敗走す而して又義詮と共に京を復し乃ち髮を削て了俊とよぶ建德二年足利義滿貞世を以て鎭西探題となし菊池氏に供ふ了俊大內義弘と兵を合せて菊池武光と戰ひ利あらず又大友と共に武朝と菊間河に戰ひ又利あらず天授元年少貳冬資と肥後に戰ひ克ちて之を斬るこの時西海諸島の姦民騷擾に乘じて高麗を侵し掠奪を事とす高麗大に苦しみ使を遣はして之を訴ふ了俊固く侵掠を禁じ島民の虜へ來れる伊明安過世等數百人を還すたま〳〵義弘義滿に叛くの志あり了俊と共に京より還るや切に勸めて事を謀らむとす了俊從はず義弘怨んで了俊を陷れ以て探題の職を奪はむとす時に足利滿兼鎌倉に叛し義弘之に應ず了俊滿兼の書を得て之を義滿に呈するを以て義滿了俊の心を欣び而も又倏ちに左右の言を信じて之を疑ひ九州に還らしむ了俊大に怒り命に從はずして遠江にかへり心を滿兼に寄す義滿憤を發し兵を率ゐて了俊を討たむとするに及び滿兼の事和成る了俊安んぜずして藤澤に往く義滿其滿兼に親みて再び事を構へむを懼れ命

じて遠江に移らしむ後久しくして了俊赦さるゝを得たり了俊性學を好み文をよくし無聊の間書を記述する事多し曾て太平記の誤謬を念ひて難太平記を作り落書鈔、落書露顯、今川双紙、九州合戰記、言塵集抄を著はし又弟仲秋の行狀を貴めて制詞を記す其言剴切人をして徐ろに感動せしむるものあり

さだよし 阿部定吉（アベノサダヨシ） 三河人大藏大輔といひ法名を玉藏眞海といへり德川清康に仕へて家政を執る常に松平信定の異圖を企つるを憂ひ却て怨言を放たる定吉の子正豐過つて清康を弑す定吉大に驚き將に自殺せむとす時は天文四年十一月なり然れども松平信孝其忠良の臣なるを知つて之を宥し清康の子廣忠の輔佐たらしむ信定乃ち德川長親に據て定吉を譴す定吉廣忠を奉じて伊勢の山田に奔り漸く駿人の扶けを得て岡崎城にかへる時に信孝威を弄して定吉が子の罪に連坐せしめむと謀る定吉酒井忠次等と議して遂に之を逐ふ天文十八年十一月定吉歿す

さだよし 奥平貞能（オクダヒラサダヨシ） 貞勝の子小字九八郎美濃守と稱す永祿四年德川家康に從ひて今川氏眞の掛川城を陷る元亀元年姉川に戰ひ父の武田氏に赴くに誘はれて仕へ意充たす後父の德川に還るに當り貞能已むを得ずして幼兒仙丸を質とす而して家康のために瀧山の寨を攻めて拔き三州作手を攻めて克つ武田勝頼大に怒り遂に其質子を磔にす天正十八年上野小幡の田三萬石を得慶長三年十二月に至りて卒す年六十二

さだよし 木村定良（キムラサダヨシ） 江戸の歌人なり字は駿卿櫛閣と號す幕府の御手先與力たり千陸脊海と交りて歌を善くす著書に草野集あり

さだよし 平貞能（ダヒラノサダヨシ） 筑後守家貞の子筑後肥後の守護たり菊池高直と戰ひて遂に之を降し九州を鎮定してかへる後宗盛の命を奉じて西に奔るや貞能極諫して納れられず獨り京に止り重盛の骨を其墓地より收めて高野山に藏め下りて福原に赴く後宗盛の太宰府に居るや緒方惟能來り攻む宗盛貞能をして之を禦がしむ利あらず遂に亡して髮を削り名を以典と改めて源氏に降る

さだよし 土岐定義（トキノサダヨシ） 土岐定政の子初字與五郎慶長七年水戸城を守る時に佐竹の士車猛虎黨をあつめて亂を作さむとす定義伐て之を平ぐ從五位下に叙し山城守と稱す元和三年攝津高槻城二萬石を食み翌年卒す年時に四十三

さだより 小笠原貞頼（オガサハラサダヨリ） 信濃深志の城主なり長時の子にして彦七郎又は又七郎といふ豐臣秀吉德川家康に歴仕し小田原以後の諸役軍功多し又家康のために伊豆の奉行となり其命を以て小笠原島を發見す寛永二年子長直の時に於て封を上野館林にうつさる

さだより 佐々木定頼（サヽキサダヨリ） 高頼の第二子小字四郎近江の人初め相國寺に入りて僧となり吉侍者とよぶ兒脚疾を以て嫡を辭するに及び還俗して家を嗣ぐ永正八年足利氏に從ひ船岡山に戰ひ功に依て管領に補し彈正少弼となる十五年四月澁井亮政を攻めて克たず十七年九月三萬の兵に將として京に入り三好長輝細川澄元と相戰ふ而して將軍義植を擁して京に還る天文十五年十二月從四位下に叙せられ十九年如意嶽城を築き箕作城に徙る廿一年正月卒す

さだより 藤原定頼（フヂハラノサダヨリ） 大納言公任の子寛仁元年正四位下藏人頭となり治安二年從二位に叙し長元中權中納言に任ぜらる長久三年正二位に進み尋で兵部卿を兼ぬ寛德二年薨ず年五十一定頼管て春日社行幸の行事たり從者敦明親王の僕と鬪爭す定頼怒て之を毆たしむ親王之を帝に訴ふ帝怒て定頼の行事を停む又教通と黨して頼通と抗し爲めに停官せらるゝ事半年に及べりといふ

さだんじ 市川左團次（イチカハサダンジ） 大阪の俳優三代目以前は傳不明なり四代目初名は小米三代目の弟子にして其養子となり左團次と改め移りて江戸の俳優となれり

さつまのじょう 富士松薩摩掾（フジマツサツマノジョウ） 富士松節をうたひ始む宮古路豐後掾の門人なり初名加賀太夫といふ

さてひこ 大伴狹手彦（オホトモノサヲヒコ） 金村の子宣化帝の二年任那を鎮め百濟を救ふ欽明帝の廿三年大將軍となり高麗を伐て大に克ち王宮に入て美女珍寶を得て還る初め狹手彦の韓に征かむとして肥前を發するや姿佐川姫別を惜みて高山に登り船を望みて悲傷に堪へず領巾を脱して麾き振る依て其山を領巾振山といふ

さとひろ 井戸覺弘（ヰドサトヒロ） 德川幕府の士にして對馬守と稱す初めは大藏といへり弘化二年十二月長崎奉行となり嘉永二年八月町奉行に轉ず安政元年正月米艦浦賀に入る覺弘浦賀奉行となり林大學頭と共に米使に接す後大目付となり五年歿す

さとやす 戸川達安（トガハサトヤス） 字喜多秀家の臣秀安の子初字助七郎勇武絶倫狀貌非凡なり天正十年豐臣秀吉に仕へ高武長濱雜賀の戰皆從ふ征韓の役加藤清正を兀良哈に援け小早川隆景と共に大に碧蹄館に戰ふ闕が原の役加藤嘉明に屬して石田三成の兵を破り功に依て備中の地二萬五千石を得慶長十九年片桐直盛を茨木に助け擊て九鬼嘉隆と舟師を發して敵を海老江に擊つ大阪夏の役花房職之と馳せて天王寺に到れば城已に陷る寛永中達安藤堂高虎等と共に咄衆に列し四年病歿す年六十一法名覺知不變院と號す

さない 佐内（サナイ） 有名の淨瑠璃家なり江戸の人薩摩淨雲の門人佐内節のうたひ初む

さない 橋本左内（ハシモトサナイ） 越前の藩士名は綱紀字は伯綱通稱左内緊園或は景岳と號す醫を緒方洪菴に學びて藩醫となり洋式を唱導す藩侯一橋慶喜を立てゝ將軍となし以て攘夷の斷行を遂げむとするに當り左内頗る奔走して成らず紀州侯家茂立つに及びて大老井伊直弼悉く天下の志士を捕ふ左内乃ち其中にあり安政六年十月遂に江戸小塚原に斬らる年二十六

さなえのすけ 五月早苗之介（サツキサナヘノスケ） 尼子十勇士中の一人なり播州上月城外の農民の子田に水を引かむとするに當り大石を動かして衆のために救ふ時に年十三尼子義久見て奇となして召して臣列に加へ此名を賜ふ後勝久に仕へて軍功多し

さぬき 二條院讃岐（ニデウノヰンノサヌキ） 源頼政の孫にして仲綱の女和歌に巧なり其詠千載集に見ゆ嘗て我袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知られ乾くまもなしの詠に依て沖の石の讃岐とよばる

さぬきてんじ 讃岐典侍 堀河鳥羽帝の朝に仕へて典侍となる其日記を讃岐典侍日記といふ

さねあつ 藤原實淳 太政大臣に拜せらる永正八年出家す法名忍樹天文二年八月薨ず年八十九禪光院と號す

さねうじ 藤原實氏 太政大臣公經の子寛元四年太政大臣となり子二人左右近衛大將となる頗る權勢あり文應元年薙髪して實空と改め京極常磐井の邸に居る文永六年薨ず年七十六世に常磐井入道と稱す

さねえだ 三條實枝 永正九年從五位下侍從に任ず後累進して正二位權大納言にいたる十三年六月名を改めて實澄といふ識詩ならず世を厭ひ二尊院に入りて僧となる後還俗して内大臣に任じ尊で又薙髪し三光院宗空と號し六十九歳を以て薨ず實枝和歌に巧なり撰著するもの少からず

さねおみ 廣澤眞臣 長州の藩士小字季之進後金吾又藤右衛門通稱兵助高杉晉作國司信濃等と共に謀を合せて外艦を赤間關に擊ち軍功あり後國司等の罪を得て刑せらるゝに及び眞臣も坐して獄に下さる慶應二年四月海防手當用掛となり尊で政務役に進む三年十月中山大納言に依て内勅を得明治元年一月參與となり海陸軍務掛を命ぜらる四月從四位に叙せらる二年四月民部省副知事となり民部大輔にうつり參議となる三年三月正四位に進み民部省御用掛となる四年一月賊の爲めに殺さる時に年三十九朝廷哀悼して正三位を贈る

さねかず 三條實量 本名實敦といふ右大臣伊冬の子北朝に仕へて從三位左近衛中將に任じ越中權守を兼ぬ尊で從一位内大臣にすゝみ右近衛大將となり長祿元年右大臣に拜し三年左大臣に轉ず應仁三年薙髪して禪空といひ文明五年薨ず年五十九後三條と號せり嘗て赤松の遺臣石見雅助其族を復せむと欲す實量聞て曰く何を以て嘉吉の弑逆を贖ふかと雅助曰く若し南帝を弑し神璽を奪ひ來りて獻ぜば如何と實量之を諾し爲めに奏上し又幕府に告ぐこゝに於て雅助の徒中村眞友中村與次吉野に入り計を逃らして二王子を弑し神璽を奪ひ來るといふ

さねかた 藤原實方 家時の子叔父濟時の爲めに養はる從四位上左近衛中將となる嘗て藤原行成實方の人となりを識る實方大に憤り殿上に會して其冠を奪ひ地に擲つ帝之を見て不敬の罪を責め實方を陸奥守となす然れども其才を惜み位一階を進めて曰く汝歌枕を捜れ來れと實方任に赴き長德四年を以て卒す時人其墓を橘本に祀り以て榮平の厳本に配す實方和歌に巧みにして秀逸甚多し

さねかつ 上眞葛 樂家上氏の開祖本姓狛初めは野田を姓とせり狛近眞の三子にして秘曲に通じ名聲高し正嘉年中右近衛將監に進み正應元年五月卒す年五十七

さねかね 藤原實兼 太政大臣公相の子正應四年十二月太政大臣となる元亨二年九月薨ず後西園寺と號す

さねきよ 西園寺實清 實氏の後裔にして伊豫の領主なり永祿三年七月從五位下に叙し左近衛少將に任ぜらる八年五月國を子に讓りて京に出で大德寺に入りて僧となり名を松常と改む

さねと 藤原實子 花園帝の妃なり大納言實明の女正慶元年三位に進ぜらる建武五年宣光門院と號す貞和四年十一月出家法名を遍照智といふ

さねさだ 藤原實定 右大臣公能の子常に族實長と抗爭し長寛中遂に之に超ゆ然れども心歡らず嘉應二年辭して家居し風流に隱る詠歌尤も巧みなり壽永中内大臣となり文治中右大臣より左大臣に轉ず建久元年辭して薙髪し如圓とよぶ二年薨ず

さねさだ 善道眞眞 伊與部家守の子文章得業生となり及第して山城少目にあげらる承和中累進して東宮學士となり皇太子の廢せらるゝに及びて備後權守に貶せらる尋で卒す年七十八眞眞能く漢學に通ず當時儒家にして公羊傳を讀む者はたゞ此人ありしのみと

さねしげ 藤原實重 内大臣公親の子文保二年八月太政大臣となり元德元年六月薨ず

さねすえ 秋田實季 愛季の子なり天正十八年秀吉に謁し征韓の役兵を率ゐて筑前名護屋の陣所に到る慶長年間家康の會津を伐つに當り德川氏に從つて三成の黨大森宗近を伐ちて功あり同七年五萬石に封ぜられ從五位下に叙せられ秋田城介に任ぜらる大阪陣の時勞忠に屬して軍功を樹てしが寛永八年に及びて致仕す後罪ありて伊勢の朝熊に竄せられ萬治二年を以て同所に卒すといふ

さねすけ 藤原實資 參議齊敏の子初名大學丸祖父實賴の爲めに養はる長保三年大納言兼右近衛大將となる時に道長朝政を專らにし諸公卿皆其威に慴服す實資獨り侃々毫も憚る色なし帝大に信任して深く依賴す治安元年右大臣となり長曆元年從一位に進む永承元年正月薨ず年九十世に後小野宮といふ記逢する處小右記あり嘗て帝宣耀殿女御を立てゝ中宮となさむとす册拜の日諸朝臣道長を悞れて悉く中宮居所に遷ぬ勅使趣けども更に應ぜず實資時に疾む乃ちつとめて中納言隆家等と共に其嘉會に列して帝の意に背かず帝いよ〳〵其忠節なるに感ずといふ

さねたか 三條實隆 内大臣公保の子正二位内大臣に拜す永正十三年薙髪して幾空といひ又科隱刺斗といふこれより諸國を遊歷し高野山に詣る時の日記を高野參詣日記と稱す又和歌に巧みにして雪玉集を著はす天文六年八十三を以て歿す

さねたけ 上眞節 近與の子近代雅樂の名家なり明治五年大伶人に擧げられ雅樂曲譜選定に盡力す十五年致仕二十八年一月卒す年七十一蘊し維新に際して雅樂の正統を保持したる功績多き人なり

さねつね 藤原實經 攝政道家の子寛元中左大臣となり關白となる弘安七年削髪名を行祚と改め尊で薨ず年六十二

さねつむ 三條實萬 實美の父にして中宮大夫公陽の子孝格仁孝孝明三帝に歷仕し正二位内大臣に至る晩年幕府の讒を蒙りて退隱し落飾して濟堂と號す安政六年十月薨ず年五十八薨ずる前一日從一位に叙せられ後又右大臣を贈らる明治二年十二月忠成公と諡し十八年十月別格官幣社に列して梨木神社と崇め正一位を贈る